二次元ドリームノベルズ
装刃戦姫
サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
18
未満
有機企画
挿絵／緑木邑
肉便所サクラヒメ
正正正正
愛情ボッキ
LOVE
ケツ穴無料

◉小説 *yuukikikaku*
有機企画

しっくりくる作業用BGMを探してネットの海を徘徊しています。最近はオルゴールメドレーがお気に入り。

◉挿絵 *midorigi mura*
緑木邑

サクラヒメの連載が始まった2017年は何故か他の仕事もフタナリものが多く、チ○ポに始まりチ○ポに終わるという感じの一年でした。

http://mdrgnl.sakura.ne.jp/d/index.php

小説 有機企画　挿絵 緑木邑

登場人物紹介
Characters

建宮流華（たてみやりゅうか）
「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

クリスティーナ・エイミス
流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。

三城良平（みしろりょうへい）
流華の幼馴染にして恋人。

鬼蛙（蛙坂蔵夫）（おにがえる　かわずざかくらお）
オニグミを束ねる幹部。偽名を使って流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

第一回　サクラヒメ魔淫に堕つ　006
第二回　忍び寄る魔手　侵される日常　064
第三回　屈辱の地下バトル　公開羞恥地獄　110
第四回　学園フタナリ奉仕　惹かれていく心　161
第五回　恥辱に喘ぐお嬢さま　224
第六回　最悪の罰ゲーム　転落する薔薇の戦姫　291
第七回　ダブル戦姫　倒錯の射精遊戯　352
第八回　背徳絶頂　恋人に注がれる白濁　454
最終回　闇に沈む装刃戦姫　堕淫と恍惚の未来　492

第一回　サクラヒメ魔淫に堕つ

草木も眠る丑三つ時。

夜闇が人の世を黒く塗りつぶし、湖面が満月の光をたたえる。人々は床につき、街は静寂に包まれていた。聞こえるものといえば木々のざわめきと虫の鳴き声くらいだ。

そんな夜更けに一人、山中にかかる鉄橋でトラブルに見舞われた女性がいた。運転していた軽自動車は柵に衝突し停車し、ボンネットから黒い煙を噴き上げている。

彼女は車のそのすぐそばで焦燥に駆られていた。会社帰りのスーツはところどころ破れ、忙しなくスマートフォンの画面をタップしている。

「どうして⁉　どうして繋がらないの⁉」

電波が圏外で、立ち往生しているように見えるがそうではない。二日ぶりに帰宅する彼女を待ち受けていたのは、百鬼夜行絵巻で描かれているような悪鬼だった。

「ムダムダ。封鎖結界を張らせてもらったからよ。ま、人間に言っても理解できないだろーがな」

「ヒイッ！　こ、これって現実なの？　じ、冗談でしょ⁉」

「どっちでも好きな方を選んでいいぜ。結果はこのオレ、牙噛（きばがみ）さまの晩飯一択なんだからよ」

女性の前に立つのは大型トラックほどもある巨大な蜘蛛の化け物。闇に紛れて人を喰らう妖魔、オニグミだ。古来から不審死や行方不明者の大半は彼らが原因であり、人知れず人間をエサにしているのである。

「若い女の肉は美味いんだよなあ。ゲヘヘ、骨の髄までしゃぶらせてもらうぜ」

「い、いや……だれか助けて……お願いだから……」

顔面蒼白で歯の根が合わない女性。助けを呼ぼうにもここは山の中。連絡を取る術もない

牙噛はその様子に舌なめずりし、トラバサミめいたアゴを開いた。口内からは腐臭の混じった吐息がこぼれる。

「だ、だれか……だれかあああああああああッ！」

「いただきまあああ～す！」

一息に飲み込もうとする大蜘蛛。

だが、絶体絶命の瞬間、一本の小太刀が投擲された。それは牙噛の額に突き刺さると青白い雷光を放つ。

「ギャアアアッ!?　な、なんだこりゃあッ!?」

突然の一撃に痺れながら叫ぶ。慌てふためく悪鬼の前に音もなく、一人の少女が現れた。

「抵抗できない女性を狙うとは……恥を知れ」

ロングの黒髪を風になびかせ、セーラー服を着こなす。月明かりに負けない美貌だが、切れ長の双眸はあらゆる者を拒絶するかのように鋭い眼光を放っていた。スリムな身体だが、胸部だけかなり豊満で、さらしで押さえられた肉毬が息苦しそうである。

艶麗という言葉を体現したような少女だが、ただ者でないことは明らかであった。化け物を前にわずかな畏れすらない。

「その霊力……まさか……まさかテメェ！」

「神器転身！」

少女は胸元から深紅の結晶を取り出し言霊を込める。結晶は戦う意志を受け止めると、まばゆい閃光を放った。

直後、鉄橋は太陽のごとく輝かしい光に包まれた。セーラー服が分解されると墨色の甲冑に再構築。柔らかな胸乳を除き、上半身に装着される。下半身には緋色のミニスカートが出現し、可憐にひらめく。

手には籠手、脚にはすね当て、肩には袖、頭には兜の角をモチーフにしたヘッドギアを

纏う。瞳の色は黒から赤へ変わり、歴戦の武将のごとき眼光を放つ。最後に身の丈三倍はある大太刀、『風明刃』を両手で掴み、少女は白刃を煌めかせ名乗りを上げた。

「人に仇なす悪鬼羅刹よ塵芥に還るがいい！　魔を断ち祓うは神器の刃！　装刃戦姫サクラヒメ、推して参る！」

そう、彼女こそ破魔の力を秘めた神器結晶で転身する姫武者。オニグミに対抗し、人の世を守るために生み出された変身ヒロイン、装刃戦姫なのだ。

「チッ。いいところだったのによお！」

食事を邪魔され怒りに震える牙噛。激しい怒気で空気が歪む。

「オレがだれだかわかってんのか!?　八大鬼は鬼蜘蛛をつかさどる牙噛さまだぞ！　テメェなんぞ五秒でゴミクズにしてやるぜ！」

八大鬼とはオニグミを束ねる幹部の名称である。その力は圧倒的で幾人もの装刃戦姫が敗北を喫してきたのだが――

「それがどうした。八大鬼など何度も切り結んでいる。貴様はあの鬼蛙よりも強いのか？」

「鬼蛙……クソッ！　あの根暗野郎、ガキを図に乗らせやがって！　いいぜ、相手になってやらあ！」

微塵の動揺も見せない少女に本能が警告を告げる。だが、鬼が人を恐れることなどあっ

てはならない。死神の鎌のように八本脚、その先端に生えた爪を肥大化させる。幹部としてのプライドが後退を許さない。

「死ね死ね死ね死ね！　死ねえええぇえ！」

凄まじい速度で三百六十度、全方位から爪が襲い掛かる。一撃、一発が鋼鉄すらも引き裂く鬼の全力だ。サクラヒメは身じろぎ一つせず牙噛は勝利を確信する。

「もらったぁッ！」

自信家の悪鬼は気づいていなかった。相対する敵が並みの戦姫ではなく、日本対魔協会最年少で神器結晶に適応した最強の戦姫、装刃戦姫サクラヒメであるということを。

「愚かな」

身の丈以上の大太刀が目にも止まらぬ速さで振るわれると、脚の一本が斬り落とされた。その衝撃と痛みで残りの爪も空を切る。

「ガッ!?　な、なにイィィ!?」

「遅いっ！　ハアアアアアアッ！」

刃が閃き、続けて二本、三本、四本と脚が斬り落とされていく。紫色の体液が噴き出しては地面を汚す。

「ぎゃアアアァァッ!?　あ、脚があああああ！　オレの脚があああアァァッ！」

「ピーピーわめくな、みっともない。貴様それでも八大鬼か？」
「こっ、こっ、この糞女がッ！　舐めやがってッ！　許さねえええェェェ!!」
殺意を全開にして爪を叩きつける牙噛。だが、力の差は歴然だ。白刃が舞い踊るたびに体液が飛び散り、五本目の脚が斬り落とされた。
「弱い者イジメはできても戦はできないようだな。鍛錬がまったく足りていない。このままダルマになるまで続ける気か？」
「ガッ！　がああァァ……！　くそッ！　くそッ！　こ、ここは一先ず退いてやるぜ！次に会った時がてめえの最期だ覚えてやがれ！」
たまらず尻から噴き出した糸を木々に繋ぎ留め、巻き取り彼方へ離脱しようとする八大鬼。
「ハッハッハアッ！　またな糞女！」
封鎖結界も解除し、なけなしの虚勢で装刃戦姫を挑発する。弾丸めいた速さで鉄橋から遠ざかっていく。
しかし、サクラヒメは兎のように跳ね、すでに牙噛の上を取っていた。
「次？　貴様に次などない」
「ナッ!?　なにイイィィ!?」

甲冑を纏っているとは思えない電光石火の早業。鬼の動体視力でも追いつけないスピードだ。

姿を捉えた時にはもう遅く、空中で急な方向転換ができずに狼狽する牙嚙。数秒前までの余裕はもうどこにもない。

「ま、待て！　待ちやがれ！　そうだ！　あの女はあきらめる！　それに欲しいものは何でもやるから見逃してくれ！　大金持ちになりたくないのか!?」

「黙れ」

「オレさまは他のカスどもとは違う！　こんなとこで死ぬ定めじゃねえ！　ねえはずだ！」

「黙れと言ったはずだ見苦しい！　消え失せろ鬼蜘蛛！」

「ひっ、ひぃいいィィ！　いやだいやだいやだあっ！　幹部になったばかりなのに！　こんなガキに！　いやだあああアアァァッ!!」

悪鬼の命乞いに貸す耳などあるはずもない。満月を背に、風明刃が振るわれる。刀身が青白く光ると、斬撃が幾重にも重なり牙嚙の身体を切り裂いた。

「討滅奥義！　花鳥風月・百八式!!」

「ギャアアアアアッ！　アアアアアアッ！」

牙噛の身体が百八つに分割、闇の魂が浄化されると完全に消滅した。
刃から体液を払うと鉄橋に舞い立つサクラヒメ。残心を決めると女性へ近づき、額に触れる。
「今夜あったことは悪い夢だ。何も気にすることはない」
「あなたは一体――」
その言葉を最後に眠りに落ちる女性。神器結晶の能力で記憶の消去を行った反動だ。スヤスヤと寝息を立て、目が覚めた時にはすべて忘れているだろう。
身体に異常がないことを確認すると、サクラヒメは対魔協会に連絡を取り、事後処理班を寄こすように伝えた。
あとの面倒ごとは彼らがやってくれるだろう。
（父さま、母さま、また一体鬼を斬りました。八大鬼、鬼蛙の首までもう少し。二人の無念、必ず晴らしてみせます）
亡き両親に思いをはせ、帰還する装刃戦姫サクラヒメ。月光照らされる姿は一振りの刃のように煌めいていた。

◆◆◆◆

「おはよー」

「おはようございまーす」
校門から快活な声が聞こえてくる。
ここは岩戸(いわと)学園。昔ながらのしきたりを重んじる古風な学園だ。文武両道をモットーに多くの生徒が青春を謳歌している。
「建宮(たてみや)会長！　この資料はどうしたらいいでしょうか！」
「ああ、そこに置いておいてくれ。あとでチェックしておく」
「はい！　ラジャーです！」
体育会系の男子生徒が資料を机に置き、ダッシュで教室をあとにする。
建宮会長と呼ばれた女子生徒はやれやれといった様子で肩をすくめた。
装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華(りゅうか)は学園に通う生徒だ。生徒会長と剣道部部長を務め、二足のわらじに忙しい毎日を送っている。
「ふぅ、それにしても今日は日差しが強いな」
窓から差し込む太陽は早朝からギラギラと輝き、欲しくもない熱線を存分に振りまいていた。季節は夏。
今年もまた暑くなりそうである。
流華も衣替えを行い、セーラー服も半袖だ。無地のスカートは少し短めで、抜群のスタ

イルと合わさって清涼感と、透き通るような美しさを体現していた。黒髪が風になびく姿に男女問わず見惚れてしまう。

と、そこへ男子生徒が現れた。

「おはよう。今日も暑くてゆで上がっちゃうよ」

「おはよう良平。しかし、これしきのことで泣き言を言ってはいかんぞ。心頭滅却すれば火もまた涼しだ」

「あはは、建宮さんはいつも元気だね。夏バテしているところなんて見たことないよ」

「鍛えているからな」

声をかけるのは流華の幼馴染にして恋人、三城良平。丸眼鏡をかけた小柄な少年だ。流華と同じ剣道部に所属し腕前はイマイチだが、人のことを思いやれる心の優しい少年である。

両親の死で街を離れていた流華と岩戸学園で再会し、最近交際を始めたばかりである。

「そういえば、ぼくの剣道の腕ってどのくらいなの？　建宮さんを十としたらどのくらい？」

「〇・五といったところだな。相当に鍛錬が足りていない」

「う、まだまだ先は長いなー」

「ふふ、わたしを守るんだろ？　ならばもっと精進しないとな」

少年の想いに口元を緩める黒髪乙女。二人で過ごす時間は戦いのつらさを忘れられる大切なひと時、流華にとって彼は日常の象徴だった。

この何気ない日々を失いたくない。

入学してからは復讐のためだけではなく、良平や学園のみんなの平和を守りたいと流華は考えていた。

しかし、自らが装刃戦姫であることは絶対に口にはできない。言えば周囲の人間をオニグミとの死闘に巻き込んでしまうからだ。

牙噛との戦闘も霊力を全力解放したから勝てたのであって、見た目ほど楽な勝利というわけではない。神器結晶を酷使した反動で筋肉痛がひどいが、痛みを隠して気丈に振る舞う。

「しかし、建宮さんではなく流華だろう。わたしたちは恋人同士なのだぞ。そんな他人行儀でどうする」

「でもまだ名前呼び捨ては慣れないっていうか……ちょ、ちょっと恥ずかしいし……」

「良平、大和男子だろシャキッとしろ！　ほら、りゅ・う・か・だ。りゅ・う・か」

「り、りゅう……か……」

「声が小さい！」
「りゅ、流華っ!!」
「うむ！　それでこそわたしが認めた男だ」
大声でクラスメイトの注目を集めてしまうバカップル。気弱な良平はモジモジと赤くなっているが、流華はとても満足した様子である。
気っ風のいい建宮会長は人の目など気にしないのであった。

◆◆◆◆◆

放課後。
部活と生徒会長としての業務を終えた流華は一人、街を歩いていた。良平と一緒に帰らないのはパトロールも兼ねているからである。
西の空が茜色に染まり、日の落ちるこの時間帯は悪鬼たちの起床時刻でもあるのだ。
「うむ、特に異常はないな。そろそろ家に戻るか」
ひとしきり街を探索したあと、自宅であるマンションへ戻ることにする。
だが、帰路の途中で神社にさしかかった瞬間、急速に膨れ上がる妖気を感じた。
「――ッ、まさか……神器転身！」
神器結晶に霊力を込め、装刃戦姫サクラヒメに転身する。

禍々しい気配に全身が粟立つ。
（この妖気……あいつ以外にありえない……！）
急ぎ鳥居をくぐって石段を駆け上がり、境内に到着する。広々とした敷地の奥に賽銭箱の置かれた拝殿が見えた。周囲に人の気配はない。
妖気は確実にここから漂ってきていた。
「そこにいることはわかっている。姿を現せ！」
「せっかちなところは変わってないねサクラヒメ。牙噛を倒したからちょっとは成長したと思ったんだけど」
ぐにゃり、と石灯籠（いしどうろう）が歪み鬼が出現する。同時に外界から隔離する封鎖結界が起動し、空が血のように赤く塗り固められた。
「黙れッ！　貴様のたわ言に付き合うのも今日限りだ、覚悟しろ鬼蛙！」
「いきなり暑苦しいなあ。もっと平和的にいこうよ平和的に」
「ほざけ、どの口が……！」
サクラヒメと相対するのは身の丈四メートルもある蛙の化け物。オニグミ幹部、八大鬼の一体鬼蛙である。体表はぬらぬらと光り、いたるところにぶつぶつとした出来物をこしらえている。

額の部分からマッシュルームヘアーの少年が顔を覗かせ、声はそこから聞こえていた。
「父さまと母さまの仇……今日こそ討たせてもらう」
「おお、すごい霊力。若いっていいよね、レベルアップが早くてさ。ボクなんて歳取っているから物覚えが悪くって」
「覚悟ッ！」
風明刃を中段に構え、疾風のごとき速さで間合いを詰めるサクラヒメ。
鍛え上げられた霊力は瞬間的に、八大鬼幹部をも凌駕（りょうが）する。鋭い突きが無防備な腹部目がけてくりだされた。
（殺った！）
「って思うよね？」
しかし、あと一歩というところで大太刀が止まる。反撃を受けたわけではない。原因はサクラヒメ自身にあった。
「これは……ッ！」
「いつまでも対策を講じないおバカさんとでも思っていたのかな？　キミの情報はすでに把握しているんだよ。装刃戦姫サクラヒメ、いや建宮流華」
（コイツわたしの名を……!?）

でっぷりとした太鼓腹がスクリーンめいて光り、映るのは眼鏡をかけた少年の映像。家族で夕食を取る三城良平の姿であった。

「なぜ良平の姿が……き、貴様何をッ！」

「おっと、その物騒な刀はしまった方がいいと思うよ。彼の肩を見てごらん」

良平の肩にはホヤのような物体がへばりつき、ドクンドクンッと鼓動を打っていた。明らかな異物だが霊力のない人間には見ることも触ることもできない。不思議と肩が重く感じるくらいである。

「コイツは爆震蟲（ばくしんちゅう）。ボクの身に何かあったら作動するようになっているんだ。例えば刃物で怪我をするとかね」

「わたしを脅迫するつもりかこの卑怯者！」

「キミの選択肢は二つ。一つ、ボクを殺して両親の仇を討つ。一つ、恋人を救うためにボクの言いなり、雌奴隷になる」

「雌奴隷だと!?　ふざけたことを……」

「クフフ、好きな方を選んでいいよ。前からその身体を好きなだけイジくりまわして、みたかったんだ」

「クッ……うぅ……」

「一分あげるから手早く決めてね。キミと違って暇じゃないから」
不気味な笑みを浮かべる鬼蛙をにらむ黒髪戦姫。雌奴隷という単語から凄まじい怖気を感じる。
（ここで斬れば奴の命を断てる……だが……良平は……良平の命は……）
極限の二択に苦悩する。一分の間に数多の逡巡（しゅんじゅん）が流れ、ようやくサクラヒメは答えを出した。
「貴様の雌奴隷になる……だ、だから良平には手を出さないでくれ……頼むこの通りだ……」
風明刃が音を立てて地面に倒れる。武器を手放した黒髪戦士は仇敵（きゅうてき）に向かって頭を下げた。
「ククク、クハハハハ！　歓迎するよサクラヒメ。ボク好みの雌奴隷に調教してあげる」
（今は言いなりになってやる。だが覚悟しておけ鬼蛙……わたしは必ず貴様を討ち滅ぼしてみせる！）
恭順の裏で牙を研ぐ黒髪戦姫。夜闇がまた深さを増していく。
「じゃあ、オッパイを触らせてもらおうかな。当然、鎧は外しておいてね」
「そ、それは……ッ！」

「あれ、雌奴隷になるって言ったよね？　まさかこの程度のこともできないの？」
「わかっている！　今脱いでやるから待っていろ！」
サクラヒメは胸の布生地を大きく開くと、たわわに実った乳房をさらけ出した。柔らかな豊乳が狭苦しい鎧から解放され、プルンプルンと弾む。汗で濡れた乳頭は桜色に火照っていた。
（こんな下衆に肌を見せるなんて……）
大き過ぎるオッパイは周囲から好奇の目で見られることも多く、彼女の一番のコンプレックスだ。いやらしい視線を感じることも多々あり、そのたび不埒な輩は鉄拳で制裁してきた。
二つの膨らみを鬼蛙は下卑た視線で舐めまわす。
「すっごくデカオッパイだね。まるでメロンみたいだ」
「……それがどうした」
「こんな下品乳だと。クラスでも視姦されてるんじゃない？　学園でのキミってオナペットなのかな？」
「そ、そんなわけあるか！　愚弄するのも大概にしろ！」
「んー、まだ自分の立場がわかっていないようだね。恋人がはどうなってもいいわけだ」

「うっ、ぐ……」

凍りつくような視線と追及に口ごもってしまう。鬼蛙の望む答えを言わなければならないことは明白。

「ふんっ。まあ、そうかもな……」

屈辱に耐えどうにか言葉を搾り出す。良平が人質でなければ、もうこの瞬間にも斬りかかりたいくらいだ。

（くうっ……このヌルついた目で見られるとぞっとする。やはりコイツも他の男どもと同じか……）

自らを欲望のはけ口としてしか見ていない男性はサクラヒメにとって軽蔑すべき対象だ。良平以外の異性は今でも受けつけない。

「うんうん。奴隷はご主人さまに従わないとね。今から質問をするけど全部正直に答えてもらうよ。嘘をついたら……わかってるよね？」

「ああ。好きに聞けばいい」

乳頭を露出させたまま恥辱に耐える美少女戦姫。逃れることのできない羞恥質問が始まった。

「一つ目。キミって処女なの？」

「ッ!?　だれがそんなことを言うかッ！　ふざけるのもいい加減にしろッ！」
「はあーあ、今のは傷ついたな。傷つき過ぎて自殺しちゃうかも」
「わ、わ、わかった！　言う！　言うからやめろ！　わ、わたしはその……」
「その？」
「しょ……処女だ！　経験はまだない……」
「へー、まだなんだ。そのエロボディなら男なんて選り取り見取りだと思うけど」
「うるさい！　わたしの勝手だ！」
顔を真っ赤にしながら叫ぶ。同性相手でも言わない秘密を仇敵に知られ血液が沸騰しそうだ。
「次はもっと早く頼むよ。二つ目。ファーストキスはいつ？　それくらいはしてるよね？」
「まだだ……キスはしていない」
「あれ？　彼氏がいるのにキスもしてないの？　というかまだ一度もしてないんだ？」
「貴様らを殺すために修行の毎日だったからな。それに良平とは先週付き合い始めたばかりだ」
「オニグミ討滅の戦闘マシーンだと思ってたけどカワイイところもあるんだね。三つ目。自慰の経験は？」

「じ、じい？」
「オナニーのことだよ。やったことくらいあるでしょ？」
「おなにい!?　破廉恥なことを……！　そんなことするものか！」
「ホント？　もし嘘だったら――」
「本当だ！　本当にしたことはないし興味もない！」
サクラヒメの言うことはおおむね事実である。学業や装刃戦姫としての任務で多忙な彼女は自慰をした経験がまったくない。
良平との交際で性に関する好奇心が少し芽生えている程度だ。
「まあいいけど、経験ゼロでボクのテクニックに耐えられるかな？　簡単に壊れないでよね、つまらないからさ」
「言われるまでもない。貴様ごときに感じることなど何もない」
チロチロと舌を動かしニヤつく鬼蛙。柔らかな胸乳を好きに陵辱できることにご満悦の表情だ。
一方、耐えるサクラヒメの瞳には、灼熱に燃える闘志があった。
（胸くらい好きに触るがいい。その腕がこの先もあると思わないことだな）
神器結晶に選ばれるのは心身共に強靭な人間のみ。これしきのことで絶望する装刃戦姫

ではなかった。
だが、鬼蛙が舌を伸ばし乳首に触れると、今までに経験したことのない痺れが身体を奔った。
「ひっ!?　ひゃあああんっ!?　な、何をする！」
「味見だよ。まずはそのデカ乳からね」
粘ついた舌を乳首に絡めてクニクニと愛撫する。初歩の初歩の前戯。
経験不足な黒髪戦姫はそれだけでも身をよじってしまう。
「ふんっ！　少し驚いただけだ！　んっ、んん……赤ん坊のように舐めていろ！」
「へぇ、キミって乳首は桜色なんだね。だからサクラヒメって名乗ってるのかな？　乳輪はかなり大きめで、まるで牛みたいだよ」
「じろじろと見るな！　んくっ……っうぅ……」
「ここまでデカ乳輪だと水着からはみ出しちゃいそうだね。海でデートとかどうするの？　あっ、本当は視姦されたかったとか？　クフフ、純情ぶってるわりにムッツリスケベだったりして」
（い、言わせておけば……この変態め！　絶対に許さん！）
乳輪の大きさをバカにされ唇を噛む。乳首を舐め転がされたまま屈辱質問に回答させら

れる。

「この大きさだと九十六センチのGカップだよね？　合う下着を探すの大変じゃない？」

「ひ、百貨店でもないとなかなかな……あっ、ふぅぅ……ま、まだ舐めるつもりか……むうぅ……」

「ホルスタインみたいなデカチチだと苦労も多いんだ。それじゃ、ちょっと本気を出そうかな」

「ふあぁぁっ!?　な、ななな、ああアアァぁ!?」

鬼蛙は大口を開けるとサクラヒメの乳首にしゃぶりついた。舌先で触れるだけでなく、いやらしく下品に音を立てて乳房に吸い付く。まるでミミズとナメクジが合わさったような不快感だ。

ちゅぱっ♥　むちゅっ♥　ちゅううう♥

「はあぁんっ！　ふひんぅっ、あああ！　な、なにを……ッ！」

境内に甘い声が響き渡る。だらしなく感じてしまうデカチチ乙女の声。

先ほどまでの気丈な態度はどこへいったのか。切ない喘ぎが堪えられない。

「甘くておいしいよ。キミのオッパイ。ン……」

「ひゃあぁぁん！　うぅ……ひうっ！　はあぁん、っくあああ……や、やめろ……ッ！」

「処女のクセに感じ方だけは一人前だね。実は雌奴隷の素質があるんじゃないの？」
「くぅぅ……なんでこんな……こんな気持ち悪い男に舐められているのに、ひぅ、ウソだぁ……！」
「フフ、困らせてごめん。種明かしをするとボクの唾液には媚薬の効果があるんだよ。普通の女の子なら一舐めで絶頂するくらいのね。キミは霊力で耐性があるみたいだけど、いつまで続くかな？」
「びやくだと……この外道がッ！　悪趣味にもほどが……あ、あうっ！　ひゃあぁぁあああ！」
媚薬舌技に嬌声を上げるデカ胸戦姫。頬を赤く染め歯を食いしばって耐えようとするが、理性がどんどん蕩かされていく。
キスもしたことがない彼女に鬼蛙の責めは刺激が強過ぎた。唾液がGカップ巨乳を濡らすたびに乳首が硬直してしまう。
股布の下で息を潜める肉花弁は淫蜜をこぼし、濡れそぼっていた。
「くっうぅうん、くぅう……はあぁぁん！」
「オッパイが気持ちよくなってきたんじゃない？」
「そ、そんなわけあるか……こんなの……き、気持ち悪いだけだ！」

「ダメダメそんな言い方じゃ。雌奴隷としての心得がわかってないみたいだね。ここからはボクの命令通りにしゃべってもらうよ」
「勝手にしろ。その程度なら安いものだ」
何を言わされようと心までは屈しないと不敵に微笑む黒髪乙女。
鬼蛙は乳房から口を離すと耳元に唇を近づけ、囁く。途端にサクラヒメの瞳が見開かれ全身が紅潮した。
「じ、冗談も大概にしろ！　そんな……そんな恥ずかしいこと言えるわけがないだろう！」
「ボク何度も同じことを言うのは好きじゃないな」
「――く、くそ……わかった……言う通りにすればいいんだろう」
「クフフ、その通りさ」
蛙の大口からベロを伸ばし、再びGカップ巨乳を舐め上げる。張りのある乳房がテラテラと輝き、桜色の巨乳輪が淫猥な光沢を見せる。
声を殺し喘ぐ対魔少女に先ほどと同じ質問が投げかけられた。
「オッパイが気持ちよくなってきたんじゃない？」
「……ああ……と、とても気持ちがいいぞ……ふぅぅ……んくうううう……！」
「デカ乳を舐められるのがいいんだよね？　乳首も勃起してるよ？」

「ああ、スケベＣＤ乳輪と……ぼ、ぼ、ぼ、勃起……乳首を責められるのが感じるんだ……はぅっ！　ああ……はぁぁ……」

「へぇ、じゃあこれからはデカオッパイでオナニーしないといけないよね」

「そうだ……わたしはだらしない牛乳女で、お、おなっ……オナニー願望のある淫乱なんだ……くっ、ンアアッ！」

望まない羞恥セリフにカァッと顔が熱くなる。二つの膨らみがたわわに揺れ、硬さを増す乳頭は淫らに色づく。

「思った通り真面目なふりして淫乱なんだね。学園オナペットのキミらしいよ」

「わたしはド下品デカ胸のオナペットだ……学園男子全員に欲情されるズリネタだ……こ、これでいいか！」

命令に従い卑語を口走る。媚薬の効果を忘れるほどの屈辱に、怒りがこみ上げてくる。

（くうぅ……なぜこんなセリフを……人の胸をなんだと思っているんだ！）

鬼蛙はひとしきり乳房を舐め尽くすと、ねっとりと口を離した。唾液が白肌に残り線を引く。

「ごちそうさま。次はコイツに奉仕してもらおうかな」

黒髪乙女にさらなる辱めが襲い掛かる。

鬼蛙の股間が盛り上がると、勃起したペニスが現れたのだ。太さも長さも人間のものとは大違いで、サクラヒメの鼻先に届くほど。

突然の事態に少女の思考は追いつかず、三秒置いてようやく悲鳴が上がった。

「き、キャアアァアアアッ!!　な、なんだそれは!?　やめろ見せるな！　近づけるな！」

「なんだって、チンポに決まってるでしょ。知らないの？」

「そういう意味じゃないッ！　う、うわあああ！」

男性器など授業でしか知らない装刃戦姫に走る衝撃。

八大鬼、鬼蛙のイチモツは男性が見ても驚く代物であった。先端は赤黒く光り金棒のごとき威圧感がある。カリ首には恥垢がこびりつき、鼻が曲がるような異臭を放つ。竿の部分にはブツブツとしたイボが無数にあり、種付けをするという意思が前面に表れていた。

「これを口と胸に入れて、気持ちよくしてもらおうかな」

「本当にこれを口に入れろと言うのか……？　ありえない匂いだぞ……」

「サクラヒメ？」

「承知した！　やればいいんだろう！」

あまりの禍々しさにうろたえる美少女戦姫。しかし、雌奴隷に選択肢などあるわけがない。

「まず、おねだりしてもらおうかな。キミは何をしゃぶりたいの？」
「その……そ、それをください……」
「それって？」
「だから……そ、その股間のそれだ！」
「それってなに？　やる気あるの？」
「ぐっ……貴様……！」
意地悪くプレッシャーをかける鬼蛙。サクラヒメは恥ずかしさのあまり茹蛸のようになるしかない。
男性器の名称など口にするのも汚らわしい。
「ペ、ペニスのことだ。男性器を……舐めさせて欲しい……」
「ペニスじゃなくておチンポだよね？　おチンポが欲しいならちゃんとお願いしないと」
「……ッ！　お、お、お、おチ……ン……」
「ん？　今なんて？」
「お、チ……ン……ぽ、だ。これでいいだろう！」
「残念、よく聞こえなかったなー。もっと大きな声で言ってくれる？」
「～～～～～ッ！」

わざとらしい口調に歯ぎしりする。自分が情けなくて仕方がない。

（このクズめッ！　だ、だが言うしかないのか……良平のために我慢するしか……）

そして、可憐な唇から最低の名称が叫ばれた。境内中に響き渡るような大声で。

「お、お、おチンポ！　おチンポ！　おチンポのことだ！　き、貴様のおチンポをしゃぶらせて欲しい！　うぅぅ……恥ずかしい……」

「はい、よくできました。そこまで言うならしっかりしゃぶってね」

「くっ、やってやる……！」

サクラヒメは両手でGカップ巨乳を持ち上げると肉柱をおずおずと谷間に挟んだ。血管がビクビクと脈動し、熱がオッパイに伝わってくる。

（生暖かくて気持ち悪い……このクズ！　クズクズ！　クズ鬼め！）

続いて亀頭を恐る恐る口に運ぶ。薄桃色の唇で先端に触れ、すりゅり、と口内に招き入れた。あまりの刺激臭に涙がこぼれそうで、恥垢の苦しょっぱさが舌をマヒさせる。

「ちゅく……んんむぅぅ……」

「あのサクラヒメがチンカスまみれのチンポを口に含んでいる……ああ、最高だよ！」

（く、くさい！　臭過ぎる！　なんて不潔なんだ……ッ！　うぐっ、うぐぅぅ……ッ！）

気力を総動員して吐き気を堪える。一方、鬼蛙はまったく意に介さず腰を振り、淫らな

水音が奏でられた。

「んぐっ！　ちゅぶ……んぶっ、じゅぶぶ、ごぶっ……ちゅぶぶぶぅぅ～～ッ！」

「その調子だよ。噛まないように気をつけて」

「ちゅく……んぐぐ、ちゅぐぅぅぅ……ッ！　じゅぐ、じゅぐ……んぶぁぁ……ッ！」

「ほら、もっと亀頭を中心に」

「ふむぐっ、ちゅくぅ……ぺろ、ぺろ、ぺろりゅん……」

肉ロケットが口内を蹂躙する。動くたびにチンカスがこぼれ落ち、下水を凝縮したような匂いが加速する。

「無駄にデカい胸をしっかり動かしてね。おチンポに感謝を込めて」

「んっ、ちゅう……んんん……くうう……！」

黒髪戦姫はGカップ巨乳を押し付け奉仕する。両乳を上下に動かし、男の象徴に媚びを売る。

ムニュ♥　フニュ♥　ムニュニュ、ニュッ♥

「こうすればいいんだろう！　この変態……！　あむ、んくぅぅ……ちゅくぅぅ～」

「んー、まあこんなものかな。雌奴隷になるならもっと練習しないとダメだね。オッパイなんてチンポを擦るくらいしか役に立たないんだから」

（人の胸を玩具にしておいて、女をなんだと思っているんだコイツは！　これだからオニグミは……男は嫌になる！）

ホルスタイン巨乳を弄ばれ美少女戦姫は怒りに震える。無遠慮な視線を向けられたことを思い出し、異性への嫌悪感が湧き上がる。

良平がいなければすべての男を斬り捨てたい気分だ。

「ちゅ、ごほっ！　ぐちゅる……うえぇぇぇ……！　ま、まだやるのか？　うう、うぐうぅッ！」

「もちろん。ボクのおチンポはおいしい？」

「ごふっ……お、おいしい……す、すごくおいしい……んぐ！　けほ……むぶっ！」

「じゃあ、もっと笑顔でないとね。ほら笑って。スマイル、スマイル」

「ふぁ、ふぁぁ……はぶ……んじゅ、じゅぶぶぶん！　ちゅくうう……！　す、スマイル……」

「サクラヒメスマイル０円でーすってね。やってみせてよ」

「さ、サクラヒメ、スマイル……んぶ、ちゅう、ぜ、ぜろえんでしゅ……と、とても安くなっている……ん、ングウウゥゥッ！」

無理やりに口角を上げ、ぎこちなく微笑む巨乳乙女。惨めさに乳首がまた硬くなってし

まう。

「そういえばキスもまだだったよね。じゃあこれが一番目なんだ」

「グッ……何を言っている……ちゅぶ、あ、んぐじゅじゅうぅうううッ！」

「ククク、ハハハ！　恋人より先にカエルチンポとキスする女なんて初めて見たよ！　ねえ、良平くんに申し訳ないと思わないの!?」

「んぐぅう……!?　なっ、ああ、あ……！　う、ううるさいッ！　ちゅぶ……んあ……うるさい五月蠅いッ！　黙れッ！」

自分が何をしているか気づき、肉竿をしゃぶりながら怒鳴る乳牛乙女。ファーストキスを陰茎で済ませてしまった事実に心が揺れる。

（ち、違っ……わたしはそんなつもりでは……良平より先にチンポにキスなんて……これではまるで浮気をしているみたいじゃないかッ！）

その動揺を鬼蛙は見逃さない。ストロークを速めチンポキスの現実を刻み込もうとする。

「そろそろイキそうだよ。お口いっぱいにボクのザーメンを注ぎ込んであげるね」

「まっ、待て！　はぶっ、じゅぐうう……せめて外に出せッ！　むぐぅ、だれが貴様の精液など……ふぐうううぅ～～ッ！」

願いは聞き入れられず、先走りのカウパーと唾液が混じり、唇を口内を蕩かしていく。

垂れた粘液が豊満な胸元を濡らしていく。
「や、やめろ！　出したら絶対に許さないぞ！　はぶっ、ちゅくぅぅ～ッ！」
「好き嫌いはいけないなあ。雌奴隷なんだからザーメンはゴックンしないとね」
「や、やめっ……うぶぶ！　あああぁあああッ！」
全力で口内射精を拒絶する奴隷戦姫。しかし、悪辣なオニグミに手加減などありえない。肉竿にミミズのような血管が浮かび上がり、鈴口がヒクつくと、白い濁流（だくりゅう）が噴出した。
ビュク！　ブビュク！　ビュルルルウウゥッ！
「ふぐッ!?　はぐッ!?　おぐうう……う、うぐうぅうううぅう～～～ッ!!」
生臭い粘液を口いっぱいに受け止める。肉棒が栓になって吐き出すこともできず、ザーメンを嚥下（えんげ）させられてしまう。
「ごくっ、ごくっ、うぐ……ぐぶぶ……げほっ！　えほっ、けほっ！　けほっ！」
「いい顔だったよサクラヒメ。おチンポの味どうだった？」
「はぁ……はぁ……ふん、べ、別に大したことはないな。この程度でわたしを辱めたつもりならおめでたいと言う他ないぞ」
「ありがとう。どこまでその調子が続くか楽しませてもらうよ」
装刃戦姫と八大鬼の視線がぶつかり合う。清廉な黒髪乙女にさらなる淫辱が忍び寄る。

「こっ、これでいいのか？」

「そうだよ。ちゃんと腰を突き出してね」

サクラヒメは引き続き胸乳を露出させられていた。さらに、股間の鎧も剥ぎ取られ、スカートもまくり上げられてしまう。ショーツは転身の影響で身に着けていないため、鼠蹊部（そけいぶ）や若草のような茂みが丸見えだ。

（ぐっ、なんて格好を……とても良平には見せられない……）

両親でも恋人でもない相手に秘部を晒す屈辱、凄まじい恥辱に全身から火が出そうである。

◆◆◆◆

鬼蛙はその様子をニヤニヤと眺めると、蛙の口内から呪符を吐き出した。薄汚れた紙に奇怪な文字が書き連ねてある。

「これがなにかわかるかな？」

「知ったことか。どうせろくでもないものだろう」

「ノリが悪いなあ。せっかくキミのために用意したのに」

「わたしのためだと？」

「そうだよ。ボクの趣味だけどなかなか試すことができなくてね。というわけで、はい」

呪符がペタリと股間に貼りつけられる。直後、ドス黒い発光と共に変化が起こった。
「!?　こ、これは!?」
股間の肉が盛り上がると肉棒が形成される。幹の部分にはミミズのような血管が浮かび、ドクンドクンと脈を打つ。先端は亀の頭部のようで皮の奥でピンク色の柔肉がヌメる。その下にはピンポン玉状の球体がフルフルと弾み、雄の匂いを放っていた。サクラヒメの股座（またぐら）に生えた物体、それはどこからどう見ても男性の陰茎であった。
「ひっ、ひゃあああぁぁッ!!　な、なんだこれはッ!?　鬼蛙！　わたしに何をしたッ!?」
「フタナリチンポを生やしてあげたんだよ。前からキミには玉つき包茎チンポが似合うって思ってたんだ」
「ふ、フタナリ……？　玉つき……ち、チンポだと？　まさか、男の陰茎をわたしに!?」
「キミが大嫌いな男と同じになれるようにね。これからはおマンコだけじゃなくチンポでも気持ちよくなれるよ」
おぞましい肉棒に黒髪乙女の血の気が引いていく。
雌奴隷になった時点で覚悟は決めていたが、これは予想外だった。
「ふざけるなこの鬼畜！　取れ！　今すぐ外せえぇぇぇぇぇッ！」

「できない相談だね。これからたっぷりとフタナリ快楽を味わってもらうよ」
肉竿へ手が伸びる。ブヨブヨとした指先が竿をつまむと、根元から亀頭の先端まで擦り上げていく。
「ひぐッ!?　や、やめ……！」
触れられた反応で硬さが増し、血管がビクンと跳ねた。
「ふあああぁぁぁッ！　さ、触るな！　すりすり撫でるなぁ！　あぁあああぁッ！」
「こうやって扱くと大きくなるんだよ。勃起って聞いたことない？」
「ふ、ふざけたことを！　ぼ、ぼっ……き……などするものか！　んくううう……！」
鋭い眼光で怒りを叩きつける。
だが、少女の想いとは裏腹に海綿体へ血流が送られ、陰茎全体が硬く膨れ上がっていく。
完全に勃起した陰茎はまるで毒虫のようだ。
「イイ感じに怒張したね。立派だよサクラヒメ」
「褒めるなバカッ！　な、なにかヘンな感じが……」
初めて味わうフタナリ勃起に戸惑い、腰を揺らしてしまう。擦られるたびに甘噛(あまが)みにも似たむず痒さが尿道を走る。
「長さは十八センチってとこかな。男子から尊敬されちゃうね」

「うくっ、ふぐうううぅ〜〜、う、うるさい……知ったことか！　あぁぁ……はうあああああ！」

「きっと良平くんよりも巨根だろうね。クフフフ、彼氏よりもチンポがデカいってどんな気分？」

「こ、殺す！　そんなこと言うな！　あぁっ、ん……！　良平のことは関係ない……！　く、ん、くううぅうう！　疼くぅう……！」

サクラヒメの身体が火にくべられたように熱くなる。ペニスの大きさで恋人に勝つなんて考えもしなかった。

（うぅ……良平よりも大きいなんて、どうやって説明すればいいんだ……ひど過ぎる！　こんなの絶対に見せられない……）

初体験もまだなのにペニスサイズで勝ってしまうフタナリ戦姫。最悪の秘密を抱えさせられてしまう。

「……ッ、いつまでも触るなっ、撫でるなぁっ！　はく、あっくあああ……」

「やれやれ、包茎のくせに偉そうだね」

「ほう……け？　んん、んぐうぅ……」

サクラヒメのペニスは勃起しても亀頭が皮を被ったままの状態、いわゆる仮性包茎であ

った。余った包皮の先っぽから尿道口だけが顔を覗かせている。
「被ったままじゃ恥ずかしいでしょ。剥いてあげるよ」
「き、貴様なにを……!?」
女性ならありえないはずの包皮剥きに冷汗が流れる。
鬼蛙は慣れた手つきでキノコ傘に触れると、皮を根元へ移動させた。
ズリュ！　ズリュ！　ズリュリュ！
「んくっ！　っあぁぁあ！　あああ、あああああああああああッ！」
徳利のような皮がずり下がると、卑猥な音と共にピンク亀頭が露出した。
仮性包茎の装刃戦姫は敏感な部分をさらけ出され、肢体をくねらせてしまう。
「ん……ふ、く、ピリピリする……本当にわたしの身体なのか……？」
「まだ刺激が強過ぎたかな？　でも大丈夫。すぐに気持ちよくなれるよ」
指でスリスリとムケ亀頭を愛撫する。初めて外気に触れた亀頭は驚いたようにヒクついた。
「は、ひゃ、はあああぁぁぁぁん！　こ、擦るな、こするなぁ……！　んぐっ！　はうぐうっ！　な、なんだこの感触は……！　あっくううううううううぅっ！」
全身を震わせて悶えるマスターベーション初体験の黒髪戦姫。Gカップスイカ巨乳を揺

らしながら、雌猫めいた声を上げていく。封鎖結界で決して外に声が漏れることはないが、淫猥過ぎる嬌声だ。

「このまま射精する悦びを教えてあげるよ」

「はうっ、くうぅっ！　ど、どこまでも下衆め……！」

「おチンポミルクをぶちまけてもらうよ。おマンコより先にチンポで雄快楽を覚えちゃったら、もうまともな女の子に戻れないね。ただの雌奴隷じゃなくてフタナリ変態のマゾ雌奴隷にレベルアップさせてあげるよ」

「やってみろ……！　そんなことでわたしは屈しないッ！」

「その強がりがいつまで続くか見ものだね。ほ～らほら、気持ちいいでしょ？」

「あっくあああああぁぁぁん！　ふくううぅぅぅうううっ！　んひぃいいいいぃ！」

ごしゅ♥　すりすり♥　しゅりしゅり♥

肉茎を擦られエロ声を出しまくる。魂の蕩けるような快美で意識が朦朧（もうろう）としてきた。指が亀頭を撫でるたびに狂おしい肉電流が神経を駆けずり回る。

「んっ！　くっ！　くあああアァアァアアアア！　だれが射精など……！　うぅうう……！」

「無駄無駄。我慢できるわけないって」

「貴様に何がわかるッ！　ああ、ふうう……くぁうううっ！　装刃戦姫を舐めるな……ッ！」

「わかるよ。だってこうするからね」

鬼蛙は指にたっぷりと唾液をまぶすと、露出亀頭に塗りたくった。呪力の混じった媚薬成分がフタナリチンポを発情させる。

「ふぁッ!?　ヒッ!?　ヒギイイイィィイイィィイイッ！　ああ……こ、股間が熱いいいいいッ！」

「ほうら、もう限界だ。チンポがヒクヒクしてたまらないでしょ？」

「くっ、くううぅううぅうっ！　き、気持ちよくなってしまう……！　感じてしまう……！　はぁあぁぁあああん！」

唇を噛んで必死を射精に耐えようとするが無駄なこと。童貞の彼女ではツボを知り尽くした悪鬼の愛撫から逃れられない。

（こ、これでは鬼蛙と同じだ……あの白く腐ったような粘液をわたしも……！　い、いやだ……くうぅうぅうぅう！）

喉で味わったばかりの臭気と熱。それと同じ醜態を自分が晒すことが恐ろしい。黒髪乙女の美貌が淫辱で歪む。

「んくっ！　んくっ！　くああ……熱いぃ……！」
「フフ、あと三十秒ってところかな。装刃戦姫サクラヒメの初射精、特等席で観覧させてもらうよ」
「ハァハァ……！　ハァ……アアアアッ！　お、鬼蛙、覚えていろ……！　ふぐっ！　ぐぅっ！　おっ、おおおオォオオオオン！」
頭の奥でチカチカと星が瞬き、思考が真っ白になっていく。黒髪を振り乱すフタナリ戦姫へ、ついに決壊の時が訪れた。
「な、なんだこれは……！　んっ！　ああっ！　あああああっ！　く、くるっ！　上ってくるぅぅぅぅぅうっ！　くあああああぁぁあああぁっ！」
ピュ……プピュ♥　ピュピュ♥　ピュ……ピ、ブビュ♥　ブビュビュビュウウウウウウウウッ♥
「くあっ！　やぁぁっ！　はうあぁぁあああっ！　ひゃあぁぁあああああああっ！」
肉竿をブルリと震わせ、黄ばんだザーメンをまき散らす。とろろ芋のようなこってり白濁液を打ち上がった。
舌を出し喘ぐ姿は淫乱そのもので、イカ臭い精液が境内を汚していく。
「ふ、く、はあ、はあ……はあ……は、早く止まれ……うう、ううう……」

「たくさん出たね。普通の女じゃ中々こうはいかないんだけど、さすがボクの雌奴隷だよ」
「くっ、うぅ……なんて醜態を……」
悔しげに目を伏せるサクラヒメ。鈴口から漏れ出る精液は一分かけてようやく治まった。常人ではありえない精液量である。
そして、屈辱に耐える表情とは裏腹に、初めての射精快感は身体へ心へ確実に刻まれる。
（射精とはこれほどまでに気持ちいいものだったのか……まるで魂が昇天するようで……お父さまや良平も同じことをしていたのだろうか……い、いや何を考えているんだわたしは！　しっかりしろ！　鬼蛙の思う壺だぞ！）
すんでのところで正気を取り戻し、心に活を入れる。呼吸を整え精神を立て直す。
「これで終わりか？　やはり大したことはなかったな」
「へぇ、言ってくれるね」
鬼蛙は次の調教に頭を巡らせる。ようやく手に入れた玩具でどのように遊ぶか額に浮き出た顔が喜色に歪み――
「はぁ、つまらないな」
「つまらないだと!?　人をあれだけ弄んでおいて……！」
「だって、このままじゃフェアじゃないでしょ？　人質を取って一方的に嬲（なぶ）るなんてイジ

メみたいだし、ボクそういうのって嫌いなんだよね」
「しらじらしいことを……正々堂々と戦う度胸など貴様にはないだろう。これで八大鬼とは情けない限りだがな」
挑発し、状況の打開に頭を働かせる。
（言葉の意図はわからないが、鬼蛙は気分屋なオニグミだ。従順なわたしに早くも飽きがきているのなら、こちらにも勝機はある！）
最悪の状況でもけっして逆転をあきらめない。そして、意外なほど早く好機は訪れた。
「そこまで言うのならゲームをしようよサクラヒメ。キミが勝ったら良平くんに手は出さない。潔く戦ってあげるよ」
「……ゲームだと？　一体何を企んでいる」
「心から屈服してもらいたいだけさ。さっきも言ったでしょ？　一方的なのは好きじゃないって。キミにもチャンスをあげるよ」
「その言葉に嘘はないな？」
「もちろん、今まで一度でもボクが嘘をついたことがあったかな？」
ニヤついた顔面からは並々ならぬ自信がうかがえ、油断しているようにしか思えなかった。

（オニグミの言葉など普通は信用できないが、鬼蛙は一度言ったことを反故にするタイプではない。八大鬼としてのプライドが許さないだろうからな。いや、元より今のわたしに選択肢などない！）

サクラヒメは研ぎ澄まされた刃のように覚悟を口にした。

「わかった、そのゲーム受けて立つ。装刃戦姫の強さ、その身に刻むがいい」

「いい返事だね。でも、キミが負けた場合はどうするの？　罰ゲームでもやってくれるのかな？」

「ああ、罰ゲームでもなんでもやってやる。さっさと始めろ鬼蛙」

「オッケー。その言葉忘れないでね」

サクラヒメと鬼蛙は拝殿へ進む。

「ゲームはこの賽銭箱でやってもらうよ」

「こ、これは……？」

困惑の声を漏らす黒髪乙女。目の前にある賽銭箱はどこにでもある普通の品ではなかった。ハシゴ状の部分にはバラエティー番組で見るようなパネルがはめこまれ、正面中央、ちょうど股間が当たる部分には黒い穴がぽっかりと空いていたのだ。

呪力による変異が起こっていることは明白であった。

「ルールを説明するよ。賽銭箱の穴にはオナホールが入っている」
「おなほーる？」
「オマンコを模した玩具のことだよ。そこにチンポを突っ込んで、奥にあるボタンを押す。一回押すごとにパネルに回数が表示される」
「神聖な神社で罰当たりな……それに、女性器の玩具など悪趣味が過ぎる！」
「射精せずに二十回ボタンを押すことができたらキミの勝ち。途中で我慢できず射精しちゃったらボクの勝ち。簡単でしょ？」
「……ッ、たった二十回だけでいいんだな？　ルールはそれだけか？」
「それだけだよ。それにゲームがスタートしたらキミには指一本触れないから安心して」
「承知した。あとで後悔するなよ」
サクラヒメは毅然とした態度で賽銭箱の前に立つ。頭の後ろで手を組み、ガニ股ポーズで腰を突き出した。今さっき射精したばかりのフタナリ肉竿は鬼蛙の指で勃起させられ、物干し竿のように硬くいきり立っていた。
（必ず勝利してみせる。良平、待っていてくれ）
慎重に穴へペニスを近づけ、そろりそろりと差し入れる。初めてのオナホール体験だ。
「ふ、あ、やあぁあああ！　く、これは……！」

ヒダとローションの絡みつきに恥ずかしい声を上げてしまう美少女戦姫。
穴の中は人肌に温められ、肉竿をヌルヌルと抱きかかえる。
「ゾクゾクするでしょ？　これと同じものがキミの身体にもあるんだよ」
「破廉恥なことを……くっ、んん！　さ、最初は驚いたがどうということはない。うく……！　生暖かいだけだ……ゆっくり動けば……んっ、平気なはずだ……んんんん……」
亀頭が奥に届きボタン押す。これで一回目のカウントだ。しかしパネルに反応はなく、表示はゼロのままである。
「おい、どうなっている！　まさか騙したのか！」
「ごめんごめん。ボタンは淫語を言いながらじゃないと反応しないんだ。なにかしゃべりながら押してみて」
「い、淫語!?　そんなものわたしが知るわけないだろう！　ふざけたことを言うな！」
「まあ、それもそうだね。今から覚えてもらうわけにもいかないし、台本でも読んでもらうかな。こういう時のために前から準備しておいたんだ」
「台本だと……なっ！　なんだこれは!?」
目の前に広げられたページを見て、サクラヒメは驚愕する。台本に書かれていた内容、それは淫乱で下品で変態的としか表現できないものだった。

性の知識に疎い彼女でも数行で赤面してしまうほどに。

「こっ、こここ、こんなことを言えるものか！」

「できないならゲームオーバーだよ？　せっかくチャンスをあげたのに残念だなー」

「本当にクズだな貴様……くっ、うう、うう……約束は必ず守れよ！」

どれほど理不尽な要求でも飲むしかなく、仇敵の淫語台本に目を走らせる。黒髪乙女は羞恥の毒に苛まれながら一行目を口にした。

「い、今からオナホ童貞サクラヒメがセンズリ実況をする！　どうかご静聴をお願いしたい！」

「それは興味があるね。どんな実況をしてくれるのかな？」

「ま、まず始めに奥まで勃起おチンポを突っ込む……ぐっ、ふうぅううぅう！」

言葉と腰振りに反応し、パネルに一という数字が表示される。あとは同じことを十九回やるだけだ。

「二回目……少しおチンポを引いて空気を抜く……こ、こうすることでホールの吸い付きがよくなる……んうう……！」

動きに反応しオナホールが自動で空気を排出しようとする。八大鬼が用意した一品だけあって市販の物とは比べ物にならないほど高性能だ。

ブビュッ、バビュッという音と一緒にたまっていた空気が抜け出していく。

「ふ、あぁ……三回目……！　こ、これでおチンポとオナホがピッチリ合体……お、おマンコ構造をより感じられるようになる……ひぐッ!?　はう！　ふあああぁあああああッ!?」

中が真空に近くなったことで、挿入時の何倍もの快美がフタナリ肉竿を襲う。

イボやヒダが絡みつき、腰を振るごとに射精衝動が高まっていく。

「よ、四回目……！　ふぁ、あ、あひいぃい！　こ、ここからが真のオナホコキとなる……ひ、ヒダの感触に敬意を払いローションのヌメヌメに感謝しながらセンズリをこく！　ほおっ！　おおっ！　おおぉおぉおおおぉん！」

恥ずかしいセリフを叫びながら抽送のペースを上げていく。台本の言いなりになりながらフタナリ快美に溺れていく。

「五回目ぇ……ほぉっ！　んおおっ！　おひイィイイイッ！　す、吸い付きすごい……ローション気持ちいい……！　おおォおおおぉおおおッ！」

「クフフ、すごい喘ぎ声だね。気に入ってもらえてよかったよ」

「だ、黙れ……六回目ぇ……んぐっ！　ぁぐっ！　お、オナホに向かって猿みたいにおチンポズリをする！　七回目……き、気合いを入れて子宮ゾーンまでしっかり挿入する…

…ぐく！　はうあぁあああぁあっ！　ボタンをチン押しする……チンポでタッチするううぅう！」

正義の装刃戦姫ははしたない水音を立て、連続でカウントを刻んでいく。変態オナニーに恥じらっている余裕はまったくない。

（とにかく早く終わらせないと……！　我慢できなくなってしまうぅ……！）

精通したばかりの包茎肉竿に疑似膣孔の辱悦が心地よく染み込んでいく。腰を前後させるたびに視界が点滅する。

「十回……お、おチンポトロトロになるぅ……十一回……き、金玉から変態……ザーメンこみ上げてくるう……くふああ、アアアアァアアアッ！」

「まったくひどいオナニーだね。オニグミのボクでも引いてしまうよ。あー気持ち悪い」

「んむうぅぅうぅっ！　じゅ、十二回ぃ……み、みっともないセンズリで申し訳ない……！　でもやめられないんだ……わたしはド下品チンポコキが大好きなフタナリ雌奴隷だから……くううぅっ！　チンポいいぃいいい！」

ペニスが肉裂に締め付けられるたびにフタナリ欲望が荒れ狂う。海綿体が膨らみ陰茎のすべてを硬く、硬く膨張させる。皮を剥かれた包茎亀頭はヒダをかき分け、淫猥に蠢動（しゅんどう）する。

背筋に快美電流が流れて止まらない。

「チンポ、チンポ、チンポっほおぉおおおおッ！　じゅ、十四回……よ、よく見てくれ……これがわたしのオナホコキなんだ♥　玩具相手にへ～こへこ腰振る情けないオナニーなんだぁ♥　ほぉっ♥　んひ♥　くひ♥　ひいいいぃい～～ん♥」

言葉に甘いものが混じり、鈴口が解放を求めてヒクつく。

しかし、正義のヒロインはまだ屈してはいない。最後の気力で射精衝動に耐える。亡き両親や恋人を想い、淫悦に抵抗する。

（負けない負けないわたしは負けない！　射精なんかしてたまるものか！　絶対に我慢してみせる！）

そして、残り三回。

フタナリ肉竿を最大に怒張させながら、黒髪戦姫は死力を尽くす。気の狂うような射精欲求に理性はもう限界だ。

「んっ♥　んんっ♥　シコシコ止まらん……♥　おチンポ感じ過ぎる……っ♥　こ、これで十八回めぇ♥　あ、あと二回……んくあぁあ……♥　ふっ、わ、わたしの勝ちのようだな鬼蛙！」

「さすがはボクの雌奴隷。カッコイイよサクラヒメ。でも……ここから我慢できるかな？」

「なっ、なに!?」

鬼蛙は小銭を取り出すと賽銭箱に投げ入れた。小銭に込められた呪力はオナホールに伝わり、隠された機能を引き出す。快楽振動、バイブレーション機能を。疑似膣内がゆっくりと震え出していく。

「ヒッ、ひぎぃ!?　そ、そんなの嘘だ……」

バイブの振動が最大限になった時、今までの比にならない辱悦が童貞チンポを直撃した。亀頭や竿が一気に耐久限界を迎え、たまらず叫ぶ射精直前のフタナリ乙女。

ヴイイイイィィイン♥　ブイイイイィン♥

「ぐっ、ぐっひいいぃいぃい♥　ひうっ♥　あひっ♥　ひ、卑怯だぞ鬼蛙♥　へおおぉおおぉおお♥」

「言った通りキミには指一本触れてないよ。キミにはね。賽銭箱の仕掛けに気づかない方が悪いんじゃないかな？」

「ふ、くううぅ……♥　じゅ、じゅ、じゅ、十九回目……♥　あ、あと一回だけぇ♥　が、我慢すれば……♥　おチンポ♥　おチンポ♥　ちんぽぉ♥」

最後の力で淫語を吐き出し、腰を振る。虚ろな目で台本の文字を追う。

「も、もう少し……♥　もう少しでおチンポタッチできるっ♥　ボタンを押せば……んく

ううぅ♥」

だが、生えたばかりの敏感包茎ペニスは激しい刺激に耐えられない。鈴口から透明な雄汁がこぼれ出し、肉竿が喜悦に戦慄く。

振動オナホールはバイブ音を轟かせ、ヒダとローションが亀頭を絶頂へと導いていく。

「だ、だめだめだめダメ！　漏れちゃダメだ！　わたしは負けるわけには……あ、あああああッ！」

そして、無慈悲にも決壊の時が訪れた。射精管から汚濁が吐き出される。

ブビュ♥　ブビュビュ♥　ドブッ♥　ドッビュルルルウウウ♥　ゴビュルルウウウ～～♥

「あああ♥　でっ、出るっ♥　出るっ♥　出てしまうっ♥　くうううぅうううぅうううん♥」

ドスケベ爆音を鳴らしながらフタナリ肉竿がザーメンを発射した。十九回分の快楽が一斉に解放され、サクラヒメは絶頂に達する。

「ふぐっ、ああ……ふあぁぁ……♥」

「クク、ボクの勝ちだね」

「ひぁ、ああ……振動とまれ……おチンポキツいい……♥」

穴いっぱいに精液を注ぎ込み、虚空を見つめる黒髪戦姫。強烈な解放感で普通の人間ならば立っていることもできないだろう。

射精が終わるとようやくオナホールが振動を停止した。

「んんくっ、うぐうう……と、止まった……はああ……」

射精の法悦が股間を支配していく。

サクラヒメは怒りに震えながら、仇敵に食ってかかった。

「この卑怯者！　この勝負無効だ！　振動なんてわかるわけがないだろう！」

「あれだけ射精したばかりなのにまだやるつもりなの？　まったく、キミの強情には恐れ入るよ」

「当然！　わたしはまだ負けていない！」

鼻っ柱の強さはいまだ健在。たとえフタナリにされても心の刃に曇りはない。

「ふーん、あっそう」

鬼蛙はその反応を待っていたかのように口角を上げると、賽銭箱に追加の小銭を投げ入れた。

「!?　ま、まさかそれは……！」

「負けを認めてもらおうかな。クフフ」

再びバイブレーションが開始される。

ヴヴヴ！　ヴヴヴヴ！　ブイイィィイイン！

「ひぎぃぃいいいいいい！　や、やめ……はぐっ！　ぎいいぃいいいいいい！」

まだチンポを咥え込んだままのオナホールが激しく振動する。先ほどの勢いが弱なら、今は強といったところか。より激しく苛烈に、上下左右に肉竿を責めつける。

「へほおおぉおおお♥　ど、どこまでわたしを辱めれば……♥　んむうううぅうう♥」

「雌奴隷のクセに生意気な態度を取るからだよ。ボクだってホントは心が痛いんだよ？」

「し、痴れ言をっ！　こんなもの抜いてやる！」

腰を引いて勃起させられた肉竿を引き抜こうとする。

しかし――

「ぬ、抜けない!?　おチンポが抜けないッ!?　おっ♥　ふおお♥　オオオオオン♥」

「負けを認めて射精しないと外れないよ。ほら、認めるんだサクラヒメ」

「いやだっ！　だれが貴様なんかに……！」

必死に腰を振り、振動淫悦から逃れようとする。だが、オナホールはピッチリと陰茎に吸い付き、とても外れそうにない。

逆に引き抜こうとする姿がオナニーに没頭しているようだ。

「うぐっ♥　うぐっ♥　むうぐうぅうぅうう♥　抜けろ抜けろ抜けろおおおぉ♥　ひ♥　ひあぁあああああああん♥」

「ほら、もう台本はないよ？　あとは自分で考えて淫語をしゃべらないと」

「また卑猥なことを……！　わたしは負け……ないっ！　淫語など言うものか！」

黒髪乙女は切り刻まれるような葛藤に襲われる。鬼蛙の言葉に従えば尊厳を地の底まで貶めるようなセリフを吐かなければならない。

しかも、今度は自らの意志でだ。

（言えばもっと気持ちよくなれる……恥ずかしい思いができる……でも……うぅ、こ、股間が疼く）

賽銭箱膣孔が刺激を与える。

肉幹にヒダが絡みつき、ローションが包茎亀頭を舐め上げる。名器の締め付けに精液通路が確保されてしまう。

（おチンポキツい……我慢しないといけないのに……悔しいのにみっともないのに感じてしまう……！　あの快感が忘れられない……！　射精したい！　射精したい！　射精したくてたまらない！）

吐精の悦びを覚えてしまった勃起乙女は雄の快美を求めてしまう。装刃戦姫としてのプ

ライドがフタナリ衝動に塗りつぶされていく。

「だ、ダメだ……また出る♥　でるでるでるでる♥　漏れてしまううぅうぅう〜〜♥」

ピンク亀頭がヒクつき、金玉から白い欲望がせり上がる。限界を迎えたフタナリ肉竿は淫孔に屈した。

ブビュ♥　ビュビュビュ♥　ドッビュルルルウウウゥゥゥ♥　ゴプププウウゥゥ〜〜♥

「い、イクイクイクいっくううう♥　おチンポイク♥　おチンポイク♥　ザーメン吐き出す♥　ほおぉぉん♥　こ、告白する♥　わたしはオナホで童貞を捨てる情けないフタナリマゾなんだ♥　し、しかも賽銭箱相手に腰振る最低の罰当たり戦姫だ♥　神聖な神社でザーメン大放出してしまうドスケベで申し訳ない♥　どうしようもない迷惑痴女で申し訳ない♥　お賽銭代わりにチンポ汁を注ぎ込んで申し訳ない♥　神様、我慢のできない早漏フタナリ雌奴隷で申し訳ないぃ♥　ん、んひいいぃぃぃ♥」

一生懸命ひねり出した淫語を叫び、絶頂する半陰陽のマゾ戦姫。強烈な白濁奔流（ほんりゅう）で賽銭の投入口から精液が飛び出し、石床や細面を汚した。

アヘ顔でザーメンを吐き出す姿に刃のような鋭さはまったくなく、すっかり射精の快感に取り憑かれているようである。

鬼蛙はひとしきり痴態を見物すると、
「やっぱりボクの勝ちだったね。キミはフタナリチンポに抗えないのさ」
「はぁ……♥　はぁあ……♥　ふぁあ……♥」
「今回はこれで退散してあげるよ。罰ゲームを期待していてね。ククク、クハハハハ！」
高笑いを上げ、闇へと姿を消した。神社を覆っていた封鎖結界が解除され、賽銭箱も元に戻っていく。
「ま、待て鬼蛙……わたしはまだ……」
ようやくフタナリ肉竿を引き抜き、その場で倒れ込む黒髪乙女。昇天するほどの射精快楽で足が動かない。
「まだ負けていない……！」
恥辱に身を焼かれても、心までは折れないと誓う。それがフタナリ淫獄の幕開けとも知らずに。

第二回　忍び寄る魔手　侵される日常

一筋の光も差し込まない洞窟の最深部。カビの臭気が鼻腔を刺激し、ジメジメした岩肌には苔が蔓延る。現代人ならばまず立ち入ることのない領域だ。

鬼蛙は仮宿に腰を下ろし、次なる調教に頭を巡らしていた。良平の命を握っている限りサクラヒメからの反撃はない。じっくりと計画を立て辱める算段である。

すぐそばには部下の土愚鬼（どぐうき）と霧幻鬼（むげんき）が膝をつき、命令を待っていた。二体の表情には苦いモノが混じり、なにやら不満げである。

やがて、痺れを切らすように霧幻鬼が口を開いた。

「鬼蛙さま、なぜサクラヒメを始末しないのですか!?　あの夜が千載一遇の好機！　敗れていった仲間のためにも、決着をつけるべきだったのでは!?」

「オレも霧幻鬼と同意見だぜ兄貴。人間どもはウソつきで凶暴だ。寝首をかかれねえうちにさっさと殺っちまった方がいい」

「落ち着いてよ二人とも。ボクにいい考えがあるんだ」

「どのような？」

「マジかよ。兄貴は色々考えてんな！」

疑いの眼差しを向ける霧幻鬼と子供のように目を輝かせる土愚鬼。二体はオニグミの最下層、腐肉あさりの時代から鬼蛙に付き従っていた戦友だ。それは幹部になった今でも変わらない。

「八大鬼の一角を討滅するほどの強烈なパワー。彼女と神器結晶の力を手中に収めることができたとしたら？」

「確かに。実現できれば我々にとって貴重な戦力になります」

「いい非常食になるんじゃねえの？」

「オニグミの悲願である《神鬼（しんき）、羅轟丸（らごうまる）》さまの復活も可能ということだよ。彼女には鍵としての素質がある」

二体は息を飲む。羅轟丸とは太古に封印されたすべてのオニグミを束ねる存在だ。神にも等しい羅轟丸を復活させるために何代もの八大鬼が苦心したが、いまだ成功していない。

復活の立役者となれば右腕として、絶対的な地位を約束されるだろう。

「なるほど。それであのような手段を」

「そのためには徹底的に心をへし折って、ボクたちに忠誠を誓わせないとね。堕ちた最強の装刃戦姫。復活のトリガーとしては申し分ないはずだよ」

「すげえ。これなら出世街道まっしぐらだ！」
「霧幻鬼と土愚鬼には見張りをお願いするよ。サクラヒメやその仲間が爆震蟲を祓わないとも限らないからね」
「承知いたしました」
「オウケイだぜ！」
威勢のよい返事に鬼蛙は頷く。
「ボクは街に出るよ。布石も打っておきたいしね」
「布石ですか？」
「彼女を縛る大切な……ね」
二体に背を向け鬼が嗤う。醜悪な顔面には喜悦の笑みが刻まれ、ドス黒く濁った瞳には野望の炎が燃え盛っていた。

◆◆◆◆

「はぁ……」
神社での陵辱から三日後。岩戸学園。装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華は力なく嘆息する。
あのあと自宅へ戻り身体は清めたが、股間に生えたフタナリ肉竿はいかなる手段をもっ

てしても除去することができなかった。もどかしい射精への欲求も依然そのままだ。

良平の件で対魔協会に連絡することもできず、学園を休んで一人で悶々とする日々を送っていた。

（このままでは奴の言いなりだ。だが、一体どうすれば……）

「ため息なんて珍しいね。大丈夫？　まだ風邪が治ってないの？」

「ひゃう!?　りょ、良平!?」

恋人の問いかけに素っ頓狂な声を上げてしまう黒髪乙女。上の空の代償だ。

「？　そんなに驚いたの？」

「い、いや別になんでもない。少し考えごとをしていただけだ」

アワアワと手を振り、気にするなとアピールする。悪鬼の策謀を本人に知られるわけにはいかない。

（わたしが鬼蛙に辱めを受けたと知ったら、どんな顔をするのだろうか。おまけに……男のモノまで生えているとわかったら……ダメだ！　言えるわけがない！）

恥辱を味わわされた記憶がよみがえる。ファーストキスを肉棒に捧げる屈辱。汚辱。恥辱。死んでも恋人には知られたくない。

「悩みがあるなら相談してね。ぼくなんかじゃ頼りにならないかもしれないけど」

「自分を卑下する必要はない。ありがとう良平」
柔らかな笑みがこぼれる。頼りないところもあるが、気遣う気持ちに嘘はない。その好意を嬉しく思いながら、建宮流華は決意を新たにする。
（必ず鬼蛙を討滅し良平を助ける。これしきの逆境に屈してなるものか！）
胸の谷間に煌めく神器結晶に誓う。いつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。
と、そこへ足音を消しながら男子生徒が近づく。
「むっ、だれだ？」
人並み外れた察知能力で後ろを振り向く。瞬間、黒髪乙女の表情は蝋人形のように蒼白となった。
「貴様！　なぜここに!?」
「あれ？　二人って知り合いなの？」
男子生徒はわざとらしく頭を下げ、自己紹介をする。べっとりとしたマッシュルームヘアーを見せつけながら。
「はじめまして建宮流華生徒会長。転校生の蛙坂蔵夫（かわずざかくらお）です。よろしく」
蛙坂の顔、三段腹の下に隠された呪力は紛れもなく鬼蛙のものであった。日中は基本的に動けないオニグミだが、八大鬼だけは違う。

ガムを噛む程度の気軽さでクラスメイトを喰らい殺すことも容易い。流華の頬に汗が流れる。

だが、不安とは裏腹に鬼蛙もとい蛙坂は、なんのアクションも起こしてはこない。

それどころか流華を無視して良平に話しかける。

「良平くん。今度ボクにも剣道を教えてくれないかな？　ずっと勉強漬けだったから、ここでは運動も頑張りたいんだ」

「ほんとに！　うちはいつでも新入部員募集中だから嬉しいよ。ね、流華」

「あ……ああ、そうだな」

「ありがとう。今日の放課後にでも顔を出すよ。それから――」

軽く談笑すると自分の席へ戻っていった。あまりにも無防備で、本当に学生気分を味わいにきたのかと思ってしまいそうだ。

（いや、そんなことあるわけがない。奴め一体なにを企んでいる）

流華は良平に訊ねる。

「あの生徒はいつここに来たんだ？」

「流華はまだ知らなかったよね。昨日ご両親の事情で転校してきたんだ」

「……それから学園で何か変わったことは？」

「んー、特にないよ。蛙坂くんいい人だし」
背筋をナメクジが這うような感覚。言いようのない寒気を感じる。
「もう少し詳しく話を聞きたい。例えば」
キーンコーン。カーンコーン。
情報を集めようとした流華だが、ちょうど会話を区切るようにチャイムが鳴る。これ以上の話は難しそうだ。
「もう戻らないと。流華も無理しないでね」
「ああ。心配するな」
ドアが開き教師が着席を促す。だが、授業が始まっても内容がまったく頭に入ってこない。頭に浮かぶのは蛙坂のことばかりだ。
（わたしに逃げられないとプレッシャーをかけに来たのか？　いや他にも思惑が――、ッ!?　な、なあ!?　あぁぁあぁぁあっ!?）
突然の昂りに眼を剥く黒髪乙女。原因は股間に生えたフタナリペニスだ。醜い肉棒がかま首をもたげ、勃起状態に移行しているのだ。海綿体が膨張し黒のレース下着がモッコリと膨らんでいく。
（一体どうなっているんだ!?　欲情するようなことなんて……なにも……！）

困惑するフタナリ美少女。身体が熱っぽく火照り、射精衝動がこみ上げる。右手を押さえていなければ、今すぐにでも手淫してしまいそうだ。

（どうする!?　どうすれば!?　このままではみんなに、良平にバレてしまう！　授業中に勃起するフタナリ変態女だって知られてしまう！）

迷っているうちに包茎チンポはどんどん大きくなり、スカートの上からでもわかる大きさになってしまった。完全に勃起した内筒は竹刀のようにスカートを持ち上げる。

（い、嫌だ……見られたくない……！）

こんもりと股間を膨らませる清楚な生徒会長。問題でも当てられれば、クラス中に痴態を晒すことになってしまう。

流華はパニックになりながらも席を立つと、前かがみになりながら教師へ宣言した。

「すみません、気分が悪いので保健室に行ってもよろしいでしょうか！」

「建宮か？　ど、どうした？」

「では失礼します！」

答えを待たず、疾風のごとくドアに駆け寄って、開け放つ。そのまま廊下を早歩きで進んで、あっという間に教室から遠ざかった。

「流華？」

良平や他のクラスメイトはポカンと口を開けて、その様子を見つめていた。

◆◆◆◆

「あ、あ……くっ……お、治まれ……静まれ……んくうぅうう！」

壁に手をつき、肩で息をする。むず痒さにも似た尿道のヒクつきは一向に改善されず、むしろ大きくなるばかりだ。

「すいぶんと苦しそうだね」

「――ッ！　やはり貴様の仕業か！」

ギリリと双眸を吊り上げ仇敵をにらむ。当の本人はどこ吹く風といった様子である。

「具合が悪いようだから付き添おうかと思ってね。それと今は蛙坂だよ」

「ふんっ、どちらでも同じことだ」

「フタナリチンポの具合はどうかなサクラヒメ。もう今すぐにでもオナニーしたいんじゃない？」

「悪趣味な貴様らしいやり口だな」

「ちょっとした余興だよ。キミの日常を観察してみたかったんだ。どこであろうとボクに逆らえないことは理解できたかな？」

「わかっている。わざわざ言われるまでもない」

「それはよかった。じゃあ移動しようか。もう限界でしょ？」
「……ああ」
鋭利な殺意を胸に秘め従う生徒会長。学園でのフタナリ淫辱が幕を開ける。
「ここなら邪魔も入らないでしょ」
二人が到着したのは男子トイレ。校舎の片隅にある取り壊し予定の古いトイレだった。
長い間手入れがされておらず、異臭が漂っている。
「人もいないしうってつけだね。流華」
「なれなれしく話かけるな」
目も合わせず返答する。名前を呼ばれるだけでもおぞましい。
そして、蛙坂は喜色を滲ませながら口を開いた。清楚可憐な黒髪乙女を貶めるために。
「今からキミには便器を舐めながらチンポをしごいてもらうよ」
「……今なんと言った？　悪いがよく聞き取れなかったぞ」
「便器を舐めながらフタナリオナニーをしろってことさ。もちろんこれは要求じゃなくて命令だからね」
「べっ、便器だとっ!?　ふざけるな！　そんな汚らわしいことができるか！」
「別にいいけど、断るなら良平くんだけじゃなくて、クラスメイトの安全も保証できない

な。明日のニュースが楽しみだね」

「この卑怯者！　っ、わかった……言う通りにすればいいんだろう」

その他にも屈辱的な注文が言いわたされ、流華はスカートのホックを外すと下着姿になった。パンティーには恥ずかしいシミが滲み、立派なテントを張っている。

続いてパンティーをズラし股間を露出する。短めに揃えられた陰毛は黒い草原のようで、じっとりと湿り気を帯び、雌の匂いを放っていた。

勃起した包茎チンポは淫猥にぬめり、恥垢の香りが鼻を突く。ピンポン玉サイズの金玉はプリプリと揺れ、卑猥さと可愛らしさをアピールしていた。

「へー、綺麗に手入れしているんだね。戦闘バカの装刃戦姫だからもっとモサモサのボーボーかと思っていたよ」

「黙れ、この変態！　それより便器を舐めながらオナニーする。命令はこれだけでいいんだな？」

「基本的にはね。でも、もう少し面白くしようかな」

蛙坂はビニール袋に入った液体を取り出すと、小便器にかけた。黄色い液体が便器を上から下へと流れ落ち、キツいアンモニア臭が広がっていく。

「うっ、に……尿か。ひどい匂いだ」

「そう尿、オシッコさ。キミの大好きな良平くんのね」
「良平の!?」
「愛しい人の排泄物だと気分も乗るでしょ？　ボクの気遣いだよ」
「余計なことを……」
「あと、ボクがいいって言うまで射精しちゃダメだからね。じゃ、スタートしようか」
「ふん、精々調子に乗っていろ」
中腰になり小便器に相対する黒髪乙女。良平の小便と積り積もった尿石の刺激臭が鼻腔を苛む。今までの学園生活では考えられない状況だ。
（なんてことを思いつくんだあの外道は！　だが……やらなければみんなが……）
泣きたくなるくらい惨めなシチュエーションに唇を噛む。小便器を舐めるなんて想像したこともない。間違ってもうら若き乙女がする行為ではない。
（良平……わたしに力を貸してくれ）
それでも意を決し、便器に顔を近づける。学園一優秀な建宮生徒会長は小さなお口を開き――
ぺろっ♥　ぺろっ♥　ぺろぺろっ♥
黄ばみを舐め取り始めた。

（く、くさい……！　きたないぃ……！　う、うぐぅぅ……ぐうううぅう！）

チロチロと舌を動かし汚汁を舐め取る。愛する少年のオシッコを味覚全体で味わう。鼻を潰れるほど便器に押し付け、発狂しそうな臭気を吸い込む。

「ちゅっ、んくっ、あうむぅぅ……」

「クフフ、いい姿だね。便器の味は気に入ってもらえたかな？」

「う、うるひゃい……ぺろ、んちゅる、じゅりゅ……ちゅはぁ……」

トイレブラシの真似事をしながら汚れをこそげ落とす。艶やかな黒髪に唾棄すべき臭気を染み込ませながら。

「ぺろ、ぺロぺロ……うぇぇんぐぅぅ……ちゅは、はぁあ……えぐぅうう……」

「右手がお留守だよ。ほら、チンポもシコシコしないと」

（そうだ、おチンポ……しごかないと）

そっと指を当てフタナリ陰茎に触れる。汚辱行為で恥ずかしげもなく勃起した肉竿は、火かき棒のように熱せられていた。

（熱い……こんなに興奮しているのか……）

身体の一部だと思えない滾（たぎ）りに困惑する。わずかな逡巡のあと、白魚のような指から粘着音が奏でられた。

しゅこっ♥　しゅこ♥　こしゅこしゅ♥

「んっ、ううう、ふううううう……んぶぅ」

皮を剥かれた亀頭は桜色で、チェリーに似た瑞々しさだ。初々しい肉傘は変態的な状況に順応し、萎えるどころかさらにカリ首を尖らせていた。

「ぺちょ、んくっ、ちゅむふぁあああぁあ……」

「黙っていてもつまらないし、実況でもしてよ。キミが今やっている変態プレイをね」

「ちゅぶ、はう……ちゅうう、あ、あぁ……」

徹底的に心をへし折ろうとする蛙坂。流華は自らの言葉で被虐の泥濘（ぬかるみ）に沈む。

「ちゅっぷっ、むくぅ。わたしは……建宮流華はただいま便器舐めオナニーの真っ最中だ……んっはぁあああん！」

「良平くんの小便はおいしいかい？」

「くちゅっ、ぺろ……とってもおいしいぞ。苦くてぇしょっぱくて……く、癖になってしまいそうだ」

「溜まった汚れや黄ばみはどうかな？」

「こちらもいいぞ。はぁむ、顔も知らない男子のオシッコ黄ばみ……かぐわしい。くんっ、スンスン。スンスンスン」

ヒクヒクと鼻を動かし悪臭を嗅ぐ。屈辱に耐え、蛙坂に都合のよい言葉を吐く。
「チンポからもいやらしい音がするよ。よほどオナニーが気に入ったみたいだね」
「んくっ、そうだオナニー気持ちいい……おチンチンこするのイイ……んむ、ちゅはああ」
「その調子だと家でもしているよね。何回かな？」
「え……んむぅぅ、そ、それは……」
あの夜、肉棒を植え付けられた流華は常に射精の欲求に苛まれ続けていた。
しかし、まだ一度も自分の意志で自慰をしたことはない。装刃戦姫としての誇りが常人では耐え難い疼きに抵抗を続けていた。
「答えてね。何回？」
「に、二回だ……朝と夜に二回している」
「本当に？　嘘ついてない？」
「本当だ！　トイレやお風呂場でシコシコしている。むぶっ、ふはぁっ……包茎おチンポが恥垢まみれだから……剥いてお手入れしないといけないんだ……」
「やっぱりオカズは良平くんなの？　彼氏のことでシコッてるのかな？」
「そうだ、りょ、良平だ。良平の裸を想像して……お、おチンポしごいている！　顔にぶ

っかけたらどうなるかとか、チンチン同士でキスとか、いやらしい妄想ばかりしているんだ！」

「そうなんだ。彼が知ったらどう思うだろうね」

「言うな！　バレたら軽蔑されてしまう……おチンポコキ大好きの変態だと思われてしまう……ぺちゅ、ちゅく、りゅんっ……！」

便器を舐めながら健気に嘘をつくフタナリ乙女。手淫も続けながら悪鬼の機嫌を取る。

（できる限り従順なフリをするんだ。必ずどこかに隙があるはず……！）

面従腹背で機会をうかがう。どれだけ屈辱的な言葉を言わされようと、恋人のためなら耐えられた。

（ぐっ、……この疼き、射精していなかった反動がきているのか……まったく面倒な身体にしてくれたものだ……うっ、んくぅうぅうっ！）

しかし、どれだけ清廉潔白でいようとも肉竿の充血は止められない。三日ぶりの手淫に興奮したフタナリ勃起はもはや抑えがきかない状況。

倒錯的な行為が快感を増幅させ、ミミズのような血管が浮かび上がると共に、カリ首の高さが増す。

金玉も子種汁を大量生産し、今か今かと射精のタイミングに備えていた。

蛙坂の許可さえあれば、あっという間にだらしなく射精してしまうだろう。
「くううむ、ちゅぶ、はぁ、はぁ……満足したか？　もう……んくぅう、いいだろう」
「んー、どうしようかな」
「貴様、まだ焦らすつもりか」
その時、乾いた靴音が廊下に響いた。教員の履くサンダルの音だ。
「まさか……！」
「手の空いた先生が向かっているみたいだね。サボっている生徒がいるんだから当然だけど」
「他人事みたいに言うな！」
氷水を浴びせられたような怖気が流華を襲う。男子トイレで小便器を舐めながらフタナリオナニーする生徒会長。人生終了としか表現できない状況だ。
「まったく、また不良どもだな」
年配の男性教員の声が聞こえてくる。もうすぐそこまで来ているようだ。
これまでの出来事が走馬灯のように巡る。緊張で心臓が破裂しそうだ。
（時間がないっ！　こうなったら……！）
ドアが開く寸前、建宮流華は決断した。

「ん？　だれもいないのか？」
男性教員は眉をひそめる。男子トイレの中に人影はない。黒髪乙女と蛙坂の姿は、
『んっ、狭い……』
『自分から誘っておいてワガママだなあ』
封鎖結界の中にあった。
緊急避難的に神器結晶を起動し逃げ込んだのだ。ただし、急いで展開したため二人が隠れる程度の広さしかなく、蛙坂の肥満体型のおかげで空きスペースはほとんどない。互いの頬がピッタリとくっつき、まるで恋人同士のようである。
『ッ……顔を寄せるな』
『気づかれても構わないなら別にいいけど？』
『うっ、ぅぅ……』
姿を隠していても声や音は誤魔化せない。見つかればおかしな噂が立つことは必至である。
流華は便器の汚臭を嗅ぎながら蛙坂へ身を寄せる。異常なシチュエーションが心臓を高鳴らせる。
（わたしには良平がいるのに、おかしな気分だ）

少年のことを考えるとなぜか胸が痛んだ。これは仕方のない行為のはずなのに。

『胸を押し付けて誘っているのかな。クフフ、流華はエッチだね』

『うるさい。だれのせいでこんな目に遭っていると――、っくひぃ！』

蟲が這うような感触に小さく声が漏れた。鬼蛙が柔らかなお尻、白い双球に触れたのだ。

むっちりとしたヒップに五本の指が食い込む。

むにゅ♥　むにゅ♥　ふにゅむにゅん♥

『や、やめろバカ……っ、こんなところで……んっ、んあぁぁ……はくぅうぅぅ～』

『揉みごたえのあるデカ尻だね。ほら、どんどん指が沈んでいくよ』

『デカ尻じゃない！　大きくなんてない！　このっ、変態蛙め……！』

流華は生まれつき肉づきがよく、特に胸やお尻は同学年の生徒よりも発達していた。装刃戦姫としての鍛錬でくびれたウエストも彼女の美貌に一役買い、結果的に異性の視線を惹きつけてしまうのだ。重量感のある尻肉もその影響である。

『っうぅう、くあぁああ……汚い手で触れるな……揉むなあぁあああぁ……』

『声を押さえちゃって可愛いね。そんなにバレるのが嫌なんだ』

『ひゃあぁあ、あっ、くあぁぁ……と、当然だっ』

ブニブニとした三段腹に密着しながら尻たぶ愛撫に耐える。不純異性交遊を見られまい

と、声を殺す。
「……まあいいだろう」
首をかしげながら男性教員はその場をあとにした。足音が聞こえなくなるのを待って、封鎖結界が解かれる。
「はぁ……よかった」
床に尻もちをつき、胸を押さえる。心拍数は依然上昇したままだ。
「危ないところだったね。ところで、フタナリオナニーはいいのかな」
「え？」
指摘され忘れていた射精衝動がよみがえる。股間の勃起陰茎はさっきよりも熱を帯びていた。
むしろスリルを味わったせいか限界点が早まっている始末だ。
「や、あっ、ま、待て！　あ、んあああぁあぁあああああっ♥　おちんちんがぁ♥」
目の前には小便器。舌に残るエグみとアンモニア臭がよみがえる。冷静になった頭に、男子トイレオナニーという変態現実を思い知らされる。
「わたしはなんてことを……んひ♥　ひゅうぅう♥　ふあああアアアぁああ♥」
「いいよ。射精を許可してあげる。生徒会長としてみんなの模範になるような射精をお願

いするよ」

「んひぃい♥　も、模範♥　おっ♥　ああぁ♥　そうだ……みんなの模範になるような……♥」

「思う存分イキなよ。建宮会長さん」

「ひゃあぁあぁあぁ～ん♥　ちゅっ♥　じゅりゅ♥　ちゅくうううぅううう♥」

安堵の心地よさでブルリと勃起熱棒が震える。全身が甘く戦慄き、思考が白く塗りつぶされる。黒髪生徒会長は便器を舐めながらアクメする。

ブビュ♥　ブブッ♥　ブッビュルルウゥウゥウウッ♥　ゴッビュルウゥウゥウゥウッ♥

「あ、あひぃいぃいぃいぃいッ♥　精液でる♥　精液でるぅ♥　スペルマ♥　ザーメン♥　でてしまううううぅううう♥　男子便器舐めながらおチンポしごきでイク♥　イキまくるううぅうっ♥　んひっ♥　あひぃっ♥　建宮流華生徒会長はぁ♥　チンポコキっ♥　チンポコキ模範射精でイキまくりいいぃいぃいい♥　蛙坂くんもこれを参考にするようにいいいいいいぃっ♥　おっひぃイイィイイ～ン♥」

「いい勉強をさせてもらったよ。キミが正真正銘、フタナリのド変態だってね」

「あ♥　はぁ♥　んくあぁぁ……♥」

精液溜まりをつくり、虚ろな笑みを浮かべる清廉美少女。三日ぶりの射精で頭が真っ白

だ。

（射精気持ちいい……っ、ダメだ。気をしっかり持たないと……！）

快楽に溺れる心を自制する。しかし、白濁快美の影響は確実に少女を蝕んでいた。

「あーあ、こんなに汚しちゃって汚いなぁ。キミの舌で綺麗にしなよ」

「わかっている。うっ、くぅぅ……」

犬のように首を垂れ、精液溜まりに顔を近づける。生暖かいフタナリ汁に舌を這わせる。

ちゅる♥　ぺろ♥　じゅる♥　ちゅううう♥

「んっ♥　はぁ♥　ザーメン、ちゅ♥　おいしい♥」

なんの疑問もなく汚汁をすする。快美で呆け思考がまとまらない。もはや命令に抵抗する気さえ起こらない。

「ちゅぐ♥　ちゅううぐ♥　じゅりゅりゅりゅ♥　隅々までぇ……しっかり掃除しないと♥」

「気に入ってもらえたようでなによりだよ」

「くちゅ、じゅずず♥　じゅぶ♥　心を込めてザーメン舐め取る♥　んぐっ、ごくっ♥　ごっくん♥」

蕩けた瞳で男子トイレの床に口淫奉仕する。

ドアの向こうからは賑やかな声が聞こえてくる。授業が終わり休み時間に入ったのだ。
「ボクはもう行くね。お掃除頑張って」
「当然だ♥　生徒会長として当然……♥」
ミルクをすするようにザーメンを舐めすくう。数分後正気に戻った流華は痕跡を消し、慌てて男子トイレをあとにした。
装刃戦姫を手中に収めるための雌奴隷調教は、鬼蛙の思惑通り着実に進行していた。

◆◆◆◆

田園地帯を電車が走る。休日の昼間ということもあって乗客は多くない。スマートフォンを弄(いじ)ったり、談笑したりとどこにでもある風景だ。
（くっ、本当にあんなことをするのか……）
その中の一人、セーラー服を着た黒髪美少女はギュッと固く口を結んでいた。
絹のような肌はじっとりと汗ばみ、緊張がうかがえた。冷房が効いているにもかかわらず、少女の身体は燃えるような熱を帯びている。
（装刃戦姫に二言はないがさすがにこれは……うぅ、あまりに惨め過ぎる）
神社で射精を我慢できなかった装刃戦姫サクラヒメ。今日はその罰ゲームの執行日だ。ゲームに負けた彼女を待っていたのは最悪の恥辱。女性としての尊厳をぐちゃぐちゃに踏

みにじるものであった。

（見ていろ鬼蛙……このような辱めになど屈するものか！）

対魔協会での訓練を思い出し、己を奮い立たせる。オニグミを祓うために血の滲むような努力を続けてきたのだ。忍耐力には自信があった。

そして、建宮流華は大きな、よく響く声で宣言する。

「神器転身！」

まばゆい光が車両内を照らし、驚いた乗客たちは目をつぶる。

閃光が消えたあとに現れたのは武骨な甲冑を纏った大和撫子。黒髪ロングの変身ヒロインだ。

「注目！　これより装刃戦姫サクラヒメのフタナリオナニー芸を披露する。心して見るように！」

突然の宣誓に乗客たちの視線が集中し、直後、完全にフリーズした。なぜなら、声の主が完全に頭のおかしな痴女そのものだったからだ。

基本的なコスチュームは以前のままだが、間違っても戦いに向かう装束ではない。

胸の布生地は存在せず、デカ乳輪のGカップ巨乳は丸見え。股間を守る草摺（くさずり）もなく、少し濃い目の陰毛やそびえ立つ勃起包茎チンポ、すべすべとした金玉、そのすべてが開帳さ

れていた。

どこからどう見ても変質者で、正常な人間なら間髪入れず一一〇番通報するだろう。

車両内にパニックが起こった。

「な、何を考えているんだ君は!?」

「そ、装刃戦姫!?　アニメのコスプレ!?」

「キャアアアアアア！　え、なんで!?　なんでドアが開かないの!?　他の車両に行けない！」

「お姉さんなんで裸なのー？　どうしておチンチンついてるのー？」

「シッ、見ちゃいけません！　世の中には色んな人がいるのよ」

「騒ぐな！　静かに聞けー！」

めいめい異なるリアクションだが、この変態女から離れたいという気持ちは一つだ。だが、彼らが他の車両に移動したり外部と連絡を取ることはできない。

封鎖結界で車両ごと空間が隔離されているからだ。これから始まる羞恥ショーを嫌でも見るしかない。

（やってしまった……も、もう後戻りできない）

サクラヒメは顔どころか全身真っ赤になりながら、罰ゲームを進行していく。

自分が変態だと思われているのは百も承知だが、約束は履行しなければならない。

「とにかくやめなさいキミ！　はしたない！」

勇気あるサラリーマンが状況を打開しようと立ち上がった。目の前にいるのが女子生徒というのもあって、負けるとは考えていない。無理やりにでもコートを着せようとする。

サクラヒメはその腕を取ると、身体を空中で一回転させて投げ飛ばした。

「ぐわっ！」

「力比べは無駄だと知れ。黙ってわたしの変態芸をよく見ていろ」

サラリーマンは起き上がると、スゴスゴと車両の隅へ戻っていく。成人男性が片手で敗北したことで車内にはあきらめムードが漂う。

目の前の露出狂がただのコスプレイヤーでないことは自明の理。黙って変態女の言うことを聞くしかなさそうだ。

（罪のない人になんてことを……本当に申し訳ない……）

守るべき人間に手をあげたことを心中で詫びる。それでもペナルティは行わなければならない。

サクラヒメはGカップ巨乳をすくい上げると、ピンと勃起した桃色乳首を口に運んだ。唾液をたっぷりとまぶし、デカ乳輪と一緒にセルフ乳首フェラを始める。

「んっ♥　んんっ♥　ふあああぁ♥　まずこうやっておチンポを勃起させる♥　んふううぅうう♥」

唇を何度も乳首に寄せ、痺れるような快楽を貪っていく。フタナリペニスがムクムクとかま首をもたげていく。

「んっ、くうぅう♥　あっ♥　あっ♥　ああん♥　乳首感じるぅ♥　はう、ん、むううう♥」

乗客たちは目を丸くしてなりゆきを見守っている。モデル顔負けの美少女が積極的に自慰をしているのだ。どうしても目が離せない。

（み、みんなに見られてる……わたしのはしたない自慰行為が……乳首おしゃぶりが）

知らない人間に見られている事実が、羞恥の炎を燃え上がらせる。だが本番はここからだ。

「それではわたしのオナニー芸をお見せしたいと思う。ドアに貼られた的が見えるだろうか？」

「的？」

サクラヒメが指差す方向に視線が集まる。車両の連結部の扉。そこに射的に使うような的が貼ってあった。混乱に乗じて鬼蛙が用意した小道具、中心から赤く百点、九十点、八

十点と点数が書いてあり、距離は二メートルほどだ。
「この的を使ってザーメン射的をさせていただく♥　わたしのマゾザーメンが見事に命中する様を見届けてくれ♥」
「はあ？　頭おかしいんじゃないのか！」
「何を言っているんだこの変態！」
「そうだ♥　もっと軽蔑してくれ♥　罵倒してくれ♥　わたしは蔑まれて感じるマゾ女なんだ♥」
胸乳をこねくり回しながら陰茎を怒張させる。皮をかぶった尿道口はしっかりと的に向けられていた。そう、罰ゲームとはフタナリ肉竿を使って射的をすることだったのだ。
男性でもありえないお下劣芸にサクラヒメの全身から汗が噴き出す。それでも笑みをつくり、彼女は大きく胸を張った。鬼蛙が監視しているため、逃げ出すことは不可能だ。
（恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！　嫌だ消えてしまいたい！　こ、こんな格好気がくるっている！）
人に見られながらのオナニー芸に涙が出そうになる。まだ普通にセックスもしたことがないのに。
（もしネットにこの動画が上がったりしたら……も、もう一生外を歩けない！　人生が終

わってしまう！　良平のお嫁さんになれなくなってしまう！　可愛いお嫁さんになれなくなってしまう……）

心の中で恥辱に身悶えるフタナリ乙女。恋人のことを考えると胸が詰まりそうになる。しかし、自らを貶める最低遊戯を止めることはできない。

乳首を濡らしさらに視姦快楽を味わう。剛直マラをビンと勃起させ、先端から先走り汁を垂らしていく。

フタナリという変質的な肉体を見世物にして、倒錯興奮に陥ってしまう。

「始めに包茎おチンポの皮を剥く♥　んっ♥　ふっ♥　ふううぅ～ん♥」

「げ、なんて匂いだ」

「うわっ、クサッ」

にちっ、ぬちちっ、と卑猥な音を立てながら余った皮が根元へと送られていく。恥垢の臭気に乗客たちは顔をしかめる。

「ぐひいぃぃぃぃぃぃん♥　臭いおチンポですまない♥　性欲が強過ぎてすぐにチンカスが溜まってしまうんだ♥　わたしはおチンポの手入れもできないチンカス臭い装刃戦姫なんだ♥」

戦姫としての誇りを地に堕としながら皮を剥く。そして、湯気を立てながらピンク色の

亀頭が姿を現した。
「あくうう♥　ど、どうだ！　これがわたしのムケチンポだ♥　とても立派だろう！」
「ひどい……」
「バカじゃないのか」
「んっ♥　ふうぅ♥　んあうぅううう♥　罵られるの気持ちイイ♥　白い目で見て欲しい♥　変態行為をもっとバカにしてくれ♥　蔑んで惨めなマゾ豚だと自覚させてほしいいいぃ♥」
乗客たちはサクラヒメに言われるがままに侮蔑の言葉を投げかける。
「ああ♥　ピンク亀ちゃん見られるぅ♥　童貞チンポを晒し興奮するぅ♥　マゾ肉体がときめく♥」
チェリーチンポを見せつけながらM宣言をする。非現実的な羞恥に頭がうわつく。
（言うこと全部が最低だ……うぅ、鬼蛙！　なんてことを教えてくれるんだ！）
この数日でサクラヒメは大量の変態知識をお勉強させられていた。以前の彼女なら想像もつかない卑猥なセリフも口に出せてしまうのだ。
そして、恥辱ワードをふんだんに使ったザーメン的当てがスタートした。
「それではおチンポシコらせてもらう。照準を合わせてマゾチンポをこする♥　こする♥」

「うわっ」
「なに考えているのよ。気持ち悪い……」
「んっ、くううぅ♥　ふひぃいいいいいっ♥」
人差し指と親指でつくった輪っかに肉竿を通し、前後させる。ヘコヘコと腰を動かす様子が滑稽だ。
「ひぅっ♥　くううううぅ♥　あふあぁあぁああ♥　か、カリ首を輪に引っかけてシコる♥　ごしごしする♥　これがわたしオナニー作法だ♥　ふっ♥　ほおおぉっ♥」
「最低……」
「バカみたいにコキながらチンポパワーを溜める♥　包茎チンポをしごくうぅうぅう♥　んひっ♥　あひっ♥　くひいいぃいいいぃい♥」
みっともないセリフをまき散らし自慰を続ける。成績優秀な生徒会長は淫らな言葉もすぐに暗記してしまう。
「うっ♥　ううっ♥　おチンポいい♥　いっちに♥　いっちに♥　金玉からもグングン精液昇ってくる♥　種付け汁がたっぷり溜まる♥　ふんっ♥　ふううぅうん♥」
「ホントだ……もっと大きくなってる」
「んふううぅ♥　ぐふううぅ♥　いっちに♥　いっちに♥　おひイイィイイ♥　ザーメン

力が高まるううぅう♥　ど真ん中的中を目指してもっとマゾ精液溜める♥　んっ♥　ジッ♥　んウ〜♥」

一擦りごとに射精欲望が増幅する。気を抜けばすぐに果ててしまいそうな快美と戦いながらサクラヒメは肉竿をしごく。

（真ん中に的中させない限り罰ゲームは終わらない。絶対にこの一回で決めないと）

一刻も早くゲームを終わらせるために集中する。より興奮し肉竿を硬くするためにコリコリと乳首を弄るのも忘れない。フタナリオナニー絶好調である。惨めな姿を晒すのが心地よ過ぎて、脳幹に電流が奔る。

「おんっ♥　おんっ♥　おおんっ♥　包茎おチンポ前後さいこお♥　ビキビキに大きくなる♥」

「マジでけえペニスだな。この変態」

「うぐっ♥　あふうう♥　お褒めに与り光栄だ♥　無駄にマゾおチンチン♥　フタナリエロ肉棒が勇ましく反り返る♥　射精♥　射精♥　射精力が高まる♥　玉裏に我慢汁たらしながらマラをこする♥」

大人の男よりも立派な肉地蔵を突き出し、さも自信があるようにオナニーする。

開いたキノコ傘はショッキングピンクで淫猥だ。

「んむうぅうう♥　こうやってシコりながら的を狙う♥　ムケチンポで的中させる♥」
「すごい、脈打ってる……」
「あぁぁ♥　ううぅ♥　金玉から子種汁が大量生産される♥　無駄撃ちされるためだけの変態オタマジャクシ生まれるううう♥　気持ちいい♥」
手淫の水音が車両に満ち、可視化できるほどの雌臭が少女を堕落の道へと誘う。
限界が近づいたサクラヒメは肉竿をもたげながら絶頂に向かう。
「ほぉっ♥　おおっ♥　おぅっ、ホオオォオォ♥　も、もうでる♥　でる♥　でる♥　射精する♥　ザーメンすぐそこまでのぼってくるううぅ♥」
腰の動きが加速すると同時に、血管がミチミチと浮き上がる。鈴口がキュウキュウと疼く。
陰茎の角度を調整しながら的を狙うチンポ乙女。
「ぅっ♥　ぅぅっ♥　イク♥　イクイク♥　んッくううウウゥウウ〜〜♥」
指を淫靡（いんび）に濡らし肉竿が痙攣（けいれん）、思考が点滅する。
そして、蛇口を勢いよくまわすようにフタナリ精液が噴出した。
ドビュ♥　ヌブブ♥　ドビュルルウウゥゥ〜♥
「おオオォ♥　ほオオォオォ♥　おオォオォオオオォン♥　でる♥　でるでる♥　ザーメ

ン漏れ出る♥　的に向かって飛び出るううぅうう♥」

粘ついた白濁液が弧を描きながら的へと向かう。飛距離は十分だ。

（頼む頼む頼む！　頼むから命中してくれ！）

中心に当たっていることを祈る。しかし、現実は非情であった。

（そんな……）

精液は中心部からわずかに外れ、的を濡らす。これではまた始めからやり直しだ。

（もう一度あんな真似を……くうっ、情けない）

気丈な黒髪戦姫の目じりに涙が浮かぶ。だが罰ゲームからは逃れられない。

「は、外れてしまっては仕方ないな。おチンポ力を高めるためにもっと恥ずかしい姿を見てもらおうと思う！　ど、どうだぁ！」

サクラヒメは脚を開いてガニ股になると両手を頭の後ろで組み、汗ばんだ腋の下を公開した。

「おいおい、マジかよ」

「ちょっと冗談でしょ」

乗客たちは一様に眉をひそめた。無理もない。大公開された腋くぼみ、そこに黒々とした腋毛が生えていたからだ。

（お、覚えていろ鬼蛙！）

呪符の効果で無理やり生やされた腋毛。黒髪戦姫を辱めるためだけの下品調教だ。

「こ、これがわたしの……サクラヒメ腋毛だ♥　ど、どうだすごいだろう♥」

「あんた腋の処理もしていないのか？」

「もちろん♥　装刃戦姫とは腋の処理もできない変態ムレ腋集団なのだからな♥」

自分だけでなく装刃戦姫すべての名誉を踏みにじる。顔の火照りは治まらず膝が震える。

（腋毛を晒すなんてみっともなさ過ぎる……女として終わっている……）

黒いジャングルを軽蔑された影響か、肉竿が再び起き上がる。秘められていたマゾヒズムが開花する。

「どんな匂いがするか気になるだろう？　ほら、そこのキミも♥」

「う、うん……」

「そうだろう。ほら嗅いでみろ♥」

大人しそうな少年を羞恥ゲームに誘う。もう何を言っても無駄だと悟ったのか、止める人間はいない。

「ここでいいの？」

「もっと鼻を近づけろ。そう、そこだ♥」

バンザイポーズでモジャモジャ腋毛を晒し物にする。ムダ毛処理なしの変態マゾ乙女。

少年は汗で湿ったくぼみに顔を近づけると、恐る恐る匂いを嗅いだ。

「くんっ、くんくん。お姉ちゃん……なんか酸っぱい変な匂いがする」

「フフン、当然だ♥　ろくに手入れもしていないからな♥　わたしは自然に任せるスタイルなのだ♥　モサモサの黒毛を堪能してくれ♥」

「いつもこんな感じなの？」

「いつもだ♥　き、昨日は鬼蛙さまとノースリーブのお洋服でデートしたんだぞ♥　よく腋毛が見えるように♥　ショッピングモールで視線を独り占めにしたくて♥」

「え……」

年端もいかない子供に雌奴隷デートを告白する。フタナリ調教される装刃ヒロインは良平に黙って恋人のようなことをさせられていた。

「あっ♥　ああんっ♥　帰りのバスは満員で……つり革につかまっていたら、わたしの周りだけ人がいなくなってしまったんだ♥　腋からいやらしい匂いがしていたから♥　うぅ……そんな目で見ないでくれ♥」

「だって意味わかんないよ……」

「おまけに公園のトイレでおチンポオナニーして鬼蛙さまに笑われてしまった♥　どこで

もおチンポシコシコするドスケベ女だって♥」

「お姉ちゃんって病気なの？　病院なら一緒にいってあげるよ？」

「し、心配ご無用♥　わたしは装刃戦姫サクラヒメ♥　つまり変態ドスケベ豚なのだ♥」

子供に心配されるも、最低告白で返事をしてしまう腋毛乙女。

内心プライド大崩壊なのだが、それを口にはできない。しかもこの状況で身体の疼きは増すばかり。変態行為に性的快楽まで感じてしまう。

（ひ、ひどい……ひど過ぎる！　子供の前でこんな……みっともないみっともない！）

肉竿をヒクつかせながら苦悶する。だが、的に的中させない限り終わりはない。腋マゾ告白で勃起した肉竿は先ほどよりも硬くそそり立ち、今にも射精しそうだ。

（これなら的中するはず。いや、絶対に当ててみせる！）

泣き笑いの表情で海綿体を膨張させる。

さらに成功率を上げるために、鬼蛙から渡された淫具を取り出す。それはこけしの形をした電気マッサージ機であった。スイッチを入れると高速で振動がスタートし、虫の羽音に似た音が、車両中に響き渡る。

ヴイイイインン♥　ヴィイイイインン♥

「これをわたしのおチンポに当てて欲しい。よろしく頼むぞ♥」

「う、うん」

振動こけしの先端が脈動する亀頭に接近する。ゴクリッ、と唾を飲む音がした。二つが触れ合った瞬間――

「おっほおおぉおおぉおっ!?♥　ぎ、ぎもちぃいいいいいいいぃ！♥」

「お、お姉ちゃん!?」

「チンポ♥　チンポ♥　チンポぉ♥　マゾおチンポびりびりくるうぅうぅう♥　電マチンポいじめさいこうウウゥウウゥ♥」

白目を剥き、舌を突き出して喘ぐ。快感中毒の肉棒戦姫。振動快美がつま先から頭のてっぺんまで走りぬけ、全身が性器になったと錯覚するほどだ。

もっと痴態を見て欲しい、罵って欲しいとサクラヒメは懇願する。

「あっひいいイイィイイ♥　見てくれ♥　ザーメンで射的する変態マゾ♥　露出フタナリ女をバカにしてくれえぇえぇえぇえぇ♥」

この一言が最後のスイッチを押した。頭のおかしい罰ゲームにつきあわされ、緊張を強いられてきた乗客たちはもはや我慢の限界。

堰（せき）を切ったように罵声がとぶ。

「いい加減にしろ！　この変態ビッチが！　あとで通報してやる！」

「そうよ！　このチンポ女！　装刃戦姫かなんだか知らないけど最低の淫乱痴女だってことはよく理解できたわ！」

「あんっ♥　いいっ♥　いいっ♥　もっと叱って♥　蔑んで♥　わたしを惨めにしてくれ♥　良平に見られたら破局決定のフタナリ雌豚にしてくれえええ♥」

罵声が飛ぶたびに肉竿が怒張する。氷のような視線がフタナリチンポを悦ばせ、亀頭が針で刺されたようにヒクつく。

マッサージ機の振動は速さを増し、亀頭から栗の花めいた匂いの液が飛び散る。

「ふうほおぉおおおぉおぉ♥　とぶ♥　とぶ♥　アタマとんじゃうぅうう♥　さいこおっ♥　電マおチンポイジメだいすきっ♥　くっひイィイイ♥」

「うえっ、いいからさっさと射精しろよ」

「声援ありがとう♥　よしっ♥　やるっ♥　やるぞおっ♥　装刃戦姫サクラヒメ、おチンポシコシコに参るっ♥　センズリコキまくるううぅううっ♥」

バイブレーションに合わせて一心不乱に腰を動かすフタナリ戦姫。一突きごとに快美電流が身体を駆け抜け、理性を焼却する。

亀頭が小刻みに震え尿道口が的をロックオンする。金玉からは男性特有の暴力的衝動がミチミチと顔を覗かせる。

「おっ♥　オほぉ♥　黄ばんだザーメンが昇ってくる♥　包茎チンポコが痺れるぅ♥」

学園での凛とした振る舞いなど微塵もなく、上目遣いで鼻から鼻水、口元からよだれを垂らし、ペニス角度を調整する変身ヒロイン。

瑞々しい唇から聞こえてくるのは嬌声のみ。

「ふひぃぃぃぃぃ♥　はひぃぃぃぃぃぃぃっ♥　おっひぃぃぃぃぃぃぃぃぃ♥　おチンポバカになるっ♥　ブルブル振動の虜になるぅ♥　ひ、ヒィ♥　ハアァあああ♥」

凄絶な光景に最後の罵声が飛ぶ。

その一言一言がの黒髪乙女の被虐快感を数十倍に増幅させた。

「イけっ！　イッちまえイカレ女！」

「汚い……ホンットに汚いわね！　ちゃんと狙いなさいよ腋毛マゾ！」

「最低だよお姉ちゃん」

「ありがとう♥　ありがとう♥　応援感謝する♥　包茎エロチンポでしっかり狙う♥　オシッコ穴で照準合わせる♥　おほっ♥　おほぉおおぉおおおおぉおおおっ♥」

腋毛丸出しガニ股ポーズ、包茎チンポ、電動マッサージオナニー、あらゆる要素がサクラヒメの精神を陵辱する。

腋の下や胸の谷間、うなじから甘酸っぱい汗が噴き出し、淫乱フェロモンを乗客へお届

けする。

乳首を痛いほど尖らせ、ヴァギナから淫蜜を垂らし魔悦に溺れる。

「イグ♥　もうイグ♥　イグイグイグ♥　ザーメンショットする♥　くっさいザーメン的中させるうぅうぅぅう♥　へおほおぉおぉおお♥」

鍛えられた肢体がビクビクと痙攣し、Gカップ巨乳や金玉がブルンッと跳ねた。極彩色の幸福が身体を支配する。

すべてが限界に達した時、尿道口から白濁の射液が放たれた。

ゴビュ♥　ブビュビュ♥　ゴブボビュルウルルルルウウウゥウウゥ♥　ビュクビュクビュク♥

「ほぉ♥　おへ♥　ぽっぉほおオオォオン♥　イグイグイグ♥　イッグうぅうぅぅう♥　露出スケベマゾのサクラヒメはっ♥　おバカにしかできないド下品的当てゲームでアクメする♥　粗チンポロックオンしてえ♥　ゼリーみたいなプルプルザーメンひり出して恥かきアクメするうぅうぅぅう♥」

イキ狂い、羞恥陥落するマゾ戦姫。意識が恥悦の奔流に飲み込まれ思考ができない。そして、ゲームの結果は、

「あひぃぃィイイ♥　うひっ♥　や、やったあぁあああ♥　的中♥　的中♥　大当たり

いぃいい♥　わたしの濃縮子種汁が見事ど真ん中を撃ち抜く♥　ザーメン的当て大成功♥　ぁっ♥　んあぁ♥　イク♥　終わったのにイグ♥　マゾおチンポまだイグうぅうぅうううぅ♥」

散々焦らされた精液の量は凄まじく、的がチン汁で隠れてしまうほど。

丸一日我慢した小便のように飛んだザーメンは、見事命中し、ようやく罰ゲームの終わりを迎えた。封鎖結界が解除されると同時に電車が駅に到着した。

「あっ♥　ああ……♥　よかった……♥」

「おい、出られるぞ！」

「ったく、最低な気分だわ！」

安堵するサクラヒメを後目に、慌ただしい靴音が響く。車両内に黒髪戦姫とザーメン溜まりを残し、電車は出発した。

しばしの静寂があり、サクラヒメは快悦から目覚めていく。

（終わった……これで帰れる。ッ……うぅ、でも、わたしはなんてことを……）

改めて変態行為を思い知らされる。あまりの惨めさに舌を噛み切ってしまいそうだ。

「クフフ、楽しんでもらえたようだね」

「貴様……ッ！」

座席の一部が歪み鬼蛙が姿を現した。痴態を楽しむため、ここまで姿を隠していたのだ。
「お疲れ様サクラヒメ。とてもいいショーだったよ。毎日でも見たいくらいだ」
「う、うるさいっ！　二度とやるものかっ！」
流麗な双眸を吊り上げ、精一杯の抵抗を示す。
「ああそうだ。今やったことは全部録画しておいたから。良平くんに変態ＤＶＤを送られたくなかったらヘンな気は起こさないようにね」
「くっ、次は負けないっ！　今度こそ絶対に勝ってみせる……覚悟しておけ鬼蛙っ！」
勝気な瞳に殺意の炎が燃える。風明刃の柄を握りしめ、悪鬼の打倒を再度誓う。
装刃戦姫は肉悦に抗い、戦い続ける。オニグミを、鬼蛙を討ち滅ぼすために。

第三回　屈辱の地下バトル　公開羞恥地獄

「すまない良平。今日のデート中止にしてくれないか」
「え。どうしたの流華？」
身を切られるような思いで、スマートフォンに口を当てる。建宮流華はできる限り平静をよそおい、続きを口にする。
「昔お世話になった道場に稽古を頼まれた。みんな両親のいないわたしによくしてくれて、断るわけにはいかなかったんだ」
「……そうなんだ。残念だけど仕方ないよね。もう向かってるの？」
「ちょうど駅についたところだ。山奥でしばらくは連絡もできない」
「ぼくも一緒に行きたかったけど無理っぽいね。デートはまた今度にしようか」
がっくりした様子を見せないように、少年は普段と同じ調子で返事をする。最近元気のない彼女に気を遣わせたくない、彼なりの優しさだ。
「面目次第もない。この埋め合わせは必ずする」
「あはは、流華は真面目だね。それじゃ、次のお昼をおごってもらおうかな。焼きそばパ

ンとかさ」

「フッ、承知した」

聞きなれた声に鼻の奥が熱くなる。通話を終了すると、流華は双眸の奥に真剣のごとき鋭さを宿らせた。

瞳に映る景色はどう見ても駅ではない。

あるのは岩盤をくり抜いてつくられた闘技場。

ここは闇の住人が集う人工島の地下深く。狂気と瘴気が渦巻く魔境だ。

中でも一際目を引くのは、闘技場中央にあるプロレスで使うようなリングだ。リングを囲むように階段状の観客席も設けてある。

ここで昼夜を問わずオニグミたちが賭け試合を行っているのである。もちろん賭けるのは金銭だけではない。出場者の命もだ。

「そんなに殺し合いが好きか。化け物どもめ」

護身用の木刀を握りしめ、吐き捨てる。従業員も観客もすべてオニグミのため、セーラー服姿の流華はかなり浮いた存在だ。

「暴力に惹かれるのは人間と変わりないと思うけど」

「蛙坂……」

いつの間にか隣には鬼蛙がいた。動きやすいのか姿は蛙坂蔵夫のままだ。ニキビ顔でいつものように薄ら笑いを浮かべている。

流華は刺すような殺気を隠そうともせず、今日のゲームについて問いかけた。

「今回はリングでの格闘戦。早い話、殴り合いで勝てばいいんだな？」

「そうだけど、なんだか随分と自信ありげだね。勝算でもあるのかい？」

「ふんっ。これまでは卑怯な策略で遅れを取ったが、小細工なし、正面からの闘いで負けるものか」

拳を握り、不敵に微笑む。この試合も蛙坂が提案したゲームの一環だ。条件は以前と同じで、勝てば良平に手を出さず、正々堂々と立ち合う。負ければ恥辱の罰ゲームである。

「ご勝手に。ただ、対戦相手はボクの部下だからね。油断してると足をすくわれるよ？」

「今更雑魚に苦戦するものか。見ていろ。前回の屈辱を万倍にして返してやる。約束を破るなよ」

「もちろんさ。キミの勇姿を期待しているよ」

鬼蛙はリングコスチュームを投げて寄こすと、ひらひらと手を振り観客席へ向かう。流華は不機嫌にそれを受け取り、少ししてから顔を赤くした。

「こっ、この衣装は……っ!?」

「カワイイでしょ。キミに似合うようにボクが選んだんだよ」
「き、貴様という奴は……っ！」
「バイバ～イ」
マイペースに歩いていく鬼蛙。流華はその様子を憮然とした態度で見送り、手元の衣装に目を落とした。
唇をギュッと結び、つぶやく。
「……あの変態」

◆◆◆◆

闘技場はあっという間に化け物で埋め尽くされた。最前列から立ち見までどの席も完売だ。
憎い装刃戦姫が嬲られる姿を見ようと、かつてない賑わいである。
司会の一つ目玉がリングに上がり、顔面にマイクを当てる。選手紹介の始まりだ。
『これより第三〇一回鬼刻試合（きこくじあい）を開始させていただきます！　まずは赤コーナー！　八大鬼、鬼蛙さまの右腕、土愚鬼の入場です！』
派手な音楽に合わせて、土愚鬼がリングに上がる。
「ウオオォーッ！　オレの活躍見とけよ！」

歓声を浴びながらガッツポーズを決める。プロレスラーのようないで立ちで、見た目は人間とまったく変わりない。額に生えた一本角がなければ、完璧な擬態だ。

これは試合のルールに『サクラヒメは神器転身せず、自分の腕力のみで戦う』『オニグミも本来の力をセーブし、人間の姿で戦う』という取り決めがあるからだ。

呪力を使ってすぐに決着がついてはつまらない。できるだけ長く辱めようとする、鬼蛙の企みである。

（良平。いってくる）

次に流華がリングに上がる。甲冑や大太刀がなくとも装刃戦姫としての矜持（きょうじ）が瞳に燃ゆる。

『青コーナーから入場するのは憎っくき我らが怨敵！　装刃戦姫サクラヒメです！　鬼蛙さまのご協力で、今回特別に参加を取り付けることができました！　お力添えに感謝であります！』

ビリビリと空気が震えるほどに、装刃戦姫を口汚く罵る声と、鬼蛙をたたえる声援が沸き上がる。

「騒がしい奴らだ」

ロングの黒髪を後ろで結び、涼やかなポニーテールをなびかせる。しなやかな肢体が一

層際立ち、望まずとも男性を魅了する。

（んっ、やはり……動きづらいな）

モジモジと太腿を擦り合わせる。どうにも落ち着かない様子だが、それもそのはず。今の彼女が身に着けているのは、欲情を煽る変態としか言いようのない衣装であった。

青を基調にしたリングコスチュームはピッチリと肌に貼りつき、乳輪や乳首の形が丸見えだ。股間のVラインも強調され、後ろからは重量感のある尻肉がはみ出している。

股間には穴が開けられ、フタナリペニスと金玉が丸出しになっていた。さらにペニスと金玉には薄いゴムカバーが被せられ、勃起状態が一目でわかってしまう。全裸よりも恥ずかしい格好だ。

恥部を限界まで強調するやり方に流華は身を震わせる。

（またこんな辱めを……いや、勝てばいいんだ。気にするな）

内心では強がっても、ついイチモツを意識してしまうフタナリ乙女。これだけ大勢の目に晒され、見世物にされる屈辱は相当だ。

風明刃が手元にあるなら一人残らず斬り伏せているだろう。

「グヘヘヘ、いい格好じゃねえか。精々楽しませてくれよ」

「チッ……口を開くな。汚い息がかかる」

「言うじゃねえか！　その言葉よく覚えとけよ」
十センチもない距離で、互いに火花を散らす。
『それでは皆さま、声を揃えてカウントしましょう！　テーン！　ナイーン！　エーイト！』
一つ目玉が実況席に座り、カウントを開始する。観客席のオニグミたちが声を張り上げる。黒髪乙女と土愚鬼は自分のコーナーに戻り、精神を研ぎ澄ます。
「キミの本性を暴いてあげるよ。サクラヒメ」
鬼蛙が嗤った。
『スリー！　ツー！　ワン！　レディ～、ゴーッ！』
ゴングが甲高い音を響かせ、試合がスタートした。
流華の勝利条件は、『制限時間の十分以内に土愚鬼をノックアウト』か、『射精を我慢したままタイムアップまで逃げきる』だ。逆に土愚鬼はあらゆる手段で射精を狙う。
「推して参る！」
野ウサギのようにマットを蹴り、瞬きのうちに土愚鬼との距離を詰める。
（欲情が疼く前にカタをつける！）
両の拳を構え、土愚鬼が振りかぶると同時に連続でパンチを放つ。

「ハアアアァッ！」

大ぶりの一撃は空を切り、流華の拳がマシンガンのごとく炸裂する。強靭な腹筋を叩きのめし、一気呵成にロープ際へ追い詰めた。

（いける！　このまま決めてやる！）

身体をひねり、流華の右脚から白刃のごとき上段回し蹴りが放たれた。

「グッ！　ガッ……ハガアッ！」

こめかみを押さえながら土愚鬼は膝をつく。

（やったか!?）

確かな手ごたえを脚の痺れから感じる。しかし、確信はすぐに困惑へと変わった。

「なーんてな」

土愚鬼は素早い動きで流華の足を払い、背後にまわると、両足を両脇で抱え込んだ。そのまま馬乗りになり、脚を反らせて締め上げた。

強烈な痛みに悲鳴が上がる。

「っ……あぐうぅぅっ！　はっ、離せ！」

「あんなショボいキックで勝ったつもりか？　甘いっつーの」

懸命に手足を動かし拘束から逃れようとするが、力の差は歴然だ。

「ひぐっ、んん、くううぅ～！」

土愚鬼は獲物が動けなくなったことを確認すると、したり顔で解説を始めた。

これからの陵辱を想像し、顔面が喜悦に歪む。

「オレはプロレスが得意でなあ。特に悶絶する表情が大好物なんだよ。どうだ逆エビ反りの味は？」

「ぐっ、はな……せ……！　下衆が……！」

「まだやるきかよ。だったら、しっかりと教育してやらねえとなあ！」

土愚鬼はさらに脚を反らせ、股間のフタナリペニスを晒しものにする。ブラブラと揺れる肉竿が滑稽だ。

プラン♥　プラン♥　プランプラン♥

「ッ……！　んうぅ、くひいいいぃいん！　見せるな……ぅう、このおっ！」

凶悪な極め技に、甘い声を上げてしまう黒髪美少女。淫欲に慣らされた肉体は圧迫の苦しさにも敏感に反応してしまう。チンポがビンッと勃起し、ゴムカバーが伸張する。

「あ……あぐ……あぐうぅ！　ひゃああ、ふあああああああっ！」

Gカップ巨乳はマットに押しつぶされ、豊かに弾む。コスチュームの上からでもわかるほどに、乳首が立ってしまう。

ただ痛いだけのはずなのに、身体が疼いて仕方がない。
「テメエみてえな雌奴隷はどんなプレイでも感じるだろ？　気持ちいいって言っても構わないんだぜ？」
「だれが言うか……ンううぅう！　んっ、はぁ……ああ……ざ、雑魚鬼が調子に乗るな！」
「兄貴の命令は聞けてもオレは無理ってか。嫌なら今すぐイカせてやろうか？」
「う……ぐううぅうう……」
流華はリングサイドの電子パネルを見た。無機質なパネルには八分十秒と表示されている。まだ試合開始から二分も経過していない。
（まだあんなに……し、仕方ない……）
今は言いなりになるしかない。ここで責められて射精すれば試合が終わってしまう。
下唇を噛み、ためらいがちに口を開く。
「い……いい……」
「あ？　なんだって？」
「い、痛いのが……いいんだ……」
「小声じゃ聞こえねえよ。ほら、会場のお客さまにわかるように、もっと大きな声で言っ

てみな」

土愚鬼は司会からマイクを受け取ると、圧迫される巨乳に挟ませ、口元へ近づける。

パイズリをするような格好に赤面する装刃ヒロイン。声を震わせ、気持ちを声にする。

「き、気持ちいいっ！　い、痛いのが気持ちいいんだ！　ふぁ、ふはあんっ！　ん……極められて感じてしまうぅ……くぁんッ！」

「どのポイントがいいんだ？」

「お、おチンポ！　わたしのはしたなく勃起したおチンポがいいんだ！　ひぅ、あ、ああああっ！　見世物にされるのいいっ！　逆エビ反りでおチンポがよくなってしまうぅっ！」

淫猥心境を暴露しながら悶える乳牛乙女。体重をかけるたびに乳首がマットに擦れる。敏感な勃起乳頭をコリコリと弄ばれてしまう。

「ひっ……ひゃあんっ！　ふひゃぁぁあん！　そ、そこ……だめだぁっ！　ひぅ、うぅっ！」

「なんだ乳首も感じてんのかよ。しょうがねえ淫乱だな」

「淫乱なんかじゃ……！　ふぁっ、あっ、あっ、ひゃあぁぁ！　こ、擦れるううう♥　オッパイ感じ過ぎるんだ！　わたしの大事なところ弄くるなあ！　うひゅんぅ！」

「ったく、情けねえな」

「ああ、はぁん……！　ふ、ぐぅう、情けなくなんか……ない！　あひゅうぅうん！」

桜色のポッチを充血させながら、はしたなく喘ぐイキ乳首戦姫。口の端からはよだれがこぼれ、耳まで朱に染まる。膣孔からは淫蜜が滲み出し、股布にシミをつくった。

包茎肉竿もビンビンに勃起し、天井に向けて反り返る。カウパー汁でゴムカバーの内側はビショビショだ。

「んむ……ああ、ひイィィィン！」

「そそる反応をしてくれるな。まさか彼氏よりもオレに乱暴される方が好きなんじゃねえだろうな？　ま、あんなモヤシじゃ満足できねえか」

「っううう……良平を……バカにするなっ！」

喉から声を搾り出し反抗する。自分のことならまだしも、大切な恋人を汚されたくない。彼のことを想うと申し訳なさがこみ上げてくる。

「へえ、そうか。まだ仕置きがたりねえみたいだな」

「ううぅ、くうぅ、なにを……？」

土愚鬼は流華を仰向けにすると、自分の肩に乗せアゴと太腿を掴む。そして、首を支点に身体を弓なりに反らせ抱え上げた。

アルゼンチン・バックブリーカーの体勢だ。

「はぐっ!?　は、はにゃせ……うっぐうううぅっ！」

喉を反らし、黒髪乙女は悲鳴を上げる。だがもう遅い。土愚鬼は丸太でもへし折るように両腕へ力を込めた。

ギリ！　ギリギリ！　ギチチチィ！

「ひぅ！　ぅうウゥゥ〜ッ！　ほうううぅうぅうぅっ！　おごおおぉおっ！」

鍛えられた肢体が和弓の弦のごとく引き絞られる。力技で乙女の身体が弄ばれる。

フタナリ陰茎は天狗の鼻のごとく起き上がり、凄まじい快美が尿道を奔る。つんざくような嬌声が可愛いお口から飛び出した。

「ひぎいいいいぃ！　ひっ、は、ああっ♥　あひいぃいいいい！　おひいいい！　ダメッ！　ダメッ！　それだめえぇぇぇ♥」

「わかるようにしゃべれって言っただろうが！　もっと声出せ！」

「ち、ち、チンポだ！　チンポがいい！　勃起おチンポがダメになりゅ！　物みたいにされてるのに、感じすぎりゅううううう！」

「その勃起おチンポで一番興奮しているのはどこだあ？」

「ひうっ、はふうっ！　き、亀頭！　チンポの亀さん！　それからカリ首だぁ！　あひっ！　ひうううぅうっ♥」

「教えてくれてありがとよ。お礼に言った箇所を重点的に掻いてやるよ！」

太腿を押さえる右腕の中指が、カリカリとエラを引っかく。そよ風のような刺激でも、技をかけられた流華には劇薬だ。

「ヒッ、ひいいぃぃぃん！　あああぁあああっ！　ふはあああん！」

「おらおらおらぁ！　どうだあ！　ここかあサクラヒメ！」

「へ、ええ、へえぇぇえええ！　掻くのやめろぉ！　おチンポで遊ぶにゃあ！　お、おかしくなるうぅうううう♥」

ビクンッ、ビクンとのけ反り、今にも達してしまいそうな早漏乙女。バックブリーカーが闘志を削る。

「ハハハハ！　なんて情けねえ姿だ！」「あの装刃戦姫がチンポ弄られて喘いでやがるぜ！」「あーあ、みっともねえ」

観客の罵声や嘲笑が被虐快感を増幅し、脳天を痺れさせる。このままでは射精するのも時間の問題だ。電子パネルの時間はまだ五分以上あるというのに。

（このままじゃ射精してしまう……！　ダメだ……良平を助けないといけないのに……！）

美貌を引きつらせ、射精絶頂に耐える。しかし、快悦に痙攣する黒髪乙女の嬌声は唐突

に止まった。

土愚鬼がバックブリーカーを解き、流華をマットへ降ろしたからだ。水を差され、観客席からブーイングがとぶ。

「ハァ……ハァハァ……！　な、なにが……！」

拘束から解放され、荒い息を吐く。身体は自由になったが、体力の消耗が激しく、しばらくは立つこともできそうにない。

（これで終わりにするはずがない。……まだ何かするつもりなのか鬼畜め！）

次の陵辱に備え、必死に手足を動かそうとするが間に合わない。愛撫を早めに切り上げたのは、さらなる恥辱に突き落とすため。

土愚鬼は胸元からマイクを抜き取ると、観客席に向けて宣言する。

「オレの真骨頂いかせてもらうぜ！　覚悟しとけよサクラヒメ！」

四つん這いの流華へ近寄ると、ゴムでできた球体を取り出した。細長いチューブが繋がれ、先端にはノズルがある。

「な、なにをっ!?」

「へへ、空気浣腸は初体験だろ？」

「浣腸……!?」

ゴム球体の正体は、空気式の浣腸器だ。球体の部分を押すことで、空気をポンプすることができる。

「どんなに気の強い女でもコイツの前じゃ泣いて許しを請う。謝るなら今のうちだぜ」

「くっ、クズ鬼め！　わたしを舐めるな！」

「へへ、どうやらお浣腸をご希望のようだな」

ノズルが桃色の菊門に挿入され、羞恥淫獄が始まる。土愚鬼はゴムを握り、勢いよく空気を入れる。

シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥

「はうっ！　うんうぅううっ！　くうううっ！」

蛙のように腹へ空気を送られ、目を見開き悶絶する黒髪戦姫。抵抗したいが力が入らない。

「ひぐうっ♥　や……やめっ……やめろぉっ！　膨らむっ！　お腹が……膨らむ……！」

「そのつもりだからな。ガハハハハ！」

「ぐ、ぐひいぃっ！　あふぅうっ！　ふひぃっ！　うひぃっ！　い、いやだっ、もうだめっ！　入らないって言ってるだろぉ！　こ……これ以上は……」

シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥

「よおく入ったぜ」

「ぅ、お腹が……むぐうぅ……！」

限界まで空気を入れるとマイクを肛門に近づける。ショーの準備が完了した。

「ケツ穴に限界まで空気を入れるとどうなるか⁉　てめえら聞き逃すんじゃねえぞ！」

「ひ……ひっ！　うっ……うそだろ⁉　や、や、やめっ……やめろおぉおおおお！」

少女の懇願もむなしく、ノズルが引き抜かれる。火口のように盛り上がった肛門がヒクヒクと痙攣する。

「やっ、ああ……い、嫌だ！　こんなの嫌だっ！」

「盛大にぶちまけちまいな！　変態女！」

「んっぐうううぅう！　で、出るなぁっ！　出るなあああアアァッ！」

土愚鬼はマイクの音量レベルを最大に設定し、菊門へ密着させる。流華は歯を食いしばり、決壊を先延ばしにするが長くは続かない。直腸が溜まった空気を押し出そうと蠢く。

「装刃戦姫サマの屁はさぞかしいい音色なんだろうなあ！　楽しみだぜ！　ハハハハッ！」

「こ、殺す！　殺してやる！　この下衆があああぁっ！　うぐっ、あああ、うあぁぁあああっ！」

肛門括約筋が戦慄き、ガスが漏れる。破滅の瞬間が訪れた。最低放屁の瞬間が。

プウッ！　プウッ！　プピピッ！　ブププ！

「やっ、ああ……！　うぐあああうううぅっ！」

最初に可愛らしい音が漏れ次の瞬間――

ブッ！　ブブッ！　ブビビビィィィィッ！　ブピピピピ！　ブボボボオオォォォッ！

オーケストラのような盛大さで屁が噴き出した。闘技場すべてに響き渡るような大爆音だ。

「いっ……いやぁぁあああぁ!!　聞くな聞くなああぁああ!!　やめてくれえぇえぇえぇえ!!」

肛門を隆起させながら絶叫するオナラ戦姫。皺を一本残らず伸ばして、桃色の内壁を晒しながら屁をこきまくる。

「あはははは、くっせえ！」「なんだよこれ！　臭過ぎんぞ！」「初めて聞いたぜ！　装刃戦姫も屁をこくんだな！」

「だ、黙れぇ、聞くな！　音なんて聞くなぁ！　んぐっ♥　くううぅ～♥」

観客席が沸き、オニグミが大笑いする。一向に鎮まる気配を見せない屁を嘲笑する。

「ブウブウって豚かよっ！　恥ずかしい！」「ひどい匂いだな。気分が悪いぞこら！」
「うるさいうるさいこの変態どもが！　うぐっ♥　むううっ♥　ひくううう♥　うぐぃぃぃぃ♥」
黒髪乙女の放屁は勢いを増し、とてもやむ気配はない。匂いも凄まじく、リング近くにいたオニグミは揃って鼻を塞いだ。
「まったく鼻が曲がるぜ！　女として終わってるよな！」「ああ！　オレなら自殺してるね！」
「ひぐっ……うう♥　も、もうやめてくれ……こんなの恥ずかし過ぎる……惨め過ぎる……」
大勢の前で屁をこき羞恥に濡れる装刃戦姫。瞳からは涙がこぼれ、顔を上げることができない。
（わたし最低だ……）
「豪快な音色じゃねえかサクラヒメ。見事なオナラだったぜ、あーくせえ。くせえ」
「い……言うな！　言うなぁ！」
わざとらしく鼻をつまみ、顔面を醜悪に歪める。だが、これで満足する土愚鬼ではない。男根型のバイブを取り出し、まだ空気の残る肛門へ挿入する。

ヌルついた粘液を潤滑剤に、直腸を蹂躙する。
グチュッ♥　グチュチュッ♥　ズチュグチュ♥
「どうだあ？　ケツの穴にニセチンポは最高だろ？　おら情けなく射精しちまいな！」
「あふっ♥　やぁっ♥　そ……そこいま敏感になってるからあっ！　こするなあっ♥　ほふっ♥　ち、チンポぉ♥　おチンポも感じてるうっ！　なっ……なんでお尻弄られて感じてしまうんだ!?」
休む間もない肛辱にのけ反る恥かき乙女。股間の包茎ペニスは肛悦に反応し、今日一番のエレクチオンを見せていた。バイブの隙間から漏れ出るオナラも羞恥心を煽り、ペニスを固くさせる。
残り時間は三分を切ったがこのままではとても我慢できそうにない。土愚鬼は苦しむ少女の心へ付け込み、淫辱を加速させる。
「どうだ？　やめて欲しいかあ？」
「頼むやめてくれ！　ここままじゃ射精してしまうっ！　ザーメンぴゅっぴゅっしてしまう！」
「だったら、もうわかるよなあ」
「そ、それは……」

「なあに、少し時間を稼げばいいだけさ。悪い提案じゃねえと思うぜ」
「わかった言う！　言うからお尻ズボズボしないでくれ！　も、もうイキそうなんだ！」
バイブの動きが止まる。流華は四つん這いの姿勢でマイクを受け取った。
最低のセリフが艶やかな唇から発せられる。
「お前がやったことはなんだ？」
「お……お、オナラだ……」
「違うよな。屁だろ、屁をこいたって言えよ」
「あ、ああ。わたしは屁をこいたんだ……屁をこきました……」
「全然ダメだな。それじゃあお客さまに失礼だろうが！　もっと下品に言ってみろ！」
「あ……ううっ……ああ！　ブーブーオナラです♥　ブーブーオナラでちゃいました♥　屁こき♥　わたしは屁こき女なんだ♥　くっさいくっさいガスを肛門から排出する変態マゾなんだ♥」
半泣きになりながら放屁を説明する。バイブに弄られる桜色の火口からはまだ空気が漏れ出ている。
（お腹にはまだかなり空気が残っている。もしまた放屁すれば、射精してしまいそうだ。……それだけは絶対に避けないと！）

強烈な放屁衝動に抗う黒髪乙女。残り時間は一分四十秒。

「肛門？　もっと相応しい言い方があるだろ？」

「くぅ……あ、アナル♥　アナルですっ♥　アナルから屁が出ました♥」

「ウンコ穴だろうが！　いっつも糞をしてるところだろ！」

「う、ウンコ穴だ♥　毎日汚いウンコをブリブリひり出している糞穴♥　臭くて臭くてどうしようもない糞穴だ♥　ウンコ穴から漏れた最低オナラでお耳を汚して申し訳ない！♥」

天を衝くような羞恥の炎が黒髪美少女を追い詰める。未知の快感にフタナリ肉竿は昂ったままだ。

「今からサクラヒメじゃなくてヘコキヒメって名乗れよ。ソッチの方が似合っているぜ」

「ヘコキ……そ、そうだ♥　わたしは装刃戦姫ヘコキヒメなんだ♥　あたり構わず悪臭をまき散らす糞穴変身ヒロイン♥　日夜オナラパトロールしているバカ女♥　本日はリングを臭くして申し訳ありませんでした♥　屁をこくことが生きがいのヘコキヒメをどうか許して欲しい♥」

言い終えた瞬間、会場から嵐のような嘲笑が巻き起こった。憎き敵が四つん這いで屁をこいたことを詫びているのだ。笑わずにはいられなかった。

「う……うぅ……」

屈辱で声も出ない装刃戦姫は、時間のことだけに頭を巡らせる。とても吐いた言葉の意味を考える余裕はない。

（あと一分、ここさえやりすごせば……っ、コイツらあとで全員討滅してやる！）

歯を食いしばり恥辱に耐える。あと少しの我慢だと自分を奮い立たせる。しかし、悪鬼はわずかな希望さえ残さない。

菊門へ今度がマイクがねじり込まれた。もちろん最大音量で。

ズブッ♥　ズグブブ♥　ズグウウゥゥ♥

「あふぅっ♥　ひゃんっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　い、言ったのに！　恥ずかしいこと言ったのに！　や、やめろぉっ♥　も、漏れるっ♥　ザーメンでるからあぁぁあぁぁあ♥」

「バイブをやめると言ったが、マイクを挿入しないなんて一言も言ってねえんだよ。おらクソ穴でいっちまいな！」

「ひ、卑怯者おおおおぉっ！」

アナルからマイクをぶら下げ悶絶する。押し広げられた肛門括約筋が悲鳴を上げる。

さらに土愚鬼は流華をうつ伏せにすると、太腿の外側から脚で巻き込むように挟む。自

らはマットに寝そべるようにして体勢を変えつつ倒れ込み、身体を持ち上げる。
結果、黒髪美少女は手足を固定されたうえ、大股開きで天井を仰がされてしまった。突然のことに目が白黒する。
「ぐっひいいイイィィッ！　痛い痛い痛い！　はぎいいいいいいッ！」
「ロメロスペシャルの完成だぜ！　勃起チンポ見せつけながらイッちまいな！」
「ぐ、ぐうう、い、イッたりなんか……っ！」
弓なりに身体を反らせ、フタナリ肉竿で天を衝く正義のヒロイン。
膣穴からは淫蜜が垂れマットを汚す。マイクでこじ開けられた直腸は痛みをすべて快感に変え、玉袋に伝える。精嚢が精子を勃起チンポに送り出す。ゴムカバーに恥ずかしいシミが滲む。
「っぐ♥　ふぐうぅう♥　はうあぁあああ♥」
マイクが重さで少しずつズリ落ちていく。残り時間はあと三十秒。
「おひっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁうぐぅっ♥　うっぁ♥　我慢我慢我慢我慢っ♥　我慢するんだ♥　絶対に漏らさないぞっ！　ザーメンお漏らしなんか♥　た……耐えるんだ！」
気力を振り絞り淫悦に抗うが、弱った理性がこれ以上耐えられるはずもない。マイクが

抜け落ちると同時に本日最大のオナラが放たれる。

ブブウッ！　ブビィッ！　ビチビビィィイッ！

「我慢♥　我慢♥　我慢するんだ！　我慢我慢我慢我慢我慢♥　我慢――」

持ち上げられた手足の痛みが被虐快美へ変換される。マゾ調教された肉体が歓喜し、フタナリ鈴口が放屁に合わせて開門する。

悪臭を放つ黒髪戦姫に最終判決が下された。

「で、で、で、できないいいぃぃ♥　むりむりいぃいいい♥　も、もれるうぅうううう♥」

限界を迎えたフタナリ肉竿から、壊れた水道管のように精液が迸る。

ブビュ♥　ビュククク♥　ピュピュピュピュ♥　ビュブ♥　ビュルルルルウウゥゥ♥

「おほ♥　ほぉお♥　ほぉおおおぉおぉん♥　イグ♥　イグ♥　イッグうううぅうぅうう♥

ザーメンひり出してチンポアクメする♥　くっさいオナラしながらイグぅうううう♥

ウンコ穴でイキながらチンポでイクッ♥　ブーブー屁をコキながらザー汁出しまくるううぅう♥　お♥　おひいいいぃぃ♥　へ、変態戦姫へコキヒメは♥　ウンコ穴でイクのが大好きなケツマゾ女なんだ♥　トコロテンアクメでイキまくるフタナリ淫乱なんだあ♥　もほぉオォォオオン♥」

行き場をなくしたザーメンがゴムカバーの中を満たす。あまりの量に先端が膨らみ、水

風船をつくってしまう。
試合は流華の敗北で決着した。
（こ、こんなイキかたひど過ぎる……情けない……情けない……うぅ……）
放屁しながらの射精。人としての尊厳を踏みにじる羞恥行為に涙がこぼれる。
しかし、
（あきらめない！　何度負けたってあきらめてたまるものか！）
黒髪ポニテをなびかせ、立ち上がる正義のヒロイン。闘志の炎はまだ消えてはいない。

◆◆◆◆

「鬼蛙！　再戦を願いたい！」
マイクを掴み、観客席に向かって声を張り上げる。ダメージを押し殺し、装刃戦姫としての使命をまっとうする。
「なんのつもりだい？　もう勝負はついたはずだけど」
「わたしはそう思っていない。もう一戦だ。貴様を討滅するためなら、ドロ水だってすすってやる」
「それはけっこう。でも、無理はしない方がいいよ、立つのもつらいんじゃない」
「これだけ盛り上がった興業を一戦だけで終わらせていいのか？　観客どもが待っている

ぞ」

アゴに手を当て沈黙する鬼蛙。少し時間を置いて、腫れぼったい唇を開いた。

「対戦相手は別の部下にするけど構わないかな？　それと負けたキミにはペナルティを受けてもらう。要求が飲めるなら、もう一試合認めるよ」

「問題ない。すぐに始めろ！」

リベンジマッチに奮起する装刃ヒロイン。闘技場から割れるような歓声が上がる。

（クフフフ、ボクの狙い通りだね）

鬼蛙は口元を手で隠し、笑いを含む。負けず嫌いな流華は再戦を選ぶと、あらかじめ予想していたのだ。

そうとも知らず黒髪乙女はペナルティを受け入れ、羞恥試合に臨む。

『それでは第二試合を開始させていただきます！　赤コーナーから入場するのは、鬼蛙さまの左腕、霧幻鬼！』

荘厳な音楽に合わせて、新たなオニグミが登場する。ロープを飛び越えリングインしたのは、闘いの場には不似合いなスーツの男だ。髪をオールバックに纏め、目は狐のように切れ長である。

次に流華がリングに上がる。前試合と同じくブーイング、そして早くも嘲笑が沸いた。

「ウヘヘ、なんだありゃ！」「こりゃ似合っているぜ！」「文字通り負け犬だな！」
「し、静かにしろ！　この変態ども！」
眉間に皺を寄せ、無駄だと知りつつも悪態をつく。
（さっきよりも動き難いな……と、特にお尻が……うぅ、気持ち悪い）
チラチラと臀部（でんぶ）を気にする。リングコスチュームは肌に食い込みやすい材質だが、それが理由ではない。
流華に与えられたペナルティ。それは雌犬のコスプレであった。
頭には犬耳のカチューシャ。喉には首輪。アナルには尻尾タイプのバイブが挿入されており、歩くたびにヒョコヒョコと揺れる。特に菊皺の違和感は大きくなるばかりだ。
チープだが羞恥を煽る仮装に、ギリリと奥歯を噛む。
（学園祭でも、ありえない衣装だな。スケベオヤジかコイツらは！）
オニグミの下世話な性根に呆れかえるしかない。
霧幻鬼は流華の胸中など知ったことではないという様子で、自己紹介を始めた。
「お初にお目にかかります。サクラヒメ。私は霧幻鬼。よい試合にしましょう」
「……化け物と馴れあう趣味はない」
「これは手厳しいお言葉。ああ、忠告しますが、喉の首輪には触れた相手に強制服従する

呪毒がかかっていますのでご注意を」

「呪毒だと？」

「鬼蛙さまが殴り合いだけでは風情がないと言われまして。盛り上げるための小道具ですね。条件は私も同じなのでご心配なく」

アゴをしゃくり首輪を見せる。サイズは少し大きいが、間違いなく流華と同じものだ。

「まったく、人形劇でもさせるつもりか。あいつらしいやり口だ」

「また無様を晒さないように気をつけることですね。手心を加えるつもりはありませんので」

「こちらのセリフだ」

丁寧な口調の裏に、機械のような冷たさを感じさせる霧幻鬼を黒髪乙女は迎え撃つ。

『第二試合、レディ～～、ゴーッ！』

ゴングが鳴らされ試合がスタートする。

二人は時計回りにリング上を移動し、小刻みにステップを刻む。

（土愚鬼の時はうかつな攻めが敗因になった。可能な限りタイムアップを狙う）

自分からは攻めずに相手の動きに合わせる流華。

霧幻鬼にも積極的な行動はない。

「では、そろそろいきましょうか」
しかし、三分が過ぎたところで霧幻鬼が動きだした。早歩きで距離を詰める。
（っ……くるならこい！）
拳を握り、攻撃に備える犬耳乙女。霧幻鬼は規則正しい歩調で、三メートル、二メートルと距離を詰める。そして、一メートルを切った瞬間、
「はい、つかまえた」
「ッ!?」
流華の背後に出現する。その手はしっかりと首輪を掴んでいた。黒髪ヒロインは拳を構えたまま、金縛りに遭ったように動けない。
「なっ、なに!?　身体が……っ！」
突然のことに狼狽することしかできない。心臓が早鐘を打ち、額に嫌な汗が流れる。
霧幻鬼はつまらないという様子で頬を掻き、
「人間観察が私の趣味でしてね。前の試合と合わせてあなたの癖は把握しました。瞬きをする前に小指を動かす癖もね」
「バカな！　そんな子供だましで……！」
「自分が強いと思っている人間ほど弱点に気づかないもの。本番に入りましょうか」

コーヒーにミルクが混ざるように、流華の身体へ呪毒がまわる。自分のうかつさを嘆く暇もなく、敵のマリオネットへと堕ちていく。

「手始めに犬の言葉で話してもらいましょう。ワンワン、キャンキャンと鳴いてもらいますよ」

「ふざけたことを……わ、ワンッ!?」

己の意思を裏切り、口が反応してしまう。命令に逆らうことができない。

「ワンッ！　ワンッ！　ワンワンッ！　く、口が勝手に……！」

「とてもお似合いですよ。それでこそ負け犬です」

「だ、黙れ……わ、ワンッ！　くうぅぅ～ん」

飼い主に従う雌犬戦姫。鳴き声が止まらない。

「ワンッ！　ワウーン！　バカにするなワンッ！」

「おっと、犬なら芸をしてもらわないと。お座り」

「ワンッ!?　わうんっ!?」

大股開きで両手をマットにつける。ハッ、ハッ、とだらしなく舌を垂らす。

「お手」

「わ、ワオンッ!?」

指を軽く曲げ、霧幻鬼が差し出した手にチョコンと乗せる。完全に忠犬そのものだ。
「っ……わたしを愚弄する気か！」
「愚弄？　この程度で？　お楽しみはこれからですよ」
細い眼にサディスティックな光が灯る。霧幻鬼は豊満な双乳を指で押すと、
「胸を露出してください。犬なら恥ずかしくありませんよね」
「ふ、ふざけ……ワウウンッ!?」
コスチュームをズラし、Gカップ巨乳をさらけ出す。満月のような乳輪と、ピンク色の乳首が露出する。
「ううっ！　見るなあぁあああっ！　目を閉じろ！　わううっ！」
「大きくて下品な乳輪ですね。鬼蛙さまの言った通りです」
「ぐっ、ううぅ……」
倒すべき敵に命令される屈辱。悪夢はまだまだ終わらない。
「次はクロッチをズラしてオマンコを見せましょうか。観客全員から見えるように」
「冗談じゃない！　だれがそんなこと……っあ、クウウゥウッ！」
言い終わる前に流華の手が動き出す。誘うように股間を突き出すと、お尻から手をまわしてクロッチを細く引き絞る。みるみるうちに深紅の花園があらわになる。

「き、キャアアァアッ!?　ふ、ふざけるなバカ！　ガルルルゥッ！」
オマンコ開帳に頬を染める黒髪ヒロイン。恋人にも見せたことがない秘奥を公開する。
「ほら、金玉を持ち上げてください。オマンコがよーく見えるようにね」
「ワン……うぅ……いやだ……！」
恥辱の熱波で今すぐに身体が発火してしまいそう。フタナリペニスを辱められることはあっても、膣穴を晒すことは初めての体験なのだ。
「もっと開いてください。くぱぁ、ですよ。くぱぁ」
「く、くぱぁ……？」
「女性器を開いて見せるという意味です。膣奥まで丸見えにしなさい」
「わっ、わうぅぅう……ワウッ！　指が勝手に……く、くぱぁなんて……！」
小陰唇を開き、膣穴を奥底まで開帳する。クリトリスの上で陰嚢がプルンと揺れる。
頭のてっぺんからつま先まで被虐の電流が走り、肉竿はフル勃起だ。唇から甘い吐息が漏れ、羞恥の嵐に翻弄される。
「すげえ！　あれが装刃戦姫のオマンコかよ！」「いい色じゃねえか」「ヒヒ、たまんねえ」
「み、見るな……見るなァ！　わうぅ……最低過ぎる……」
オニグミに女性器を見物される惨めさ。初体験までだれにも見せるはずのない雌芯を暴

かれる屈辱。この世から消え去りたくなるほどの敗北感だ。

「ここからが本番です。もっともっと乱れましょう」

「んっ、くうぅ……わ、わうん……!?」

流華の指先が小陰唇を上から下へなぞる。そろりそろりと敏感な部分をかすめ、観客の視線が一点に注がれていく。

チュク♥　クチュ♥　チュクク♥　クン♥

「んんっ、あっ、わぅ……！　霧幻鬼貴様何をした……んっ！　きゃうんっ！」

「オナニーは好きでしょう？　さあ、快楽に沈んでいきなさい」

「ひっ……ひゃん！　うっ、あっ、わうっ、と、止まれ……わうあんっ！」

しゅりしゅりと乙女の部分を撫で回し、ピンク色の花弁を開花させていく。喉から甘い喘ぎが漏れ出る。

霧幻鬼の命令は女の弱点を知り尽くし、子宮の疼きが治まらない。まぶたの裏に閃光が走り、股間からは透明な雫が垂れ落ちる。

「あうっ、んん、んくうぅぅ……！　わううぅっ！　く、クズ男め……あはぁあああっ！」

「これだけ大勢の前で濡れるなんて、聞きしに勝る淫乱ですね。とても処女とは思えません」

「うるさい！　首輪さえなければこんなもの……！　わうっ！　わううぅううう！」

ナメクジのように這いずる官能に、望まずとも身体をくねらせてしまう。女性器を晒す屈辱と快感で、動悸が速まる。

「あ、ああ、ぅぅ……！　くひゅ、ひうぅ……！」

「直接挿入したわけでもないのに大した乱れっぷりですね。雌奴隷の素質があるんじゃないですか？」

「貴様……っ、ンはあぁああ！　んむ……くあぁぁあああああっ！　キュイ～ン！」

フタナリ調教で開発された肉体は、陰茎以外も快感に弱くなっていた。紅色の狭間をなぞるだけで、絶頂の瞬間を予期してしまう。

「こんなことで……くぱぁなんかで感じるものか！　あ、はぁ、ジ……！」

「わざわざ否定するなんて、答えを言っているようなものだと思いますが。それに、もう限界では？」

「はうぁあ……ああ、ち、違う……む、んくむううぅう！　くるううぅううん！」

突き刺さる恥悦でラヴィアから雌蜜がこぼれ出る。呼吸をするたびに淫粘膜が赤味を増し、甘美な昇天を期待する。

いっそのこと処女膜を貫いて欲しいと、不埒な考えが浮かんでしまう。

「ではイッてもらいましょうか。そちらでイクのは久しぶりでしょう？」
「っくうぅう！　あぐっ！　はうううううぅ!?」
霧幻鬼が首輪に触れると、呪毒の強制力が膣肉を歓喜させる。絶頂という命令さえ履行させる。
何度も擦られた小陰唇が熱っぽく潤み、打ち上げられた魚のように肢体が跳ねる。挿入すらしていないのに、背筋が痺れる。
「や、いあやだぁっ♥　く、くるっ♥　アソコっ♥　くるうぅうううっ♥　わんっ♥　わふんっ♥　わはぁんっ♥」
大股開きで手淫に溺れ、黒髪乙女は肢体でアーチを描きながら、絶頂を迎えた。
「ジッ♥　ンンウウゥウゥウ〜〜〜♥」
「いい表情です。天にも昇る心地でしょう」
「わふん♥　ぅくうぅうぅう♥　わふうぅう♥」
だらしなく舌を垂らしながら痙攣する。それでも、まだ戦う意志はくじけていない。
「な、舐めるなっ！　この程度でわたしを汚したつもりか！」
「おや、射精は堪えましたか。呪毒に抵抗するとは大したものですね」
感じたのは女性器のみで、フタナリ肉竿は反り返ったままだ。黒髪戦姫は驚異的な精神

力で射精アクメを耐える。
残り時間はあと四分。
（精液なんて漏らすものか！　今度こそ……今度こそ耐えきってみせる！）
良平を救うために魂を削る。霧幻鬼はさらなる命令を加えた。尊厳を徹底的に砕いて晒し者にするために。
「お次はチンチンをしてもらいましょうか」
「ぐぅ……ウウウ……」
「皆さまにあなたのおチンポをお見せするんですよ。股をしっかりと開きなさい」
「あっ、ひゃ、あああっ！」
M字開脚で両手を胸の横に掲げる、雌犬のワンワンポーズを取らされてしまう装刃ヒロイン。
ゴムカバーと包皮で二重にくるまれた勃起チンポを衆目に晒す。フタナリ改造された肉体を改めて意識させられ、誘うように肢体をくねらせる。
「つ、次から次へと下品なことを！　先に言っておくが射精するつもりはない！　何があってもこれ以上出すものか！」
「なるほど。では、こちらはどうでしょうか？」

「なに……？　ワッ、わひんっ♥　これは……ま、まさか貴様！　ワフウウンッ！」

流華が感じた違和感、それは尿意であった。膀胱がドクドクと波打ち、オシッコが尿管を上がってくる気配がする。

すぐにトイレに行かなければ、漏らしてしまいそうだ。

「ここでオシッコをお漏らししてもらいましょうか。負け犬なんだから当然ですよね」

「ま、待て！　こ……ここで漏らすなんて、そ、そそ、そんな無様な真似ができるか！　わううぅッ！　グルウウゥッ！」

「何を言おうと選択権は私にありますから。もう限界のはずですよ」

「んふぁ♥　やっ、いやっ……だぁ！」

霧幻鬼はゴムカバーに穴を開け、放尿の態勢を整える。ムワッ、とした臭気と共に桜色の鈴口が顔を覗かせる。

「んっくっ……♥　や、待ってくれ！　と、トイレ！　トイレに行かせてくれ！」

「ダメです。ここで漏らしなさい」

「う、うぐぅ……！　お願いだから！」

荒れ狂う尿意へ抵抗しようにも、太腿を擦り合わせることさえできない。もどかしい感覚は尿道口のすぐそこまで迫っている。

「頼むからトイレに……ひぐっ！　ぐううぅ！　クウゥ～ン！　はうぐううぅう！」
「さあ遠慮なく」
「わ、や、わひいいぃいいいいんっ！」
泣きそうな顔で懇願する黒髪ヒロイン。排泄行為を他人に見られるなどあってはならない。そんなことをする奴は変態だ。
「む、無理……本当に無理なんだ！　オシッコ漏らしなんてできない……！」
「駄々ばかりこねないで欲しいですね。鬼蛙さまもお待ちしているんですから」
「お、鬼蛙……」
観客席を見ると、鬼蛙がギラついた瞳でこちらを見ていた。他のオニグミも同様だ。装刃戦姫の放尿を心待ちにしている。
（あんな下衆に放尿姿を……で、でももう耐えられない！　父さま、母さま申し訳ありません……）
仇敵にお漏らしを見物される極大恥辱。少しでも決壊を遅らせようと、肛門を引き締める。だがそれも無駄な抵抗。
パチンと指を打ち鳴らし、霧幻鬼が首輪に合図を送る。呪毒がズルリと股間を浸食する。
「あ、ああ、あああああッ！」

それをきっかけに、黒髪戦姫の膀胱は決壊した。薄く黄色がかった液体が漏れ出てくる。

「ひゃあっ♥　チョロ♥　チョロロッ♥　ジョボボボボ♥　ジョロロ♥　ジョボボオオォオオオオ♥　あっ♥　あっ♥　あっ♥　で……でるうウゥゥ♥　オシッコ漏れる♥　漏らしてしまうう♥　シーシーしてしまうぅうううう♥」

リングでの放屁に続き、放尿までしてしまうお漏らし美少女。濃密なアンモニア臭に、近くにいたオニグミが再び顔をしかめた。

「ああ、あああ……♥　やあぁぁ♥」

オシッコはたっぷりと排泄され、マットはもうビショビショだ。チンチンポーズで小便溜まりを見つめ、屈辱に震える流華に、霧幻鬼は言葉のナイフを突きつける。

「おやおや、たくさん漏らしてしまいましたね。恥ずかしくないんですか？」

「う、うう……わうん……」

「答えてください。オシッコを我慢できなかったんですよね？　恥ずかしくないんですか？」

「は、恥ずかしい……漏らしてしまって申し訳ないワン……」

「悪いと思っているなら謝罪してもらいましょうか。今すぐに」

「ひ、ひっく……く、くぅ……ご、ごめんなさい……わたしはオシッコを漏らしましたワ

ン。大切なリングを雌犬のオシッコ臭くしてごめんなさいワン」
「もっと誠意を込めて」
涙ぐみながらお漏らしを謝る。観客席から飛ぶ野次が心を追い詰める。
「きったねえな」「マジで雌犬かよ」「ションベンはトイレでしろっつーの」
「わううっ♥　しょ、ションベンッ♥　ションベンだっ♥　ワンワンポーズでションベン漏らしてすまないワン♥　わたしはションベンも我慢できない最低の尿道ガバガバ女なんだワンッ♥」
「それから？」
「ションベンしながらチンポも勃起させてしまう変態雌犬なんだワン♥　オニグミのお客さま♥　わたしのションベンが大変失礼をしましたワン♥　くっ、ううぅ……情けない……」
しゃくりあげながらお漏らし謝罪するオシッコ戦姫。残り時間は二分。霧幻鬼はトドメの調教を開始する。
「最後は土愚鬼にならってプロレスらしく決めてあげましょう。協力してもらいますよサクラヒメ」
「わひぃん！　か、身体がまた……！」

流華はその場で仰向けになると、両足を頭の横にくっつけさせられる。霧幻鬼はそれを自分の腹の上に乗せ、抱きかかえ、脚を絡める。相手の股関節をギリギリまで開脚させる恥ずかし固め、まんぐり返しの体勢だ。

「ぐっ、くぎイイイィィィ！　く、苦しいっ！」

「もう十分我慢したでしょう。楽にしてあげますよ」

「ワクぅうう！　わううん！　なんの話だ!?」

フタナリチンポに唇が届くほどの前屈体勢を取らされる。再びの羞恥ポーズに身を震わせる装刃ヒロインだが、思考する間もなく未知の感覚に狂わされていく。

アナルに挿入されていた尻尾バイブが振動を開始したのである。一擦りごとに脳が焼き切れるような快美電流が全身を痺れさせる。学園では絶対に出せない下品声で哭いてしまうまんぐり乙女。

ヴヴヴヴ♥　ヴイイィィン♥　ヴィイイィィン♥

「あひぃいいいいいいぃ♥　いや……いやあっ♥　お尻くる♥　き、気持ちいいのが流れこんでくるうううぅぅうぅ♥」

「どうですか前立腺を責められる気分は？　ぞくぞくするでしょう」

「する♥　するワン♥　頭おかしくなるぅうぅううっ♥　ひぃいぃぃっ♥　こんなの覚え

たらヘンになっちゃうワン♥　お尻オナニー覚えて変態バカ戦姫になるワウゥウゥウゥウン♥」

「気に入ってもらえてなによりですよ。負け犬ヒロインさん」

「あっぁあぁぁぁあ♥　気に入ってないワン♥　おほっ♥　おほっ♥　おほっぉおおぉおおあああ♥　も……もぅやめてくれえぇえぇえ♥　ひぅぅうぅうぅう♥　わごぉおおぉおおお♥」

数分前までの強気な態度はどこへやら。

性感帯を絞り上げられアヘ顔を晒す。普段の威厳どころか人間としての誇りも残らず捨て去り嬌声を響かせる。

霧幻鬼はフリフリと揺れる金玉に触れ、射精準備を整えた。残り時間はあと一分。

「な……あっ♥　金玉っ♥　金玉おかしいっ♥　玉袋さわるなぁ♥」

「揉みごたえのあるよい金玉です。このままお顔にぶっかけてしまいましょうか」

「かっ、顔に!?　ひくぅうぅぅぅ♥　もう許して♥　許して霧幻鬼さまぁっ♥　自分で顔面射精なんて無理だワン♥　人間のすることじゃないワン！　わぐぅぅう♥」

快楽の連続で頭がまわっていなかったが、このまま射精すれば、顔にザーメンがかかるのは必然。自分で自分の白濁液を浴びてしまう。

「負け犬のあなたにピッタリですね。人間にバイバイしましょう。サクラヒメ」
「ぁっ♥　んっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁんっ♥　いやぁぁぁぁぁぁあ♥　金玉プニプニするな♥　顔面射精なんてしないワン♥　わっ、わたしは耐える♥　耐えるワウウン♥」
最後の気力を振り絞る黒髪乙女。だが、菊門の震えは激しさを増し、射精衝動がこみ上げてくる。
「おほぉおおっ♥　ケツ穴こすられてイキそうぅう♥　い、いや……ダメだ！　ほ……誇り高い装刃戦姫は絶対にイッたりなんかしないワン♥　ワン♥　ワン♥」
包茎チンポを天狗の鼻のように勃起させ、尿道責めで感じてしまう。恥ずかし固めがさらに恥辱を煽り、ブルンッブルンッと、Gカップ巨乳を乱高下させる。
「たっ……耐えて♥　耐えて♥　耐えて♥　耐えるんだ♥　もう少しのはずなんだ♥」
「ゲヘヘ、もう無理だな」「オラッ、早く出せよ変態女」「ザーメンぶちまけちまえ！」
「ワウウゥウン♥　う、うるひゃい♥　ザーメンなんて出さない♥　ぴゅっぴゅっなんてしないからな♥　本当だぞ♥　キュウウゥ～ン♥」
必死に尿道を引き締めるも、もはや時間の問題。制限時間よりも射精快楽の方が早い。
陰嚢マッサージと肛門バイブで、いやがおうにも絶頂へ歩かされる。

「りょ、良平！　必ず助けるからぁ！　ほぉ♥　おぉ♥　ワウウゥウン♥　ワホォジ♥」

最後に浮かんだのは恋人の笑顔。オニグミとの戦いでボロボロになった自分を優しく包み込んでくれる笑顔だった。

「ち、チンポ耐えるワン♥　チンポ我慢するワン♥　チンポ射精しないワン♥　チンポチンポチンポチンポぉ♥　チンポイッたりなんかしないワン♥」

しかし、その想いも動物的な欲望に塗りつぶされる。思考が虹色に点滅し、発狂しそうなほどの快美が股間に集中する。

「ワ、ああ♥　ワウウウゥウ〜〜ン♥」

ついにフタナリ肉竿は暴発し、粘ついたザーメンが大量に漏れ出した。

ビュク♥　ブビュルルウ♥　ドブブウウウウ♥　ビビュ♥　ドッビュルルルウウウゥウウウゥ♥

「ワウウウゥウウン♥　イクイクイクわんわん♥　イグわんわん♥　顔射♥　顔射♥　ザーメン顔射するワン♥　雌玉揉まれながら敗北ザー射♥　ケツ穴バイブでバカ犬ザー射♥　わんわんワオン♥　スケベ雌犬イク♥　ザーメンぶっかけでイク♥　マンコでイッてチンポでアクメ♥　ケダモノみたいにイキまくるワン♥　変態ポコチンから犬汁ひり出すワウウゥウウン♥」

清廉な細面を白濁でドロドロに塗りつぶし、恍惚の表情で雌犬になりきる黒髪乙女。

電子パネルは残り一秒のまま停止していた。

「ワン♥　ワウン……♥」

「残念。あと少しでしたね。いい試合でした」

「ワウン♥　ひゃ……ひゃい♥」

ザーメンでドロドロに汚れながら、虚空を見つめる。オニグミの歓声と嘲笑が耳にこびりついて離れない。今夜も装刃戦姫は敗北を喫した。

（良平ごめん……）

恋人と話したことが何十年も昔に感じる。観客がいなくなり、従業員が帰って一人になっても、流華はリングから立ち上がれないでいた。

二度も醜態を晒した屈辱で、顔を上げることができない。おまけに、このあと罰ゲームが控えていると思うと、身体がすくんでしまう。

と、そこへ鬼蛙が近づきハンカチを差し出した。

「使っていいよ」

「え？」

想定外のことに間抜けな声を出してしまう。オニグミに気遣われるなんて初めての経験

だ。

「……何を企んでいる」

鬼蛙は答えず化け蛙の姿に戻ると、影に向かって跳ね、池にもぐるように姿を消した。

流華にはその光景がどこか幻想的に見えた。

「な、なんなんだあいつ……」

トクンッと心臓が高鳴り頬が赤くなる。

なぜ良平に抱く感情を鬼蛙にも感じるのかわからなかった。

◆◆◆◆

鬼蛙はゴミ山の頂上から顔を出した。水しぶきのように影が飛び散る。

今夜の調教も上手くいったとほくそ笑む。この調子ならサクラヒメが凋落する日も遠くない。

その時、背後に気配があった。自分と同じオニグミの気配だが、つい今し方までなかったものだ。何者かと振り返ると、そこには白い毛並みをした妖狐がいた。四尾の妖狐である。

それは妙齢の女の声で、鬼蛙に話しかけてきた。

「なかなか上手くやっているようだね鬼蛙」

「なんの用ですか鬼狐。今更あなたの入る余地はありませんよ」
「その呼び方は嫌いだよ。呼ぶなら妖月と言いな。名前のないあんたは頓着しないだろうけどさ」
「世間話をしたいのなら別の日にしてくれませんか？　こちらも暇なわけではないので」
「そう邪険にするもんじゃないよ。いま異国の装刃戦姫に追われていてね。あんたが鉢合わせしないよう忠告しに来ただけさ。なかなかの腕前だ、気をつけな」
「異国……まあ一応覚えておきましょう。ただボクの邪魔だけはしないでください」
「もちろんさ。それじゃ、また出直すとするよ」
二匹の化け物は闇に消える。あとにはゴミさえ朽ちる邪気だけが残った。

第四回　学園フタナリ奉仕　惹かれていく心

地下の戦いから数日後。小鳥のさえずりが耳に心地よく、うっすらと朝靄（あさもや）のかかる早朝。岩戸学園近くの駅前で、建宮流華はデートの待ち合わせをしていた。お相手は良平だ。清楚な白のワンピースを着こなし、ショルダーバッグを斜めにかけている。紐が胸の谷間を強調し、通りかかった男性の視線を惹きつける。少しいやらしいかなと思いつつも、彼氏を楽しませたいという気持ちが勝ったコーディネートだ。

（今日は良平に積極的になってもらうために、わたしの魅力をいっぱいアピールしないと）

罰ゲームのことを考えると憂鬱になるが、今だけは気分を変えて楽しみたい。鬼蛙の調教に屈しないためにも、恋人の温もりを近くで感じたかった。

落ち着かない様子で到着を待つ。電車の出発時刻まであと五分というところで良平がやってきた。

走ってきたのか額に汗をかいている。

「ごめん遅れて。自転車のチェーンが外れちゃって」

「遅い。だがギリギリ遅れなかったことは評価する。ほら汗を拭いてやろう」

「い、いいよ。一人でできるって」
「遠慮するな。じっとしていろ」
バッグからハンカチを取り出し、ぽんぽんと汗を拭く。良平は照れ臭いのか、モジモジとしていた。傍目から見ればまごうことなきバカップルだ。
しばらくして電車が到着する。満席だったので、二人はドアの前に並んでつり革につかまった。
流華は良平に肩を寄せながら訊ねる。
「今日はどこへ連れていってくれるんだ？」
「三波（みなみ）マリンパークに行こうよ。この前改装したし、流華は海の生き物好きでしょ？」
「ああ。子供の頃はよく家族で海水浴へ行ったな」
「クラゲに刺された時は大変だったねー。大泣きしちゃって海の上なのにしがみついてくるんだもん。もう少しで溺れるところだったよ」
「そ、そのことは忘れろ。わたしも若かったんだ！」
ぷくりと頬を膨らませ、そっぽを向く。戦闘時からは想像もできない年頃の少女らしい一面だ。
そこへ部活に向かう途中なのか、大量の学生が乗車してきた。あっという間にスペース

が埋まり、車両がすし詰め状態になる。
「うわっ」
「流華だいじょうぶ……っぷ」
二人も人波に流されて密着する。しかし急なことだったので、小柄な良平の顔を胸が挟み込んでしまった。
たわわに実ったGカップ巨乳が顔面をムニュムニュと圧迫する。ボディソープの清涼感ある香りが少年の鼻腔をくすぐった。
「す、すまない良平」
「んっぷっ……へ、平気だよ」
普通ならここで身体を離すのだが、慌てる良平の姿に流華は悪戯をしたくなった。日頃責められている反動なのかもしれない。
さらに胸を押し付け、柔らかな双乳でオッパイサンドイッチを敢行する。
「悪いが身動きできないんだ。しばらくこのままでもいいか？」
「え……いいの？」
「窮屈な思いをさせてしまうが仕方ないな。うん仕方ない」
「わぷっ……んっ、む……むぅ……」

むにゅっ♥　むにゅっ♥　ふにゅん♥

「苦しくないか？　んっ……♥」

「あぷ……う、うん」

コンプレックスであるはずの胸乳を最大限に利用して、顔を揉みしだく。幼馴染が赤くなるのが可愛くて、もっと押し付けてしまう。

太腿に触れる少年の股間からペニスの熱が感じられ、固くなっていることがわかった。男性の生理現象がますます流華の欲情を煽る。

（可愛い。わたしと同じなんだ）

ペニスの気持ちよさは嫌というほど理解している。流華のフタナリペニスも半分ほど勃起し、軽くワンピースを持ち上げた。

「そ、そろそろ到着だね」

「うむ。そうだな」

電車が駅のホームに入ると、キューブをいくつも重ねたような建物が見えてきた。

三波マリンパークは海岸線沿いに建てられた水族館で、休日はカップルや親子連れで賑わう地元の人気スポットだ。少し歩けばホテル街もあり、盛り上がった二人がそのままということも珍しくない。

「おおっ。随分綺麗になったな」
「改装効果だよね。ピカピカだよ」
二人は手を繋いで水槽を見ていく。時おりマシュマロのような膨らみが腕に当たる。
（ちょっと近くないかな？）
生徒会長や剣道部で指導をする時とは違う流華の仕草に良平は戸惑う。またもや巨乳を強調されて、気が気でない。
「流華……その近過ぎない？」
「いいじゃないか。わたしたちは恋人同士なんだぞ。ふふ、そんなに気になるなら触ってみるか？」
「か、からかわないでよもう！」
「お、あそこにジンベイザメがいるぞ。行こう！」
「待ってよー」
手を引かれて走り出す良平。流華は目を輝かせて、どんどん進んでいく。
群れをなして回遊する小魚や、面白い顔をした深海魚。蛍光色に光るクラゲや、アスレチックのような水槽を走り回るカワウソ。お客の言うことをよく聞き、芸をするイルカなど退屈することはなかった。

そして楽しい時間というものは、あっという間に過ぎていく。水平線の向こうに太陽が沈み始め、オレンジ色の光彩が空と海を染める。テトラポットに止まったカモメの鳴き声が、まだ遊び足りない気分にさせた。

流華と良平はベンチに座りながら海を眺めていた。

少年の横顔を見た流華は、

「良平。あれを見てくれ」

「あれって何？　何も見えないけど――」

振り向いた瞬間、二人の唇が重なった。

「ん……んんっ」

「んむ……りゅうか……」

柔らかな唇の感触が少年のすべてを蕩かす。流華はついばむように唇を求めた。

「ぷはっ、初めてだな良平」

「ふぁ……は、初めてだね」

陵辱ではない心が通い合った初めてのキス。それは凄惨（せいさん）な戦いを繰り広げ、今はフタナリ調教の渦中にいる戦姫の心に染み渡っていった。

（できるのならもっと……もっと良平が欲しい。だが今のわたしは……いや、いつかきっ

とわかってくれるはずだ）

今はこれで十分だと自分に言い聞かせる。必ず鬼蛙を倒し日常へ戻る。元の身体を取り戻すと黒髪ヒロインは胸に誓った。

◆◆◆◆

授業が終わり放課後。

岩戸学園の生徒たちは部活で汗を流したり、残っておしゃべりに興じたりと、各々の青春を謳歌していた。

剣道部員の三城良平もまた、部活動に勤しんでいた。体育館で他の部員たちと竹刀を振る。飛び散る汗が床板に水玉模様をつくる。

「なあ建宮部長を知らないか？　今日はまだ姿を見てないんだ」

「いえ、ぼくも知りません」

副部長が良平に訊ねてくる。腕前は男子生徒の中でも一番で、白い歯がまぶしい。

「おかしいな。何も言わずに休むような人じゃないんだが。おまけに新入りもいないし、まったくどうなっているんだか」

「ぼく連絡してみます」

良平は部室に戻り電話をかける。だが流れるのは留守番電話のメッセージだけだ。

（流華どこ行ったんだろう。それに蛙坂くんも）

二人の行方が気にかかる。ありえないと思っても悪い想像が頭をよぎる。

「……偶然だよね」

不安を打ち消すようにつぶやき、良平は部活に戻ろうとする。彼は気づいていない。体育館の隅、普段なら部員たちがトレーニングに使っている場所に、まったく人がいないことを。

まるでそこだけが切り取られ、この世界に存在しないかのように。

「ぐぬぬ……こ、これでいいんだな？　またこんな破廉恥なことを……」

「いい加減慣れた方がいいと思うけど。キミは不器用だね」

「だれが慣れるか！」

黒髪乙女は端整な細面を紅潮させる。今彼女が身に着けているのは、上靴と靴下のみだ。スラリとした長身が何に遮られるわけでもなく、生まれたままの姿で外気に晒されている。

隣には鬼蛙こと蛙坂がニヤニヤ笑いを浮かべていた。

現在この一角は封鎖結界でこの世から隔絶されている。良平や部員たちの姿や声はわかるが、逆に中の出来事が外に伝わることはない。

だが、見えないといっても近くに恋人がいるというのは落ち着かない。流華は手で胸と

股間を隠しながら蛙坂に、
「こんなところに呼び出して何を企んでいる。まあ、どうせ貴様のことだからろくな考えではないだろうがな。まったく、部長のわたしがサボりとは」
「そう怒らないでよ。罰ゲームまでの余興さ。面白いアイデアが浮かんだから試そうと思ってね」
「バケツに入っている液体のことか？　黒い……墨のように見えるが」
「惜しいね。これは媚薬入りのローションさ。色が黒いだけ」
「び、媚薬だと!?　性懲りもなく……」
思わず声を荒らげてしまう。また身体を弄ばれると思うと、肌が粟立つ。
「クフフ、キミにはこれで書道をしてもらうよ。トーゼン拒否権はないからね」
「っ……まあそれくらいしてやろう。だがなぜ裸になる必要がある。みんなが近くにいるというのにこれは……見えなくても恥ずかしいぞ」
つい小声になってしまう流華に、蛙坂はしたり顔で内容を告げた。ドロドロとした嗜虐心が昂り、オニグミの本能が顔を出す。
「ただし、筆の代わりに使うのは股間のチンポさ。それで半紙に文字を書いてもらうよ」
「ばっ、ばっ、バカ！　ふざけるのもいい加減にしろっ！　ペニスで書道だと!?　そんな

恥知らずな真似できるか！」

「断るなら封鎖結界を消しちゃうよ。良平くんたちに裸を見られてもいいのかな？　部長がいきなりヌードで登場したらさぞみんな驚くだろうね」

「またそうやってわたしを……くっ、わかった。やればいいんだろう」

「素直で助かるよ。それとボクの質問に答えながら書いてね。ああ、射精したら始めから書き直しだから頑張って」

「このクズが」

乙女の怒りもどこ吹く風で、蛙坂は壁に半紙を貼りつける。

（んっ……ヌルヌルして気持ち悪いな）

流華はガニ股になりながら、皮を剥いたペニスをローションに浸した。粘液の冷たい感触が背筋を震わせる。ピンクと黒が混じり合った亀頭は、熟れた果実のようだ。

変態的なシチュエーションが感度を高め、豊乳美少女の被虐体質を煽る。

（チンポで文字を書くなんて、次から次へとよく思い浮かぶものだ）

股間を突き出し、ガニ股の姿勢で包茎チンポを勃起させる。たわわな豊乳をプルンップルンッと上下させながら半紙に近づく。

蛙坂は期待に剛直を膨らませながら、最初の質問をした。

「一つ目。キミはボクの何かな？」
「めす……雌奴隷だ……」
不格好に腰を振りながら『めすどれい』と書いていく。亀頭に半紙が擦れてこそばゆい。
コシュッ♥　コシュッ♥　コシュコシュ♥
「んっ、くうぅ……なかなか難しいな」
媚薬のエキスがジクジクと染み込み、肉竿や金玉が熱を帯びる。頬の赤みが増し、吐く息がだんだんと湿り気を帯びていく。
「クフフ、その調子だよ。もっとお尻を振ってくれると嬉しいんだけど」
「はぅっ、ひくううぅう、ぅ……ジロジロ見るな！　エロ蛙が！」
水蜜桃のようなヒップを弾ませ、一文字一文字書いていく。自分の陰茎を筆代わりにするというありえない恥辱行為に背筋が痺れる。
「んんっ、はっ、ひうううぅん、はくうぅ……書けたぞ。これでいいか」
「へえ、上手だね。授業でも綺麗にノートを取っているけど、チンポも達筆なのかな？」
「し、知ったことか。それより次はなんだ」
「二つ目。いつもアヘアヘよがっているけど、装刃戦姫ってマゾの変態なの？」
「そんなわけがあるか！　装刃戦姫は人の世の平和を守るために戦っているんだ！　侮辱

するのも大概にしろ！」

「ボクが気に入らない答えも書き直しだよ？　この結界を破るなんて、障子紙に穴を空けるより簡単なんだけどな」

「わかった……装刃戦姫はマゾの変態……集団……だ」

屈辱的な言葉を吐かされ、『マゾ変態』と字を書くマゾ乙女。媚薬の効果か欲情が大火のように燃え盛り、はしたなく射精をしたくなってしまう。

「あっ、くぅんっ……まっ、マゾの……変……態……ひっうううぅぅう……書けたぞ」

「三つ目。一番感じるところは？」

「おチンポだ……フタナリの包茎チンポ。毎日シコっているスケベチンポだ。お……お……チ……ん……ぽ……」

「チンポを使ってチンポって書く人間は初めて見たよ。恥ずかしくないのかな？」

「一体だれのせいだと……あぐうう、亀頭が擦れて……ち、チン……ぽぉ……」

休む暇なく淫らな言葉を書かされる。懸命に腰を振る姿は、ストリップ劇場でも見られない淫靡さで、鬼の視線を虜にしてしまう。

白い肌に玉のような汗が浮かび、雌の匂いが結界内に満ちる。

「四つ目。チンポから出る白い液体は？」

「……ザーメンだ。わたしの早漏チンポからみっともなく噴き出す濃厚種付け汁だ……ふひゅっ、んんっ！　んくっ……ざ……あうっ！　ザ……メ……ン、ひゃうんっ！」

「随分息が上がってきたけど大丈夫？　まだ序盤だよ」

「こんなこと……屁でもない。ザ……は、ああ、くうぅうぅ……メンできたぞ」

フタナリペニスが半紙に触れるたびに、屈辱電流が尿道を走る。ザラザラとした紙の繊維がムケ亀頭を愛撫し、絶頂が迫ってくる。

「五つ目。ザーメンはどんな匂い？」

「く……臭い。生臭い……ああ、はあぁぁあっ！　栗の花みたいな匂いだ」

「ウソはよくないよ。本当はもっとえげつない匂いなんじゃない？」

「はあ、くぅっ、んあああ……そうだ……臭い！　臭い臭い臭いいっ！　すごくイカ臭いんだ！　ひぅっ、うゥ……は、鼻が曲がりそうなくらいイカ臭いんだ！」

「キミの腋の匂いと同じレベルなのかな？　電車に乗った時もすごかったよね」

「っくうぅ……ティッシュに包んでもプンプンに匂ってしまう激臭ザーメン……ゴミ箱を妊娠させられそうなこってりザーメンなんだ。わ……わたしの腋臭同様くっさいザーメンなんだ！」

「じゃあ流華の『激臭ポコチン臭』って書かないとね」

腋毛を生やされた罰ゲームのことまでバカにされる。腋臭を貶められ、乙女の身体がカッと熱くなった。

「覚えていろ……り、流……華の……はあっ、おチンポ熱いいぃぃ！　おチンポ痺れる……ひぐぅうううぅうっ！　半紙で感じてしまう……」

獣めいた嬌声が喉の奥から搾り出される。チンポ書道で誇りを貶める黒髪ヒロイン。勃起肉竿だけでなく金玉下のクレヴァスからは淫蜜が溢れ出し、床をはしたない染みで汚す。

ビクンビクンッと跳ねる股間のチンポ筆は、ローションで淫猥にぬめり毒虫のようだ。

（惨め過ぎる……わたしの身体をなんだと思っているんだ）

女性どころか男性でもするはずのない下品さに、端整な小顔が引きつる。自分の精液がいかに汚いか思い知らされるようで、涙が出そうだ。

「おい、もっと声出せ！　部長がいないからって手を抜くなよ！」

「はい！　いち！　にい！」

そうしている間も竹刀を振る音と、気合いの入った声が聞こえてくる。真面目に部活をしている部員たちの姿が余計に恥辱を煽る。

日頃散々「何があってもサボるな。一生懸命打ち込むことが上達の近道だ」と説教して

いるのは、他ならぬ流華なのだから。

（情けない情けない……うぅ、チンポでこんなことをさせられるなんて……バカみたいだ）

淫辱に肉体が疼き脂汗をかく。射精欲求が限界まで高まり、肉竿も金玉もパンパンだ。バケツに陰茎を浸すたびに、脳髄が焼き切れるような灼熱を感じる。股座は溢れる蜜液の大洪水で、濃い目の陰毛がヌラリと光る。

コシュ♥　ズチュ♥　ヌチュルン♥

「六つ目。流華のチンポはいつも皮をかぶっているけど、実際は何包茎なのかな？」

「そ、そんなこと知るか！　興味もない！」

「淫乱ドスケベのキミなら当然調べているはずだよ。はいはいっはいっ、建宮流華部長は何包茎なのかな～？」

「鬼畜め。か、か……け……だ……」

「聞こえないな。もっと大きな声でよろしく」

「か……ほ……け……だ。これでいいだろ！」

「全然聞こえないね。もう一回」

「ぐうぅ、くっ……かっ、かか、仮性包茎だっ！　いつも亀頭が包皮に覆われている仮性包茎だ！　わたしのチンポは皮かむり早漏チンポなんだ……あっ、はうっ……チンカスの

溜まりやすい不衛生チンポで、すぐにイッてしまう敏感チンポ。んっ、むううぅ……サイズだけはデカいのにすぐ屈服してザーメン発射してしまう情けないおチンポなんだ！」

「へー、そうなんだ。知らなかったよキミが仮性包茎だったなんて。それじゃあ『仮性包茎』って書いてみようか」

大きな声で皮かぶりを告白させられる。マゾ調教された肉体のおかげで、言葉の端々に切ないものが滲む。恥垢が溜まりやすく、匂いもキツいフタナリ包茎は、巨乳に次ぐ流華のコンプレックスになっていた。

（だれのせいで包茎チンポになったと思っているんだ。毎晩手入れするのも大変なんだぞ）

強烈な射精衝動だけでなく、恥垢の掃除が黒髪乙女の精神を擦り減らす。ボディソープを大量に使って匂いを消さなければ、学園に通うこともできない。

（とにかく今は書かないと。ほ、ほう……け……い……）

切れ長の瞳を恥辱で染め、再び腰を振る。快美波動に冒されながら、亀頭を走らせていく。

シュシュ♥　ズリジュリ♥　ズチョチョ♥

「はぁんっ……♥　仮……っん。うぅっ、んっ、んんっ……チンポ切ないぃ……勃起が止まらないいぃぃ……」

グロテスクな血管を浮かび上がらせながら、文字を書く。傍から見れば尻を上下させ、誘っているように見える。尻タブがブルンッブルンッと揺れる光景は、むしゃぶりつきたくなるほどエロティックだ。

アナルも歓喜に盛り上がり、花が咲くように紅く膨らんで、甘酸っぱいフェロモンを放出していた。蠱惑的な淫臭が狭い結界内にたちこめ、理性を蕩かしていく。

「みんな真面目に打ち込んでいるね。ここにチンポで書道しながらセンズリ扱いてる変態がいるなんて思いもよらないだろうね」

「くぅ……そんなこと言うな……せ、い……ふうぅぅん、わたしは変態じゃない。断じて変態じゃないぞ！　これは無理やりやらされているだけだ……チンポ書道で感じてなんかいない！」

「だったら本当に感じていないか試してみようか。おーい、みんなー！　ここに建宮部長がいるよー！」

「えっ、えええええええ!?」

蛙坂は一時的に結界の機能を弱め、声だけを外に伝えた。部員たちにざわめきが広まる。

「今何か声がしなかったか」

「俺にも聞こえたぞ。な、良平？」

「はい。ちょっと見てきます」
良平は手を止めると、声の聞こえた方向に歩き出した。
建宮部長が絶賛チンポ書道をしている場所だ。恋人の接近に黒髪乙女の顔が青ざめる。
煽情的なうなじを冷汗が流れ落ちていく。
「ヒッ、ひいぃぃぃぃぃ！　やっ、いやだあああぁぁあぁぁあぁあ！　たっ、頼む良平こっちにこないでくれ！」
「ほら腰が止まってるよ」
「ひぅっ、ほっ、ほっ、ほ……うけ……あひぃんっ！　んアァアアアッ！」
キョロキョロと辺りを見回す良平。外からはわからなくても結界の内側からは丸見えだ。
恋人の眼前で全裸になり、肉竿を黒色ローションに浸し、金玉をぶらぶら揺らしながらフタナリチンポ書道に励む。学園では古風で厳格、剣の腕も一流な建宮流華の姿。
どこからどう見ても頭のおかしい変態女である。もし気づかれたら二度と登校できないどころか、外を歩くこともできない。
しかし、どんなに屈辱を味わわされても、蛙坂の命令には逆らえない。ロングの黒髪をしなやかに揺らし、肉幹で線を引く。恋人の命を守るために。
コシュ♥　ジュシュッ♥　ゴシュゴシュッ♥

「あんっ、はぁんっ！　りょっ、良平ダメだ……きちゃダメ……ひぐっっう♥　はぁあ……ああんっ♥　ひあああん♥　顔見えてる……良平がすぐ近くにいいぃいい♥」

羞恥快美に心を蹂躙される。カリ首からしたたり落ちるローションが卑猥だ。

「んっ、あっ、あぁぁん♥　け……け、かっ……書けないいぃいぃ！　あひっ、あひイィィイイィィィイィィ♥　で、でるでるぅ♥　おチンポでるぅぅうぅ♥　ザーメンでてぢまううぅ♥　良平がそこにいるのにいぃい♥　あぅヴんんん♥」

極限まで感度の上がったチンポを、ズリズリと半紙に擦り付ける。背徳感が胸中で渦巻き、さらにリビドーを増幅させる。

「おかしいなー。確かに流華の声だったんだけど」

「ヒゥッ♥　やっ、イヤアァァ……♥　良平……あああ♥」

二人の目線が重なった瞬間、一気に快感ゲージが上昇した。鮮烈な羞恥と快感が肉竿の秘奥を刺激し、頭の中が真っ白になる。

ずっとお預けをくわされていた包茎チンポはついに精を爆発させた。

ビュビュク♥　ブッビュル♥　ドブビュルウゥゥウゥゥッ♥　ブブ♥　ボジュル♥

「おっほぉおおぉぉお♥　イグッ♥　イグッ♥　おチンポ書道でイグううぅぅう♥

半紙にくっさいザーメンだしまくる♥　ザーメン文字♥　ザーメン文字♥　ザーメン文字

でイッくのっぉぉおおぉおお♥　包茎チンポミルクで半紙汚してしまううぅう♥」

ぶぴっぶぴっと半紙を白濁液で汚す筆チンポ乙女。

刀の扱いは手慣れていても、筆チンポの扱いはまだまだのようで、白目を剥きながら恋人の前で果ててしまう。

「何もないですね。気のせいだったみたいです」

良平は部活へ戻っていく。すぐそこに恋人がいるとも気づかずに。

蛙坂は満足げにその光景を眺めていた。精液でドロドロになった半紙をつまみ取ると、

「もう一度始めからだね。仮性包茎からいこうか」

「はぁ……ううぅ」

流華はおぼつかない足取りで、陰茎を持ち上げる。チンポを黒ローションにまぶし再び勃起させる。壁に貼られた半紙に亀頭を向け、『仮』の文字から書き直した。

一時間後。

流華の足元には淫語の書かれた半紙がうずたかく積み上がっていた。枚数は百枚以上にも及び、太腿がつりそうだ。

（はぁはぁ……これだけ書いてもまだ部活が終わっていない。封鎖結界の内外で時間の流れを歪めているのか。まったく面倒なことを）

時間すらも操る八大鬼の呪力。強大な力に装刃戦姫は歯噛みする。いかに鍛えられた彼女でも、さすがに体力の限界が近い。

「蛙坂……はぁ、少し休ませてくれ」

「もうヘバったの？　チンポの鍛え方が足りてないんじゃない？」

「調子に乗るな媚薬のせいだ。薬で女を屈服させるなんて恥ずかしいと思わないのか」

「やれやれ仕方ないね。どうしようかな」

蛙坂は大袈裟に肩をすくめる。そこで、部員たちの会話が聞こえてきた。どうやら休憩中のようだ。

「良平、建宮部長とはうまくいってるのか？　この間デートに行ったんだろ？」

「はい副部長。相談に乗ってもらってありがとうございます」

「マジかよその話！　詳しく聞かせろよ～」

「私も興味あるな」

良平は照れ臭そうに頬をかきながらデートのことを話し出した。部員たちは興味深そう聞き入っている。厳格な姿しか知らない彼らには、想像もつかない未知の世界だ。

（良平すごく嬉しそうだ）

流華は気まずそうにその会話を聴いていた。話の中に出てくる自分と、現実の自分の乖

離に胸が張り裂けそうになる。
純朴な少年は恋人がこんな変態行為に勤しんでいるとは思いもよらないだろう。
「も、もういいだろ。まだ何かさせたいのなら、せめて場所を変えろ」
「まあそう急がないでよ。ね？」
「なっ、貴様何を!?」
蛙坂が手の平をかざすと、床や半紙に飛び散ったザーメンが集まり、バケツの中に注がれていく。瞬く間に白濁の水塊が出来上がった。
「今度はこのザーメンで書いてもらおうかな。フタナリ雌奴隷のキミにはピッタリだよね」
「どこまでも下劣な……正気じゃない」
「流華？」
「ぐぅ……承知した」
白濁液がよく見えるように、黒色の半紙が用意された。最低の気配りに腸（はらわた）が煮えくり返る。流華はフタナリ肉棒をザーメンに浸すと、粘ついた汁を垂らしながら持ち上げた。
（うぅ、臭い……こんなに汚いものがわたしから出ているのか）
まざまざと自分の雄汁を見る屈辱。古いイカのような生臭い香りに眉間をひそめる。
「キミが一番好きな人の名前を書いて告白してよ。どう書こうとキミの自由だからさ」

「そんなもの決まっている」
ためらうことなく良平の名前を書こうとする。本人が談笑している姿を見ながら書くのは気が咎めるが、背に腹はかえられない。
「まさかとは思うけど良平くんの名前を書くつもりじゃないよね？　ザーメン書道で彼氏の名前を穢すなんてそこまで変態じゃないよね？」
「っ!?　そ……それは」
その一言に黒髪乙女は凍りつく。
（た、確かにザーメンで良平の名前を書くなんて侮辱にもほどがある。だが……）
理屈としてはもっともだ。恋人を自ら穢す恐怖に、足が震える。
（だが他に選択肢なんて……適当な名前を書いても蛙坂は納得しないだろう。どうすれば）
まぶたを閉じ、葛藤する黒髪ヒロイン。肉竿からザーメンをしたたらせたまま固まってしまう。
「そうだ。ボクの名前なら好きに使っていいよ。別に気にしないからさ」
（初めからそれが狙いか。だが良平の名前を書くよりは……）
悪鬼の姦計にハマったことに唇を噛む。頭の中を何周も逡巡がまわる。ややあってから、流華は口を開いた。

「……貴様の名前を書かせてもらう。これで文句はないだろう」
「嬉しいね。一体どんな風に書いてくれるのかな？」
「か、『蛙坂さま愛しています』だ。さっさと終わらせるから口を挟むな」
両親の仇に媚びさせられる戦姫ヒロイン。屈辱に歯を食いしばりながら、肉竿を振る。
「か……かわ……はぅう……あうううぅうううう、くひイイィイ！」
媚薬漬けの肉竿で懸命に文字を書く。背徳感でますます怒張してしまう海綿体が憎らしい。
「ず……さか……ふぅ、くううぅううう！」
流華は股間部を突き出しながら、視界の端に良平の姿を捉えた。話は水族館のところにさしかかり、剣道部の仲間たちもかぶりつきで聞いている。
（良平言わないでくれ……わたしは……）
日常とのギャップがさらに淫靡な炎を燃え上がらせる。勃起肉竿を脈動させ、カクカクと腰を動かす美少女戦姫。
ズチュ♥　コシュ♥　シュリュリュ♥
「人気があって羨ましいね。まあ本命はボクなんだけどさ」
「世迷言を……だれが貴様なんか……んんぅ、ひっうぅうぅう♥　んっ、ひウゥウゥ♥」

「あれ今なんて？　ボクのことを愛しているんじゃなかったの？」
「うっ、愛している……貴様のことが好きだ……あああ♥　ひゃうあああ♥」
悪鬼を恋人と混同させられる恥辱。情けなさと申し訳なさがさらに欲情を煽る。
うなじから汗がしたたり落ち、腋から雌の香りが発散される。乳首が熟れたサクランボのようにテカり、快楽に興じる。
「だよね。そんなに好きなら隠さなくてよかったのに」
「やっ♥　ぁっ♥　好き……貴様が好きなんだ……くっ、んはぁあぁ♥　あひうぅう♥　好き好き♥　しゅきぃ♥」
流華の脳内で快美の水流が渦を巻く。良平たちの話と今の自分が混ざり合い意識がトロトロに溶けていく。
これまでに感じたことのない快感を陰茎に叩き込まれ、フタナリ乙女は身をよじる。
「好き好き大好きなんだ♥　おチンポしゃぶるのも好き♥　デカ乳でパイズリするのも好きなんだ♥」
倒錯的な恍惚に支配され、言わなくていいことまで言ってしまう。恋人の存在をスパイスに、淫悦に堕ちていく。
「うひいぃいいいん♥　かわず……さまぁ……♥　ほぉ♥　おぉ♥　チンポたまらん♥

チンポチンポチンポいい♥　ザーメンで書道しながらマスをかく♥　ゴシゴシマスかきぃ♥　し、しっかりしないといけないのに♥」

黒い半紙へナメクジが這うように、ザーメンが塗りつけられる。排泄物を墨汁代わりにする惨めさが、心臓の鼓動を速めていく。

蛙坂への嫌悪感が消えていく事実が恐ろしい。

「もう一度聞くよ。流華はボクが好きなんだよね？」

「もちろんだ♥　貴様のことが好きなんだ♥」

「じゃあキスしようか。本当に好きならできるよね？」

「んっ♥　そっ、それはぁっ♥」

蛙坂の言の葉が毒のように心身へまわる。気持ちよくてもう何も考えられなくなってしまう。

ブルンブルンとチンポを上下させ、舌を出しながら喘ぐ美少女戦姫。

（こんな奴とキスなんて良平になんて言えば……んくぅぅう♥　はぁぁ♥　っう、身体が疼く♥）

肉竿で『大好き』と書きながら淫辱に溺れていく。艶やかな唇から漏れ出る吐息は、切なく口づけを求めるサインだ。

（そ……そうだこれは演技だ。キスしないとまた理不尽な要求をするに決まっている。勝つために蛙坂を欺くだけだ。良平を裏切ったわけじゃない。あっ♥　はくぁぁ♥　ち、チンポくるぅうぅ♥）

自分の本心に目をつぶり、身勝手な理屈の鎧を纏う。イカ臭い白濁液のトロみが心地よく、金玉が新たな精子を生み出していく。桜色のニップルがピンッと張り、理性が媚薬に敗北する。

「き……キスして♥　キス♥　キスして欲しい♥　貴様とキスしたい♥　フタナリ淫乱で最低のドM♥　マゾオナニーが大好きな剣道部変態部長とキスしてくれ♥」

「いいよ。良平くんよりも気持ちよくしてあげる」

「ひゃうううっ♥　ン……♥　ンむうううぅうううう♥」

蛙坂の分厚い唇が流華の口を塞ぎ、濃密なキスが交わされる。口内に侵入する長いベロにも嫌悪感はない。膣穴から蜜汁をこぼしながら口淫に溺れる。

「ちゅく♥　ちゅぶ♥　ちゅううぅん♥　はぁ……あああん♥　好き♥　しゅき♥　蛙坂ぁ♥」

「んっ……ボクも好きだよ流華。最後まで書けたらイッていいからね」

「が、がんばる♥　がんばるぞ♥　あと一文字なんだ♥　だ、だいす……き……好き♥

ほぉ♥　もぉ♥　もう辛抱たまらん♥」

良平の存在がどこまでも遠くに感じる。部員たちの声が異次元のノイズに聞こえる。繰り返される『好き』は演技のはずなのに、蛙坂への愛を錯覚してしまう。

（違うわたしが好きなのは良平だけだ！　ぐっ♥　でも蛙坂がぁ♥　りょ、良平……わたし……わたしは♥）

黒髪乙女はみっともなく鈴口をヒクつかせる。被虐に慣らされた身体は偽りの言葉さえもスパイスに変換し、貪欲に快楽を求める。フタナリペニスが最大限に怒張し、竿にビキビキと血管が浮かんだ。

「か、書けたぞ♥　もうイッていいんだろ⁉」

「いいよ流華。ボクの彼女なんだから遠慮なく射精してよ」

「おぉ♥　ぼお♥　感謝する♥　好きしゅき大好きだ蛙坂♥　ほっ♥　イク♥　イグイグ♥　チンポイグ♥　ザーメン昇ってくるうぅうぅ♥」

惨めで情けない自分に興奮し、淫虐に背筋をのけ反らせる。直後、半紙をなぞる肉竿から特濃のミルクが噴き出した。

ビュル♥　ビュルゥウゥ♥　ブリュリウウウウ♥　ブリュグウゥ♥　ビッ♥　ブピュルルルルル♥

「お……おほッッ♥　おっほぉおおおぉおお♥　好き♥　好き♥　しゅきぃいいい♥　蛙坂にキスされながらフタナリチンポいっぐうぅぅぅ♥　半紙にビュービュー射精しちゃう♥　あひっ♥　んぐっ♥　良平がいるのに♥　みんながいるのに書道に使える便利おチンポでイグ♥　チンポ書道でザーメンいっぱい出りゅぅうぅう♥　ザーメン塗りながらザーメン出す♥　すごい変態マゾリサイクル♥　チューしながら筆チンポマジイキしまくりゅうウウウゥゥウ♥」

愛の言葉を聞きながら絶頂する最低最悪のフタナリ乙女。睾丸から残らず精子を打ちだし黒い半紙を白く染める。

（ふぁぁ……良平♥）

肉悦に溺れる黒髪乙女。今は肉竿のことしか考えられなかった。

翌日。

流華と良平が登校すると、正面玄関に人だかりができていた。学年もばらばらで、皆一様に頭上を見上げている。

「何かあったんですか？」

「見ろよ。校舎の外壁に半紙が貼りつけられているだろ。しかも下品な書き文字だらけでな。まったくどこの変質者なんだか」

「ホントだ」

視線の先にはひらひらとはためく半紙があった。昨晩蛙坂が貼りつけると提案し、流華も無理やりに手伝わされたものだ。

ぶっかけたザーメンもそのままで、美少女部長の書いたおチンポ文字は、全学園生徒に知られることとなった。

「おかしな人もいるよね。ん？　流華どうしたの？」

「そっ、そうだな！　けしからんっ！　とんでもないバカ者だ！」

「だよね。正直引くよ」

「……やっぱり良平も軽蔑するか？　いや、もちろん生徒会長として許さないがな！」

「これはちょっとね。気持ち悪いよ」

「そうか……気持ち悪いよな。当たり前だな……ハハ……」

乾いた笑みを浮かべる黒髪乙女。

恋人に気持ち悪いと言われ研ぎ澄まされたメンタルにヒビが入る。

だが、フタナリペニスはこの事態でも興奮し、かま首をもたげつつあった。書道の快感、そして蛙坂への告白を思い出すだけで、鈴口が潤んでしまう。

（あれは一時の気の迷いだ。あんな奴が好きであってたまるか！）

わずかでも蛙坂に惹かれた自分が許せない。竹刀袋をギュッと握りしめ、オニグミと戦う決意を固める。

「行こう良平」

恋人の手を取り歩き出す。唇にまだ蛙坂の体温が残っている気がした。

◆◆◆◆

薄暗い路地を少女が走る。

ローファーがアスファルトを叩き、軽快な音を奏でる。走り慣れていないのか呼吸は荒く、時おり太腿をさすっている。

それと同じ路地を進むオニグミがいた。丸太のように太い脚がガリゴリとビルの壁面を削る。

外見はトカゲに似て、頭部には山羊のような角がある。岩石と同じ頑丈な鱗が全身を覆う。

両者の距離は二十メートルほどだが、みるみるうちに詰まり、袋小路に入ってしまった。

「はぁはぁ。行き止まり……ね」

少女は肩で息をし、オニグミが牙を剥き出しにする。映画なら華奢（きゃしゃ）な肢体が八つ裂きにされ、鮮血が画面に飛び散るだろう。

ただし、今回に限っては少し状況が違う。追い詰められたのがオニグミで追い詰めたのが少女という点だ。

「買い物の最中でしたのに手間をかけさせてくれますわね。慣れない靴で無理に走って靴擦れしてしまいましたわ」

「た、頼む見逃してくれ！　今日はまだ何もしてねえ！　何も食べてねえんだよ！」

「それは人肉ステーキのことかしら？　食後には血を飲むのがお好きらしいわね」

「ああ人間ディナーもまだなんだよ！　まあ昨日は愉しませてもらって……ハッ!?」

「見下げはてたクズ野郎ですわね。今すぐ塵に還りなさい」

「まっ、まってくれ装――」

オニグミは最後まで言葉を紡ぐことができなかった。少女が手の平から光を瞬かせると、閃光のような速さで肉体をバラバラに解体したからだ。

緑色の体液が飛び散り、すぐに蒸発を始めた。闇の魂がこの世から消滅する。次の八大鬼、鬼蜘蛛候補は、名乗りを上げることなくこの世から消滅した。

「日本の悪魔（デモン）は手ごたえがありませんわね。こちらとしては楽でいいですけれど。で……あなたはいつまでそこにいるつもりですの？」

少女が視線をやる方向。雑居ビルの屋上にはウェーブの黒髪を腰まで伸ばした女がいた。

外見は三十代半ばで、医師のような白衣を纏い、深紅の瞳が妖しく光っている。
見ただけで男を魅了する色香が漂い、お尻からは四本の白い尻尾が生えていた。
「おや気づいていたのかい。人間に化けた意味がないねぇ」
「そこでじっとしていなさい妖月。今すぐにブチ殺して差し上げますわ」
「おー怖い怖い。話し合いの余地はまったくなしかい。なら、さっさと退散させてもらおうかねぇ」
「待ちなさい！」
少女が駆け出す前に妖月の姿が揺らぎ、水のように溶けて消え失せた。呪力の反応も完全に消失している。妖月が得意とする転移の呪術だ。
「まったく、逃げ足だけは速いですわね」
少女は「ふうっ」と息を吐くと背を向け出口へ歩き出した。これ以上の追跡は無意味だと悟ったようだ。
「爺やを呼んで試着室に戻るとしましょうか。靴の代金も払わないと」
縦ロールの金髪をかき上げ、異国の装刃戦姫は路地をあとにする。苛烈な殺意を胸に秘めて。

◆◆◆◆

岩戸学園の数ある部の一つに、ゲーム研究部というものがある。部員全員が集まっても規定人数ギリギリで、活動内容も漫画を読んだりゲームをするだけの、まったく実績も上げていない役立たずの部である。

生徒会の人間からは一刻も早く潰して、予算を浮かせたいと思われている始末だ。

休日だというのにゲーム研究部の部員は、校舎の隅にある部室に集まっていた。部員全員丸々と太っていて、養豚場を思わせる光景だ。他の生徒たちが汗を流している中、閉めきった部屋で遊んでいるのであった。

「まったく建宮会長にも困ったものだねえ。ウチの部を潰そうだなんてえ」

「そうだよ。遊んでいるだけじゃないってのに」

「体育会系はこれだからイヤなんだ。あいつら脳ミソまで筋肉でできてるんじゃないのか」

「本当だよねえ。今度あの口うるさい女と会ったらビシッと言ってやるよお」

一番太った部員に残りが追随する。直接会った時は目も合わせられなかったのだが、本人がいないため言いたい放題だ。

と、陰険な話を続けるゲーム研究部のドアがノックされた。

「チッ、なんだよお」

暇な教師が注意しに来たのかと、嫌々ながら返事をする。だがドアを開いて入ってきた

のは、全員が想像だにしない人物。生徒会長、建宮流華だった。なぜか黒いマントをはおり、身体を隠している。

「ど、どうしたんだよ建宮会長。部を潰すって話ならお断りだからねえっ！」

「いや今日はその話をしに来たわけではない」

「じゃあ、なんだってんだよお」

「それは……あの……」

「はっきりしないなあ。からかってるのお？」

気っ風がよい流華らしくない態度に、苛立(いらだ)つ部員たち。違和感を覚えながらも虚勢をはる。

「今日はお前たちに頼み事があってきたんだ……っ」

「会長が俺たちに頼み事？　アタマでも打ったのかよ」

「くっ、つ、つまりこういうことだ！」

半ばやけくそ気味にマントを脱ぎ捨てる。マントの下に隠れていたもの、それは白雪のような乙女の素肌であった。

建宮流華は全裸、いや全裸よりも卑猥な格好を衆目に晒す。

（鬼蛙……あとで絶対に殺す！）

丸出しのメロン巨乳にはハートのニップレスが貼られ、乳輪が間からはみ出していた。金玉にはレースをあしらった玉ブラジャーを着け、ペニスの部分も同じくフリルで飾られている。

亀頭には尿道プラグが刺さり、ハートマークの持ち手部分が卑猥さをアピールしている。肉竿はビンビンに勃起し、射精できない苦しみに血管を脈打たせていた。しばらく洗っていないのか、饐えた恥垢の匂いが鼻につく。

流華は腰に手を当て仁王立ちになると、部員たちに向かって言い放った。

「見ての通りだ！　どうかわたしのフタナリチンポを助けて欲しい！」

「はあ？　フタナリい!?」「え？　どういうことだよ？」「理解不能！　理解不能！」

どよめきが起こる。自分たちを目の敵にしている生徒会長に陰茎が生えているのだ。動揺するのも無理はない。

「つまりどういうことだ？」

「か、隠していたがわたしにはおチンチンが生えているんだ。それで、ワケあって罰を受けている最中で……もう二週間も射精していないんだ」

「だから僕たちにそのプラグを抜いて欲しいってこと？　正気なの？」

「そうだ。尿道プラグをお前たちに抜いてもらうように命令されているんだ。っうぅ…

…もう射精したくて我慢できない……お願いだからわたしを助けてくれっ！」

「ふ～ん。なるほどねえ」

部員たちは部室の隅に集まると、なにやら相談を始めた。突拍子もない状況に困惑しているが、股間は確実に膨らんでいる。

一方、黒髪美少女はそれどころではないと、太腿を擦り合わせながら射精欲求に耐えていた。地下バトルの罰ゲームで、この二週間一度の射精も許されていないのだ。

シャフト部分に穴が開いているため、オシッコはできるが、パンパンに怒張した陰茎はもうとっくに限界を通り越していた。

（出したい出したい出したい！　早く射精しないと気が変になりそうだ！）

射精我慢の苦しみは、少女の理性を溶かし、嫌悪していたオタクにも頭を下げさせる。

尿道プラグを抜いてもらえるならもうだれでも構わない。

「助けてくれるならお前たちの言うことを何でも聞く……っ。ど、どんなことでもしてやる……」

「へぇ、そうかよ」

堅物な生徒会長を意のままにできる好機。濁った瞳に欲望の火が灯る。

「マジで何でも言うこと聞くの？」

「本当だ。うぅ、くっ……頼むから急いでくれ。お、おチンポがつらくてたまらないんだぁ……はうっ、くうぅぅう」

「へえ。じゃあまずはおねだりしてもらおうかなあ。会長が本気だってところを見せてよ」

「おねだりだと……？」

「俺たちを誘惑しろってこと。あとは自分で考えな」

「あ、ああ」

太ったオタクの提案に迷いなく応じるフタナリ乙女。まったく嫌がるそぶりも見せず、要求に応える。

（これは罰ゲームだから仕方ない。仕方ないんだ）

鬼蛙に仕込まれた知識を総動員して男を誘惑する。

「う、うっふ～ん♥　見てくれわたしのオッパイ♥　とっても大きいだろ♥」

前かがみになり、Gカップ巨乳を両腕で挟んで強調する。普段の彼女なら考えられない甘声で媚びを売る。

「無駄に大きな胸もお尻も全部、お前たち好きにしていいぞ♥　その逞（たくま）しいおチンポでめちゃくちゃにしてくれ♥　あん♥　あん♥　あっは～ん♥」

「うわ、ホントにやってるよ」「ドッキリじゃなかったのか」

「だからそう言っているだろ♥　どうかこのオナ禁フタナリマゾ豚にご慈悲を♥　はぁん♥　はうう～ん♥　あはあ～ん♥」

胸乳をたわわに弾ませ、豊満なヒップを左右に振り、軽蔑する男たちに媚びを売る。これまでにない恥辱に、顔から火が出そうだ。

（恥ずかしい情けない……でもわたしにはこうするしか……）

胸の中は逃げ出したくなるほどの惨めさでいっぱいだ。今まで築き上げてきた自分のイメージが音を立てて崩れていく。

流華の言葉が事実だと理解した部員たちは、鬱屈（うっくつ）した欲望を爆発させた。これまで体育会系の生徒に蔑まれてきた分、歯止めがきかない。

「やったホントじゃん！」「会長がこんなに変態だとは思わなかったよ」「おい、もっとおねだりしてみろよ」

「うふぅ～ん♥　わたしの裸で勃起して前かがみになってぇ～ん♥　思う存分おチンチンしこしこしてくれ♥　んうぅ～ん♥」

親指と人差し指で輪をつくり、口の前で動かす。口淫奉仕を想像させるジェスチャーで男の欲情を誘う。

「ちゅぱ♥　ちゅうん♥　はぁあん♥　シュッシュッっておチンポを扱いてやろう♥　ザ

ーメンぶっかけても今日だけは怒らないぞ♥」

下品にみっともなく、自らの淫猥さをアピールする。恋人にも見せられないエロ顔でニップレスをつまみ、チラチラと乳首をアピールする。フタナリ肉竿もリズミカルに上下し、可愛らしいフリルの飾りを見せつける。

「こ、これで本気だということがわかっただろう？　どんな命令でも受けつけるぞ♥」

妖艶に微笑み陵辱をおねだりする。オタク部員たちを繋ぎ止めていた理性の枷は、これで完全に断ち切られた。飢えたハイエナのように流華へ群がる。

「じゃあ会長の言う通り触らせてもらうよお。ふふ、誘ってきたのはソッチなんだからねえ」

「お前たちの好きなところを触って舐めて楽しんでくれ♥　出血大サービスだ♥」

我先にと手を伸ばす部員たち。全身を弄られ、豊乳や巨尻をモニュモニュと揉みしだかれる。引き締まった太腿をなぞられ、うなじや腋の下を舐められる。

「んん♥　はぁ……んくうぅう♥　あぁ……ウウうぅ～ん♥　ふひゃああん♥」

ハート尿道プラグが刺さった肉竿にデコピンをくらい身をよじる。普段の凛とした佇(たたず)まいはどこにもなく、男に弄ばれるのが嬉しくて仕方がない様子だ。

「建宮会長は何カップなのお？」

「きゅ……九十六センチのGカップだ♥　やんっ♥　あっ♥　はぁんっ♥　オッパイ吸われてるぅっ♥　ふぁひぃ♥　慌てなくても逃げないからたくさん吸って揉んでくれっ♥　んんっ♥　ふうんっ♥」

「へっ、歩くたびにエロ乳アピールしやがって。俺は前からムラムラしてたんだよ。変態会長さんはどこが弱いんだ？」

乱暴な手つきで双乳を弄ばれる。ツンと尖った乳頭を甘噛みされ、針で刺されたような淫悦に、背を弓なりに反らせる。

コリッ♥　クリクリ♥　コリッコリ♥

「ひぐぅっ♥　あっ♥　あんっ♥　乳首噛むのダメだぁ♥　そこ弱くて感じてしまう♥　ひゃうっ♥　きゅううぅ～ん♥」

「会長ここは～？」

「はぅうっ♥　せ……背中あっ♥　背中ペロペロダメだぁ♥　肩甲骨のとこ舐めまわさないでくれえぇッ……♥　ん、んんッッ♥」

「こっちはどうだよエロ会長！」

「あぐんっ♥　太腿マッサージもダメだ♥　優しく撫でられると疼いてしまう♥　あんっ♥　ひゃっ、ふぁんっ♥　なでなでするなあ♥　筋肉のついた大根脚が発情してしまう♥」

ざらついた舌が肌を這いずりまわる。唾液のヌルついた感触が不快だ。
「結局全部弱いじゃないかあ。建宮会長は性感帯だらけのスケベ女だったんだねえ。いつも偉そうなことを言っているくせに変態だなんて幻滅だよお」
「はうっ♥　そ、そうなんだっ♥　生徒会長建宮流華は全身イキポイントだらけのドスケベ雌♥　どこを責められても感じてしまうクリチンポみたいに敏感なスケベ女なんだ♥」
「おまけにフタナリなんだろ。そのデカいチンポ使って学園でもオナニーしてたのかよ？」
「あ、ああ♥　我慢できなくて男子トイレでオナニーしてるぞっ♥　シコらないとまともに授業も受けられないお猿チンポなんだ♥」
「いつやってんだよこの淫乱」
「昼休みとか人のいない時間を狙ってえ♥　便器の匂いを嗅ぎながら包茎チンポをシゴいている♥　最近は輪姦される妄想で射精しているぞ♥　ほぉ♥　おおう♥　チンポ昂るウウゥウゥ♥」
粗雑な愛撫に背筋を震わせ、屈辱的な快美に陶酔する。喉から漏れ出る甘声は子猫のようだ。
「会長って最悪のマゾじゃん。彼氏も泣いているよ」
「それは言うなあ♥　学園ではオナニーしまくりでぇ♥　あっ♥　変態衣装で乱交してる

なんて知られたらフラれてしまうっ♥　あぐん♥　もっと♥　もっと触ってくれえ♥　恥ずかしいフタナリ女の身体を愉しんでくれ♥」

脂ぎった手の平で触られ、汚い舌で舐めまわされて、恥も外聞もなく喘ぐ淫乱生徒会長。手汗と唾液にまみれるその姿から、普段の毅然とした態度は想像できない。

肉竿の先っぽに我慢汁を滲ませながら、射精することだけを考えて悶える。口からハッハッと舌を出し、雌犬のようにお尻を振る。

「今度は僕のケツの穴を舐めてもらおうかなあ。もちろんできるよね？」

「お尻の穴!?　穴だと!?　それは……さ、さすがに……」

「なんでもやるんだよねえ？　断るとプラグを抜いてあげないよお？」

「っ……うぅ」

尻の穴を舐めるという汚辱行為にためらいを見せる。そんな不潔で惨めなことはやりたくないに決まっている。女としてだけではなく、人として終わってしまう。

（この変態どもめ。図に乗るな！）

射精衝動と残ったプライドがせめぎ合い、火花を散らす。スマートフォンで録画を用意する者もいて、承諾すれば今後も彼らの言いなりになってしまうだろう。

（でもチンポが……おチンポが切ない……一週間分のザーメンドビュドビュ出したいぃ

♥）

欲望に理性が屈していく。心が肉竿の衝動に支配され、人としての矜持がガラス細工のように砕け散る。

「わ、わかった舐める！　お前の尻の穴を舐めさせてくれ！」

「いい子だね建宮会長。それとお前じゃなくて、これからはご主人さまと呼ぶように。会長は僕たちの奴隷なんだからさ」

「ああ、ご主人さま♥」

部員たちが下半身を露出する。流華はそのお尻にためらわず顔を埋めた。ろくに風呂に入っていないのか、排泄物の刺激臭が鼻腔を苛む。

（うぅ、臭い……）

できれば鼻をつまみたいところだが、相手の機嫌を損ねたくない。チロチロと舌を出して肛門の位置を探り、

（ここか。これが男のお尻の穴……）

ぬるんっと中に侵入した。

苦さと臭さで感覚が埋め尽くされるが、今の流華にとっては汚辱すらも甘美に変わる。証拠に股の膣孔はしとどに濡れ、包茎ペニスはさらに硬さを増していた。わざと音を立て

ながら、いやらしい舌愛撫を敢行する。
チュッ♥　グチュ♥　ジチュチュウウ♥
「んぐっ♥　ちゅっ♥　ちゅっ♥　ちゅううん♥　気持ちいいかご主人さま♥」
「とてもいいよお建宮会長。会長も嬉しいでしょ？」
「ちゅっ♥　くっんっ♥　う……嬉しいぞっ♥　ご主人さまのケツの穴を舐めさせてもらえてとっても感謝だ♥　嬉しい♥　くんっ♥　くんっ♥　入り口の皺もなめなめして♥ん、匂いキツイいぃ♥　でもおいしい♥　はむっ♥　ちゅクンッッ♥」
「ああトイレのあとよく拭いてなかったあ。ウォシュレットみたいに綺麗に頼むよお」
「ひぅんっ⁉　は、はぁい♥　ウンカスもぉ♥　ウンカスもお掃除しちゃうぞっ♥　わたしは汚物が大好きなトイレットペーパー女なんだから♥　もっとお尻に顔くっつけてスリスリしちゃうぅッッ♥　はむんッ♥　ペロペロ♥　唾液もい～っぱいまぶして洗浄洗浄ッ♥　建宮・肉便器・流華張り切っちゃうぞ♥　ずちゅぅううん♥」
恥辱と興奮で身体をくねらせながら、アナルへ奉仕する便器乙女。舌の先っぽを持ち上げ、肛門の下、やや盛り上がった括約筋の外周をなぞる。
さらに菊の花めいたアナルも舐め上げ、皺の一本一本までお手入れする。
（汚いのに気持ちイイ♥　プラグを抜くためだけにやっているはずなのにぃ♥）

汚辱行為にまるで心の臓が溶かされるようで、子宮がきゅんきゅんと疼く。本来の目的を忘れるほどに菊門へ奉仕する。

ン……グチュ♥　グチュ♥　チュチュッ♥

「ところでさあ。ご主人さまに謝罪の言葉はないのお？　非生産的だとかもっと運動をしろとか、ここを潰すとか散々言ってたよねえ？」

「ちゅっ、ちゅうう♥　ごめんなさいご主人さま♥　わたしの無知から失礼なことを言ってしまった♥　ゲーム研究部は素晴らしい部活だ♥　本当に申し訳ないッ♥　ペロっ♥　くちゅんっ♥　いっぱいご奉仕するから許してくれ♥」

「心がこもってないよお。もっと誠意を込めてえ」

「はぅんっ♥　おバカチンポ会長流華のご無礼をどうぞお許しください♥　ちゅっ♥　んちゅっ♥　これからは便器女としてウンコ穴綺麗にしますからぁ♥　変態汚物掃除機として一生こき使ってくれ♥　はうむッ♥　んっ♥　男子のウンコ穴専属メイドになるからあん♥」

「他には？」

「ひゃん♥　はふん♥　肛門っ♥　アナルッ♥　クソ穴あんっ♥　ご主人さまのウンコの穴デリシャスだ♥　今までのお詫びにウンカス一つ残らず舐め取る♥　んんっ♥　ちゅく

んッ♥　毎日男子トイレ入ってお口ウォシュレットになる♥　どうかこのフタナリマゾ便器を許してくれ♥　んんっ♥　ふむうん♥　ちゅっく♥　好き好き♥　ウンコ穴大好きぃっ♥」

心底嬉しそうに尻穴を舐めるお下劣乙女。喉を鳴らして汚物を舐め取り咀嚼（そしゃく）する。肛門の内壁を残らず舐め上げ陶酔する。

「キンタマぁ♥　キンタマも舐め舐めする♥　あむ♥　はぶ♥　じゅりゅん♥　玉裏まで丁寧にナメナメするうぅうう♥　はぁ♥　この匂い好き♥　臭いのしゅきぃ♥」

頼まれてもいないのに金玉に愛撫まで始めてしまう。左右の睾丸を手ですくい上げて揉み解し、指に絡まった陰毛を口に運ぶ。

「ちゅぶ♥　んくぅう♥　あむうぅううう♥」

「どうしようもない変態だね会長はあ」「こんなのが生徒会長気取ってたのかよ」「彼氏がいるのに浮気してんじゃねえよ」

「あうぅ♥　これは射精のためだからセーフなんだ♥　罰ゲームだから浮気じゃない♥　ちゅううう♥　んぶっ♥　じゅっぷうぅううう♥」

オタク部員たちは嘲りの目で流華を見下す。口角が上がるのを抑えきれない。毅然とした生徒会長が変態行為にハマっているのが滑稽でたまらない。

プルルルル。プルルルル。
「ん？　着信か？」
最初に脱ぎ捨てたマントの中から着信音が鳴り響く。相手は三城良平だ。運悪く罰ゲーム中に電話をかけてきたようである。
部員たちはナイスタイミングと口の端を歪め、
「電話に出るんだよ建宮会長」
「くちゅっ♥　んくちゅっ♥　で、でも相手が良平なんて……もしこんなこと気づかれたら」
「自分で浮気じゃないって言ってたよねえ。出たらプラグを抜いてあげてもいいんだけどなあ」
「わ、わかった！　約束だぞ！」
恋人への想いも肉勃起の誘惑には勝てない。
奪うようにスマートフォンをもぎとると、素早く通話ボタンをなぞる。できるだけ呼吸を整え、ぎこちない様子で良平と話し始めた。
「どうした良平？」
『今外にいるんだけど生徒会の仕事が終わったら遊べないかと思って』

「そうかちょっと現在進行形で手の離せない要件があって……ヒッ、ひゃあん♥」
『どうしたの流華？』
突然の官能刺激に肢体をビクつかせるフタナリ乙女。
原因は引っ張られた尿道プラグだ。数ミリ動いただけでもその刺激は圧倒的。デコボコしたシャフトが尿道を擦ると、思考が真っ白になる。
射精禁止で敏感になっているフタナリ勃起が肉悦に痙攣する。出したくても出せないもどかしさが股間に充満し、良平がいなければ叫び出していただろう。
ズリュ♥　ズジュ♥　ズジュジュジュ♥
「な、なんでもない。ちょっと風邪気味でしゃべりづらいだけだ」
『大丈夫？　迎えに行こうか？』
「いや心配ない。あひっ、ひくぅぅ♥　今ゲーム研究部に仕事を手伝ってもらっているんだ。だから平気だぞ♥」
『前に廃部にするって言ってたとこだよね。そんなに仲よかったっけ』
「わたしも最初は好きじゃなかったんだが……く、くうウゥッ♥　話してみたら意外とイイ奴ばかりで生徒会に協力してもらっているんだ♥　んっ♥　んん♥　そこはダメ……うきゅっ♥　ハ、はぁはぁ♥」

「俺もう我慢できねえよ」「い、いいよな会長」
「あひぃいいいん♥　ち、チン……いやなんでもないぞ♥　っ……くぅぅ」
尿道責めに犬めいて舌を伸ばす浮気乙女。さらに我慢できなくなった部員たちがペニスを出し、擦り付けてくる。
頬に、腋に、手に、お腹に生臭いペニスが押し付けられ、無遠慮にオナニーを開始した。
（チンポチンポチンポの匂い♥　熱くて臭い男のチンポ♥）
雄肉の匂いを嗅がされ脳天がクラクラしてしまう。ペニスの温もりにマゾ調教された肢体が発情してしまう。
電話中という状況も欲情を煽り、プラグでいたぶられる包茎チンポも悦んでしまっている。
『変な音がしているけど本当に何もないの？』
「あっ♥　んっ♥　じゅ、ジュースをこぼしてしまって、みんなが拭いてくれているんだ♥」
『流華の身体に？』
「ぁうっ♥　ああ♥　染みになるからってぇ……はぁああんっ♥　もうっ、触り過ぎだ♥」

『本当に平気なの？　なにか嫌な予感が……』

「だ、だから平気だ♥　なんの問題も……ひぐぅっっ♥　おっ♥　おおっ♥　おぼっ♥　引っ張るなぁ♥　また擦れて……うひイィイイィイイン♥」

肉竿へ強い刺激を受け、白目を剥く装刃乙女。快美の業火で理性の糸が纏めて焼き尽くされる。

ハート型尿道プラグは今まさに引きずり出されようとしていた。一ミリ、また一ミリと突起が尿道を通過していくたびに、思考が点滅する。

（あと少しで射精できる♥　ザーメンザーメンザーメン出せる♥　もう耐えなくていいんだ♥）

射精を禁止されて悶々と夜を過ごしたことが思い出される。度重なるアクメで教えられた肉竿の快楽は強烈だ。もはやオナニーなしで生きていられない。

「あと一分良平くんと話していてよ。そうしたらこのプラグを完全に抜いてあげるよお」

「わかった♥　んっ♥　んむぅ♥」

言われるがままに頷く。意識はすべてフタナリチンポに持っていかれ、バレてしまう恐怖などどうでもいい。重要なのは射精することだけだ。

情けなさと申し訳なさが黒髪乙女のエクスタシーを加速させ、マゾ肉体がさらなる快悦

を求めた。
「ジっ♥　うぅ♥　良平またデートしよう♥　二人でいっぱい遊ぼう♥」
『うん。でも急にどうしたの？』
「ぁっ♥　ばあっ♥　ぁぁん♥　良平……ぅっ♥　チンポ……おチンポが♥　んひゃあああああん♥」
『流華どうしたの!?』
「で、電波の調子が悪いみたいだ♥　すまないがあとでかけ直す♥　んんっ♥　イク♥　イクイク♥　イグうぅうう♥」
『りゅ――』
流華は電話を切った。
股間のハート尿道プラグが半分以上抜け、フタナリペニスがもう射精寸前で限界ギリギリである。
「あっ♥　はあっ♥　イク♥　もうムリだ♥　チンポが耐えられない♥」
ハートニップレスの貼られたスイカ豊乳が、ブルンと上下し、乳頭がペニスと同じく勃起する。
周囲では部員たちが一心不乱にペニスを擦り付け、雄の精臭を充満させる。

その匂いに酔いしれながら、肌に感じるペニスの温もりに陶酔しながら、己の快美を上昇させていく。

「抜ける♥　プラグ抜ける♥　イグイグ♥　もうイグ♥　ザーメン昇ってきてる♥」

「ご苦労様。思う存分イッていいよ」

「はぅ♥　ぅぅ♥　くる♥　ズリズリって抜けるぅ♥　あ、あああああ♥」

自分の肉体で雄が興奮しているという事実。子宮が下りて身体中に電気が走る。雌としての悦びを感じながら、射精を求める二律背反。

「も、もうダメ♥　イキ狂いたい♥　ザーメンザーメンザーメンすぐそこまできてるぅぅぅ♥」

黒髪ヒロインの嬌声に合わせ、半分まで抜け出ていた尿道プラグが一気に引き抜かれる。二週間溜めに溜めた絶頂が流華を迎え、糊のように濃いザーメンが噴き出した。

ドビュ♥　ブビュ♥　ドッビュルルウウウウウ♥　ビュクビュクビュクウゥウウゥウウゥ♥

「お、おっほぉおおぉおぉあお♥　でりゅ♥　でりゅぅうぅうぅっ♥　二週間溜めた超濃厚種付け汁ぶちまける♥　チンポ♥　チンポ♥　イキチンポぉ♥　パンパン勃起マラからフン詰まったドロドロザーメン射精すりゅ♥　んんっ♥　あぅっ♥　はしたないザー

メンで申し訳ない♥　ろくに洗ってない不潔包茎でアクメして申し訳ない♥　ほっほおおおおおぉお♥」

床にザーメン水溜まりをつくりながらアヘ顔晒してイキ狂う黒髪生徒会長。艶やかな黒髪も、可愛らしい頬も唇も、Gカップ巨乳も、張りのあるお尻も自分の白濁液で染め上げられた。

「いっぱい射精したねえ建宮会長。精子で床がドロドロだよ」

「ご……ごめんなひゃい♥　ふぁぁ♥　まだ止まらないぃ♥」

ザーメンを恍惚の表情で吐き出しながら淫美に沈む。すでに良平と話した内容など覚えてはいない。二週間の射精我慢から解放された事実だけが彼女の心を満たしていた。

「あーあ、部室汚しちゃった」「ゲーム機にもかかってるじゃん。弁償しろよ」

「え。いや、あの……」

射精中の流華に冷たい言葉が言い放たれる。まだ絶頂していない彼らの不満は大きくなるばかりだ。

「お詫びとしてお掃除フェラしろよ」「会長もまだ出したりないんだろ？」

「む、無理だそんなの……まだイッてるのに♥　ひぅ♥　くうぅう♥」

「うるさいなあ。早くしろよお！」

「やっ、やめろ……っく、ひゃあああ!?」
再び尿道プラグが差し込まれ、射精を封じられてしまう。歓喜をせき止められたフタナリ肉竿が悲しげに蠢く。
「なんで……イッてるところだったのに！」
「ちゃんとイカせられたらもう一度抜いてやるよお。ほらっ、咥えろよお！」
「むぐっ、ぐうぅうううっ！」
嫌がる流華の口に蒸れた肉棒がねじ込まれる。洗っていないのが丸わかりで、強烈な臭気に目が痛くなりそうだ。
「んぐっ、ぐうぅうう♥　はぶ、むうぅ、く、苦しひぃぐ、離せ……！」
「ザーメン垂れ流してから言っても怖くないんだよ！　しっかりしゃぶれえ！」
「むぐうう!?　ふぐ♥　ぶうぅう♥　ら、乱暴に……むっくうぅうう♥」
頭を掴まれイラマチオを強要される。思いやりの欠片もない自慰行為に利用されてしまう。
「ぅヴ♥　ばううぅうううん♥　ごぶっ、グプン♥　ンうう……♥」
「いいよお会長の喉マンコ。たくさん精液をごちそうしてあげるからねえ」
「ぐ、臭いぃ♥　ひゃめろぉ……♥　ほぐ♥　おぐうぅうう♥」

「おい、手がお留守だぞ。俺たちもご主人さまだろ！」
「んむうぅぅう!?　ご、ごひゅじん……さま♥　でもそれはぁ……っあぁ♥　はあぁああ♥」
腋や黒髪でオナニーしていた部員たちもペースを上げる。手にもペニスを握らされ、全方位から雄の欲望をぶつけられる。
（まだ出しきっていないのに……チンポがムズムズしてぇ……このままじゃまた狂ってしまう！）
一時射精の解放を味わった理性は脆かった。再び白濁液を吐き出すために、また言いなりになってしまう。
「掃除なんだから奥まで頼むよお。皮の中までしっかりとねえ」
「ちゅぶ♥　はむ♥　わ、わかっひゃからプラグを抜いてぇ♥　チンポチンポチンポまだイキたりないいぃい♥」
「会長がチンカスまで綺麗に舐め取ってくれるならねえ」
「ひ、ひんカスなめりゅ♥　ペロペロすりゅから♥　じゅぶ♥　ずりゅ♥　んぐうぅう～♥」
包皮の裏側まで舌を差し入れ、溜まった恥垢をお掃除する。スペルマの生臭さと小便の

苦みも、射精衝動に狂う流華には心地よい。

「ひんカス♥　ひんカス♥　ご主人ひゃまのおチンポをきれいきれひ♥　ちゅっ、ちゅっ、ううぅうん♥　臭いのしゅきだ♥」

「こっちもサボるなよ。手を動かせ！」

「ひゃいい♥　手コキもがんばりゅ♥　シ～コシコ♥　シ～コシコ♥　みんなもわらひの身体でひンポ磨いてぇ♥　建宮ひンポ専用洗浄機をご利用頼む♥」

必死に肉竿を舐めしゃぶり、ご主人さまに奉仕する。残ったザーメンを排泄するためだけに、雄汁を求める。

「はぁ。そろそろイキそうだよ会長」

「俺ももう……でる！」「僕も限界だよ」「俺も俺も」

「うぐうぅ♥　だひてぇ♥　ザー汁♥　チンポ汁♥　くっさい精液ぶっかけへくれ♥　わたしの身体にかけへぇ♥」

何本もの肉竿が震え精液が噴出する。同時に尿道プラグが引き抜かれ、流華のザーメンも解放された。二週間溜め込んだ白濁の残り汁が、今度こそ一滴も残さず撃ち放たれる。

ブブ♥　ビュブブ♥　ゴッブビュルルウウウウ♥　ブビ♥　ビュブ♥　ドブブブウウゥウ♥

「いいいい、イッグウゥゥウウ♥　イグ♥　イッてりゅううぅう♥　チンポ手コキしながらザー出し♥　チンポフェラしながらザー抜き♥　チンポに囲まれてマジイキザーメンひり出すううぅう♥　ご主人さまの素敵ザーメンシャワー浴びながらマラ汁残らず吐き出す♥　ニップレス、玉ブラの変態ドスケベ衣装でチンポ便器になるうぅうぅう♥　おホオォオ～ン♥」

全身にザーメンシャワーを浴び、自らも大量射精する生徒会長。意識は快美に犯される。

「はぁ♥　ふぁぁ♥　イッたぁ……♥」

絶頂の余韻に浸りながら瞳を蕩かせる。二週間分の我慢から解き放たれ、天上の淫悦に虚脱する。

「さて。次は何しようかあ」「ＡＶに出演させるとかどうでしょう」「いいねそれ。俺たちのために稼いでもらいますか」

「ま、待ってくれ。なんの話だ？」

オタク部員たちの言葉に困惑する黒髪乙女。あれだけ奉仕したのにまだ満足していないのかと、背筋が寒くなる。

「何って変態会長の使い道を決めてやっているんだけどお？」「動画もバッチリ残っているしな。彼氏にバラされたくなけりゃわかってるよな？」

「ふざけるな！　今のことは罰ゲームで仕方なくやっただけだ！　わたしは貴様たちの奴隷じゃない！」
「今更遅いよお。会長はもう僕たちの物なんだから」
「そうだ。変態女のクセに逆らうんじゃねえよ」
「そんな……」
流華の細面から血の気が引いていく。
（これでは鬼蛙を倒すことができても意味がないじゃないか。わたしは一生男に嬲られる運命なのか……良平……）
海溝のごとく深い絶望が装刃美少女を襲う。この先ずっと慰み者にされるなんて耐えられない。
だがその時、流華の影に蠢くものがあった。
「へっ⁉」「ぎゃっ⁉」「うわあああ⁉」
汚い声を漏らして部員たちが床に倒れる。ムチのようにベロを振るうソレは、人外の怪物だ。
「罰ゲームご苦労様。動画は消しておくから心配しないで」
「鬼蛙どうしてここに⁉　その……動画のことはありがたいが……」

「キミはボクの雌奴隷だからね。自分の玩具を管理するのは当然でしょ？」

「き、貴様の物になった覚えはない！」

流華は真っ赤になってそっぽを向く。なぜか犯されている時よりも心臓の鼓動が速くなった。

第五回　恥辱に喘ぐお嬢さま

転校生が来る。退屈な日常に飽きたクラスメイトたちは色めき立ち、教室は朝からその話題で持ち切りだ。

流華と良平もご多分に漏れず、おしゃべりの真っ最中である。

「どんな人だろうね。海外からの留学生って噂だけど」

「特に興味はないが来るなら男の方が好ましい」

「どうして？」

「腕試しができるだろう？　一度異国の猛者と手合わせしてみたいと思っていたところだ！」

男らしくガッツポーズをする流華に良平は呆れる。

「もー、流華はすぐ戦いたがるんだから。そりゃぼくだって剣道部に入ってくれる人がいいけどさ。最近、蛙坂くんも顔を見せないし」

「……あいつはどうせ仮病だろう」

「前から思っていたけど流華と蛙坂くんって仲悪いよね。何かあったの？」

「別に何もない！　あいつの顔が気にくわないだけだ！　……もう席に戻れ。すぐに先生が来るぞ」

良平は戸惑った様子で席に戻る。つい感情的になってしまったことを黒髪乙女は反省した。

（良平……ごめん）

自分が蛙坂の雌奴隷なんて絶対に知られるわけにはいかない。電話の件はどうにか誤魔化すことができたが、そう何度も同じ手は使えないだろう。

フタナリのうえに乱交好きの変態だと知られたらお終いだ。

しばらくすると担任が現れ、生徒たちに着席を促す。蛙坂は病欠すると連絡を入れたようで、まだ姿を見せていない。

（あいつがいないと心がざわめく……いや、ただの気のせいに決まっている！）

少しずつ鬼蛙に惹かれている自分が怖い。ゲーム研究部で人間の醜悪さを見せつけられ、戦う理由がぼやけていく。良平や人々を守らなければいけないのに。

と、迷う黒髪乙女を他所に、転校生が姿を見せた。

「おお、すげえ！」「やった、マジかよ！　ラッキー！」「チョー美人じゃん！」

男子生徒たちから喜びの声が上がる。転校生は女子生徒で、今花開いた薔薇のごとく、

美人だったからだ。

「おはよう。皆さん」

ブロンドヘアーを白いカチューシャで纏め、胸の高さに揃えた毛先をロールさせている。瞳は蒼く上等なアンティークドールのようだ。

スタイルも抜群で、豊かに実った双丘がブレザーの上からでもわかるほど自己主張し、男子生徒の視線を釘付けにしていた。

ウエストはキュッと引き締まり、ヒップは大きくふくよかで、意図せずとも雄の欲情を煽ってしまうボディラインだ。

転校生はチョークを手に華麗な手さばきで名前を書くと、自信満々に言い放った。

「はじめまして庶民の皆さん。クリスティーナ・エイミスですわ。わざわざクソ田舎に転校してあげたことを感謝なさい」

流暢（りゅうちょう）だが品のない日本語で、いきなりのお嬢さま宣言。勝気で高慢な性格がありありと伝わってくる。クラス全員があっけに取られ、男子生徒一同の甘い妄想は一瞬にして打ち砕かれた。

（なぜあいつがここに!?　あとで詳しく事情を聞かないと）

ただ一人、流華だけは困惑の色が違った。珍しく自分と同種の生き物を見つけたように。

授業は問題なく進み、休み時間。案の定だれも転校生のそばに近寄ろうとはしない。
（好都合だ。今のうちに話を――）
しかし、遠巻きに見つめるクラスメイトの輪から離れ、一人で空白地帯に近寄る男子生徒がいた。お人よしの少年が。
「はじめまして三城良平です。エイミスさん校舎の案内はまだだよね？」
「けっこう。わたくしに声をかけるなんて変わり者ですわね」
「余計なお世話だったかな？」
「ええ、まったく。でもまあ……無駄に時間を取られるのは利口ではありませんわね」
ブロンドヘアーをかき上げると、悪戯っぽく微笑む。
「いいでしょう。特別にわたくしのそばで案内することを許しますわ。ついてらっしゃい」
「わっ、エイミスさん!?」
「クリスでいいですわよ良平」
良平の手を引くと、一切の躊躇（ちゅうちょ）なくドアへ向かって歩いていく。
「まてまてまてっ、勝手に話を進めるな！　校舎の案内ならわたしがする！」
流華は慌てて呼び止めた。聞きたいことは山ほどある。それに恋人が振り回されているのを黙って見過ごすわけにはいかない。

「あら、お久しぶりですわね流華さん。もしかして良平くんのお友達？」
「彼女だ！　最初から気づいていただろう。まったくしらじらしい」
「りゅ、流華声が大きいよ」
小柄な少年は顔を赤くする。付き合っているのは周知の事実だが、改めて大きな声で宣言されるとやはり恥ずかしい。
立ち話をしていた学園生たちは「へえ、面白そうだな」「なんだ修羅場か？」と興味津々だ。
一方、クリスは外野のことなどお構いなしといった様子で、
「それは失礼。ですが案内はこのまま良平くんにお願いしますわ。あなたの聞きたいことはまたあとで」
「っ……だ、だったらわたしも同行する！　いいな二人とも！」
「ぼくはいいけど」
「お好きにどうぞ」
そうして案内は三人で行くこととなった。途中流華とクリスが口論になり、結局昼休みを含む休み時間のすべてを費やしてしまった。
最後に体育館を案内して教室に帰るところで、クリスが流華に向かって話しかけた。ト

ーンを落とし今日初めて表情が真剣になる。
瞳が氷のような冷たさを帯びた。
「あなたの疑問にお答えしますわ。放課後屋上に来てもらえないかしら？」
「わかった。生徒会の仕事が終わってからでもいいか？」
「問題ないですわ。紅茶でも飲んで待っています」
丁寧にロールされた毛先を弄びながら、クリスは頷いた。
放課後。校舎屋上。
青黒くなった空の下で、流華とクリスは対峙する。二人以外の人影はなく、夕暮れの生ぬるい風が頬を撫でる。
「単刀直入に聞く。なぜ日本にいるんだ？」
「まったく、随分な言いぐさですわね。欧州悪魔殲滅戦（デモンせんめつ）で散々わたくしの力を借りておいて」
「わたしが力を貸してやったの間違いだろう。フッ、昔と変わらずプライドの高いお嬢さまだ」
「そちらこそ相も変わらずクソ真面目ですわね。彼氏さんの苦労が偲（しの）ばれますわ」
流華とクリス、二人は装刃戦姫として、共に人類を守ってきた。出会った当初はぶつか

ることも多かったが、数々の戦いをくぐり抜け、今では親友と呼べる仲だ。
「話を戻しますわね。日本に来た理由、それは『八大鬼、鬼狐』を追ってきたからですわ。わたくしの国で大分好き勝手しやがりましたから」
「学園に来たのもそれが理由か？」
「いいえ、そちらは別件ですわ。日本の対魔協会から連絡がありましたの。ここ数週間、あなたの様子がおかしいと。はっきり言うと監視ですわね」
「そ、それは……」
雌奴隷にされたことを知られる恐怖。情けなくて恥ずかしくて、とても口には出せない。
「別に何でも、ない。協会の思い違いだろう」
「嘘が下手なのも変わりませんわね。どうやら訳ありのようですし。ま、いいですわ。代わりにこちらの方たちからお聞きしますから！」
クリスは胸元からダーツを取り出すと、貯水タンクの上方に投擲した。
直後、虚空が歪み無色透明な空間からオニグミが姿を現す。土でできた巨体を操る土愚鬼と、スーツ姿で糸目の霧幻鬼だ。彼らも流華の動向を監視するために、屋上で見張っていたのだ。
二体の鬼は互いに顔を見合わせる。

「他に装刃戦姫がいるなんて聞いてねえぞ。兄貴に報告した方がいいんじゃねえか？」
「同意見です。面倒なことは勘弁ですね」
鬼蛙への報告を優先し、この場から離脱しようと跳躍を試みる。だが、タンクを踏みしめたところで動きが止まった。
屋上全体が紅く染まり、封鎖結界が展開したのだ。結界を生み出した張本人は、蒼く輝く神器結晶を胸元から取り出し、不敵に微笑む。
「むざむざ獲物を逃がすと思っていまして？　わたくしの目に留まった時点で、あなたたちの死は確定していますのよ！　神器……転身！」
クリスの言葉に応えてサファイアブルーの光が放たれる。
制服が分解されるとピッチリとしたスーツに再構築。光がスラリとしたボディラインをなぞるように裸体を包む。
その上から羽毛のように軽量で装飾を施された、銀のアーマープレートが装着され、霊力を増幅し身体機能を高める。ブルーのミニスカートが風にひらめき、隙間から見える太腿が悪鬼をも魅了する。
最後に豪奢なレイピア『エスペラーダ』を掴むと、切っ先を煌めかせ名乗りを上げた。
「人に仇なす悪魔（デモン）たち！　その魂を煉獄で清めなさい！　わたくしの剣は魔を討ち刻む

光！　装刃戦姫コーデリア、ここに見参ですわ！」

　土愚鬼、霧幻鬼は転身した姿を見て、警戒レベルをさらに引き上げた。コーデリアから発せられる霊力が全快のサクラヒメと同等か、それ以上であると確信したからだ。

「クソッ、やっぱり装刃戦姫かよ」

「想定外の事態ですね」

「流華さんに何をしましたの？　三秒以内に答えなさい」

「ハァッ!?　兄貴の命令で彼氏を人質にしてるだけだっつーの。出世のチャンスを邪魔するんじゃねえ！」

「こっ、このバカ！」

　いきなり目的を明かしてしまい、霧幻鬼は頭を抱える。

「なるほど人質ですか。品性下劣なクズ虫らしいやり口ですわね。でもそのカードを使ってこないということは、『兄貴』以外が良平くんに害を及ぼすことはできないようですわね」

「それがどうした！　やるならやってやるぜ！」

「まったく……戦うしかなさそうですね」

「話が早くて助かります。バラバラにして差し上げますわ」

　三者の視線が交差し一秒後、コーデリアはしなやかに跳躍し、土愚鬼の元へ跳んだ。

「ハァッ！」
「おらあああぁっ！」
土愚鬼は大きく拳を振りかぶり、コーデリアを狙う。直撃すればコンクリートも粉々に粉砕する一撃だ。しかし――
「遅い。遅過ぎますわ。そんな速度でわたくしと戦うつもりですの？」
「エッ……エ……ヘェッ!?」
土でできた巨体が一呼吸のうちに切り刻まれ、サイコロステーキのような細切れで崩れ落ちる。エスペラーダを用いた、目にも留まらぬ早業だ。
土愚鬼の肉体が茶褐色の体液をまき散らしこの世から消滅する。
「……速さが自慢ですか」
まったく知覚できない動きを見て、霧幻鬼は全包囲に呪力の霧を展開した。触れれば骨まで溶ける魔の霧だ。
慎重な霧幻鬼らしい判断だが、コーデリアはその作戦を一蹴した。
「あなたアタマが悪いですわね。見えている地雷に近づく敵がいると思いますの？」
「何っ!?」
「フィニッシュムーブ！　クイーンアンスラッシュッ！」

コーデリアが叫ぶとエスペラーダの鍔（つば）が薔薇のごとく開き、切っ先から霊力を束ねて撃ち出した。金色（こんじき）の光線が凄まじい速度で迫る。

「――――――ッ!!」

大気が震え、霧幻鬼を消し炭に変換する。魂が消滅し断末魔の叫びすら残さず討滅された。

コーデリアは軽く身だしなみを整えると、流華に向き直る。

「これで二体撃破ですわね。良平くんのためなのでしょうけど、装刃戦姫としての自覚が足りないのではなくて？」

「うっ、……すまない」

「まったくですわ。コレを外すのも楽ではないのでしてよ」

そう言ってコーデリアは、サッカーボールサイズの塊、爆震蟲を床に転がした。

校舎を見回っていた時点で、すでに外していたのである。起爆よりも速く解除できるコーデリアにしかできない神技だ。

「コーデリア、本当に……本当にありがとう。わたしは何もできなかった。良平を見捨てるなんてできなかったんだ……」

「オニグミに従っていたことは不問にして差し上げますわ。あなたの泣き顔なんて滅多に

見られるものではありませんから」

顔をくしゃくしゃにして涙を流す流華を、コーデリアはそっと抱きしめた。境内の戦いから初めて流す安堵の涙だ。

「ところで『兄貴』と呼ばれているオニグミを呼び出すことはできますの？　そいつがあなたを苦しめていた張本人なのでしょう？」

「可能だとは思うが奴は八大鬼の一体、鬼蛙だぞ。一筋縄ではいかん」

「むしろ好都合ですわ。妖月の前に八大鬼と戦っておきたかったですから。わたくしが鬼蛙を倒せば全部問題が片付きますわね」

「ああ、もちろんわたしも協力する」

流華が胸元から神器結晶を取り出した瞬間、封鎖結界の一部がスッポリと切り取られた。外からの闖入者（ちんにゅうしゃ）、それは今まさに話していた鬼蛙だ。

巨大な蛙の姿で、手には鎖鎌をたずさえている。仲間の死を知ったのか、目には静かな怒りが浮かんでいた。

「鬼蛙！　貴様……っ！」

「やあ流華、それと異国の装刃戦姫コーデリア……鬼狐に処理してもらいたかったけど、そうもいかなそうだね」

「あら、早いお着きですこと。あの二体と同じく討滅されたいようですわね。神様に祈るなら今のうちでしてよ？」

「ボクに祈る神はいないけど、土愚鬼と霧幻鬼の仇は取らせてもらうよ」

「やってみなさいっ！」

コーデリアの言葉を合図に、両者は風のごとく駆ける。残像が残るほどの速さで、エスペラーダと鎖鎌が打ち合わされた。

人間の目には虚空で火花が散っているようにしか見えないが、命を懸けた戦いは進んでいく。

「くっ……さすがにやりますわね」

「いい剣さばきだけど一撃一撃が軽いね。それじゃボクは倒せない」

スピードではコーデリアが勝っているが、鬼蛙は長年の技巧でスペックの差を埋めていく。決め手を欠くコーデリアは、じわじわと追い詰められていく。

「ぐぅっ、あああああああっ！」

「その首、落とさせてもらうよ」

フェンスにぶつかり、苦悶の声を上げるお嬢さま戦姫。鋭利な刃が喉笛に迫る。

「そこまでだ鬼蛙！　ハアアァァッ！」

「サクラヒメ……ごっ、ゲホッ！」

風明刃を中段に構え、サクラヒメが横合いから切り込む。不意を突かれた鬼蛙のわき腹から濁った血が飛び散った。

「助かりましたわ。腕は鈍っていないようですわね」

「一気に決めるぞコーデリア。悪鬼め塵芥に還るがいい！」

形勢は逆転し、サクラヒメとコーデリアの剣閃が鬼蛙を追い詰める。醜い皮膚に幾筋もの刃が奔り、噴水のように体液が噴き出した。

「がっ、ぐうぅ……ゴホッ！　やるねキミたち……二対一はキツいかな」

「まさか卑怯なんて言わないですわよね？」

「トドメだ鬼蛙ッ！」

二人の装刃戦姫は霊力を解き放つ。凄まじいまでの斬撃が悪鬼に直撃する。

「討滅奥義！　花鳥風月・百八式!!」

「フィニッシュムーブ！　クイーンアンスラッシュッ！」

「グアアアアアアアアアッ!!」

全身を切り裂かれ倒れ伏す鬼蛙。もはや妖魔の姿を保つこともできず、蛙坂の身体で血反吐を吐く。

「父さまと母さまの仇、討たせてもらうぞ」
「……サクラヒメ」
夕陽に照らされ紅く煌めく刃が、鬼蛙の首筋に触れる。積年の怨みを込め、柄を握る手に力がこもる。
「キミに殺されるなら本望さ。好きにやりなよ」
死を覚悟したのか鬼蛙はいつもと同じ、根暗な笑みを浮かべる。だが、そこから風明刃が動くことはなかった。
「何をしていますの!?　早くトドメを刺しなさい！」
「わ、わかっている！　わかっているんだ！」
コーデリアの声は聞こえている。それでも、大太刀は動かない。
（一体どうしたんだわたしは!?　まさかこんな奴に絆（ほだ）されるわけが……）
自分でも理解できない感情にサクラヒメは戸惑う。あれだけの辱めを受けた相手に同情する理由はないはずだ。
「装刃戦姫の使命を忘れましたの？　あなたがやらないのなら、わたくしが討滅しますわ」
「ああ……その通りだ。鬼蛙……これで終わりだ！」
迷いを振り払い風明刃を握り直す。白刃が首の肉に食い込み――

「そこまでにしな。この坊やがどうなってもいいのかい？」
切断することはなかった。
音もなく気配もなく『八大鬼、鬼狐』妖月が現れたからだ。四尾の狐の姿で、その指は三城良平の首にかかっている。
「良平！　貴様……その手を離せ！」
「妖月！」
「まさか卑怯とは言わないだろうねぇ。坊やを助けたいなら武器を捨てな」
思わぬ敵の襲来に二人の装刃戦姫は唇を噛む。
また人質を取られては手が出せない。
「流華……クリスさん……」
「わかった武器は捨てる。だから良平を傷つけないでくれ」
「……仕方ありませんわね」
風明刃とエスペラーダが手の平から滑り落ち、虚ろな音色を響かせた。
「わかればいいのさ。わかればねぇ。ふふ、ゆっくりと眠りな」
「うぐっ、くうぅ……貴様……」
「あとで覚えておきなさい……」

尻尾から噴き出る毒の霧でサクラヒメとコーデリアの意識は闇に沈んでいく。無力化できたことを確かめると妖月は鬼蛙に向かって、

「いい様だねぇ鬼蛙。ほぉら、忠告はちゃんと聞いておくものだろう？」

「鬼狐、悔しいですが助かりましたよ」

「妖月と呼びな。それで、あんたの計画を聞かせてもらえるかい？　お仲間が二人もいなくなっちまってさびしいだろう？」

「まったくずる賢いですね。さすが女狐」

「当然さ。あたしが八大鬼になったのは面白い見世物を見物するためだからねぇ。あんたの野望に一口乗らせてもらうよ」

口角を三日月のように歪ませると、二体のオニグミ幹部は夕闇に嗤う。今度こそ装刃戦姫を屈服させオニグミの悲願を叶えるために。

◆◆◆◆

天井から落ちた水滴が頬に当たり覚醒を促す。装刃戦姫コーデリアは薄暗い部屋の中で目を覚ました。

目立った外傷はないが、思考がぼやけ考えがまとまらない。薄く開いた瞳で辺りを見回す。

「ここは……」

目に映ったのは自分を取り囲む石壁と石畳。さながら中世の牢獄めいた時代錯誤な空間だ。

身体を動かそうとするが上手くできない。何かで拘束されているようである。

ややあって天井と石畳から伸びる鎖で、両手足が拘束されていることがわかった。鎖には呪力が込めてあるのか、転身状態でも引きちぎれそうにない。ガチャガチャと耳障りな金属音がするだけだ。

コーデリアは一つずつ状況を整理していく。

「わたくしは流華さんと一緒に戦っていて……鬼蛙を追い詰めたのに妖月の毒霧で気を失って……」

「よく覚えているじゃないか。お目覚めの気分はどうだい？　装刃戦姫サマ」

返事をしたのはこの状況をつくった張本人、妖月だ。狐ではなく人の姿に化けており、ウェーブのかかった黒髪で片目を隠して、古めかしい着物を着ている。

バストやヒップは布地の上からでもわかるほどに大きく、男の視線を虜にする。この色香で破滅させてきた人間の数は四桁ではきかない。

「ここはどこですの!?　流華さんや良平くんは無事ですの!?」

「この姿で会うのは二度目だねぇコーデリア。自分のことよりお友達の心配とは甘い限りさ」

「ふざけないで！　答えないとブチ殺しますわよ！」

「やれやれ、ここは奴隷部屋さ。裏社会のお偉いさまに提供する雌奴隷を調教するためのね。オニグミも長い間生きているとね、人としての立場ができるのさ」

真っ赤なルージュの塗られた唇を一舐めする。瞳の奥では禍々しい呪力と怨嗟（えんさ）が渦を巻く。

「あたしはここの経営者兼調教師ってわけ。ああ、それと二人は無事だよ。大切なお客さまだ、丁重にもてなすさ。それよりあたしの尻尾を九本から四本にしてくれた怨み、あの痛み……一日も忘れた時はなかったねぇ」

「目的はわたくしへの復讐ですのね。逆恨みも甚（はなは）だしいですわ」

「ふん、お嬢さまはよほど調教がお好きのようだね。どうせオニグミに従う気はないんだろう？」

「当然ですわこのクソ狐！　あなたたちの仲間になるくらいなら死んだ方がマシですわ！」

蒼い瞳に怒りを滾らせ、コーデリアは声を張り上げる。コーデリアの家は代々装刃戦姫

として異形と戦ってきた名家だ。
血反吐を吐くような訓練を続け、拷問に耐性もある。どれだけ不利な状況でも敵に許しは請わない。
「そう言うと思ったよ。だが、これでも強気を保っていられるかい？」
「なっ、何をしますの!?」
妖月の指先が触れると鎧の胸プレート、その下のピッチリとしたスーツが溶けて、形のよい乳房があらわになる。
さらに股下に触れると恥丘が露出し、金色の薄い陰毛が顔を覗かせた。
「やめなさい！　汚らわしい手で触るんじゃありませんわこの変態！」
「ガタガタとうるさいねぇ。騒ぐんじゃないよ」
敵に素肌を見られる屈辱。異国の装刃戦姫は羞恥に身をよじる。緊張による汗でうなじや太腿は濡れ、甘酸っぱい匂いが香る。
「くんくんっ、鼻につく匂いだねぇ。淫乱な雌の匂いさ」
「面白くない冗談ですわね」
妖月は獲物の柔肌に舌なめずりをすると、背後から腕をまわし、双乳を揉みしだいた。
乳房が指の形に歪み乙女の身体にくすぐったく、もどかしい感覚を伝える。

ふにっ♥　ふにっ♥　ふにゅんっ♥　ふにふにっ♥　ふにっ♥　もにゅもにゅんっ♥

「あっ、やっ、やめなさい！　どこを触っていますの！」

「どこってオッパイに決まっているだろう。精神力を消耗すれば転身を保っていられないんだろう？　小娘に戻ったあとでじっくりと調教してやるさ。むしろ気持ちよくしてやっているんだから感謝して欲しいくらいだよ」

「ふざけた真似を……すぐにその手を離しなさい！　今ならまだ八つ裂きで許してあげますわ！」

「まだ自分の立場がわかっていないのかい。この鎖がある限りあんたは常人並みの力しか発揮できない。あたしのお人形ってことさ」

「あっ、ひ……ひゃあん！」

妖月はコーデリアの乳首をつまみ引っ張ると、指先でコリコリと刺激する。野イチゴのような突起が快美に戦慄く。

白い肉毬が紡錘形に伸ばされ、プルプルと弾む。瑞々しい唇から切なげな吐息がこぼれた。

「ひぅ、くぅぅ……はあぁうぅぅん！」

「可愛らしい反応をしてくれるじゃないか。気持ちいいかい？」

「いいわけありませんわ！　こんなの気持ち悪いだけです！」
「ふぅん、そうは見えないけどねぇ。ふふ、この大きさだとEカップかい？　小娘のくせに贅沢なモノをぶら下げているじゃないか」
「その口を閉じなさい！　さ、サイズなんてあなたに関係ないでしょう！」
「なんだ図星かい。まったく腹が立つったらありゃしない」
「あひっ!?　そこ……、あっ、ひぅぅうぅぅ！　くぅ、んっ、んんんっ、ううぅうぅぅ！」
乳頭をつままれ、ねじられる痛み。コーデリアは必死で悲鳴を噛み殺す。
妖月はニタリと口元を歪めると、装刃ヒロインの心を揺さぶりにかかる。ただ痛めつけるだけで怨みは晴れない。
「そうだ。面白いことを教えてあげようか」
「んう、ううう……興味ありませんわ。ああう、んくうぅうう……」
「人質にした眼鏡の坊や。あんたあいつのことが好きなんだろう？」
「なっ!?　なななな、何を言っていますの!?」
コーデリアの頬がカッと赤くなる。首筋に冷たい汗が流れ、心臓が早鐘を打つ。
「予想通りの反応だねぇ。そんなことだと思っていたけどさ」
「てっ、適当言うんじゃありませんわ！　あなたに何がわかりますの！」

「隠しても無駄さ。お友達の彼氏を気にするあんたじゃないだろう？　普段なら人質に構わず殺しにきただろうからねぇ」

「良平くんとは今日会ったばかりですのよ！　それに流華さんの恋人を好きになんて……デタラメにもほどがありますわ！」

顔どころか全身真っ赤になりながら否定する金髪乙女。だが、妖月の言葉はすべて事実だ。

初めて声をかけてもらった瞬間から、良平に心惹かれていた。でなければ校舎の案内など頼まない。身体に雷が落ちたような衝撃は、戦いに命を捧げたはずの彼女にとって初めての体験だ。

（違いますわ。そんなはずありませんわ。良平くんのことが好きだなんて……）

どれだけ否定しても本当の想いは止められない。隠してきた気持ちを見抜かれ唇を噛む。

「違うと言うならそれでもいいさ。精々坊やに会えるよう耐えてみるんだね」

「ふあぁぁあ！　あああ、はあぁぁあああん！」

妖月は再びEカップ美乳を揉みしだく。手慣れた様子でたわわな実りを掴み、ゆっくりと大きく愛撫していく。

ふにっ♥　ふにゅん♥　ふにゅふに♥　ふに♥

「むうぅ……うく、あああ、この変態……はぅっ、くうううぅううん！」
「いいオッパイだねぇ。どうだい？　感じるだろう？」
「感じるわけないですわ！　はうぅ、くひぃんっ！　こんなの……不快なだけです！　はうくうぅうぅううん！」
「へぇ、ならコイツは？」
鋭い爪で刺すように乳頭へ刺激を与える。チクリとした痛みが神経を弄び、乙女の感覚を鋭敏にする。
「ヒグウゥウゥウゥウ!?　あひ、ひううう、ひゃうううぅううううっ！」
「いい声を聞かせてくれるじゃないか」
「くウゥ、はあアァアアン！　っ……いうぅうぅうっ！」
どの戦闘でも受けたことのない痛み。股の奥から妖しい疼きがこみ上げてくる。
（なんですのこれ……痛いはずなのに身体が熱っぽくなってきて……）
美少女戦姫は未知の快悦に困惑する。
「あっ、はあああ、あひウゥウウウウん！　い、いい加減になさい……！　んむうぅう！」
「いい喘ぎっぷりじゃないか。そろそろオマンコも濡れてきたんじゃないのかい？」
「はうクゥウウウ！　ふざけたことを……そんなはずがありませんわ！」

口ではどれだけ否定しても、嗜虐の悦びに股間が濡れていく。弄ばれたEカップ美乳は形のよさはそのままに伸張し、乳頭はピンッと上を向いていた。

コーデリアの顔が朱に染まり、乙女のシンボルが小石めいて硬くなる。

「痛くて感じているのかい？　ふふ、こんなのがいいなんてとんだマゾだねぇ。お高くとまった装刃戦姫さまの正体が、まさか淫乱のドMだとは知らなかったよ」

「ちっ、違いますわ。ん……あっ、こんなの痛くて苦しいだけですわ。はぁあああ、ぐぅ……はひイイイィィン！」

「おや、こちらも準備万端じゃないか」

ブロンドの陰毛をかき分けクリトリスへ爪を伸ばす。包皮を剥くとピンク色の陰核が露出した。

「アヒぃん！　そこはダメ……ダメですわ！」

「可愛らしいクリトリスだねぇ。ろくに愛撫もしていないのに大層張り切っているようだけど」

「うっ、うるさいですわ！　ンくうぅうぅう……ジぐくうぅうううう～～っ！」

妖月は小ぶりな肉粒をつまむと、転がしながら愛撫する。一擦りごとに快楽電流が走り脳を焼く。オーガズムに達せないギリギリの快美が理性を蕩かしていく。

ちく♥　ちくり♥　ちく♥　くりくり♥

「アッ、あひぃいぃいっ！　そこダメえぇ……ダメですのぉおぉッ！　敏感だから……わたくしの大事なところなんですの……おっ、おお。ほおぉおあああああおぉッ！」

「い～い声で鳴くじゃないか。天国みたいな心地だろう？」

「やあぁぁあああ！　ダメッ！　いけませんのぉおおおおぉ！　くりくりしないでぇ！」

陰核を扱かれるたびに、はしたない嬌声が口から吐き出される。股座が熱を帯び、意識が飛翔してしまいそうだ。

「ひぅうぅうぅうう！　はうっ！　くひんっ！　はあぁあああぁあんっ！　やっ、やめなさいっ！　あふうぅうぅうぅう！　やめないと痛い目をみますわよ！」

「なんだ嫌なのかい？　しょうがないねぇ」

「ひうぅうぅうぅうぅう！　んっ、え……？」

妖月はクリトリスから指を離すと、甘露を舐めるように爪をしゃぶる。

唐突な解放にコーデリアは戸惑うばかりだ。

（はあっ、はぁはぁっ。助かりましたの？　危なく意識が飛ぶところでしたわ。じ……自慰をした時みたいに）

本番こそ知らないものの、自慰に関してはサクラヒメより経験豊富なお嬢さま。戦いのあとやどうしても身体が疼いて仕方がない時には、指で自らを慰めていた。

淫欲に溺れることは装刃戦姫としてよくないが、どうしてもやめられなかったのだ。

（やっぱり濡れていますわよね。くっ、こんな奴に感じさせられるなんて屈辱ですわ）

膣孔は湿り気を帯び、乙女の快楽を雄弁に語っていた。大陰唇が貝のようにヒクつき、肉棒の挿入をおねだりする。

ブロンドヘアーは乱れて、火照ったうなじからは一筋の汗が流れ落ちた。

（あの女がこれで満足するはずがありませんわね。一体何を企んでいますの？）

いぶかしげに妖月を見つめるコーデリア。その不安は的中する。

妖月は着物の胸元から注射器を取り出すと、鼻先でくるくるとまわした。口元には加虐の悦びで、隠しきれない笑みが広がっている。

「お次はコイツで遊ぼうと思ってねぇ。この液体がなんだかわかるかい？」

「ふんっ、大方あなたが使っている消臭剤でしょう？　さっきから獣臭さが鼻について仕方がありませんの」

「コイツは肉体を変質させる薬さ。サクラヒメが鬼蛙からどんな調教を受けたか、聞いているんだろう？」

「薬……？　鬼蛙は流華さんに何をしましたの!?」
「なんだ知らないのかい。あいつがやったのはフタナリ化。つまりおチンポを生やすってことさ」
「男の人のアレを生やすなんて……じょ、冗談ですわよね!?」
美少女戦姫の細面から血の気が引く。親友がそんな目に遭っているなんて想像もしていなかった。男性の性器を生やさせるなんておぞましい行為、正気の沙汰とは思えない。
「肉棒の快楽ってのは百戦錬磨の装刃戦姫でも音を上げるからねぇ。拷問の耐性はあっても射精に耐えたことはないだろう？」
「やめなさいっ！　それだけは絶対に許しませんわ！　あとで後悔することになっても知りませんわよ！」
「あたしの怨みに比べればこんなものどうってことはないさ。ねぇ？」
「いっ、いやぁあああああああああぁ!!」
絶叫が牢獄に響く。毛先がロールした金髪を振り乱し、どうにか抵抗しようとするが無駄な足掻きだ。身体に力が入らず。鎖をガチャつかせることしかできない。
妖月はまったく意に介さずに、注射器を恥丘に刺すと薬液を注入した。紫色の液体がジクジクと広がっていく。

「あっ、くあああっ！　熱いぃ……！」
「暴れるんじゃないよ。危ないだろう」
「ハァっ……はひイイイィイイッ！　か、身体がおかし……ングウウゥゥッ！」
火かき棒で内臓をかき回されるような灼熱。効果はすぐに現れ、クリトリスやその近くの陰唇も取り込み、肉棒と睾丸が生えてくる。
（夢ですわよね？　わたくしにこんなモノが生えるなんて……）
コーデリアのフタナリ肉竿は長さこそサクラヒメより短いが、金玉が成人男性の一回りも二回りも大きかった。
性豪の中年オヤジでもなかなか見ないでっぷりとした金玉が股間にぶら下がり、ブラブラ、ユラユラと揺れているのだ。
皺の隙間から濃厚なホルモン臭が香り、かなり下品である。
「うあぁ、ああぁ。こんなに汚いものがわたくしの股に……さ、最低ですわ！」
「ふふ、あはははは！　よく似合っているじゃないか！　あの坊やにも見せてやったらどうだい？　自分のイチモツよりデカいキンタマにたまげるだろうさ」
「良平くんの侮辱は許しませんわよっ！　卑劣な真似を！」
「それじゃあさっそく、射精体験といこうかねぇ。気持ちよ過ぎて狂わないように気をつ

けな」

「っ……大きなお世話ですわ！」

妖月のお尻から四本の尻尾が伸びると、そのうちの一本がコーデリアの肉竿に巻き付いた。なめらかな毛皮が表面を撫で上げる。

コシュ♥　コシュ♥　ゴシュッゴシュ♥

「ヒイィイイン！　あ、アレが大きく……はあぁぁあん！」

ヘビのようにくねり前後に擦ると、あっという間に陰茎を勃起させた。包皮が自然に剥け、ピンク色の亀頭が露出する。

残り三本は胸や尻を愛撫し、乙女の性感帯を刺激する。

「ひゃぁあああぁあぁああん！　なんですのこれ……あ、アレがジンジンしますわ！」

「男の快楽はすごいだろう？　ほらさっさと射精しちまいな」

「ふぅうぅうぅうぅうぅん！　あっ！　ああっ！　すりすりしないでぇ……おかしくなってしまいますわ！」

肉竿を擦られ悶絶するフタナリ戦姫。毛先が時に優しく時に激しくチクチクと愛撫し、人間では味わえない快悦を生み出すのだ。

普通の男性なら早々に射精してもおかしくないが、コーデリアは鍛えられた精神力で耐

える。

「はひイイィイん！　こ、こんなの大したことありませんわ……くうぅうううぅっ！」

「その割にはうるさい喘ぎ声だけどねぇ」

「ぐっ、はぐあぁぁあぁぁっ！　おっ、おっ、こんなのぉおおおお！」

一流の芸術品のような美貌が快楽に犯されていく。整った鼻梁（びりょう）もまつ毛の長い瞳も、可愛らしいお口も肉棒の悦楽に染まっていく。

（なんて快楽ですの……まるで背骨に直接電流を流し込まれているようですわ）

初めて味わう男の快美。意識のすべてがフタナリ肉竿に集約し、他の思考がぼやけていく。

（流華さんはこんな快楽を我慢していましたのね……なんて卑劣ですの！）

この状況でも一番に思い浮かぶのは、幾度も共に戦場を駆けた友のことだ。サクラヒメの優美にして苛烈な太刀筋を忘れたことはない。

それだけにフタナリ化などと下劣な調教を施されていたことが許せなかった。

「くぅ、くぅぅ、くひうぅうううぅっ！　妖月……許しませんわよ！」

「それはお互い様だねぇ。強がっている余裕はあるのかい？」

「あうっ、あああああ!?　む、胸が……それにおしりも……んぁ、はぁあああぁあああ！」

双乳やすべすべの腋、桃尻に巻き付いた尻尾が激しく動き、愛撫を開始する。人の手では不可能な感触が、理性をヤスリ掛けする。

「はひっ、はひゃっ、はひゃあぁ〜ん！　あははは！　く、くすぐったいぃいい！」

「笑いたいのか泣きたいのかよくわからない顔だねぇ。ほらほら、ここがいいのかい？」

「ひひっ、アッハハハハハ！　くぅ、ふふ……やめなさい！　ははぁあああん！」

ねこじゃらしで遊ばれているようなくすぐり愛撫。くすぐったさと肉快美が同時に襲来し、ブロンド戦姫を翻弄する。

「はひっ、あははは！　きゃはははは！　いい加減にしなさい……んひっ、ひはははは！」

「オッパイやチンポ擦られて笑っている女なんてあんたくらいだよ。みっともないったらありゃしない」

「きゃは、きゃはあぁあぁぁん！　だ、だれのせいだと……ほうぅぅうぅん！」

無理やり笑顔にさせられたうえに、ペニスを強制勃起させられる。屈辱で頭がどうにかなってしまいそうだ。

（ぐっ、うぅ……でもこれしきの責めでイッたりなんかしませんわ！　男のアレなんかで気持ちよくなってたまるもんですか！）

美麗な双眸をキュッとつむり、フタナリ快楽を拒絶する。肉悦に負けて転身を解除してしまえば、もう逆転のチャンスはない。

それに汚らわしい男性器でのアクメなんて絶対にごめんだ。

「まったく強情だねぇ。少し気合いを入れてやろうかい」

「はひ、あひひぃ、んはうぅぅ！　な、何をどうするつもりですの……？」

だが、そんな忍耐を嘲笑うかのように、妖月はすべての尻尾をフタナリ勃起に集めると、扱く動きを速めた。ロールペーパーのように毛皮が勃起マラを包み、激しく擦る。

我慢していたはずの射精衝動が一気に高まる。

コシュ♥　コシュ♥　コシュ♥　ゴシュッ♥

「はぐぅぅぅぅぅぅ！　はっ、あっ、あっ、速くしないでぇ……でるっ！　も、漏れ出てしまいますからぁあああああ！　んッ♥」

「当たり前だろう。出すために扱いているんだからさ。ほ～ら、おチンポごしごし～。ごしごし～。ふふふふ」

「ひうぅぅぅぅぅ！　ひゃうぅぅぅぅぅ！　ごしごしダメですわ！　先っぽがムズムズしてぇ……変な気分ですのぉ！　ひぐッ！　ウッ、ウウウウ、クゥゥッ♥」

肉竿がギンギンに勃起し先走り汁が垂れる。尻尾が亀頭を揉み解し、肉茎を撫で上げる。

頭の中で閃光がいくつも散った。
「だ、ダメッ♥　はうッ、くぅ……我慢できないっ♥　我慢できませんのぉおおお♥　で、でる♥　出してしまいますわァァアァァ♥」
「そうだよ。あんたはみっともなくザーメンを漏らすのさコーデリア！」
扱くペースがさらに速まり欲求が限界点を超える。尻尾の毛皮は金玉にも愛撫を開始し、コーデリアを追い詰める。
「あふんうぅうううッ♥　あんっ♥　くはあぁぁぁん♥　そ、ソッチもダメぇ♥　グリグリしないで♥　も、もう……もう♥　ひぐっ♥　うきゅぅうううううう♥」
「くくく、先っぽからドンドンお汁が染み出しているよ」
「くぅ♥　ふゅう♥　あはぁぁあああん♥　わたくし……わたくしは……あぁあああああ♥　おッ♥　おッ♥　もう漏れちゃいますのおぉおお♥　アレが……アレが♥　男の人のが♥　男の人のが♥　熱いのがあああああアアァァァ♥」
ついに尻尾コキに耐えられず肉竿が臨界点を迎えた。局部を丸出しにしながら身体をくねらせるブロンド装刃戦姫。デカ金玉から精子が送られ海綿体が膨張する。
皮の剥けた肉傘がヒクつき、ピンク色にぬめり、男のモノで初めての精通を体験する。
ブビュ♥　ビュルルル♥　ドビュッ♥　ドッビュルルルウウウウウ♥　ビュウウウウ

～♥

「あぁあああん♥　でる♥　でてる♥　いっぱいでてますのぉお♥　イクッ♥　イクッ♥　わたくしイッてます♥　男の人みたいにイッちゃいますのおおぁおおぉおおお♥」

プリプリとザーメンを吐き出し、雄の快感に酔いしれるフタナリお嬢さま。思考が白熱し何も考えられず、恍惚の表情を浮かべる。

あまりの心地よさに、己の使命を忘れてしまいそうだ。

（気持ちいい……男の人はいつもこんな快感を味わっていましたのね。良平くんもきっと……）

想い人もこんなことをしているのかと、ぼんやりした頭で考える。

「まだ転身を解いていないのはさすがだけど、もうあきらめたらどうだい？　今あたしの雌奴隷になるなら、許してやってもいいけどねぇ」

「くっ、舐めないで！　この程度でわたくしが堕ちたと思いましたの!?　八大鬼が聞いて呆れますわ！」

「やれやれ、なら別の手を考えるまでさ。もっと強烈な手をねぇ」

「やれるものならやってみなさいっ！　わたくしは決して屈しませんわっ！」

二人の頭上、はるか高くにつくられた格子窓から月光が差し込む。四尾の尻尾が活きの

いい獲物に悦び、妖月の瞳に渦巻く呪力がさらに激しさを増した。

◆◆◆◆

雪のように白い細指を唇に添え、妖月は考えを巡らす。いまだに転身を解かないコーデリアをどう陥落させるかを。

石畳の床を歩くたびに着物の裾がはためき、豊満な胸乳がいやらしく弾む。

（さて、どうしたものかねぇ）

ただ射精させるだけで装刃戦姫の心を折ることはできない。もっと屈辱的に、自ら敗北を認めさせる手段を講じる必要があった。

（鬼蛙の奴はゲームにこだわっていたっけ。あたしは趣味じゃないけど、そういう手もアリかもねぇ）

悩んだ末に妖月は鬼蛙と同じ手を使うことに決めた。フタナリゲームを持ちかけ、精神を屈服させるのだ。

「ねえコーデリア。あたしとゲームをしないかい？　このままじゃれ合っていてもお互い時間の無駄だろう？　もし、あんたが勝てたなら鎖を解いて、正面から戦ってもいいんだけどねぇ」

「……何を企んでいますの？　そちらに有利な状況でゲームなんて意味不明なのですが。

あなたバカですの？」
「面倒が嫌いなだけさ。あんただって何日もそうしていたいわけじゃないだろう。話くらい聞いてみてもいいと思うけど」
「……話だけなら構いませんわよ。さっさと言いなさいな」
「あたしが提案するのは『淫語射精耐久ゲーム』。コイツを使ってやるゲームさ」
妖月がパチンと指を弾くと床に穴が開き、中から大仰な機械がせり上がってきた。
見た目は分娩台に近いが、股間の部分に搾乳で使われるような円筒形のケースがある。
ツタ草のように赤錆色のコードが絡みつき、全体から禍々しい邪気が漂っている。手足は革のベルトで固定できるようになっており、凶悪な拷問機械のようだ。
「なんですのこの悪趣味な機械は。嫌な予感しかしませんわ！」
「見てくれは悪いがアブナイ機械じゃないさ。あたし自らが設計したからね」
「これあなたがつくりましたの？　……余計に心配ですわね」
「時代遅れの呪力にだけ頼っていちゃ進歩できないってことさ。それよりルールを説明するよ」
愛おし気に機械を撫で、薄く微笑む。四本の尻尾でスイッチを操作し、手際よく準備を進める。

「簡単に言うとあんたが機械に座り、股間の搾精ケースでペニスをしごかれる。それで射精したら負け。以上さ」

「ばっ、バカですの!?　そんなものあなたがスイッチをいじればどうとでもなるじゃありませんの！　絶対にやりませんわよ！」

「落ち着きなよお嬢さま。確かにこのままじゃフェアじゃない。だからこういうのはどうだい？」

妖月は搾精ケースに触れると、カチリとスイッチを入れた。

「あんたが何かしゃべるたびに、搾精ケースの振動や回転が落ちるようにしておいた。まあ、感じている時はまともに声を出すのも大変だろうけどねぇ。ハンデってとこさ」

「多少はマシになりましたが……制限時間は？」

「三十分」

想定外の展開にコーデリアの心が揺れる。敵地で拘束されている時点で圧倒的に不利なのだ。蜘蛛の糸ほどわずかでも可能性があるのなら、それに賭けてみたい。

（妖月はまったく信用できませんが、ゲームに乗るしかなさそうですわね）

決意を込めて、拳を握る。

「わたくしが負けた場合はどうなりますの」

「転身が解除されりゃ十分だけど、せっかくだし罰ゲームもやってもらおうか。サクラヒメは二回やったそうだからあんたにも二回ね」
「罰ゲーム……また悪趣味なことを考えていそうですわね」
「別に死ぬわけじゃないさ。ただ、こっちも怨みがあるんだ。それなりに痛い目は見てもらうよ」
コーデリアは機械に視線をやる。悩んでいる時間はない。装刃戦姫の霊力も無尽蔵には持たない。このまま時間が経てば自動的に転身が解除されてしまうだろう。
「いいですわ。そのゲーム受けて立ちましょう。ただし、わたくし生まれてからゲームと名の付くもので、負けたことがありませんので。精々吠え面かかないように気をつけることですわね」
「交渉成立だね。その言葉が嘘ではないことを確かめさせてもらうよ」
鎖を引きずりながらコーデリアは機械に座ると、搾精ケースにペニスを差し込んだ。ケースの内部はオナホールのような構造で、肉ヒダがローションと共に絡みつく。
（んっ……うぅぅ、ぬるぬるして冷たくて変な感じですわ）
ひんやりとした感触に驚き、初めてのオナホ体験に背筋を震わせる。尻尾コキとは違う未知の感触が不安を煽る。

手首と足首は革バンドでしっかりと固定される。これでもう逃げられない。勝つにしろ負けるにしろ取り決めは絶対に実行されるだろう。それがどんなに屈辱的な内容でも。

「ゲームを開始するよ。覚悟はいいねコーデリア？」

「ええ、いつでも構いませんわ！」

淫語射精耐久ゲームが始まる。妖月がコントローラーのスイッチを入れると、搾精ケースが蠢き肉竿に刺激を与え始めた。

ゆっくりと内部の肉壺が回転すると同時に、微弱な振動がフタナリペニスを弄ぶ。

「んんぅ、くうぅうう、ひゃうううんっ!?」

始まってから数瞬で、コーデリアの口から甘い声が漏れ出た。

搾精ケース内部に再現された膣孔の感触が、射精衝動を急速に高めているのだ。

ズチュ♥　ズニュ♥　ゴシュ♥　ムニュウ♥

「あっ、くうぅ……ひぐうぅうう……んんく！　ひぐうぅうううううん！」

「可愛いらしい声を出すじゃないか。ゲームはまだ始まったばかりだよ」

「心配には及びませんわ。ん、くうんっ、ちょっとビックリしただけですから……あっ、ううううぅ、ンウゥゥウウウ」

子猫のように切なく呻くコーデリア。バキバキに勃起した肉竿が、ミミズのようにうね

る搾精ケースで愛撫される。
皮を剥かれた肉傘がローションで怪しくぬめり、敏感なカリ首の部分を刺激される。
特大金玉は子種汁をどんどん増産し、少女を快楽の大海へと引きずり込んだ。
「あうっ、クウウゥウゥ……くっ、はくうぅうううぅうううん！」
「生えたばかりの童貞チンポには荷が重かったかねぇ。もうイッちまいそうだよ」
「バカにしないでこの程度なんとも……ひゃあう！　ふぐくうぅうううぅうううう！」
常人なら一分と我慢できない快楽責めに、金髪縦ロールの装刃戦姫は唇を噛み耐え続ける。
精神を集中して衝動に耐えなければ、あっさり心が折れてしまいそうだ。
「よ、妖月……はぁ、あああああっ！　んぐぅ、おかしいですわよ！」
「んー、なんだい？」
「さっきからしゃべっているのに、どうして感度が落ちませんの!?　説明と違いますわよ！」
「ああ、そのことかい。しゃべるといっても搾精ケースは淫語にしか反応しないのさ」
「淫語……？」
「おチンポとかオマンコみたいな言葉さ。聞いたことくらいはあるだろう？　まぁ、あん

たが恥ずかしがってくれるならなんでもいいんだけどねぇ」

「そ、そんなこと……！」

コーデリアは血液が沸騰しそうな羞恥に身を焼かれる。言葉自体は知っていても、口に出したことは一度もない。

エイミス家の箱入り娘として育てられてきた彼女に、そんなはしたない真似ができるはずもない。

「そんな話聞いていませんわよ！　今更ズルいですわ！」

「言い忘れていただけなのにうるさいねぇ。真面目ぶったお嬢さまはこれだから」

「んぅ、はううぅ、くひイィィイイン！　はぁああ……！　げ、下劣過ぎますわ！　あなたにはプライドというものがありませんの!?」

「ないね。あたしは調教ができればそれで問題ないからねぇ」

「むううん、んむあぁぁぁあああ！」

妖月を一瞬でも信じた自分が愚かだった。卑劣なやり口にブロンド戦姫はほぞを噛む。

「いいじゃないかこれもゲームのうちさ。手始めにあんたの股間に生えているものでも言ってみたらどうだい？」

「なんですって……い、言えるわけがありませんわ！」

ピンチにもかかわらず口ごもってしまう。男性器の名称なんて言葉にするのもおぞましい。

（でも言わないと今すぐにでも出てしまいそうですわ。まだ五分も経っていませんのに）

振動する搾精ケースの影響で、フタナリ肉竿が悲しく震える。鈴口が魚の口のように開閉し、先走り汁が止まらない。

（背に腹は代えられませんわね。屈辱ですが言う通りにするしかありませんわ）

切ない衝動に苛まれていながらも、コーデリアは口を開く。

「ペ……その……ペ、ペニス。ペニスですわ！　これで文句ありませんわよね！」

「さあ、それはどうだろうねぇ？」

「くひぃぃイぃン!?　ジくうぅうっ！　と、止まらない……どうしてですの!?」

「ちゃんとおチンポって言わないからさ。保健体育の授業じゃないんだよ」

「ぐうううぅうっ！　最低ですわね……ふううぅうん！」

肉勃起の疼きに翻弄されるコーデリア。妖月の言いなりになるのは癪だが、他に打つ手がない。

（し、仕方ありませんわね。これも勝つためですわ！）

ブロンドヘアーを汗で濡らしながら、恥辱への門を開く。肉柱は回転と振動で熱く脈動

し、勢いを弱めなければ今にもザーメンをお漏らししてしまいそうだ。
「お……お……おチンポです！　わたくしのお股で反り返っているのはおチンポですわ！」
「ははっ、あはははははっ！　面白いねぇ。どんなに高貴なお嬢さまでも、あたしには逆らえないのさ」
「予想以上に悪趣味ですわね。腐った脳ミソに反吐が出ますわ……やっ、あああ！　ウゥゥ、辱めたいのなら好きになさい！　わたくしはそんな機械になんて負けませんわ！」
「おやそうかい？　じゃあおチンポの下にぶら下がっているソレはなんて言うんだい？」
「き、金玉ですわ……プニプニ金玉ですの！　くっ……またこんなことを……ふぁ！　んぅ、んっ、くあぁぁ……」
　卑猥な単語を言うたびに搾精ケースパワーが弱まっていく。ペニスの脈動も落ち着きを取り戻していた。
（淫語で抑えられるのは本当のようですわね。あと少し遅かったら危ないところでしたわ）
　口に出すのは恥ずかしいが、これならどうにか三十分持ちそうだ。膣奥からも淫蜜をこぼしながら、コーデリアは責めに抗う。
「その調子さ。次はザーメンのことでも話してみなよ。おチンポからザーメンを射精する

のはとっても気持ちよかっただろう？」

「はぁはぁ……ざ、ザーメンぴゅっぴゅっするの気持ちいいですの。糊みたいにこってりした汚濁を吐き出して……ザーメン漏らし癖になってしまいそうですわ……んうあぁあああ！」

「こりゃあいいねぇ。チンポ、ザーメンと恥ずかしくないのかい。サクラヒメや坊やが見たらなんて思うだろうねぇ」

「ぁっ、はひゃんっ！　そんなこと言わないで！　変態みたいなセリフを口にしてるなんて知られたら……うぅっ、ンッ！　失望されてしまいますわ……むううぅうう！」

思考がフタナリ肉竿だけに集中し、妖月の問いかけを拒絶できない。装刃戦姫コーデリアは淫語による性的興奮を抑えられず、淫辱に身悶える。

「おチンポ！　おチンポですわ！　ううぅ……あ、あ、あ、はぁあああぁあ！　おチンポ好きですの！　おチンポ、チンポ！」

「ようやく十分経過ってところかい。この先が思いやられるねぇ」

「うるさいですわ！　ンッ、はあぁぁあああ！　おチンポ！　おチンポ！　ざ、ザーメン！」

自分を貶める最低の被虐快感に身を焦がし、肉竿を硬くしてしまう。恍惚の表情を浮か

べながらよだれを垂らす。
「ベラベラとみっともないねぇ。お嬢さまっていうのはもっとプライドが高いのかと思っていたよ」
「お……おあいにく様ですわね。あなたをブチ殺すためならいくらでも言ってあげますわ。ゲームが終わったら覚悟なさい」
「へぇ、ならもう少し強くしごいてやろうか」
妖月は手元のスイッチを現在の『弱』から『中』に切り替えた。もう一段階強い回転とバイブレーションがフタナリ勃起に襲い掛かる。
ゴシュ♥　ズチュチュウ♥　ヴヴヴヴ♥
「あぁ、あぁぁあああああっ！　苦しい……おチンポが破裂……破裂してしまいそうですわ！　オ、おおぉおオォオォオン！」
「まったく懲りない女だねぇ」
「ち、チンポ！　おチンポですわ！　ぐっ、くうぅうぅ！　ザーメンおチンポ！　あああぁあ……振動が止まらないいぃ！」
「パワーを上げたからそんな言葉じゃ止まらないさ。もっと頭をひねらないとねぇ」
「勝手なことを……ひぅっ！　んぅ、ザーメン！　ザーメン！　ああ、おおっ、チンポほ

おぉおおおおん！」

女狐の姦計に翻弄されるコーデリア。言いたくもない変態ワードに頭を悩ませる。

（恥ずかしいですけどやるしかありません！　んん、回転も振動も激しいっ！）

少ない知識を総動員し、淫語をひねり出す。と、同時に火照った身体からは大量の汗が噴き出し、金髪乙女の肉体を煽情的に濡らした。男を虜にするフェロモンが部屋中に広がっていく。

むわっ♥　むわっ♥　むわわわわわっ♥

「部屋の匂いがキツくなってきたねぇ。あんたの身体で匂うところを答えてもらおうかい」

「調子に乗って……くっ、腋の下ですわ。わたくし汗っかきですぐに腋が蒸れてしまいますの……くぅっ、きゅうんっ！　酸っぱい匂いが噴き出しちゃいますの！　んッ、あううぅぅう！」

「サクラヒメも体臭がキツいそうだけど、あんたの匂いも濃いねぇ。くんっ、くんくんっ……狐のあたしにはつらいよ」

「あっ、あんっ、ぁんっ！　嗅がないで……わ、腋が臭くて申し訳ございませんわ！　戦いの最中もムレムレ腋染みつくりながら技名叫んでますの！」

羞恥の炎に焼かれながらキツめの腋臭を告白する。悔しいのは妖月の質問に答えていた

方が、より恥ずかしく、搾精ケースの勢いが弱まることだ。

（あんな女の思惑通りに言わされるなんて屈辱ですわ……ん、うぅ）

お嬢さま戦姫は射精衝動に翻弄される。快楽に乱れる心の隙間に容易に付け込まれてしまう。

「オニグミだってもう少し清潔にしているけどねぇ。それで他にはないのかい？　あんたの身体にはもっと匂ってくる部分があるんだけどねぇ」

「そっ、それは……」

妖月の言いたいことはよくわかっている。だがそれはコーデリア一番のコンプレックスだ。

（絶対に言えませんわ……あんなの、あんなの恥ずかし過ぎます！）

装刃戦姫としてだけではなく、乙女として口に出せないことがある。ましてや敵の眼前でこれ以上の弱みを見せたくない。

「なんだ言えないのかい。こっちはそれでもいいけどねぇ」

「はうあぁ、はぅぅぅウゥウウウッ！　ほおおぉオオオォオン！　回転キツいぃぃ……」

「残り時間は十五分。我慢できるなら好きにしな」

「むぐうぅう、ンひゃうぅぅぅうっ！」

喉の奥から獣のような嬌声を上げる。回転する肉ヒダで勃起ペニスは絶頂間近だ。

（ぅぐぅぅ……い、言うしかありませんの？　悔しいですわ……）

感情を殺しコーデリアは自身の秘密を暴露する。それが最悪の羞恥を招くとしても。

「わ、わたくしの一番匂うところは……お、お、お、オマンコですわ！　ビラビラオマンコです！　装刃戦姫コーデリアはマンコが臭いんですのぉおおおおおお！」

真っ赤になりながら羞恥セリフを口にするコーデリア。自分の性器が臭いなんて絶対に言いたくない。惨めで情けなくて涙が出そうになる。

良平には死んでも聞かせられない。

もむわっ♥　むわわっ♥　むんっ♥　むわっ♥

「あはははははっ！　コイツは傑作だ！　一番匂うところがおマンコなんて最悪だねぇ！　くく……ふはははは！」

「そうですわ！　わたくしオマンコの匂いが一番キツいんですの！　脱いだパンティーを嗅いでみたら臭過ぎて涙目になってしまうくらいクサマンなんですの！　う、うぅう……」

「そんな匂いじゃ彼氏ができた時に困るだろう？　どうやってセックスするつもりなんだい？」

「セックスなんてできませんわ……はうっ！　んきゅう！　だっておマンコの匂いが最低なんですもの……男の人に嫌がられてしまいますわ！」

恥辱の灼熱で気が狂いそうになる。性器の匂いを笑われるなんて悪夢としか言いようがない。搾精ケースの動きが弱まっていることだけが唯一の救いだ。

「そうだろうねぇ。でもクンニしてもらう時に困るだろう。例えばあの坊やにおマンコ舐めてもらいたいんじゃないのかい？」

「いじわるなこと言わないで！　良平くんは関係ありませんわ！」

「無駄な足掻きはよすんだね。ゲームに勝ちたいならあたしの質問に答えてりゃいいのさ。たっぷり恥をかきながらね」

「ああっ、ひぐぅぅッ！　あ……頭を床に擦り付けて土下座してお願いしますわ！　あなたの彼女クリスティーナ・エイミスはおマンコ激臭の便所レディです！　は……鼻栓をしても構いませんから、どうかこのクサマンを舐めてください！」

涙目になりながら女陰のことを説明する。ここまで惨めなお願いはこの世にないだろう。心の奥のマゾヒズムが蕾（つぼみ）を開き、コーデリアを妖しい世界に連れていく。

「それから……だ、唾液をたっぷりまぶして消臭して欲しいんですの！　くっさいくっさいマンコを消毒してください！　マンコ汚臭お嬢さまが彼女で申し訳ありませんわ！」

「ふふふ、それだけ言えば坊やも嫌々舐めてくれるかもねぇ。でもあたしを不快にさせた罰は受けてもらうよ。マンコが臭いって十回言いながら謝ってもらおうか」

「はくうぅうぅう！　い、言いますわ！　マンコが臭い！　マンコが臭い！　マンコが臭い！　マンコが臭い！　マンコが臭い！　マンコが臭い！　わたくしのマンコが臭いんですのおおぉおぉおお！　この度はわたくしのマンコが大変ご迷惑をおかけしましたっ！」

半狂乱になりながら女性器の俗語を連呼し、羞恥謝罪させられる汚臭お嬢さま。

キツイ体臭で自分を貶め淫猥、淫辱な快悦を貪る。絹のような肌から恥ずかしい淫臭がさらに発散され、赤貝のように口を開いたヴァギナからも酸っぱい匂いが漂う。

（最悪ですわ……わたくしなんてことを口走ってますの……くっ、くうあぁっ！　おチンポが切ないぃ！　まさかあんな変態セリフで感じてはいませんわよね……？　あっ、ひゃうううぅ！）

心がズタズタになりながらも必死に射精を我慢する。しかし、今の淫語の連打で肉竿はすでに限界が近い。

肉ヒダがくねり、振動がフタナリ陰茎を追い詰める。搾精ケースへ白濁液を放出しようと、一気に精欲求が昇る。

ゴシュ♥　ズリュ♥　ズググ♥　ズジュジュ♥

「あぁぁっ、ンクッ、おチンポ苦しい……ザーメンがすぐそこまで来てますのオォォ！　おっぐウウゥウウゥウ！」

強烈な快楽に耐えながら絶叫するコーデリア。ブロンドヘアーを振り乱し、無意識のうちに腰を振ってしまう。

発情期の猿めいて絶頂を求める姿に、普段の高貴な面影はまったくない。

「負けを認めるかい？　残り時間はもう十分もないんだけどねぇ」

「――ッ！　そんなわけありませんわ！」

妖月の言葉で我に返る。自らの使命を思い出しもう一度精神を引き締める。瞳に宿る正義の炎はまだ消えていなかった。

（危ないところでしたわ。あと十分程度耐え抜けないはずがありません！）

気持ちを新たに淫語射精耐久ゲームへ臨む。だが、フタナリ快楽に溺れる身体は、もう何度も絶頂を求めていることを妖月は見抜いていた。

「よく頑張るじゃないか。ご褒美にもっと搾精ケースのパワーを強くしてあげるよ」

「ヒゥッ!?　よ……妖月!?」

スイッチを操作し、強さを『中』から『強』に引き上げる。搾精ケースが高速で回転し、

激しく振動する。これまでの比にならない淫悦がフタナリ肉竿を襲う。

ゴシュ♥　ゴシュ♥　グリュ♥　ジュコジュコジュコ♥　ズジュブ♥　ゴッシュゴシュ♥

「へほおおぉおおおおお!?　おチンポおかしくなる！　壊れる！　おチンポ狂ってしまいますのおおぉおおぉおおおお!?」

スタイル抜群の身体が痙攣し、少女の肉竿は快美を要求し怒張する。肉花弁がびしょびしょに濡れほぐれ、ラフレシアのように咲き乱れる。

身体中から発散されるフェロモンがさらに濃さを強め、初々しい亀頭が絶頂をおねだりする。

「イキたいぃいいい……だ、ダメッ！　ダメですわ！　イッてはいけませんのぉおぉおおおお！」

短い間隔で絶頂の波が訪れ続ける。コーデリアは歯を食いしばり耐えるが、鍛えられた精神力でも限界が近い。

「あぐうぅうううぅうう！　妖月今すぐに止めなさい！　はやく止めてえぇえええぇえッ！」

「うーん、どうしようかねぇ」

「焦らすんじゃありませんわ！　あっ、あっ、またクル！　ケースがくにくに動き回っておチンポ変になってしまいますわ！　おほッ！　おほぉおおぉおっぉぉッ！　ザーメンチンポっほおぉおおおおん！」

「どうだい？　もうギブアップするかい？」

「しっ、しませんわ！　これしきのことでわたくしは負けませんの……んんっ！　あっ！　くぅうぅうぅうん！　チンポ！　チンポ！　おチンポがつらいですのぉおおあぁあああ！」

妖月の容赦ない責めが精神を追い詰め、無理やり変態トークをさせられる。度重なる淫猥セリフでお嬢さまヒロインの理性に霞がかかる。

頭の中が被虐ワードで埋め尽くされ雌奴隷へと歩き出す。自分が変態マゾに変わっていく過程が恐ろしい。

「今すぐ止めなさい！　細切れに切り刻みますわよ！　もっほおおおぉおオオォォッ！　チンポチンポチンポチンポおぉおおおお！」

「ったく仕方ないねぇ。ほら、戻したよ」

「ほ、本当ですの!?　くうぅあぁ……まだおチンポがビクビクして気持ちいいのが終わりませんのおおぉっ！　チンポ感じる！　感じてますわ！　オマンコぐちょぐちょでしゅの

おぉおおおお！」

「恥ずかしさが足りないんじゃないのかい？　淫語に慣れてしまっているのさ。秘密でも暴露したら勢いもマシになると思うんだけどねぇ」

「くふぅぅぅうん！　このクソ女……あひゃあぁあぁぁん！」

妖月が『弱』に戻したといっても、フタナリペニスの快感は変わらないままだ。先走り汁とローションが混ざり合い、搾精ケースに淫猥な匂いが充満する。

（い、言うしかありませんの!?　あの秘密だけは知られたくなかったのに……でもこのままではおチンポが持ちませんわ！）

悪趣味な肉棒イジメに抗うお嬢さまヒロイン。

彼女が選んだのは自らの秘密を暴露することだった。喉の奥から声を搾り出す。

「わたくしの秘密を告白しますわ……んっううう……よく聞きなさい！」

「へぇ、なんだい？」

「お、オシッコですわ。わたくしはついこの間オシッコをお漏らししてしまいましたの！」

恥辱に勃起肉が硬くなり、ゴクリと生唾を飲み込む。

「戦闘のあと公園で急に尿意を催して、我慢できませんでしたの！　トイレが使用禁止だったから仕方なく……そ、そこで……」

「どうやって漏らしたんだい？　まさか男みたいに立ってしたわけじゃないよねぇ？」
「それはぁ……んんっ、はうっ！　おチンポが擦れる……頼むから止まりなさいっ！」
「誤魔化すんじゃないよ。はっきり言いな」
「そ、その場で漏らしてしまいましたの！　レースの下着を汚して、わたくしその場でお漏らしをしてしまいましたのおぉおおおお！　ひぐっ、うぅ、最低ですわ……」
　子供でもないのにパンティーを汚してしまった現実。惨めで情けないはずなのに、身体の火照りは大きくなるばかりだ。
「そいつは恥ずかしいねぇ。小便臭い下着はどうしたんだい？」
「そ、そのままですわ。靴を汚してしまいましたけど、オシッコ臭いびしょびしょパンツのままで歩いて家に帰りましたの……お漏らし女でごめんなさい！」
「歩いてってことはだれかに見られたかったんじゃないのかい？　あんたはどうしようもない変態マゾだからねぇ」
「そんなわけ……い、いえ、み、見られたいですわ！　わたくしは変態のオシッコマゾですの！　皆さんにお漏らしパンツのまま歩く痴女だって思われたいですの！　おッ、オグうぅうっ！　どこでもションベン垂れ流す雌犬だって罵ってくださいな！　のほおおおおおオオオォォ！」

自分が何を口走っているのかもわかっていないオシッコ乙女。何度も勃起肉に淫悦を与えられ、理性はとっくに崩壊していた。

まだゲームを続けられているのは、装刃戦姫の矜持があるからだ。

「どうしてですの!?　どうして振動が弱まりませんの!?」

「さあねぇ？　その程度の淫語じゃ抑えきれないんじゃない」

「そんな……ヴくぅぅ、んんんんっ！　こんなに恥ずかしいですのに……アグゥッ！」

どれだけ恥をかいても搾精ケースの勢いは弱まる気配がない。だがそれもそのはず、妖月はスイッチを『弱』に戻したわけではないからだ。

代わりに触ったのは搾精ケースの『淫語をしゃべると快楽が治まるスイッチ』である。

コーデリアが喘いでいる最中に、尻尾でスイッチをオフに切り替えたのだ。

「ひゃはあぁあぁぁあん！　チンポ！　マンコ！　ザーメンザーメン！　ど、どうしてですのぉおおおぉおおお!?」

そうとも知らずコーデリアははしたない言葉を口にする。サファイア色の瞳が陰り、高潔な信念に雲がたちこめる。

（おチンポがおかしくなる……そ、そうですわ！　今の気持ちを正直に言えばいいのです！　それならきっと振動と回転が止まってくれますわ！　だってもうおチンポが限界な

んですから♥）

自分の気持ちを正直に吐露し、恥をかこうと考えるコーデリア。だがそれはフタナリ快美の奈落へ落ちていくことに他ならない。

射精がしたくてたまらず、肉竿からはとめどなくカウパー汁が溢れ、金玉はパンパンに膨らんでいる。理性の糸が束になって引き抜かれ、プライドも何もかもが紙くずのように吹き飛ばされた。

宝石のように輝く心が屈服する。

「し……したい……」

「ん？　なにか言ったかい？」

「し……し、したいですの……は……早く……」

「だから何を？」

「しゃ……射精したい！　射精したい！　ザーメン吐き出したいですのぉおおおおぉお！　も、もう無理ですのおぉっ！」

「まったくはしたないねぇ。お嬢さまらしい態度はどこにいったんだい？」

「そんなのどうでもいいですわ！　チンポチンポ♥　チンポが限界ですのお♥　射精したいんですのおおおおぉおぉお♥」

快楽に喘ぐオシッコ漏らし戦姫コーデリア。その心を完膚なきまでにへし折ろうと悪鬼が嗤う。

「チンポチンポ♥　おほおぉおおお♥　だ、ダメ……止まらないぃいいいい♥」

「そこまで恥ずかしいのが好きなら、あたしに謝ってもらおうか。尻尾を斬ったことを謝罪しな」

「ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　妖月さま♥　わたくしの無礼をお許しくださいっ♥」

「それだけかい？」

「わ……わたくし装刃戦姫コーデリアは身の程もわきまえず妖月さまを傷つけてしまいました♥　この愚かなバカ女にどうかお慈悲をくださいませ♥　なんでもしますっ♥　靴だって舐めますから♥　ペロペロしますからッ♥　だから……だから射精させてぇえええええぇぇぇぇぇ♥　フタナリおチンポ限界なんですぅううう♥」

プライドも何もなく、妖月に媚びる。より屈辱的に恥を晒せば搾精ケースが止まると信じているのだ。それが罠だとも知らずに。

「腋臭、マン臭キツイ汚物コーデリアをお助けくださいっ♥　臭くて臭くてたまらない最低戦姫を許してくださいっ♥　わたくしが間違っていましたわ♥　高貴で強い妖月さまに挑

戦したわたくしがバカですの♥　おチンポッ♥　おチンポッ♥　おチンポッ♥　おチンポッ♥　わたくしのおチンポを助けてくださいませ♥」

最悪に自分を貶めながら懇願する淫乱戦姫コーデリア。思考は定まっておらず、明かりに向かう蛾のように衝動に従い口を動かす。

四尾の鬼狐は最大級に口角を吊り上げると、フィナーレとばかりに装刃戦姫へ敗北を与える。

「ははははっ、最高に無様だねぇ。そこまで言うならもう射精してもいいんじゃないかい？時間はもう五分もないけど、たかが罰ゲームだろう？」

「ぐ、うぅ、わたくしは……♥」

コーデリアの頭の中で装刃戦姫としての想いと射精への欲求がぶつかり合う。フタナリ勃起はカウパーでドロドロで、毒虫のように脈動している。

（ここであきらめたら妖月を倒せない……流華さんや良平くんだって助けられませんわ……時間だってあと少しですもの。はうぅうう……んっ♥　で、でもっ、もう♥）

意識のすべてが快楽に染まる。剥き出しの腋からは雌の匂いが発散され、蜜壺からは淫液がとめどなく漏れ出てくる。

「もう♥　もう無理ですわ♥　無理無理無理ムリですの♥　ザーメン出します♥　ザーメ

ン出しますわ♥　プリプリザーメンで射精しますのおぉおおおおおおおぉお♥」

搾精ケースが一際激しく蠢動し、肉柱を絶頂へと追い込む。水風船のように膨らんだ金玉が歓喜でブルリと震える。

カリ首がビンッと反り返り、遮るもののなくなった肉竿が臨界点を超えて怒張する。

全身から淫臭を噴き出しながらコーデリアは敗北アクメへ向かって突き進む。

何度も絶頂を我慢させられたフタナリペニスは、凄まじい勢いで精を吐き出した。

ドビュ♥　ドバ♥　ドブバババアァァア〜〜♥　ドビュク♥　ブビュククウウウウ♥

「あ、あ、あひぃいいいいいい♥　イグッ♥　イグッ♥　イグッ♥　イギまくりますのオオォオォオオォ♥　おチンポイグ♥　ビンビンイグ♥　わたくしの変態勃起チンポから濃厚白濁こってり雌ザーメンが大噴火してますのおぉおお♥　らめっ♥　らめっ♥　らめれすのおぉおおおぉ♥　おチンポイギまくって変になっちゃいますのぉおおぉおおおぉ♥」

ド下品な音を立てて射精するマゾお嬢さま。散々焦らされたフタナリペニスは搾精ケース内に、濃厚なザーメンミルクを吐き出した。

「ぢオ♥　ぢオオ♥　バカみたいに腰振りながら敗北射精してしまいますわあ♥　お

ッ♥　ぁんッ♥　おチンポイグの最高ですのおぉおおお♥　腋クサ♥　クサマン♥　汚臭マンコ♥　クサマン戦姫コーデリアの最低ルーザーチンポアクメごらんになってえぇぇえええ～～ッ♥」

搾精ケース、偽物の膣孔に出す感触に酔いしれ、雄の快楽を身体の全細胞で享受する。だらしなく白目を剥き、装刃戦姫としてあるまじき最低のアヘ顔をキめる。

（ごめんなさい流華さん、良平くん……わたくしダメでしたの♥）

色欲に精神が侵され転身が解除される。神器結晶が胸元から滑り落ちた。それを拾い上げながら妖月は愉悦に微笑む。

「この勝負あたしの勝ちってことだねぇ。ふふふ、罰ゲームを楽しみにしていな」

「あぁ……ひぅぅ♥」

満足げに勝利宣言する妖月に、コーデリアは何も言い返せない。射精の虚脱感で指一本動かせず、ザーメンの残り汁をピューピューとみっともなく吐き出すばかりだ。

（……で、でも次こそは負けませんわ！　この借り万倍にして返してあげますから！　そうですわよね流華さん）

それでも気力を奮い立たせ、闘志を燃やす薔薇の装刃ヒロイン。

どれだけ辱めを受けようと、絶対に屈するつもりはない。

この白濁に満ちた悪夢から抜け出すために。

第六回　最悪の罰ゲーム　転落する薔薇の戦姫

妖月の所有する調教部屋は数多存在し、そこでは毎日のように小鬼たちが女性を辱めている。

完全に堕ちた者は金持ちや犯罪組織などに出荷され、彼女を潤す資金源となっていた。

建宮流華と三城良平も引き離され、調教部屋に囚われていた。

（……わたしとしたことが、またしても不覚を）

神器結晶を取り上げられた流華は普通の女子生徒と変わらない。自力での脱出は不可能で、己の非力さに歯噛みするしかなかった。

クリスや良平の安否が気にかかるが、今は二人は無事だという鬼蛙の言葉を信じることしかできない。

監禁から五日後。

流華はようやく恋人との面会を許された。

「良平！　怪我はないか!?」

「流華……！」

薄暗い部屋の中で二人は抱き合う。もう誤魔化すことはできない。装刃戦姫やオニグミ、今まであったことすべてを打ち明けた。

さすがにフタナリ調教を受けたことは言い出せなかったが、丸眼鏡をかけた少年は、真剣な眼差しで耳を傾けていた。

「――というわけなんだ。すまない良平、ずっと隠していて。おまけにわたしのせいでこんな目に遭わせるなんて……装刃戦姫失格だな」

「すごく驚いたけど……うん、大丈夫だよ。流華やクリスさんが悪い怪物からぼくたちを守ってくれていたんだよね。ありがとう」

「りょ、良平っ！　怒ってないのか？　全部鬼蛙を倒せなかったわたしのせいなのに……」

「平気だよ。流華がいてくれるならオニグミだって怖くない。またみんなで学園に帰ろう」

「ああ！　装刃戦姫サクラヒメの名に懸けて約束する。絶対にみんなで帰ろう」

少年をもう一度力いっぱい抱きしめる。互いの温もりが染み渡るように心を癒す。

黒髪の装刃戦姫は必ず鬼蛙、妖月を倒し三人で脱出するとここに誓う。

漆黒の瞳に灼熱の炎が灯った。

◆◆◆◆

同日同時刻。

装刃戦姫コーデリアこと、クリスティーナ・エイミスの罰ゲームが執行されようとしていた。

ブレザー制服は没収され、乳首にはハート型のピンクニップレス。陰嚢にはフリルをあしらった純白の金玉ブラジャーを着けられ、フタナリ器官をいやらしく装飾する。

細い首には大型犬用の首輪が嵌められ、伸びた鎖は床に繋ぎ留められていた。

（こんな格好……屈辱ですわ）

女性を辱めるためだけの衣装に、真っ赤になって羞恥に震える。

しかし、コバルトブルーの瞳には一点の陰りもなく、淫語射精耐久ゲームの敗北からは完璧に立ち直っていた。

過酷な鍛錬を積む装刃戦姫は、一度や二度の敗北で心が折れることはない。

（前回は不覚を取りましたが、律儀に罰ゲームをする余裕を見るにチャンスはまだあるはず。わたくしを殺さなかったことを後悔させて差し上げますわっ！）

平静を保ちクリスは思案を巡らせる。妖月のグラマラスな胸元に収納された、神器結晶奪還の機会をうかがう。

当の本人は小鬼と共にカメラを調整していた。まるで新品の玩具で遊ぶように、ウキウキとした様子だ。

部下に任せるだけでなく、自らの手で準備をしていることがなによりの証拠である。
「技術の進歩ってのには驚かされるねぇ。あたしが生まれた時とは大違いさ」
カメラは三脚で支えられた大型のものが床に四台、小型のものが天井に二台取り付けられている。
昨日までは影も形もなかったディスプレイや機材類も運び込まれ、まるでテレビの中継でも始まるような光景だ。
チェックが終わると妖月はクリスに向き直り、罰ゲームの説明を始める。
「準備はいいかい装刃戦姫サマ？　逃げるんじゃないよ」
「準備も何もこんな格好で逃げられるわけないでしょう。どうせくだらない内容でしょうし、さっさと始めなさい」
「開き直るのもいいけど、お客さまの前ではお行儀よくしておきなよ。今日の罰ゲームはあたしがメインじゃないからねぇ」
「なっ、ではどなたですの!?　まさか知らない殿方じゃありませんわよね!?」
「当たらずとも遠からずってとこかねぇ。実際に見てみればいいさ」
見知らぬ男性と性行為を強要され、撮影でもされるのかと恐怖するお嬢さま戦姫。
妖月は呆れた様子で壁際にあるディスプレイのスイッチを入れた。

カメラから映像が転送され、画面に二人の姿が映る。しばらくするとそこに白や黒に赤、様々な色の文字が流れだした。

「これはなんですの？　意味がわからないのですけれど」

「お嬢さまはネット中継も知らないのかい？　簡単に説明すると、この部屋の様子は外部に生中継されている。流れているコメントは視聴しているお客さまが打っているってことさ」

「わたくしの姿が中継されてますのね。うぅっ、最悪ですわ……」

「その通り。裏社会のＶＩＰたちがこの放送を楽しみにしているってわけ。そして罰ゲーム内容は視聴者の皆さまに決めてもらう。今回のあたしはただの司会者さ」

「理解はできましたわ。ホンットに下衆なことばかりよく思いつきますわね！」

「そりゃどうも。じゃあ、さっそく番組を始めようか。まずは自己紹介だよ」

「このっ……わ、わたくしはクリスティーナ・エイミス。岩戸学園に通う生徒ですわ。夜は装刃戦姫コーデリアとして悪魔（デモン）……オニグミを狩っていますの」

「なるほどねぇ。で、股間のそいつはなんなんだい？」

「ふ、フタナリおチンポですわ。妖月さまに生やしてもらいましたの……これからは変態フタナリ女として生きていくつもりですわ。っ……画面の前のあなた覚えてらっしゃい。

必ず見つけ出してギタギタにしてやりますわ！　この変態っ！」
「こらこら、失礼な口をきくんじゃないよ。今から何をするのか説明しな」
「罰ゲームですわ……『淫語射精耐久ゲーム』で負けてしまいましたので。お客さまにわたくしの恥ずかしいところを見てもらいますわ……」
テレビ画面に『フタナリってマジ⁉』『すげー初めて見たｗ』『金髪お嬢さまサイコー！』『おちんぽクリスちゃんはぁはぁ』などのコメントが流れる。
そのどれもが少女の痴態を嘲笑い、醜悪な表情が目に浮かぶようだ。
今日は若い視聴者が多いのか、早くも興奮を抑えきれないコメントが増える。ドス黒い欲望はまるでコールタールのようだ。
「本日の雌奴隷は活きがいいねぇ。お客さまにもきっと楽しんでもらえると思うよ。まずは……アンケートスタート！」
妖月の言葉に反応して、画面の下に選択肢が浮かび上がる。
内容はプレイの種類だ。
【投票。A、三角木馬　B、グリセリン浣腸　C、ムチ打ち　D、蝋燭責め】
シンキングタイムは二分。各アルファベットのコメントが右から左へと流れていく。
それだけでもかなりの人数が参加していることがわかった。一人一票で視聴者がより多

A 三角木馬
B グリセリン浣腸
C ムチ打ち
D 蝋燭責め

く投票したプレイが採用されるのだ。
結果はすぐに発表された。
【結果。A、三角木馬　15％　B、グリセリン浣腸　66％　C、ムチ打ち　12％　D、蝋燭責め　7％】
「なんですのこれ……」
グリセリン浣腸の断然トップに、クリスの美貌が青ざめる。
どれもまともなシチュエーションではないが、浣腸が一位とは思わなかったのだ。
妖月はニヤリと口角を吊り上げ、
「罰ゲームはグリセリン浣腸に決定。さっそく執行するよ」
「待ちなさい！　ま、真面目に言ってますの!?　あなたたち狂っていますわ！」
「お客さまが決めたんだから仕方ないだろう。あたしにはどうしようもないさ」
「っ、うぅ……絶対にあとで切り刻んでやりますから！」
「ここのところお通じがよくなかったんだろう？　ちょうどいいじゃないか。ねぇ？」
「わたくしのお通じは関係ありませんわ！」
便秘気味でもう一週間も我慢しているのは事実だが、大勢が見ている前で暴露されたいわけがない。

もし漏らせば大量の大便をネットの海に乗せることになってしまい、想像するだけでもおぞましい。

（とにかく我慢。我慢ですわ）

クリスが柔らかな桃尻を突き出すと、小鬼がどこからともなく浣腸器を運んでくる。ガラス製で巨大な注射器のようだ。

中は薄黄色の液体で満たされ、量もたっぷり二リットルはある。

小鬼は肛内壁を舐めて揉み解すと、先端をぷっくりと膨らんだ菊門に差し込み、注入態勢に入る。

ピンク色のアナルに異物が入り込み、「んっ」とか細い声が漏れた。

妖月はすぐに注入を命令せず、カメラに向かって問いかける。

「ここでアンケート。お客さまはどちらが好みかねぇ？」

画面に二択のアンケートが浮かび上がる。

内容は注入の早さだ。

【投票。A、ゆっくり注入する　B、素早く注入する】

「そんなことまで……吐き気がしますわ」

「いいから黙って見ていな」

眉根を吊り上げるクリスを他所に投票は進んでいく。
視聴者の答えは、
【結果。A、ゆっくり注入する　74％　B、素早く注入する　26％】
となった。
「ぐっ、品性下劣にもほどがありますわね」
ナメクジのようにノロノロとした動きでピストンが押され、じわりじわりと浣腸液が注入される。
グリセリンのひんやりとした感触が直腸を苛み、アナルを苦しめる。
内臓に得体の知れない感触が広がり、チリチリと下腹（したばら）が痛み始めた。
チュウ♥　チュウウゥ～♥　チュウチュウ♥
「苦しい……ううぅ！　はううぅ、くうぅ……もっと早くできませんの!?」
「お客さまの意見は絶対さ。それより何かしゃべりなよ。黙りこくっている生放送があるかい」
「勝手なことを……こんな奴らに話すことなんて何もありません！」
「ならあたしが質問してやるよ。あんたが今お浣腸をされているのはどこだい？」
「お……お尻の穴ですわ」

「そんなお上品な言い方じゃダメさ。罰を受けているんだからもっといやらしく、お客さまを愉しませるようにしゃべるんだよ」
「その……あ、アナルですわ」
「それも違うねぇ」
「くっ……うぅ、こ……こう……」
「はっきり言いな！」
司会者の言葉には逆らえない。自分が惨めで情けないがどうにもできない。
花弁のように可憐な唇が恥辱に開かれる。
「こ……肛門ですわっ！　わたくしの汚いクソ穴です！　んんっ、くうぅぅ……毎日用を足している穴ですわっ！」
「そう、肛門だろう……ん？　なんだ汚い穴だねぇ。ところどころに毛が生えているじゃないか。これはなんて毛なんだい？」
「ケツ毛ですわ！　わたくしのケツ毛です！　お手入れをサボってごめんなさい……クリスは肛門の周りにケツ毛を生やしていますの……んん、お浣腸つらいぃっ！」
「へぇ、お嬢さまはケツ毛も生やしているのかい。とても恥ずかしいねぇ」
「うぅ……わたくしはケツ毛女なんですの。あっ、ひぐッ！　ぐうぅぅっ！　金色のケツ

毛生やしているだらしないバカ戦姫なんですの！　お見苦しい尻毛を晒してごめんなさいっ！」

淫語調教の影響もあって、次々と恥ずかしいセリフを口にするケツ毛乙女。

四、五本生えたお尻の毛のことを謝罪させられる。

『げっ、ケツ毛生えてんのかよ』『うわっ、汚ったねえｗ』『気持ち悪い。反吐が出るぜ』『オレに剃らせてｗ』と醜悪なコメントが流れる。

コメントの量が多過ぎて画面が見えづらいほどだ。

（こんなの最低ですわ……んうう、お腹も……ふう、うううぅっ！）

浣腸液でジクジクとお腹を嬲られ、クリスは身体を悶えさせる。股間のフタナリペニスは完全に勃起し、竿にフリルを着たまま上下に揺れる。

「おやおや、勃起しているのかい？　浣腸で勃起するなんて変態のうえにマゾなんだねぇ」

「ちっ、ちがっ……違いますわ！　わたくしはマゾなんかじゃありません！　言葉に気をつけなさいっ！」

「偉そうな態度を取っていいのかい？　正直に言いなよ変態マゾなんだろう？」

「ちが……うぅ、くうぅ、ああぁ……」

妖月の言葉が毒のように染み込んでいく。抵抗する気力が削られる。

「変態マゾなんだよねぇ？」

「――わたくしは変態マゾです！　お浣腸でチンポフル勃起させる淫乱装刃戦姫ですわ！　ひぅ……んんッ！　お尻気持ちいいですの♥」

「やっぱりねぇ。一人の時はアナルでオナニーしていたんだろう？」

「ええ、そうですわ。中指を突っ込んでアナルオナニーやりまくりでしたの！　おッ♥　うぐん♥　お……おマンコよりアナルが好きなドスケベですの！」

カメラに向かって無理やり笑顔をつくる。

死にたいくらい恥ずかしいのに、身体がゾクゾクと反応してしまう。ペニスの先っぽからカウパーの雫がしたたり落ちた。

『お嬢さま最低じゃん』『さすがにアナルはないわ』『アナルマゾとかバカ過ぎ。終わってんな』『もっとお尻の穴見せて！』と視聴者が好き勝手にコメントを送る。

内臓を焼かれるような苦しみに耐える少女を心配する気配はまったくない。

（わたくしはなんてことを……）

変態性癖を公言させられ屈辱に震えるブロンドの戦姫。目じりにはうっすらと涙が浮かぶが、逃げることもできない。

時間をかけてたっぷりと浣腸を施され、引き締まった下腹部がイカのように膨らむ。キ

ユポンッと浣腸器が引き抜かれ、ようやく注入の苦しみが終わった。
しかし、それはさらなる地獄の始まりにすぎない。
「ぐっ!?　あ、ひぐっ！　あぐうううぅぅぅ〜〜ッ!?」
下腹から雷鳴のような音が響き、猛烈な勢いで排泄欲求が高まってきたのだ。
肛門を引き締めて決壊に耐えるが、とても長くは持ちそうにない。気を抜けば今すぐにでも大便を漏らしてしまいそうだ。大勢の顔も知らない視聴者の前で。
ギュルル！　グルルル！　グルルルルル！
「すごい音だねぇ。大丈夫かい？」
「だっ、大丈夫なわけないでしょ……早くおトイレに……トイレへ行かせなさい！」
「それはお客さまに聞いてみないとねぇ。はい、アンケート」
【投票。A、トイレに行かせる　B、トイレに行かせない】
すぐに回答が返ってくる。
【結果。A、トイレに行かせる　6％　B、トイレに行かせない　94％】
やはり圧倒的に行かせない人間が多い。
『当然』『知ってた』『ですよねーw』『お前ら信じてたぜ！』『笑うわw』と歓喜のコメントが流れていく。

オニグミのような怪物と繋がっている人間がまともなわけがない。
だが、それでも、クリスは懇願し奇跡を信じるしかなかった。お漏らしなんて絶対にできない。大便を鑑賞されるなんて女性として以前に人として終わってしまう。
「お願いですからトイレへ行かせて！　本当に漏らしてしまいそうですの！」
「なら何か芸でもしてみるかい？　面白い芸を見ればお客さまの気も変わるかもねぇ」
「ホントですの!?　芸をすればトイレに行かせてくれますのねっ!?」
必死の形相でカメラに訴えかける。
お腹が死ぬほどつらくて苦しくて、トイレに行けるならどんな可能性にでも賭けてみたいのだ。
願いが通じたのか『いいぜ』『やってみろよ』『チョー、楽しみ』と画面に同意するコメントが大量に流れる。
うなる下腹を押さえながら、意を決してクリスは芸を始めた。
「い、一発芸！　今からお尻で字を書きますわ！　くいっ♥　くいっ♥　くいくいっ♥　くいっ♥　ま、マゾブタと書きましたわ♥　これでいいでしょう!?」
「いいでしょうって、それだけかい？　やる気がないなら漏らしちまいな」
「うぅ……くいっ♥　くいっ♥　んひうううぅうう♥　ふ、フタナリバカ女ですわ！」

「次は？」
「はう、んん……♥　あぁぁん♥　ケツマンコ大好きですわ♥　ふうぅう……♥」
男を誘うように腰を振り、自らを貶める。排泄のためだけに恥ずかしい言葉を選んで書く。
「他にはどんなのがあるんだい？」
「ひゥ、あひうぅぅ……腋臭クサ子です♥」
「イマイチ気合いが足りないね。もっとお客さまに媚びなきゃトイレには行けないよ」
「ぐいっ♥　くいっ♥　ふんぐうぅう♥　淫乱マンコですわ！　も、もういいでしょう!?　わたくしをトイレに行かせて！　い……行かせてほしいにゃん♥　にゃんにゃん♥　雌猫クリスにゃんのお願いだにゃん♥」
手を口元で揃えて片足を上げた、猫のような媚び媚びポーズを取り、上目遣いで機嫌をうかがう。
もうなりふり構ってはいられない。
だが、流れてくるコメントは『思ってたのと違う』『全然ダメ』『やる気あんの？』『バカにしてんのか？』『ねーよw』といったものばかりで、トイレに行かせる気はまったくないようだ。

「そんな……あぐっ、ぐひあぁあああああ！」

クリスはお腹を押さえてうずくまってしまう。恥ずかしくて痛くて涙が出そうだ。

と、そこへ妖月が助け舟を出した。

「やれやれ。だれにでもできる芸じゃお客さまも満足しないさ。あんたしかできない芸をしなきゃ意味ないだろう？」

「わたくしにしか？　……思いつきませんわ」

「股間のイチモツがあるじゃないか。それでオナニーするんだよ。フタナリ女のオナニーなんか滅多に見られるもんじゃないからねぇ。お客さまもそう思っているはずさ」

その言葉に同調し画面には『オナニーしろ』という内容のコメントが溢れかえる。

（なんてこと考えますの。コイツら全員地獄行きですわ！）

人間のために命がけで戦ってきたことがバカらしくなる。こんな奴らだと知っていたら装刃戦姫にならなかったかもしれない。

だが、ごちゃごちゃと迷っている暇はない。痛みのスパンはどんどん短くなる。浣腸戦姫は勃起した肉竿を握り、真剣な眼差しでカメラを見る。

「そ、それではお客さま♥　フタナリ変態女クリスのおチンポオナニーショーをごらんくださいませ♥　はい、シ～コシコ♥　シ～コシコ♥　おチンチンしこしこ～♥　うっふ～

ん♥」

卑猥なセリフを口ずさみ肉竿を擦っていく。白魚のような指で円をつくり、根元から亀頭の先端へせわしなく動かす。

片方の手は後ろからお尻をくぐって金玉を掴み、モミモミと玉袋の間で指をくねらせる。クチュックチュッと淫らな音をマイクが拾い、先走り汁を視聴者にお届けする。

「チ～ンポッ♥　チ～ンポッ♥　チ・ン・ポ♥　シコシコ♥　シコシコ♥　シ～コシコ♥」

「あはは！　まさか本当にやるとは思わなかったよ。一体だれをオカズにしているんだい？」

「お……お客さまです♥　お客さまに見られている姿を想像してますの♥　あんっ♥　んんっ♥　露出マゾクリスは人にオナニー鑑賞されて感じてしまいますの♥　ンッ♥　それシ～コシコ♥」

「もっとよく見せてあげなよ。それに笑顔でね」

「あはっ♥　ひゃいい♥　え、笑顔でオナニーしますわ♥　ニコニコ♥　ニコニコ♥　笑顔でおチンポしこしこっ♥　あっは～ん♥」

淫蕩な笑顔を浮かべセンズリする薔薇の戦姫。

『いいぞ、いいぞ』『マジでオナニーしてやんのw』『フタナリオナニーきたー！』『もっ

と腰振れよ』と反応も悪くない。

大人数に見られている快感がさらに手の動きを加速させ、感度が何倍にも何十倍にも膨れ上がる。

自慰の経験はあっても、ここまで昂るのは初めての経験だ。気持ちよくて心地よくて、生えたばかりのフタナリチンポはすぐに絶頂を迎えた。

カメラに向かって白濁液を放出する。

ブビュル♥　ブブビュル♥　ビュクウウウウウウウ～～ッ♥　ドッピュン♥

「お……おほおぉおおおぉ♥　イグッ♥　イグッ♥　イグうううぅうううぅぅ♥　画面の前のお客さま♥　わたくしのイキ姿をよく見て見てぇ♥　ほぉ♥　ザーメンぶりぶり出ちゃってますのおぉおおおおお♥　ひぐうぅうううううぅう♥」

白目を剥きながらイキまくるフタナリ戦姫。

射精を見られることが恥ずかしいことだとわからない。頭の中は便意で埋め尽くされ、トイレに行くことしか考えられない。

妖月が再度アンケートを取り、クリスは祈るように画面を見つめる。

【結果。A、トイレに行かせる　37％　B、トイレに行かせない　63％】

「んうぅ!?　やぁ、あぁぁあああ……！」

もう何度限界を迎えたかわからない腹部を押さえながら、クリスは最後のお願いをする。
これでトイレに行けなければここまでの恥辱も努力も水の泡だ。
「もう一度チャレンジさせて……くうう！　お腹が裂けそうなんですの！」
「今のでダメならもう無理さ。それより、いい加減正直に言ったらどうなんだい？」
「なんの話を……隠し事なんてしていませんわよ」
「いいや『トイレトイレ』ってそればかりじゃないか。もっと具体的に何がしたいか言うんだよ」
「!!　で、でも……それは……」
妖月の意図は理解できる。視聴者も同じことを考えているのだろう。
だが、それを口に出したらすべてが終わってしまう。乙女が人前で絶対に言ってはいけない言葉だ。
（どこまで品性が腐っていますの。で、でもわたくしにはそれしか……）
悩んだ末にクリスは、恥辱の決断をする。
「し……したいですわ……」
「ん～？　何をだい？」
「お……あの、大きい方を」

「舐めてるのかいあんた。大きい方なんて言い方じゃわからないねぇ」
「そ、その……お……オシッコじゃない方ですわ……あの……」
「だーかーらー、具体的に言ってくれないと伝わらないんだよ。そうだろう？」
視聴者も同意する。
口から直接、羞恥セリフを言わせたいのだ。
「くっ、ぐぅ……そ、その。あの……う……っち……ですわ……」
「もっと大きい声で。聞こえないねぇ」
「ん……ち……ですわ……」
「お客さまに聞こえるように」
「お、ぐぅううぅ！　ぅ……ン、ち……ですわ……くぅぅ……こんなのひど過ぎます！」
「もっとはっきりと」
執拗に嬲る四尾の妖狐。クリスの精神力がみるみるうちに削られていく。痛くて痛くてお腹に溜まったモノを出したくてたまらない。
（し、仕方ありませんわ。もう無理なんですの……）
忍耐力が限界に達し、屈服瞬間が訪れた。
「ぐぅ……う、う、う、ウンチですわ！」

「あれ？　今ウンチって言ったのかい、装刃戦姫サマ？」
「そうですわ！　ウンチ！　ウンチ！　ウンチですわ！　ウンチがしたいですの！　お客さま、わたくしにウンチをさせてください！」
「まだ気取ってるねぇ。ウンコだろう？　ウンコがしたいって言いなよ」
「そ、そうですわね♥　ウンコですわ♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ぶりぶりウンコがしたいですわ♥　きったないウンコがしたいのです♥　ぐ……ぐうううぅッ♥」
声を張り上げ大便の名称を叫ぶ。惨めでみっともないはずなのに、マゾヒズムが疼いてしまう。
「もっとだよ。お客さまに誠意が伝わるようにねぇ」
「ウンコをさせてくださいませ♥　便秘でぎっしり大便が詰まったお腹から排泄させて♥　ケツ毛の生えた糞穴からウンコを出したいんですの♥　茶色くて立派なウンコをしますから♥　ブリブリさせてぇ♥　ブリブリッ♥　ブリブリッ♥」
「それだけかい？」
「ぶりぶりウンコ♥　ぶりぶりウンコ♥　最低下痢グソ♥　淫乱マゾ大便♥　肛門からくっさいウンコをひり出したいですの♥　くっさいウンコをいっぱいっ♥　いっぱい♥　んくうぅぅう♥」

「もっとだよ。もっと言いな」

「一本糞♥　ゲリゲリ糞♥　コロコロ鹿糞♥　いっぱいウンコしますから♥　汚い激臭ウンコがしたくてたまりませんのおおぉお♥　お客さま、どうかわたくしにウンコをさせてください♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ウンコおおぉおおぉおぉ～～♥」

汚物の名前を連呼する最低最悪マゾ雌戦姫。

淫猥に蕩けきった顔に、高貴なプライドなど一欠片もない。あるのは動物的な排泄欲求だけだ。

Eカップ美乳を揺らし、フタナリチンポをふりふりしながら、最低のおねだりをしてしまう。

『ウンコウンコってバカかコイツ』『本人は真剣なんだから笑っちゃ悪いよなw』『いや笑うだろこれは』『人として終わってるぜw』『お嬢さまでもウンコは臭いんだってよw』と視聴者からも嘲笑され、恥辱に意識が遠のきそうだ。

そして、運命のアンケートがスタートした。

散々恥をかいたクリスの結果は、

【結果。A、トイレに行かせる　59%　B、トイレに行かせない　41%】

「やった！　やりましたわ！　トイレに行って構いませんのね。今すぐ鎖を外しなさい！」

結果に歓喜し胸を撫で下ろす。
痛む下腹を最後の精神力で抑え込み、卑劣な調教者に命令する。
しかし、妖月は一ミリの落胆も見せず、次なる手段に出た。
「お喜びのところ悪いけど、まだ一つ質問が残っているよ。アンケートスタート」
【投票。A、ここでオマルに排泄させる　B、奥にある洋式トイレに行かせる】
薔薇のような美貌から血の気が引く。
「そんな……う、嘘でしょう!?　卑怯ですわよ！　わたくしは認めませんからね！」
「それも含めてすべてお客さまが決めることさ。さあ、結果が出るよ」
（B！　絶対にBですわ！　そうに決まってます……！）
Bが勝つことを神様に祈る。今のクリスにはそれしかできない。信じる者は救われると思い込むしかない。
そして結果が示された。
【結果。A、ここでオマルに排泄させる　94％　B、奥にある洋式トイレに行かせる　6％】
「い、いや……」
最悪の回答が表示される。画面は嘲笑するコメントで埋め尽くされ、虹色に染まっていた。

絶望が限界の桃尻を襲い、下腹から聞こえる轟音は落雷のように凄まじい。

ギュルル！　グルル！　ゴギュルル！　グギュルル！　グルル！　グルルルッ！

「や……あぁ、いやあああああぁぁぁ!!　こ、ここで排便するなんて！　生中継されながら漏らすなんて絶ッ対に嫌ですわ!!　ゆ、夢ですわよね!?　こんなの現実じゃありませんわ！」

「ごちゃごちゃうるさいねぇ。お客さまが決めたんだ仕方がないだろう。ほら尻を突き出しな♥」

「あああああぁぁあああああああああッ!!」

イヤイヤとかぶりを振るクリスだが、アンケートの結果には逆らえない。

ぷりんっとお尻を突き出し、用意された白鳥のオマルに菊門をロックオンする。座ることは許されず中腰の体勢を強要される。

薄ピンク色のアナルがヒクヒクと蠢き、ムクリと皺を伸ばして孔を開いた。情けないオナラがぷうぷうと漏れ、破滅へのカウントダウンを始める。

そして、溜めに溜め込んだ汚泥が凄まじい臭気と共に解放された。濁流のような轟音が部屋中に響き渡り、マイクとカメラに拾われる。

ブ、ブリュリュリュウウゥウウウウウ！　ブリッ！　ブリュ！　ブリュリュ！　プウゥ

～！

「いやぁあぁぁあぁ♥　見ないで♥　見ないでえぇぇえぇぇぇ♥　で……でる♥　でてるっ♥　でちゃってますのおおおおお♥　ウンコ漏れてる♥　ウンコ漏らし生中継しちゃってますのおぉおおおぉお♥　オマルに公開生ウンコしてますの♥　くっさい♥　くっさいウンコいっぱいでちゃいますわ♥　一週間溜めた便秘グソがでるううぅううう♥　おひいイイイィィィ♥」

最初に水のようなゲリ便が吐き出され、茶色の液体が噴水めいたアーチを描き、純白のオマルをドロドロに汚していく。

あまりの悪臭に鼻を押さえずにはいられないが、まだこれで終わりではない。

ゲリ便のあとに見事な一本グソがひり出される。

ブリッ！　ブリブリッ！　ブリブリッ！　ブリブリブリッ！　ヌグウウウウゥゥ～～ッ♥

「ひいいいいいぃぃぃ～～ッ♥　い……一本グソ♥　棒ウンコ♥　アナコンダみたいな極太極長ウンコがでちゃってますのおおおぉぉお♥　おぐッ♥　ひうぐゥッ♥　チンポ♥　チンポみたいに立派なロングロング大便漏らしてますわ♥　雌奴隷の最低マゾグソがモリモリでてりゅう♥　か……感じる♥　感じちゃいますの♥　脱糞生中継でアクメするうう

ううううぅぅ♥」

金髪縦ロールを振り乱し、排便の快感に溺れていく。倒錯したエクスタシーが身体中を這いずりまわる。排泄の快感でフタナリペニスも刺激され、肉竿が最大限に怒張した。

マゾ金玉がフル稼働し、おびただしい精子が吐き出される。

ボビュ♥　ブブビュク♥　ドバッ♥　ビュバババアアアアア♥　ゴブッ♥　ドピュピュピュ♥

「いぐウウウウゥゥゥウ♥　わ……わたくしチンポもイってますのおぉおおおぉ♥　ウンコしながらチンポでイグ♥　チンポ絶頂しながらウンコでイグ♥　チンポもクソ穴もどっちも最高ですのぉおぉおおお♥　画面の前のお客さまもいっぱい見てくださいね♥　わたくしのドマゾ変態ウンコ射精♥　白濁スカトロアクメ♥　ぶりぶりウンコとぷりぷりザーメンお漏らししてるところを見て♥　クソ漏らしながらザーメンお漏らしする変態戦姫をバカにしてえぇぇえええええ～～ッ♥」

獣のような喘ぎ声でスカトロ射精に溺れるクリスティーナ・エイミス。

カメラに汚れたお尻を見せつけて、たっぷり三分は排泄、射精し石畳に倒れ込む。

オマルの中は汚物がパンパンに詰まり、今にも溢れ出しそうだ。

画面の中では『ホントに漏らしやがった！』『汚ったねえｗ』『くっさ』『うわ～最悪……』

『クリスちゃんウンコ漏らしおめでとう♪』『この動画拡散してやろうぜｗ』と嵐のような勢いでコメントが流れていく。

「あ～臭い臭い。臭過ぎるよ装刃戦姫サマ。もう人間じゃないねぇ」

「うぅ……ひっく、最低過ぎますわ……もうお嫁にいけませんわ……」

「泣いているのかい？　ま、あたしだって悪魔じゃないさ。このアンケートで最後にしてやるよ。お客さまに感想を聞かないとねぇ」

画面に新たな問いが提示される。

【投票。A、満足した　B、普通　C、イマイチ　D、こっちまで匂うほど臭かった】

「や、やめなさい！　も、もう……こんなの嫌ですの！」

涙声で止めるように呼びかけるが、女狐は耳を貸さない。

無慈悲にも結果が開示される。

【結果。A、満足した　0％　B、普通　0％　C、イマイチ　0％　D、こっちまで匂うほど臭かった　100％】

「ううう……あああ、わあああああああああッ!!　あぁぁあ……」

汚物で汚れたお尻を突き出して、慟哭するお嬢さま戦姫。装刃戦姫として、乙女としてのプライドを完全粉砕され、恥辱に身を任せることしかできない。

に漏らしやがった
ww
汚ったねえw
うわーwww
くっさ
っあああああああ
わ〜最悪……
やりやがった
まじかwwww
しおめでとう♪
ww

放送が終わっても長い間その場から動くことができなかった。
汚臭漂う調教部屋から。

◆◆◆◆

三人が監禁されてから十日が経過した。
クリスは妖月に嬲られ、良平は独房に閉じ込められている。
そして、建宮流華もオニグミによる調教を受けていた。
大型犬用の首輪を着けられ、頑丈な鎖が壁に繋がっている。神器結晶の力なしでは脱出不可能だ。
フタナリペニスは二十センチを超えるほどに成長し、肥大化した睾丸と共に割れ目の上にぶら下がっている。
世話をしている小鬼には「へへ、彼氏の二倍はあるんじゃねえか。この変態フタナリ女」と嘲笑される始末だ。
まともに風呂にも入っていないので体臭もキツく、妖月に顔をしかめられた時は、恥ずかしくて涙がこぼれるかと思った。
（必ず脱出するチャンスはあるはず。あきらめてたまるものか）
切れ長の双眸に宿る闘志はまだ衰えてはいない。と、分厚い鉄の扉を開けて鬼蛙が入室

した。

屋上で戦った時のダメージは回復し、前と変わらない薄ら笑いを浮かべている。

「久しぶりだねサクラヒメ。調子はどう？」

「ふんっ、貴様のおかげで最悪だ」

「変わらない様子で安心したよ。じゃあいつものように調教を始めようか」

「ッ……やってみろ！」

自らの不利を理解していても、気丈に怨敵をにらみつける。生きて帰るためにも前のような無様は晒せない。

鬼蛙はでっぷりとした身体を揺らすと、黒髪乙女の腰に手をまわし弄ぶ。

瑞々しい唇にキスをすると、フタナリ陰茎を丁寧に扱く。薄暗い部屋の中に淫猥な水音だけが流れる。

クチュッ♥　ンチュッ♥　クチュチュッ♥

「んッ♥　んあ♥　あッ♥　キスなんてするなぁ……♥　はむ、ちゅるんッ♥　ン……♥」

「クフフ、もうこんなに硬くなってるじゃないか」

「ひゃうううぅうッ♥　お……おチンポ磨かれてる♥　ゴシゴシされてるううぅう♥　うくうぅうううぅううう♥　ふああ♥　またザーメン出てしまうぅう♥」

熱に浮かされたように思考が淫悦に蕩かされ、時間があっという間に流れていく。肉竿が何度も硬直し、何度も白い粘液を吐き出した。

「んんっ♥　はぁ♥　はあァァ……♥」

「少し休憩しようか」

七度目の射精を迎えたところで、鬼蛙は休憩を取った。

椅子に腰かけ、薬を水で流し込む。まだ全快していないため、妖月特製の治療薬で痛みを和らげているのだ。

飲み終わるのを待って、サクラヒメは訊ねた。

「わたしが言うのもおかしいが……なぜキスやそ、その……手淫ばかりなんだ。いつものフタナリ調教はどうした」

「もっと激しいプレイがお望みだったかな？　キミも好き者だね」

「茶化すな。わたしに手心を加えて何を企んでいる！」

「そうだね。キミにはボクの計画を話しておこうかな」

「計画だと？」

サクラヒメを利用して神鬼、羅轟丸を復活させようとしていたことを包み隠さず話す。

黒髪乙女の容貌が徐々に怒りで染まっていく。

「聞くだけでもおぞましい計画だな。だれがそのようなことに手を貸すものか」
「本当にそう思ってる？　装刃戦姫が命を懸けるほどの価値が人間にあるのかな？」
「戯言を。そそのかしているつもりか」
つれなく返事を返すが、鬼蛙の憂いを帯びた瞳に困惑する。なぜか心臓が高鳴り、良平に感じるような母性が掻き立てられる。
鬼蛙はじっと目を見つめ、
「キミの両親を殺したことは謝るよ。ごめん。でも、オニグミが支配した世界は今より必ず良くなる。だからキミは仲間になって欲しい」
「……話は終わりか？　誇大妄想を垂れ流したいなら、花柄の日記帳にでも書くんだな」
「残念だよ。じゃあ最後にもう一つだけいいかな？」
鬼蛙は深呼吸をすると、真剣な面持ちで口を開いた。
「ボクと結婚しない？」
静寂。それから流華の細面が真っ赤になった。
「ふ、ふ、ふざけるな！　正気で言っているのか!?　貴様と結婚するくらいなら自害した方がマシだ！」
「けっこう本気なんだけどな。ボクとキミって身体の相性いいみたいだしさ。顔はともか

く良平くんより気持ちよくさせる自信はあるよ」

「――本当に下衆だな！　も、もう二度と口をきくな！」

ふくれっ面でそっぽを向く黒髪戦姫。鬼蛙は肩をすくめていつものニヤけ面に戻ると、オニグミの歴史など、とりとめのない話をする。

調教する気はすでに失せているようだ。

（まったく何を言っているんだ。け、結婚なんて……）

まだ顔が火照っている。良平に校舎裏で好きだと告白された時のように。

（自分を殺そうとした女を口説こうとするのか。フタナリで恥ずかしい変態のわたしを……い、いやただの気の迷いだ！　嬉しいわけなんてない……！）

悪鬼に惑わされる装刃戦姫サクラヒメ。

今この瞬間、淫獄の奈落へ足を踏み出したとも気づかずに。

◆◆◆◆

二度目の罰ゲーム当日。

青空の下、少年たちが公園で走り回っている。ブランコやジャングルジムで遊び、鬼ごっこをしたりと元気いっぱいだ。

「次はあいつが鬼だぞー！」「逃げろ！」「ちょっと待ってよー」

賑やかな声が聞こえてくる。浅黒く日焼けした肌が健康的でまぶしい。そこへ古風な着物を纏った女性が現れた。炎天下でも汗一つかいておらず、ウェーブのかかった黒髪を後ろで束ねている。

「まったく忌々しい太陽だねぇ。ま、見物人には困らなそうだけど」

すぐそばにはキャスターの付いた大きなケージがあった。人間一人くらいなら余裕で収納できる大きさである。

黒い布がかけられ中をうかがうことはできないが、微かに物音が聞こえ、何者かが潜んでいることは明白だった。

女性は少年たちの方を見ると、ルージュが塗られた唇を開き、透き通るような声で言った。

「ねぇ坊やたち。ちょっといいかい？」

「なになにお姉さん？」「どうしたんだよ」「何かあったの？」

「あたしは動物の研究をしているんだけどね、新しく担当している子が人見知りで困っているのさ。よければこの子と遊んでやってくれないかい？」

「いいよ！　遊んであげる！」「俺も動物好きだぜっ！」「僕はちょっと苦手かな……」

少年たちは興味津々といった様子で、期待に目を輝かせる。

「あら、動物がダメな子もいるのかい。弱ったねぇ。天気がいいから外に出してやりたいのだけど」
「だいじょうぶだって。お姉さん、噛んだりしないよね？」「ビビんなよ。俺もいるし平気だって」「う、うん……」
「ありがとう。もちろん噛んだりなんてしないよ。たくさん遊んでやっておくれ」
「やったー！」「おうっ！」
「ただし、珍しい動物だから驚かないようにね。クリス出ておいで」
女性、妖月はケージの扉を開いた。
中から出てきたのは動物、クリスティーナ・エイミスだ。
蒼い瞳や毛先をロールさせたブロンドヘアーと、可憐な美貌に変わりはないが、今日の彼女は一風変わっていた。
（うぅ……最低の衣装ですわ）
ウエストがよくくびれた肢体にはピンク色のレオタードを纏い、頭には豚耳のカチューシャをつけている。
胸と股間部分にだけ穴が開けられ、Eカップ美乳やフタナリペニスも丸見えだ。整った小鼻は鼻フックで吊り上げられ、醜く歪んだ乙女の鼻腔が晒される。

鼻フックを牽引する紐のもう一端にもフックがあり、肛門に引っかかっている。おまけにその上から外れないように、ペニスバイブが差し込まれていた。

バイブ後端部分からは豚の尻尾がチョロンと生え、まるで家畜のようだ。

徹底的に女性を辱める豚のコスプレに、クリスは歯噛みする。

（こんな無様な姿を晒すなんて……おまけに子供に見せつけるなんて正気じゃありませんわ。妖月あとで覚えておきなさいッ！）

最低コスチュームを着せられた恥辱と屈辱で、身体がメラメラと燃えそうだ。

白くきめ細やかな肌が怒りに震え、この屈辱は一生忘れられそうにもない。だが、罰ゲームは絶対だ。クリスは四つん這いになると、恐る恐る少年たちの前へと進み出た。

「妖月……！」

「さっさと坊やたちに挨拶するんだよ。まったく使えない豚だね」

「っ……ええ」

いきなり変態女が登場し、動揺を隠せない少年たち。しかし、悲鳴を上げたり、この場から逃げ出そうとする者はだれ一人としていない。

（ふふ、よく効いているようだね）

妖月の声を聞いたその瞬間から、呪力で常識を改変させられているのだ。

豚のコスプレをして、ペニスの生えた変態女を、珍しい生き物だと思ってしまう。
純粋に目を輝かせる少年たちを前に、クリスは最高に恥ずかしい雌ブタ口調で、肉竿を硬くしながら自己紹介を始めた。
「ぶ……ぶひっ♥　ぶひぃっ♥　わたくしは雌ブタクリス♥　き、今日はあなたたちと遊びに来ましたの♥　淫乱ブタマゾをいっぱい可愛がって欲しいですわ♥」
「こんにちは、お姉ちゃん」「すごいオッパイママみたい」
「好きに身体を触ってもらって構いませんわよ♥　お、オッパイでもお尻でも♥　その……フタナリチンポでも♥　んくうううう♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ぶひひんっ♥」
豚の鳴き真似をするたびに、灼熱の恥辱が身体を焼く。
「フタナリ？」「おチンチンのこと？」
「そう、おチンチンのことですわ♥　わたくしは女性なのにおチンポが生えていますの♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　性欲マシマシの変態両性具有ですわ♥　ふごっ♥　ほごぉ♥」
「へー、変態なんだ」「マジかよ。やばいじゃん」「う……うわー」
「坊やたちまずはこれで遊んでみないかい？　雌ブタの鳴き声をよく聞こうじゃないか」
言って妖月は乗馬用のムチを取り出した。
先端がハート型で見た目は可愛らしいが、威力は本人が調整した折り紙付きである。

少年の一人が手渡されたムチを見て、不思議そうに訊ねる。幼い彼には使い方がわからない。

「お姉さん、これどうしたらいいの？」

「そいつはね、こう使うのさ」

妖月は胸元からもう一本のムチを取り出すと、クリスのヒップへ痛烈に打ち付けた。

バチィッッッッ！　バシィッッッッッッ！

「――――ッ!?」

耳をつんざく鋭い音が響き、白雪のような柔肌に真っ赤な痕が残る。ヒリヒリと熱を帯びる痣が見るからに痛々しい。薔薇の装刃戦姫はたまらず悲鳴を上げた。

「ヒッ、ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃ！　いっ、痛いッ！　痛い！　痛いですわ！」

「ほうら、いい声で鳴くだろう？」

「だ、だいじょうぶなの？　痛そうだけど」

「平気さ。コイツはいじめられて喜ぶマゾ豚だからねぇ。だろうクリス？」

「ひゃ……ひゃい♥　ぶひっ♥　ぴぎっ♥　ぶひぃぃっ♥　わたくしは変態マゾですから平気ですわ♥　遠慮なく叩きまくってくださいまし♥　ぶひんっ♥　ふごごオオォンッ♥」

媚びた笑顔で鼻を鳴らしながら、ムチ打ちをおねだりする。ピンクのレオタードが汗で蒸れ、恥ずかしい淫臭を発散する。

鼻フックのおかげで上ずったしゃべり方になってしまうが、それを直すこともできない。みっちりと教え込まされた雌ブタセリフを口にしてしまう。

「ホントに叩いていいの？」

「ええ♥　好きなところを叩いていいですわ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ブヒブヒブヒ♥」

「それじゃあ……お尻！　えいっ！　えいっ！」

本人から許しをもらった少年は、容赦なくムチを打ち付ける。

針のような音が空気を切り裂く。

バシィッッッッッッ！　バシィッッッッッッ！　バシィッッッッッッ！

「ひぐっ♥　ひぐうぅぅぅぅ♥　ぶヒィ♥　うぐうぅぅぅぅ♥　ホンゴっ♥　ぶひゃん♥　フゴッ♥　ホゴオオオオオオオオッ♥」

「やあっ！　たあっ！」

「おひぃいいいいいッ♥　ぐうっ♥　ブヒュゥ♥　ぐひいいいいいッ♥　もっと叩いてえ♥　もっと♥　もっとマゾ豚いじめてえッ♥　ぶひっ♥　ブホおぉおおおおッ♥」

子供に尻を叩かれて歓喜するクリスティーナ・エイミス。下品に豚鳴きをしながら、被

虐の快感に陶酔する。

死にたくなるくらい惨めなプレイに興奮し、フタナリペニスもすでにフル勃起状態だ。

ロール金髪を振り乱し、Eカップ美乳をプルンプルンと揺らす。頬が紅潮し魅惑的な蒼い瞳が蕩け出す。

「次は背中！　えいっ！　とおっ！　えいっ！」

「ぃぎぃッ♥　いだい♥　ぎもぢいいいいいいぃ♥　ぶひっ♥　ブヒン♥　ブヒほおおぉおおおおおおおお♥　フゴッ♥　フゴフゴッ♥」

「えいっ！　やあっ！　とおっ！」

「うぎいいいいいぃぃ♥　背中いだい♥　いだい♥　でも気持ちイイ♥　いいのお♥　わたくしのマゾボディもっといじめてッ♥　マゾ雌ブタを真っ赤にしてくださいまし♥　あなたの玩具だってぶひっふごッ♥　刻み込んでエエエェエエエ♥」

白い平原に赤黒いミミズ腫れが浮かぶ。痛みがマゾヒズムを刺激し、本物のように尻尾を振る。

「それから……オッパイ！　オッパイ！　えいっ！　ていっ！」

「ぁん　ッ……んんんん♥　横乳っ♥　おっぱいがぁ♥　ブヒッ♥　ぶひいッ♥　オッパイ変になりましゅうぅぅぅう♥　リンゴみたいになってしまいますわッ♥　ひ……ヒグ

ッ♥　ン♥　ち……乳首までぇ!?　そっ、そこ弱いですのおォ！　勃起乳首ペンペンされてるぅぅうううぅう♥　んごほォ……♥」

「はしたない雌豚だねぇ。あー、みっともない」

「ぶひっ♥　おほッ♥　チンポみたいにおっきくなった長乳首潰されますのおおぉお♥　ドピンクエロ乳輪と一緒に刺激されてしまいますわあぁぁ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ブヒヒヒンッ♥」

ムチで打ちすえられながら、下品に喘ぐドMブタ乙女。

彫刻のような美しい肢体に奔る、紅い流線が痛々しい。だが、クリスのマゾ神経はこの異常プレイでも興奮してしまっていた。

少年に叩かれてカウパー汁を垂らしながら絶叫する。

「ブヒッ、ブヒッて恥ずかしくないのかいこの雌ブタは。しかもチンポまで勃起させるなんて本物の変態だねぇ」

「ブヒイッ♥　は……恥ずかしいですわ♥　鼻フックを付けられて淫乱衣装でこんなこと♥　ひど過ぎます♥　でも……でもぉ♥　おチンポ止められませんのおおおぉおお♥　おバカ金玉がザーメン大量生産してすぐ勃起しちゃいますの♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　もっとムチで叩いてえええ～ん♥」

勃起したフタナリ肉竿から射精衝動が湧き上がり、思考が切れかけの電球のように点滅する。

「へぇ、そんなにムチで叩かれたいのかい？」

「ひどいことされるのが大好きなんですの♥　ほおぉおおおおぉお♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　アン……ッ、躾けて欲しいですわ♥」

「坊やここを叩いてやりな。もっとお姉ちゃんが喜ぶと思うよ」

「うん、わかった！」

「ぶひっ♥　え……？　ちょっ、ちょっと待って！　そこはダメですの！　そ……そんなところを叩かれたらわたくし！」

妖月が指し示したのはクリスの股間で弾むデカ金玉だ。

もちろん敏感な性器を打たれればただでは済まない。ただでさえフタナリ調教で感じやすくなっているのだ。

責められて射精を我慢できる自信など、まったくない。

（キンタマなんて絶対に無理ですわ！　頭がどうにかなってしまいます！）

幼い少年たちの前でそれだけはしたくない。

だが、彼女の気持ちなどまったくお構いなしに事態は進み、背後から一直線に金玉へム

チが放たれた。
バチィッッッ！　バチィッッッッッッン！
「ふぎぃぃぃぃ♥　おぼッ♥　ブヒッ♥　ぶほおおぉおおおおおッ♥　金玉♥　金玉♥　キンタマいだぃぃぃぃぃぃ♥　おぐうううぅうううう♥」
「えいっ！　えいえいっ！」
「い、いけませんわッ♥　フグッ♥　今敏感なんですの♥　感じやすくなってますの♥　ま……マゾキンタマ叩かないでえェ♥　ブフううぅうううぅ〜〜〜ッ♥」
「ふふ、叩かれたらどうなるんだい？」
「イクっ♥　おチンポがイッてしまいますのぉ♥　ここでお漏らししてしまいますから♥　白いオシッコでちゃいますのおおおぉおお♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ブヒいッ♥　金玉ダメえぇぇぇぇぇッ♥」
気が触れるような痛みで、弓なりに身体がのけ反る。
鈴口がエサを求める鯉のように開閉し、白粘液が昇ってくるのを堪えられない。
「白いオシッコ？　お姉ちゃん何言ってるの？」
「叩いてやればわかるさ。もっと振りかぶってやりな坊や」
「うんっ！　わかった！」

「ぶひいんっ♥　ぶひッ♥　ぶひッ♥　だ、ダメえぇえええええええええぇぇぇぇぇ♥」

クリスの懇願もむなしく、少年は頭の上までムチを振り上げ、力いっぱい金玉を打ちすえる。

バチッ、バチイィィ〜〜〜〜ッッッン!!

尖った炸裂音が公園にこだまする。

瞬間、痛みと快美電流が背筋を駆け巡り、お嬢さま戦姫は強制的に絶頂させられる。

敏感マゾ陰茎が強烈な刺激に耐えられるはずもなく、金玉と亀頭が小刻みに震え、勢いよく精子が放たれた。

ブリュッ♥　ブリュッ♥　ビュジュリュリュウウウゥゥ〜〜ッ♥　ドプ♥　ビュバババ♥

「ぐ……ぐひいィィイィィイッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イグうぅぅ♥　ぶひぶひブヒン♥　フタナリチンポがムチでいぐ♥　雌おねだり金玉がムチでいぐ♥　ぶひっ♥　おほッ♥　豚ザーメンでるッ♥　子供に躾けられて白いオシッコでちゃいますわぁぁあああ♥　ぶひゅうぅぅッ♥」

白濁液をまき散らしながら、だらしなくマゾアクメを極めるお漏らし乙女。

公園に濃厚精臭がたちこめ、少年たちは皆呆然（ぼうぜん）としている。自分たちより年上の女性が、

それもモデル顔負け美少女が公然とお漏らしをしているのだ。にわかには信じられない光景である。

しかし、この異常事態に逃げ出す者は一人もおらず、代わりにワッと驚嘆の声が上がった。

「うわっ、すごい！　なにこれっ!?」「マジでションベン白いじゃん！」「うわわわわ！　お姉ちゃんどうなってるの？」

「コイツは特殊な豚だからね。気持ちよくなるとこうして真っ白なオシッコを漏らすのさ。面白いだろう？」

「うんっ、おもしろいっ！」「すげえな！」「う、うんうんっ！」

「だろう？　お次は……そこの坊やが遊んでくれるかい？」

「俺？　いいぜまかせろ！」

元気のよい少年に妖月が耳打ちする。一方、クリスはそれどころではなく、鮮烈な快感に呆けていた。

射精を見られた恥辱が心を支配し、まともに動けない。

（ザーメンお漏らしを子供に見られるなんてもう生きていけませんわ……良平くんに知られたら確実に失望されてしまいますわね……うう、くううぅうう……）

だが、折れたメンタルを立て直す暇もなく、次の少年がクリスの背中にまたがった。
「んっ！　んうぅぅ」
ヒリヒリと痛む白肌に衝撃を加えられ、美少女戦姫は苦悶する。
次は何をされるのかと、不安だらけだ。
「ま……待って。少し休ませてくださいません……？」
「やだね！　ほら出発だ雌ブタ！」
「ぇっ!?　おっ！　おひいいいいいいいいいいいいん!?」
ヴイイィイィインッ！　ヴイイィイィイィイィインッ！
少年はアナルに挿し込まれた尻尾バイブのスイッチをオンにする。
エラの張った亀頭や太い幹が振動し、ブルブルブルと直腸を責めにかかる。入り口を優しく、内壁を荒々しく擦り上げた。
「ほぉ♥　おぉ♥　これダメ……ぶひっ♥　ぴぎいいいいいいいん♥」
クリスは壊れた玩具のように手足を痙攣させる。感じやすいアナルを攻撃され、本物の豚のごとく喘がずにはいられない。
「ぶひゅうぅぅうぅぅ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　お……お尻ぃ♥　ケツ穴感じるううううゥゥウ♥　ホゴ♥　フゴフゴ♥　ケツ穴あああぁ～～ん♥　ブッ、ブホォオオオォォオ

オオッ♥」

「俺が乗ってるんだから早く進めよ豚女！　どうどうっ！」

「はいいいいぃいっ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　フガッ♥　ぼほおっ♥」

尻尾バイブで無理やり言うことを聞かされ、命令通り四つん這いで歩き出す。

手の平や膝に砂や小石が食い込んで、可憐な美貌が痛苦に歪むが、屈辱に耐えて進むしかない。

お馬さんごっこをするように、豚声で鳴きながらハイハイさせられる。

「ぶひっ♥　ぶひひん♥　雌ブタ散歩ブヒッ♥　ン……♥　うむうぅうう♥　だ、だいぶ進みましたわよ！　これでよろしくて……？」

「よくねえよ。もっと早く歩け！　おらっ！　おらっ！」

「ぶぼひゅうううぅうぅッ♥　ぶひっ♥　す……スイッチ！　スイッチ強くしにゃいでえええエェエェエエ♥　ケツ穴♥　ウンコ穴♥　アナルが痺れるからあああああぁぁぁあ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　くうぅうううぅ～ん♥」

「うるせえ！　えい！　おらおら！」

「む……むりいいいいぃ♥　ムリですわ♥　強くしないでって言ってますのに♥　ひ……ひどいですわッ♥　うう……ブヒッ♥　ブヒンッ♥」

バイブのスイッチを操作されると、少年のワガママに逆らえない。
振動も回転も自由自在の淫悦で、被虐の荒波に飲まれていく。
「うわっ、姉ちゃんチンポ勃ってんじゃん！　マジで気持ち悪い雌ブタだな！」
「えっ？　んっ、くうぅうぅうぅう!?　そんな……チンポ勃ってる♥　わたくしのチンポまた勃起しちゃってますわ♥　なんでえェ♥　ぶひっ♥　ぼひひっ♥　アナルいじめで勃っちゃってますのおおぉおおお♥　フゴゥ♥」
前立腺を責められ強制フル勃起させられてしまうドM美少女。先ほど射精したばかりだというのに肉竿を膨らませてしまう。
でっぷりと垂れ下がったデカ金玉が子種汁を急ピッチで生産し、海綿体に血液が送り込まれる。
もう今すぐにでも射精したくてたまらない。
「公園を一周するまでやめねえからな。おらぁっ！　トロいんだよ！」
「おぐうぅうぅうぅッ♥　む……無理ですわッ♥　一周なんて歩けませんの♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ヒグゥッ♥」
「口答えしてんじゃねえ！」
「おチンポがつらいですのぉ♥　も、もう許して♥　また白いオシッコ漏らしてしまいま

すから♥　雌ブタチンポ勃起してますのおおおおぉッ♥」

少年の罵声にますます肉竿を硬くする豚奴隷乙女。鼻水を噴き出しながらどうにか前へ進もうとするが、手足が上手に動かせない。肛門バイブで生まれたての小鹿のような挙動になってしまう。

そして、公開絶頂に慣らされた身体がアナル刺激に耐えられるはずもなく、あっさりと二度目の精液が解き放たれた。

ボチュ♥　ボビュル♥　ドビュルルルウウゥゥウ♥　ビビュル♥　ドポポポポポ♥　ドピュ♥

「ぶひっ♥　ぶひゃあぁぁぁッ♥　ま……またイクッ♥　またイグ♥　ケツ穴イグ♥　クソ穴イグうぅぅうううぅ♥　ブヒンッ♥　ぶほっ♥　アナル責めでイっちゃいますの♥　ケツマンコでアクメすりゅうぅうぅぅうッ♥」

恥ずかしい言葉を連呼しながら四つん這いで、臭いザーメンをまき散らす。

涙と鼻水を垂らしながら肛門で絶頂し、地面につっぷす。弄ばれるエクスタシーに腰が抜けて歩けない。むせるような栗の花の匂いが、少年たちの鼻腔を刺激した。

背中の上の少年は不満そうに口を尖らせ、

「ちぇっ、もう終わりかよ。つまんねえの」

「やれやれ、早漏のマゾブタで申し訳ないねぇ。帰ったら厳しく躾け直しておくよ。さあ、最後はそこの坊やだよ。怖がらないでこっちに来な」

「う、うん……」

気弱そうな少年がおずおずと進み出た。先の二人と違って大人しい性格のようだ。

妖月は優しく少年の肩を掴むと、クリスの前に連れ出した。言葉に呪力を混ぜ、心を惑わせる。

「坊やは今みたいなことはしたくないようだねぇ。どうしてだい？」

「だって、お姉ちゃん苦しそうだし……かわいそうだもん」

「へぇ、いい子だねぇ。こんな変態女に気を遣ってくれるのかい」

（はぁぁ……助かりましたわ。この子ならひどいことなんてしませんわよね。んっ♥　うぅぅ♥　もうこれ以上の無様は晒せませんわ！）

心の中で安堵のため息を吐くクリス。だが、その目論見は甘く、次なるフタナリ淫辱が襲い掛かる。

老練な妖月がこれで済ませるわけがない。

「ひどいことが嫌いなら、コイツの鼻を見てやってくれないかい？　そして教えてあげて欲しいんだよ。今の自分の姿をねぇ。それくらいなら構わないだろう？」

「う、うん。いいよ」
「さっきからなんの話をしていますの？」
クリスは状況が飲み込めず、妖月の顔をうかがうばかりだ。
自分の姿をわざわざ教えてもらう意味がわからない。もう散々雌ブタ痴態を晒しているのに。
そして、疑問は恥辱と共に氷解した。
大人しい少年は鼻フックで吊り上げられた豚鼻を見ると、
「えっと、お姉ちゃんの鼻は豚みたいになってて……あっ」
「気づいたかい。ほら、言ってやりな」
「その……は、鼻毛が生えてるよ」
「――――ッ!?」
鼻孔をまじまじと観察されてうろたえる雌ブタ乙女。
鼻毛のことを指摘されて体温が急上昇する。
限界まで鼻腔を吊り上げているため当たり前なのだが、改めて見られるのは恥ずかし過ぎる。
異性に鼻毛を見せつけるなんてあってはならないことだ。

もし良平がこの場にいたら、卒倒しているに違いない。
「うわ、いっぱい生えてる。綺麗なお姉さんでも鼻毛はすごいね」
「やっ、やめなさい！　そんなところ見てはいけませんわ！」
「なに普通にしゃべっているんだい？　あんたは雌ブタだろう？」
「ぐっ、うう……ぶひっ♥　ブヒブヒ♥　見ないで欲しいブヒッ♥　いや……いやブヒッ♥」
「い、一本外に出てるのがあるよ。抜いてあげてもいい？」
「もちろんさ。ほらどうぞ」
少年はピンセットを受け取ると、鼻毛を掴んで引っ張った。
「んぐぅっ！　あ、ああ……」
鼻腔を広げられ、どうしても声が上ずる。アゴが上を向いて、チラリと見える前歯が情けなく美貌を歪める。
一息に数本の鼻毛が引き抜かれ、チクリとした痛みが内壁を刺激した。
プチッ！　プチッ！　ブチブチッ！
「ひぅっ♥　ぬ、抜かないで♥　ヒグウウゥン♥　鼻毛の処理をされるなんてつら過ぎますわっ♥　ぶひっ♥　ほごぉお♥　もうやめてぇ♥」

「それと……こっちも」
「きゅううんッ♥　反対側の穴にも生えていましたの!?」
「いっぱい生えてるよ。ほら」
「くぅっ♥　んぐッ♥　ひぃっ♥　ぶひっ♥　抜かないでぇ♥　は……恥ずかし過ぎますのッ♥　鼻毛抜かないでぇ♥　汚いですから！　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ブヒュンッ♥」
年端のいかない少年に薔薇の戦姫は翻弄される。ピンセットがグリグリと動くと、フタナリ肉竿も硬さを取り戻し、辱悦に頬が紅潮する。
「髪の毛と同じで鼻毛も金色なんだね。あっ、こっちにもあるよ」
「うくっ♥　んっ♥　言わないでぇ♥　色なんて見てはいけませんわ♥　ぶひっ♥　ふごっ♥　教えないでえぇえッ♥　んっ、くゅっん♥」
「お姉ちゃんどうしたの？」
「鼻がムズ痒くて……くしゅっ♥　ぶひゅっ♥　くしょん♥　ぶひゅっ♥　もう鼻毛抜くのやめてぇッ♥　んあぁああ～♥」
「わっ、くしゃみ!?」
あまりのくすぐったさにくしゃみが出る。片方の鼻から鼻水まで垂らましてしまい、かなり情けない姿だ。

「きったないねぇ。謝りなこの雌ブタ」
「ふごっ♥　ピギィ♥　ごめんなさいぶひっ♥　雌ブタが失礼しましたわ♥」
「坊やは大丈夫かい？」
「うん……ちょっとかかっちゃったけど」
「すまないねぇ。罰としてコイツでお仕置きしてやりな」
「これ？　う、うん」
少年は妖月から手の平サイズの注射器を二本受け取った。先端に針はなく、中の液体がそのまま噴き出すようになっている。液体の色はドロリとした白、クリスのザーメンだ。
「ま、まさか……！」
何をされるかを理解し血の気が引く剣の戦姫。
制止を呼びかける暇もなく、少年はクリスの左右の鼻穴に針を差し込み、ギュッとピストンを押す。
濃縮されたザーメンが濁流のように鼻腔へ侵入した。
ブチュ♥　ブチュー♥　ブチュルル♥
「げ……げほッ♥　げほおッ♥　ゴホッ♥　ぶふっ♥　やめてえええぇッ♥　鼻にザーメンが流れ込んできますのぉ♥　わたくしのくっさい雌ザーメンが入ってきちゃいますのっ

ほオオォオオオ♥　フゴッ♥　ほごぉッ♥　くさいいいいいッ♥　ザーメン臭いですのおぉおおおおおお♥」

「汚いね。鼻から牛乳垂らしてるみたいだよ」

「ホントだ、情けないねぇ。でもさ、嬉しそうな顔をしていると思わないかい？」

「どうしてなの？　オシッコが鼻に入っても平気なの？」

「答えはコイツが変態のチンポ雌ブタだからさ。その証拠にチンポが勃起しているだろう？」

「え……ええっ!?」

妖月の言葉通りクリスの肉竿はビンビンに勃起していた。度重なる調教で彼女の肉体は変質してしまっているのだ。

自分の激臭ザーメンの匂いで性的に興奮してしまうほどに。

「嘘ですわッ！　ぶひっ♥　ぶひっ♥　こ……こんなの……何かの間違いですわッ！　ぶひっ♥　ザーメンの匂いで勃起なんて……ぶひっ♥　フゴッ♥」

濃密な淫臭に思考がまとまらない。豚鼻で呼吸するたびに情けない音が漏れる。

「おや、鼻ちょうちんまでつくってるじゃないか。みっともないねぇ」

「ほんとだ。風船みたい」

「い、いやぁ……！　ザーメンで鼻ちょうちんなんて♥　恥ずかし過ぎます♥　う、ぅぅ……ぶひっ♥　ホゴッ♥　妖月許しませんわよ！」

白濁汁を風船のように膨らませながら、恥辱に調教者をにらみつける。

少年たちから軽蔑の視線が突き刺さり、乙女の思考が千々に乱れる。

「うぅぅ……こんなのいやぁ♥　ぶひっ♥　うひイィィイイン♥　ああ……」

「なんて無様な顔なんだい。ふふ、記念に写真でも撮っておこうか」

「き、斬る！　微塵斬りにしてやりますわこのクズ狐！　んぅっ♥　ふぐっ♥　ホゴオオオォ〜〜ン♥　ぐうぅぅ〜ッ♥」

まん丸な鼻ちょうちんをカメラで撮影される屈辱。神器結晶があればすぐにでも転身し、エスペラーダを抜いているところだ。

それが叶わない今の自分が惨めで、自己嫌悪が止まらない。

「鼻からザーメン垂らしながら言ってもねぇ。現実にあんたのマラは元気いっぱいだよ。こんな変態プレイが好きだなんて、ちょっと笑えないねぇ」

「ぐっ、黙りなさい……！　んっ♥　うぅ♥」

「そうだ、いいことを思いついた。あんたを汚臭でしかイケない身体にしてあげるよ」

「何を言っていますの……んっ！　ふごっ⁉　んくうぅぅぅ〜〜ッ♥」

妖月はクリスの鼻腔に香水を吹きかけると、感度を膣孔と同等にまで引き上げる。臭い匂いでしかエクスタシーを迎えられないように。

整った鼻梁が快感器官に変貌する。

「は、鼻が熱くてヘンになる……♥　はぅっ♥　ブホォン♥　感じてしまいますわ♥」

「まだイクんじゃないよ。お楽しみはこれからさ」

「ぐひっ!?　そ、そこは……！」

鼻フックと肛門にかかっているフックの紐を緩めて取り外すと、フックの前後を入れ替えた。

今まで鼻に入っていたフックが肛門に、肛門に入っていたフックが鼻に入るように。

悪魔のような発想にブロンド戦姫は慌てて身をよじる。

「い……嫌ですわ！　絶対に嫌です！　汚い！　不潔過ぎますわ！　あ、あなた正気ですの!?」

「暴れるんじゃないよ。じっとしてな」

「やめなさいっ！　絶対に許しませんわよ妖月！　や、あ……やめてえぇぇぇぇぇぇぇッ！」

「坊や、コイツを鼻に入れてやるんだよ。こんなこと言ってもコイツは臭いのが大好きな

変態なのさ。最低の雌ブタだからねぇ♥」

「うん。こうかな？」

「いやぁあああああああああああああああああッ!!」

抵抗むなしく肛門のフックが鼻に侵入する。

茶色にくすむ金属フックがお嬢さまの鼻孔を陵辱する。

快美の紫電が奔り、汗だくの肢体がビクンッと跳ね、濃密な雌フェロモンが腋、そして陰部から噴き出していく。

肛門内の汚臭が乙女の嗅覚を制圧し、極彩色の快美が思考を蕩かす。

次の瞬間――

ブボリュッ♥　ブボリュッ♥　ピュピピピピ♥　ドビュククウウウウゥゥゥ～～～ッ♥

「あ、う……うひイィィイイイン♥　イッてる♥　イッてる♥　イッてりゅうううぅぅぅう♥　ぶひっ♥　ぶひっ♥　ホンゴォ♥　わたくし肛門の匂いで射精してますのおおオオオォォオオオ♥　ケツマンコの匂い♥　結腸口のくっさいくっさい匂いで感じてますの♥　ブヒッ♥　ブヒイイイッ♥　豚鼻マゾアクメでイグ♥　子種汁でまくりゅ♥　雌ブタクリスは鼻マンコでドマゾザーメン出しまくりますわ♥　ブヒッ♥　フゴッ♥　フゴホゴ

ッ♥　ブヒッ♥　ブッヒイイイィィィ～～～ン♥」

肛門の匂いで昇天するドマゾの変態汚物戦姫。

身も心も完全に人ではなく、一匹の雌ブタに成り下がる。

妖月が嘲笑し、少年たちの罵倒が飛ぶ。

「あっはははは！　本当に尻の穴の匂いでイクとは思わなかったよ！　装刃戦姫コーデリアの正体がこんな痴女だったなんてねぇ。あとで良平の坊やにも教えてあげようか」

「うわっ、何これ……」「お、おい。もう行こうぜ。さすがにドン引きだっつーの」「う、うん。お姉さんってすごい変態だったんだね……キモイよ」

一番大人しそうな少年にまで軽蔑され、もう涙を流す気力さえない。

装刃戦姫として、いや人として生きていく自信もない。

（わたくし……わたくしは雌ブタじゃありませんわ……♥　ぶひっ♥　ぶひぃ♥）

許容量を超えた快感に意識が遠くなる。

燦々と降り注ぐ陽光の下、クリスの心は闇に沈んでいった。

第七回　ダブル戦姫　倒錯の射精遊戯

高級マンション最上階の一室。古風な調度品で彩られた部屋で、鬼蛙と妖月は顔を合わせていた。窓の外では雑多な光が星のように瞬いている。

フロアには封鎖結界が張られ、虫一匹入り込むことはできない。

流華、クリス、良平の三人が囚われてから三週間が経過し、フタナリ調教は日夜問わず続けられている。

彼女たちに関わりのある人間には記憶操作を施しているため、捜索願などが出されることはないが、対魔協会の監視をいつまでも誤魔化すことはできないだろう。

地下の調教部屋を突き止められるのも時間の問題だ。

「それでは今後の計画について話しましょうか」

鬼蛙が胸をさすりながら言う。まだ痛みは残るが、風明刃で刺された傷は九割方回復していた。

「サクラヒメは大分こちら側に堕ちてきていますね。説得した甲斐がありましたよ」

「コーデリアも陥落寸前さ。プライドの高い女ほど折れる時は一瞬だからねぇ」

「ただ、問題はまだあります」
「ふんっ、まあね」
二体の悪鬼は険しい表情で口をつぐむ。機嫌を損ねるだけで空気が歪み、結界内がヘドロのような呪力で満たされた。
「羅轟丸さま復活の儀式まであと十二日。最低でも一人は協力してくれないと儀式を遂行できません」
「なんだかんだ言っても装刃戦姫は強いってことかい。最後の一線を越えないのは三城良平が原因かねぇ？」
「ボクたちには信じ難い話だけど、愛の力とかいう不確定要素が原因なのかも」
「ハッ、まったく反吐が出るよ。それで何か策はあるのかい？　ここで失敗すれば次に儀式を再開できるのは二百年後。長過ぎて欠伸（あくび）が出ちまうさ」
妖月が皮肉っぽく笑う。長大な寿命を持つオニグミでも、八大鬼の立場を維持し続けることは難しい。
「調教のレベルをもう一段階引き上げましょう。二人同時調教で一気に堕とします。反撃される確率も高くなりますけどね」
「リスクは元より承知のうえさ。派手にやるならあたしの劇場を使うといい。いつでも準

備万端だよ」

「感謝します。土愚鬼や霧幻鬼のためにもしくじるわけにはいきませんからね」

鬼蛙が踵でカーペットを叩くと封鎖結界が解除された。今日はここまでのようだ。

部屋を出る前に妖月は鬼蛙に向かって、

「ここのところ特にご執心のようだけど、あんた本当にサクラヒメに惚れているのかい？人間に執着し過ぎると身を滅ぼすよ。気をつけな」

「ご忠告どうも。でも大きなお世話ですよ。彼女はボクのものになると決まっていますから」

ニキビ面でいつもと変わらない薄ら笑いを浮かべる。長い間、人やオニグミを観察してきた妖月でも鬼蛙の内面を推し量ることはできなかった。

やがて二体は音もなく闇へと消える。装刃戦姫を完全に屈服させる、フタナリ淫獄を開始するために。

◆◆◆◆

五日後。

裏社会のＶＩＰやオニグミなど、闇の住人が集まるパーティーが開催された。

彼らは贅(ぜい)を尽くした衣装でテーブル席に座り、シャンデリアと赤絨毯が輝く会場で、本

日のショーを今か今かと待ちかまえている。
ショーの内容の大半は雌奴隷の痴態を鑑賞することで、まともな人間なら脱兎のごとく逃げ出しているところだろう。
本日は装刃戦姫をお披露目すると聞きつけて、観客たちの視線はコンサートをするような舞台に注がれていた。
「噂には聞いていたがまさかこの目で見られるとはな」
「それも二人だなんて。殺してでもチケットを確保した甲斐がありましたわ」
「グフフ、今からよだれが止まらねえぜ」
種族を問わずあちらこちらから期待の声が湧き上がる。
一方、サクラヒメとコーデリアは巨大な鳥かごに囚われ、舞台の上方で出番があるまで待機させられていた。
神器結晶はいまだ敵の手中にあるが、衣装のみを限定的に解放され、見た目は転身時と変わらない。
見世物にされる屈辱。緞帳（どんちょう）の後ろで客席のざわめきを聞くだけでも、心臓が締め付けられる。
「いよいよだな」

「ええ、そうですわね」

これまでも衆人環視の中で痴態を晒したことはあったが、二人同時というのは初めてだ。観客の数もリングで戦った時とは比べ物にならず、オニグミだけでなく人間にまで嘲笑されると思うと、惨めで恥ずかしくてたまらない。

「もう一度確認しておくが、奴らの狙いはわかっているな？」

「わたくしたちの心を屈服させてオニグミ陣営に引き入れることでしょう。羅轟丸の復活まで残り七日しかありませんものね」

「逆にこの七日間を凌げばこちらにもチャンスはある。儀式の直前には神器結晶を返すはずだからな。堕ちたフリをして装刃戦姫に転身、奴らを倒し良平を助けて脱出する」

「ハァ、また恥ずかしい目に遭うのでしょうけど、他に方法もなさそうですわね。向こうはわたくしたちが儀式について知っていると思わないでしょうし」

二人は目的を再確認し決意を新たにする。鬼蛙から得た情報だけでなく、独自の調査で儀式までの残り日数も把握済みだ。

何度も絶頂したことが結果的に功を奏したのか、オニグミの警戒も和らいでいる。

（もう少しだけ我慢してくれ良平。必ず自由にしてみせる）

やがて舞台の幕が上がり鳥かごが下降を開始した。着地すると同時に目の眩むようなス

ポットライトが照射され鍵が開く。
ダブル戦姫は万雷の拍手を受け、快楽と屈辱の世界へ躍り出た。
「大変長らくお待たせしました。これより装刃戦姫サクラヒメ、コーデリアの淫獄ショーを始めます。まずは自己紹介を」
鬼蛙がマイクを握り不気味な笑顔で開演を宣言する。
「わかってはいたがなんて数だ。それにこんな格好まで……」
「まったく反吐が出ますわね」
小声で悪態をつきながら、二人はおずおずと舞台の一番前に進み出る。
神器結晶を操作されたのか、衣装の胸と股間部分だけがハート型に切り取られ、豊満なオッパイやフタナリペニスを見せつけるように露出させられる。
秘部を大勢の視線に晒され心臓がドラムのように鼓動を速めた。
内心穏やかではないが今は演技が優先だ。先にサクラヒメが自己紹介をする。
「装刃戦姫サクラヒメだ。き、今日はわたしたちの変態フタナリショーを見にきてくれてありがとう♥　スリーサイズは上から九十六・六十一・八十三♥　おチンポの長さは二十センチだ♥　雌奴隷がみっともなく射精するところを見ていってくれ♥　んっ、ちゅっ♥」
なまめかしく肢体をくねらせ、媚びるように観客席へ投げキスをする。

度重なる調教は黒髪乙女の女としての魅力を高めていた。

続いてコーデリアが艶やかなリップを開く。

「ハァイ、装刃戦姫コーデリアですわ。スリーサイズは上から九十・五十七・八十六♥おチンポの長さは十八センチですわ♥　無駄に大きなキンタマから、子種汁大量生産するところを見物してくださいね♥　雌ブタ奴隷からのお願いですわ♥　ぶひっ♥　ブヒン♥」

お嬢さまのみっともない挨拶にワッと会場が沸く。名門エイミス家の戦闘力と財力は闇の住人たちの間でも有名だ。

その一人がエロコスチュームで変態プレイをするというのだからたまらない。

「今回はお互いに責めあってもらうよ。身体のどの部分を使っても良いから先に相手を射精させた方の勝ち。負けた方には罰ゲームがあるから頑張ってね」

「コーデリアをわたしが……」

「わたくしの身体で射精をさせるなんて……と、とても素敵ですわね」

悪趣味なやり口に辟易しながらも二人は従う。堕ちたことをアピールするために、どんなに恥ずかしい命令でもやるしかない。

「手加減はしないぞ」

「もちろん。どちらが勝っても恨みっこなし。真剣勝負ですわ」

クジを引き先攻はコーデリアに決まった。サクラヒメは言われるがままに仰向けになる。

蒼い瞳がサディスティックな色を帯び、少女はチロリと唇を舐める。

「わたくし責められるより、責める方が得意なんですのよ♥　妖月さまに仕込まれたテクニック、見せてあげますわ♥」

「なんだと……んっ！　くうぅぅぅっ！　そ、そこは……ひゃうううううううん!?」

言うが早いかスラリと引き締まった足でサクラヒメの肉竿が踏みつけられる。

足裏のほどよい固さが根元から亀頭へと陰茎をシゴいていく。被虐快感に慣らされた肉竿は、瞬く間に勃起した。

シュッ♥　シュッ♥　コシュッ♥　コシュコシュコシュッ♥

「ひぅッ！　やっ、あ……足でなんて♥　くぅっ♥　は、破廉恥なことを！　だがこんなことで射精するものか……わたしは足でイクような倒錯者ではない！」

「本当かしら？　おチンポはビンビンに勃起しているようですけど」

「ひぐっ♥　こ、これはぁ……♥　ンっ♥　くうううぅぅ～ッ♥」

絶妙な足愛撫に反応して亀頭が充血し、先端からは我慢汁が溢れ出る。

包茎の皮が擦れると、クチュクチュッと淫猥な水音が奏でられた。
「やっぱり足で踏まれて感じていますのね。マゾだと聞いてはいましたけどここまでだなんて。ほ～ら、もっと踏んであげますわよ変態さん♥」
「ウッグン♥　ひゃっ、んくくうぅぅ♥　やめろお♥　つま先で亀頭フニフニするなぁッ♥　踵で金玉ブニブニ踏むなあッ♥　おチンポが発情してしまう……♥　ううん、足でなんて感じたくないのに……ぐっ♥　あうううぅん♥」
「恥ずかしいマゾ豚ですわね。次はこうしてあげましょうか♥」
コーデリアは胡坐（あぐら）をかくように座ると、両足でサクラヒメの金玉を挟み込み、プレスするように揉みしだいた。
「ほおっ!?　あっぐうぅうううううん♥　き、キンタマ圧迫されるううぅうううぅ♥」
左右から挟撃する快悦に背筋がのけ反り、打ち上げられた魚めいて肢体が跳ね上がる。
マッサージされる感触は脳が蕩けるほどに心地よく、下品な声が漏れ出てしまう。
「お……おふぅ♥　あっ、んきゅっ……金玉ぁ♥　金玉すごい♥　金玉発情する♥　ふぁぁ……モミモミするなぁぁあああ♥　サンドイッチされると感じてしまううぅぅ～っ♥」

「さっさとイッてしまいなさいな。足コキ大好きなマゾヒメさん♥」
「くぅううううぅ……♥　が、が、我慢♥　我慢♥　我慢するんだ♥　今こそわたしのチンポはできるチンポに成長するぞ♥　絶対に足コキなんかでイッたりしないッ♥　わたしのチンポはそこまで弱くない♥」
「言いましたわね。ではこちらをどうぞ♥」
コーデリアはつま先をピンッと伸ばすと、サクラヒメの皮かむり包茎亀頭に狙いを定めた。
指を器用に動かし余った包皮を引きずり下ろすと、ピンク色の中身を露出させる。
「ぐ……ぐっひいいいいいぃぃぃ♥　チンポ♥　チンポが剥かれてる♥　恥ずかしい子供チンポが大人チンポにレベルアップしてしまう♥　ひぅうううううぅ〜〜ん♥」
「はい、キレイキレイしましょうね〜♥」
「あひゅうぅッ♥　ひうッ♥　だ、ダメだ♥　剥き出し感じる♥　敏感マゾチンポが喜んでしまううぅうううぅ♥」
皮かむりペニスを外気に晒され、雌猫めいた声が吐き出される。包茎特有の弱点を責められ黒髪乙女は悶絶する。
（足コキがこんなに気持ちいいなんて……も、もう出したくて仕方がない……射精したく

て抑えられない……）

コーデリアのテクニックに射精欲求が高まり、精神力がゴリゴリと削られていく。口の端からは快感を吐露するようによだれが溢れ出た。

フタナリペニスが小刻みに振動し、ザーメン発射までのカウントダウンが始まる。

ズシュ♥　ズチュ♥　ゴシュ♥　ズズシュ♥　ズチュ♥　ズチュズチュ♥

「恥ずかしげもなくアクメしたいんでしょう？　さあ遠慮なくおイキなさい♥　わたくしの足でみっともなくピュッピュッしちゃいなさいな♥」

「ン、んグうううぅぅ♥　オッ、オヴヴッ♥　言うなぁ♥　いじわるされたら童貞チンポが感激してしまう♥　マゾ勃起が悦んでしまう♥　ふっ、ああ♥　だ……ダメだっ♥　我慢できないッ♥　また……またイッてしまうぅうううぅぅううう♥　もオォオオオオオン♥」

言葉で責められるだけで痛いほどに感じてしまうフタナリ乙女。

包皮がめくれるたびに背筋が震え、股間に電流めいた快美が走る。下半身をガクガクと痙攣させ足コキの虜になってしまう。

「あっ♥　ああっ♥　くる♥　くるくるクルッ♥　ザーメン昇ってくるううううう♥　うぐ♥　お、ほおおおおおぉ～～ん♥」

直後、肉茎がお腹にくっつくほど反り返り、鈴口からザーメンが放たれた。
快美の味を教え込まれた弱チンポは、敗北を求めるようにマゾ射精してしまう。
ボビュ♥　ブビュ♥　ブシャ……ブシャアアアアァア♥　ビュ……ヌビュククウウウウゥ♥
「オ、おっほおぉおおおおぉおおおん♥　イグッ♥　イグッ♥　イグうううぅうぅぅ♥　激弱チンポが足でこすられてイグ♥　イッてしまううぅうぅうぅうぅうぅ♥　あッ♥　うぐぅッ♥　足コキ♥　足コキで♥　足オナホで最低アクメキメるううぅううううう♥」
足指を白濁液がベトベトに汚す。思考は白熱し、ビクンッビクンッと甲冑が跳ねた。
「くく、とんでもない射精量だな」
「フタナリ調教ってすごいのねえ。なんて面白い見世物なのかしら」
「ハァ……ハァァ……」
観客に嘲笑されながら肩で息をする黒髪乙女。栗の花に似たむせかえるような匂いが会場中に広がっていく。
射精までにかかった時間は五分二十秒。
これよりも速いタイムでコーデリアを絶頂させることができなければ、サクラヒメの罰

ゲームが決定する。
「次はわたしの番だな」
攻守が逆転し今度はコーデリアが椅子に座らされ両手足を縛られる。
「んっ、窮屈ですわね。それで一体何をするつもりですの？　並大抵の責めでは射精しませんわよ」
「鬼蛙さまに鍛えられた技量を侮ってもらっては困るな。さっきのお返しをさせてもらうぞ」
サクラヒメはしゃがみ込むと、開いた股下にそびえる雄器官に顔を近づける。
桜色の唇を開くと、フタナリペニスを口内に招き入れ吸引するように愛撫した。
チュッ♥　クチュッ♥　ンク♥　クチュッ♥　クチュッ♥　チ……チュルン♥
「ひゃうぅうぅうッ！　うくっ、んッ！　やりますわね……♥」
「ちゅっ♥　くちゅっ♥　小細工は苦手だふぁらな。直球勝負でいかへてもふぁう。はむっ♥　んんッ……くっ♥　フムんっ♥」
「うっ、くぅうううぅうん！　ち……おチンポがッ！　おチンポがヌルヌルにぃ……はひゅっ♥　ンぐ……ヒクうぅうううぅうん♥」
巧みな舌技に甘い喘ぎが吐き出される。鬼蛙に仕込まれた技巧は容赦なく肉竿を悦ばせ、

理性をトロトロに溶解させていく。

「はぁあぁぁ！　先っぽがゾクゾクしてぇ……♥　あふぁぁあああああああん♥」

竿にねっぷりと絡みつき、カリ首の裏側を丹念に舐める変幻自在のテクニックが、勃起肉竿を酔わせていく。

腋や膣孔から淫臭が噴き出し、快楽のお代わりを要求する。射精調教されてきたコーデリアでなければ、すぐにでも精を解き放ってしまうだろう。

「どうふぁ？　ひゃへいしたくなったふぁろ？　んじゅ♥　ちゅぐぐぅ♥　じゅぶ……じゅくう♥」

「んぐうぅうぅぅう！　ま……まだですわ！　こ、これしきのことでわたくしのおチンポは屈しませんわ……あっ♥　ああっ♥　へ、平気なんですから♥　んんっ♥　くううううぅ～ッ♥」

ピンッと勃起肉の角度を上げながらも、押し寄せる射精衝動に抗う。過酷なフタナリ嬲りを思い出し、菊門を引き締めて絶頂を撥ね除ける。

銀のアーマープレートがカチャカチャと音を鳴らした。

（流華さんには悪いですけど罰ゲームはもうこりごりですの。絶対にイクわけにはいきませんわ）

排泄中継や豚コスプレのような目には、もう二度と遭いたくない。
人として終わるような醜態を再び晒すなんて耐えられない。
「さしゅがに我慢強いな。だがこれはどうひゃ？　ん……ふううぅん♥」
「一体何を言って……エッ!?　そ、それはまさか……！」
コーデリアの理性を決壊させようと、サクラヒメは新たな手段に出た。
Gカップ巨乳を両手でたっぷんと持ち上げると、根元から肉竿を包み、フニフニとパイズリを始めたのだ。
下乳の部分で滑るように金玉も愛撫し、極彩色の快美を提供する。
ムニュッ♥　ムニュッ♥　グニュッ♥　フニュッ♥　ムニュフニュンッ♥
「お、おッふうううぅぅ♥　ひっ♥　うぐぅ……♥　オッパイだなんてっ♥　はうッ♥　ら……らめですわあああぁぁあああ♥　お、おチンポにキンタマまでぇ……♥」
「んぐっ♥　パイズリ気持ひいだろ？　ふぁむっ♥　ちゅうう♥　んぶ……はぁあああ♥」
「ひぎゅっ♥　おぐッ♥　わたくしの巨玉マラが変になってしまいますわ♥　んッ、く……ひッ……うぐうううぅんッ♥　デカチチ愛撫気持ちよすぎますのおぉおおおぉおおおぉ♥」

たわわに実った双乳が容赦なく淫悦を伝えてくる。子種汁をたっぷり溜め込んだ睾丸を抱擁されると、肉茎も感謝勃起せずにはいられない。

重量感のある乳圧で宙に浮いたような心地よさに包まれ、鈴口からはカウパーが泉のごとく湧き上がる。

「ちゅっく♥　んんッ♥　ふぉらみっともなく射精してひまえ♥　パフパフオッパイでチンポもキンタマもイッてしまへ♥」

「あッ♥　ん……ひぐッ♥　ふひいいいいぃいいん♥　だ……ダメッ♥　もうダメですわ♥　イグッ♥　わたくしのズルムケおチンポがイッてしまいます♥　ホルスタインみたいなデカ乳パイズリで射精してしまいますのおオオォオオオオ♥」

金髪縦ロールを振り乱し乳悦に狂うお嬢さまヒロイン。精管が戦慄くと、壊れた蛇口のように白濁液が噴き出した。

ビュク♥　ビュクク♥　ドプ……ドププウウゥウ♥　ピュー♥　ピュウゥー♥

「うほぉおおぉおおおおお♥　いっ、イイイ、イグうぅぅぅぅぅッ♥　ザーメン♥　ザーメン♥　ザーメン大噴射あああぁあああ♥　オッパイでイク♥　パイズリでイクッ♥　わ、わたくしの雌ブタ子種汁がでちゃいますのおおおぉおお♥　あへぁぁあああ～ん♥」

はしたないイキ顔を衆目に晒し、パイズリ絶頂する。マシュマロのような巨乳圧力に肉竿も睾丸も屈してしまう。

Gカップ巨乳の谷間は白濁液で真っ白に染められた。

「オッパイすごいですわ♥　お、おチンポ耐えられませんのぉ……♥」

射精までにかかった時間は四分五十秒。調教経験の長さが勝敗を分けたのか、足コキを上回る速さで絶頂へ到達させた。

「この勝負、サクラヒメの勝利！　クフフ、コーデリアは残念だったね」

「うぅ……わたくしが負けるなんて……」

「さっそく罰ゲームにいこうか。今回の罰ゲームは……羞恥パンツ被り！」

「パ、パンツ!?」

拘束を解かれたコーデリアは歓声を浴びながら舞台中央に引っ張り出される。

（またろくでもないことを考えていますわね）

鬼蛙の言葉で大体の察しはつくが、屈辱と嫌悪感で眉根がヒクつく。

少しすると、小鬼が綺麗に畳まれた下着を運んできた。

「まっ、まてっ！　それはわたしの下着じゃないか！　なぜここにあるんだ!?」

自分の下着が登場し動揺するサクラヒメ。ピンク色のパンティーがコーデリアに手渡さ

れる。
「これを被ってもらおうかな。クロッチの部分が鼻や口に当たるようにね」
「そんな恥知らずなこと……エイミス家の名に懸けてできません！」
「ん？　ボクに逆らうつもりなの？」
「っ……わ、わかりましたわ……」
言われるがままにパンティーを被る。変態行為をしている事実にカッと頬が紅潮する。
「ガニ股とWピースも忘れずにね。アドリブで変態セリフもお願いしようかな」
「……ええ」
女性のプライドを踏みにじる身勝手な命令。火炙りにされるような羞恥が心を焼くが、今は耐えるしかない。
高貴なお嬢さま戦姫は最低ポーズで恥辱に狂う。
「お……オーホッホッホッ！　パンティー仮面参上ですわ！　これからはコーデリアではなく装刃戦姫パンティー仮面とお呼びなさい♥　脱いだばかりのホカホカパンティー募集中ですわッ♥　クンッ♥　クンクンッ♥　スーハースーハー♥」
「ハハハハ！　なんだコイツ、バカじゃねえのか！」
「とても女性のすることとは思えないな」

「オマンコの残り香でデカおチンポもフル勃起♥　マゾアクメしたくてたまりませんのぉ♥　ほぉ♥　おぉ♥　あふうううぅ～ん♥　パンティーの匂いでセンズリこいてる変態女をみんな応援してくださいね♥　クンクン♥　クンクンクン♥」

お嬢さまの最低屈辱発言に観客席から爆笑が巻き起こる。

あまりの情けなさに装刃戦姫パンティー仮面は瞳を潤ませることしかできない。

「変態♥　変態♥　変態ピース♥　わ、わたくしはパンティー被りの変態です♥　こんな姿を見られてチンボッキする淫乱ですのぉおおおお♥　のほおおおおおぉ～～ん♥」

カニのようにピースサインをつくり、フタナリ勃起を見せつける。

股下でブラブラ揺れる金玉が滑稽だ。

（こんな光景を面白がる奴らをわたしたちは守ろうとしていたのか。この世界は狂っている）

サクラヒメは自分のことのように痴態を見ていた。尋常な勝負とはいえあまりにもひど過ぎる姿だ。大口開けてバカ笑いする観客たちに、憎悪を覚えずにはいられない。

（もう終わりにしてくれるといいんだが。これ以上は見ていられない）

親友の変態行為に胸が痛む。しかし、黒髪乙女の願望は脆くも打ち砕かれた。

「罰ゲームもいよいよ本番。出番だよ海月鬼（くらげおに）」

「海月鬼だと？」
「……なんですのそれは？」
鬼蛙の呼びかけに応じ舞台袖から巨大なクラゲめいた鬼が現れた。
体長は三メートル近くもあり、身体は無色透明でガラスのように反対側が見通せる。内臓の一つもない体躯（たいく）は無機物を思わせた。
「ジュル……ジュルルル……」
「随分と可愛らしい姿ですわね。その身体でわたくしに何を……んっ!?　むぐっ！　ムグウウウウウウゥゥッ!?」
海月鬼はのんびりとした動作でコーデリアの背後にまわると、太鼓腹を開きぱっくりと全身を飲み込んだ。
透明な肉ヒダを伸縮させ、磔（はりつけ）にするように少女の身体を固定する。
「こ、コーデリア!?　鬼蛙、貴様何を考えている！」
「い、息はできますのね。でも……うぅ、ヌルヌルして気落ち悪い……今すぐここから出しなさい！」
サクラヒメは怒りの声を上げる。コーデリアに至ってはパンティーを被り、ダブルピースのまま拘束され、くぐもった声を漏らすばかりだ。

「コイツは飲み込んだ人間の皮膚を性器のように敏感にするんだ。全身亀頭になりながら射精してもらおうかな」

「う、嘘ですわよね……全身性器なんて冗談ですわよね……？」

「残念だけどすべて事実さ。発狂しながら絶頂してよパンティー仮面さん」

「や……ああ！　い、いやあアアアアアアアアアアッ！」

絶叫が会場全体に響き渡るがもう手遅れだ。

海月鬼は注射器のような触手を体内に出現させると、柔肌に注射した。ブロンド戦姫の感度が一瞬にして変貌を遂げる。

「ひぐっ！　うぐうぅうううううん!?　動かさないで……ああ、はぁあああああ～～ん♥」

ブラシタイプの触手も生み出し、太った体躯をゆさゆさと動かして乙女の肢体を弄ぶ。恥ずかしい部分をすべてさらけ出したまま、コーデリアへの丸飲みプレイが開始された。

ヌチュッ♥　ヌチュッ♥　ヌチュッ♥　ヌズチュッ♥　ヌズズチュッ♥

「ぐひぃッ！　うッ、は……うううううん♥　身体が熱いですわ……なんだかポカポカしてえ……♥　ふうううぅううん♥」

「海月鬼の媚毒が効いてきた証拠だね。オナニーの何十倍も気持ちよくなれるはずだよ」

「はぁんッ♥　や……嫌ですわ！　全身が亀頭なんて狂ってしまいます♥　ふぅん、んッ……許して鬼蛙さま♥　くぅぅ……んぐぅうううう♥」

どれほど懇願されても慈悲を与える鬼蛙ではない。コーデリアの体温が上昇し、肌の感覚が鋭敏になっていく。

「んっ、くぅうううぅ！　ピリピリする……どんどん気持ちいいのが大きくなって……あぅうううううううん♥」

丸飲みという異常な状況が、さらに快美の炎を燃え上がらせる。媚毒が浸透するにつれ、快感の波はどんどん大きくなっていく。

「はぁあああああん♥　動かさないで！　擦れるだけでもキツいんですの！　ふぅ……むぐくうううぅうううう♥　あぁ……抑えられない……発情しちゃいますの♥　あぐウウウウゥ～ン♥」

海月鬼が肉体を揺り動かすと、細胞の一つ一つを犯されるような快美が直撃する。

死刑台に送られる囚人めいて、陰茎アクメの階段を上らずにはいられない。

「オ、おっぐうううぅうぅ♥　すごい♥　しゅごい♥　これしゅごいいぃいぃ♥　変態ボッキがビンビンきますのぉおおぉおお♥」

「時間が経てば経つほど快感は大きくなる。キミみたいな淫乱には願ってもない罰ゲーム

だろう？　ほら、もっと変態らしくアピールしなよ」

「いらない♥　いらない♥　そんなのいりませんわぁあああ♥　ああ、ううぅう♥　こ、腰フリしてしまいます♥　触手におチンポ擦り付けるぅ♥　パンティー仮面が体内オナニー仮面になりますのおぉおおおおおぉおお♥」

凶悪なまでに膨れ上がった感度が精神を削り取っていく。笑われながら、視姦されながら快楽を要求するコーデリア。

海月鬼の動きに合わせてヘコヘコと腰を振り、貪欲に快楽を求めていく。

「の……脳が蕩けますの♥　アヘッ♥　ヒウッ♥　おチンポがおかしいですわ♥　同化したみたいでぇ♥　アヘ、アヘ～ン♥」

「ギヒヒ、マゾらしい顔になってきたじゃねえか」

「なんてみっともない。まるでお猿さんね」

「ホオォオオォオォッ♥　んぐっ♥　ふぎいッ♥　き、キンタマも膨らんでしまいますわッ♥　恥ずかしいプリプリ陰嚢がエステられてますの♥　露出キンタマがおチンポ感度でビクンビクンしてますのおおおおぉおおおおぉおおぉ♥」

人目などお構いなしに、猥雑なセリフを口ずさむ。もはや理性などどこにもなく、盛りのついた猫のように快楽をお代わりする美少女ヒロイン。

「彼女の勇姿を撮ってあげなよサクラヒメ。ドマゾ姿を写真に残してしてあげよう」
「何を言い出すんだ!?　だれがそんなことするか！」
「ボクが満足するような写真を撮ってくれないと、罰ゲームは終わらないよ？　それでもいいの？」
「ぐっ……わかった！」
サクラヒメにカメラが手渡される。鬼蛙の卑劣なやり口は許せないが、今は罰ゲームを終わらせることが先だ。
コーデリアに向かってシャッターを切る。
「ほ、ほら！　もっと笑って！　舌を出して顔の横で可愛らしくダブルピースするんだ！」
「こ、こうですの？　ピース♥　ピース♥　パンティー仮面キラキラダブルピィース♥　超カワイイコーデリアちゃんを見て見てぇ♥　んほ♥　ほぉおおおおお～ん♥」
「もっと脚を開いて腰を突き出せ。お尻の穴まで見えるようにするんだ！」
「チンフリ♥　タマフリ♥　アナル大公開♥　最低ドMでごめんなさ～い♥　アホアホセンズリ大好きなんですのおおぉおおお♥」
「いい感じだぞ。最後は射精しながらマゾアクメするところをバッチリ撮影させてくれ！」
「ングッ♥　ハ、はうぅぅうううう♥　わかりましたわ♥　イキますの♥　下着を被っ

たままド変態アクメ極めますわ♥　クンクン♥　クンクン♥　スーハースーハー♥　シミの匂いを嗅ぎながらおチンポイキますの♥　み、皆さん！　わたくしをもっと蔑んでええぇえええええ♥」

必死になって痴態を撮影するサクラヒメ。

ブロンドヘアーを体液で濡らし、下着マスクの痴女コスプレで金玉を硬くするコーデリア。

肉体改造で興奮させられたフタナリペニスはあまりにも脆弱（ぜいじゃく）で、もう一秒も抑えられない。

（ほ……本当にもうダメですわ♥　こんなに恥ずかしい格好をしているのに身体が疼いて我慢ができませんの♥　イキたい♥　最高に恥ずかしいポーズでイキたいですのぉおおおおお♥）

何十倍にも上昇した感度が少女の肢体を絶頂へ押し上げる。透明な体内を染め上げようと亀頭がヒクつき、おびただしい量の白濁液を噴出した。

ブッ……ブビュル♥　ブブビュル♥　ドビュルルルウウウウゥ♥　ドププ♥　ブビュクククク♥

「イグッ♥　イグぅッ♥　イギますのおぉおおおおぉおおお♥　大勢の方に見られながらイ

ッちゃいますわ♥　変態パンティー仮面マジアクメしますの♥　パンツ被った頭のオカシイ雌豚をバカにしてえぇえぇぇ～ん♥　あぁ……写真♥　シャッター音が心地いいですわ♥　わたくしの痴態が保存されてますのね♥　サクラヒメありがとう♥　全身おチンポ戦姫の写真を撮って一生消えない思い出にしてえぇえええええええええん♥　おっ、オオお～ン♥」

パシャパシャと鳴る音に興奮し、ダブルピースで射精する露出乙女。

狂った感度のおかげで細胞の一つ一つまでもが、陰茎になってしまったのかと錯覚する。

「いい絶頂っぷりだったぜパンティー仮面！」

「あとで写真をいただきましょう。お友達にも見せてあげないと」

「へぇ♥　ふぇぇ……♥　わたくしの変態姿が他の方にも見られちゃいますのね♥　あは、アハハハ……♥」

ザーメンの残り汁をブビュブビュと吐き出し、絶頂を反芻（はんすう）するように腰を前後させる。

コーデリアは嵐のような喝采を受けながら果て、淫獄ショーの初日は大成功に終わった。

◆◆◆◆

地下劇場淫獄二日目、今日も恥辱と白濁で彩られた調教の幕が開く。

サクラヒメとコーデリアは舞台の上で前かがみになり、ヒップを大きく突き出す姿勢を

取らされていた。
装刃戦姫の衣装は一日目と同じく胸と股間部分がハート型に切り取られ、迫力のある乳房やフタナリペニスが後ろからでも丸わかりである。
（こんな格好をさせて何を企んでいる）
（うぅ、おチンポを露出するのは何度やっても慣れませんわね）
従順な演技をしなければならないと頭でわかっていても、身体の紅潮を抑えることはできない。
鬼すら泣いて許しを請う装刃戦姫といえども、年頃の少女。
見ず知らずの人間、それも大人数の前で恥部を晒すなど耐え難い屈辱だ。
「準備はいいかい？　しっかりとお客さまを楽しませるんだよ」
妖月は着物の袖で口元を隠しつつ、二人に声をかける。司会として落ち着いた仕草を心掛けているようだが、嗜虐の笑みがこぼれてしまう。
「ああ、もちろんだ」
（お客さまのため？　自分が楽しむためだろう、この女狐め）
「わたくしはいつでもいいですわよ」
（このポーズ……性格の悪さが滲み出ていますわね）

腸を裂かれるような屈辱に耐え、言葉を返す装刃ヒロイン。
勝利への道筋が糸のように細いとしても、あきらめるわけにはいかない。
「真後ろにあるバケツは見えるかい？　今回はそれを使ってゲームをしてもらうよ」
「確かに見えるがそれがどうした――、っ!?」
「なっ、何をしますの!?」
内容に頭を巡らせる前に視界が暗闇に包まれる。
まぶたに触れる布の感触から考えるに、目隠しをされたようだ。
「くっ、何を企んでいる!?」
「……妖月さま、教えてくださいませんか？」
「焦るんじゃないよ。すぐに説明してやるからさ。お前たち、さっさとブチ込んじまいな」
「ジづっ!?　お尻が……ぐ、グウううううぅ～～ッ！」
「んぅっ、生暖かいのが入ってきますの……！　ああっ、アアアアアァアア～～ッ！」
ガラス製の突起が肛門に差し込まれると、人肌に温められた液体が直腸に侵入してくる。
汚物が逆流するような感触に背筋が粟立つ。
「全部入ったようだね。ザーメン浣腸のお味はどうだい？」
「ざ、ザーメン……」

「浣腸ですって……？」
「小鬼どもがシコシコ頑張ったんだ、まだ漏らすんじゃないよ。お楽しみはこれからだしねぇ」
精液だけでなく浣腸液も混ざっているのか、膝はガクガクと震え名状し難い痛みが腹部を支配する。
二人は火口のように膨らんだ肛門を引き締め、歯を食いしばって決壊を堪える。
「あんたたちにはケツ穴からザーメンを噴き出してバケツに注ぐ『ザーメン的入れ』をしてもらうよ。チャンスは二回、より多くのザーメンを注いだ方が勝ちさ」
「妖月、貴様……！」
「ふ、ふざけるんじゃありませんわよ！」
「勝者にはあたしからプレゼント、敗者にはもちろん罰ゲームだから頑張りな」
「この外道め……だれがそんな変態行為を……あぐっ、グ、ぐうウウウウウウウウウウウゥゥ～～ッ！」
「ザーメンで的入れなんて正気じゃありませんわ……ああ、あウウウウウゥゥウウウウゥゥウウッ！」
演技をすることも忘れ双眸を吊り上げる。

化け物の精液を体内に入れるだけでも耐え難いのに、それを使ってゲームをするなど凶器の沙汰だ。

女性どころか人間としても終わってしまう。

「待て！　目が見えないのにどうやって命中させろというんだ！」

「そうですわ！　こんな状態じゃ狙えませんわ！」

「おや、装刃戦姫サマなら心眼でも何でも使えばいいだろう？　さっさと始めな」

「くそぉ……わ、わかった！　やる！　やってやる！」

「仕方ありませんわね……！　精々笑ってなさい！」

蠕動（ぜんどう）するS状結腸に急かされるように、サクラヒメとコーデリアは覚悟を決める。

下剤を自らの意思で出すのなら、惨めに漏らすよりも装刃戦姫の矜持は守られるはずだ。

「こ、この辺りか……？」

（今は奴らに従うしかないんだ。己を殺せ建宮流華！）

お尻を大きく突き出し肛門をすぼませて、黒髪乙女はバケツの位置を探る。

最初に見た様子だと距離は二メートルもなかったはずだ。

「早く漏らせよ」

「モタモタするじゃねえ淫売が！」

（勝手なことを……クズどもめ）

観客の野次に苛立ちを覚えながらも、サクラヒメは勝利を目指す。

白桃のような巨尻を持ち上げると、ある高さで静止させた。

「んうぅ……ぐ、はぁ……ハァハァ……ゴクンッ！」

（たぶんこのあたりのはずだ。や……やるぞ！）

羞恥心を押し殺し暗闇の中で生唾を飲み込む。排泄姿を衆目に晒す事実に心臓が早鐘を打つ。

「出すんならひとこと言ってからにしなよ。お客さまにウケることも意識してもらわないとねぇ」

「……そんなこと急に思いつくものか」

「変態セリフは装刃戦姫サマ十八番だろう？　自分で考えな」

「ぐっ……」

意地の悪い注文に奥歯を噛みしめる桜の戦姫。少しの逡巡のあと、鮮やかな唇から恥辱の言葉が吐き出された。

「み、右の左のお客さま！　装刃戦姫サクラヒメはケツ穴からくっさいザーメンをぶちまけたいと思う！　せ、精一杯汚い音を出してブリブリするので、どうかゴミを見る目で笑

って欲しい！」

言い終わると同時に観客席から爆笑が沸き上がった。

無様以外に形容しようがない光景に、老若男女問わず大口を開いている。

（一体どこまでわたしを辱めれば気が済むんだ。貴様たちの声、絶対に忘れん！）

全身を真っ赤に紅潮させながら嘲りの嵐に耐えるサクラヒメ。

腹部の痛みは一層強くなり、限界はすぐそこまで迫っている。

「ぁ、ぐうぅう……で、出る！　ザーメン飛ばす！　あぐ、ンぐウウウゥウウウウウウウウッ！」

野太い声と共に蕾がヒクつき、ピンク色の裏門が開門する。

ブビブビと放屁の音をバックミュージックに、勢いよく白濁液が噴出した。

ビュク♥　ブビュル♥　ビュウウウウウウウゥ～～♥

「んウウウゥ♥　ああ、漏れてる♥　ザーメン噴き出してる♥　みっともない音出してしまううぅ♥　ああ、アアアアアアアアアッ！」

黄ばんだ雄汁が弧を描きながら飛んでいく。生臭い匂いが舞台に広がっていく。

（ちゃんと入ったのだろうか……早く結果が知りたい）

見えない不安がサクラヒメを襲う。何があっても罰ゲームだけは受けたくない。

「どうなったんだ!?　妖月、答えてくれ！」
「んー、残念だけどハズレだねぇ。あんたから見て右に三十センチズレてるよ。バケツの中は空っぽのままさ」
「そんな……」
絶望の感情がサクラヒメの心を覆い尽くしていく。ザーメンの残り汁がむなしく垂れ落ちた。
「今度は外すんじゃないよ。次はコーデリア、あんたの番さ」
「わかってますわよ。ウゥ……お腹痛いぃ……」
ブロンドの縦ロールを揺らし、ヒップを突き上げるお嬢さま戦姫。
お腹からは遠雷のような音が響いてくる。
（悪魔（デモン）の気配ならともかくこんなポーズで的入れなんて……と、とにかくやるしかありません！　女は度胸ですわ！）
高貴なプライドをズタズタにされながらも、コーデリアはバケツを狙う。
「頑張れよ、お嬢さま」
「最高に情けな～い姿を見せてちょうだい」
「応援感謝しますわ。皆さん、わたくしのザーメンお漏らししっかりご覧なさい！　ウン

コの穴からくっさい精水出すところぉ♥　オ、あああっ！　くる！　きちゃいますのぉおおおおおお！」

清楚とは程遠い嬌声を上げるブロンドお嬢さま。

薔薇の花に似た狭穴が口を開くと、生ぬるい汚汁が噴出した。

ピュピュ♥　ボッビュ♥　ピュウウウウウゥゥ♥

「ひゃうううぅうう♥　お尻の中身が出ちゃってますのおおぉおおお♥　きったないケツ汁がブバブバ噴き出てますわぁあぁあああ♥　あへエエエエエェ～ン♥」

膝を屈伸させてザーメンが飛ぶ範囲を広げようとする正義のヒロイン。

滑稽な姿を観客に嘲笑されようとも、必死になって勝利を目指す。

しかし結果は――

「なんだい、全然届いてないじゃないか。気合いが足りてないんじゃないのかい」

「届いてないって……う、ウソでしょう!?」

「お客さまの前で嘘なんか吐くわけないだろう。まったく揃いも揃って情けないねぇ」

「っ……次こそは命中させてみせる！」

「わたくしだって負けませんわ！」

「次の浣腸がラストチャンスだからね。ちゃあんとバケツを狙うんだよ」

「ぐぅ、あぐウウウウウウッ！　また入ってくる……
あ、はあぁあああああああああぁ！」
「フぐうぅぅ……気持ち悪い……アアッ！　やあぁあああああああっ！」
再び浣腸器が差し込まれ、生温い液体が乙女の体内に注がれる。
おぞましい感触に双臀が震え、激しい痛みが直腸を襲う。
「必ず命中させてみせる……はぁ……あぐあぁアアアアアアアアアアッ！」
「もっと遠くまで飛ばせるはずですわ……ああん！　ふぐうううぅうううう～～ッ！」
「おっと、もうケツ穴がパクパクしてるじゃないか。注ぎ過ぎて緩くなっちまったのかねぇ」
「んっ、ンン、んくうううぅうう……もうすぐそこまできてる……ほおおぉおおおおおおおおおおッ！」
「アッ、あひイイイイイィ～～ン！　お尻の穴が盛り上がってますわ……っ、んううううぅうう！」
不自由な視界のまま悲鳴を上げるダブル戦姫。溢れた精液が床にシミをつくった。
ザーメンが昇り、ムズムズとこそばゆいような感覚が肛門に集まっていく。
「大袈裟にわめいているみたいだけど、股間のチンポはフル勃起してるじゃないか。よく

こんな変態行為で感じられるねぇ」

「うぅ……い、言うなぁ！　別に感じてるわけじゃない……！　が、グううううぅううう！」

「調教で身体がおかしくなっただけですわ！　気持ちよくなんて……ひぃ、んひゃあぁああああああ！」

雄臭い剛直をイキり立たせながら、ダブル戦姫は淫悦に身悶える。

認めたくはないがザーメン排泄によってもたらされる快楽は極上だ。

周囲の目がなければためらわずに、この場で射精してしまっていただろう。

「さて、そろそろザーメンを噴き出しな。どっちのバケツにも入らなかった場合は二人とも罰ゲームだからね」

「くううぅ……に、二発目出る！　ケツ穴ゾクゾクしてくるううううぅううう♥」

「お尻から子種汁噴き出しますのぉおおおお！　オッ、もおおぉおおおおお♥」

サクラヒメは方向を、コーデリアは括約筋に力を込め、一度目のミスを修正する。

桃尻に黒い空洞が開くと、二本の白濁汚水が迸った。

ビュウ、ビュウウ♥　ブピュウウウウゥゥ～～ッ♥

「お♥　おぉおお♥　ザーメンいけぇ♥　ザーメン入れぇ♥　がんばれ♥　がんばれ♥

ケツ穴がんばれぇえええ♥　ほぉ♥　んオオオォオオ～～♥」
「わたくしのクソ穴ふんばりなさい♥　絶対ザーメンぶち込むんですからあぁあああ♥
はぁ♥　んあああぁアアアアアアアアアア♥」
少しでも距離を縮めようとヒップを突き出し、菊蕾を引き絞る。
濁った精液は水鉄砲のような勢いでバケツに向かっていった。
「ひぅ♥　うぅ……あくうぅう……♥」
「はぁ♥　ああ……あああ……♥」
お腹の中のザーメンを出しきると、二人の戦姫はその場で崩れ落ちた。
射精することこそなかったが、あまりに変態的な快楽に思考が混濁する。
「おいおい、今のザーメン糞が混じってるぞ」
「あらやだ本当だわ。汚いわねえ」
「ったく、臭くて鼻が曲がりそうだぜ。装刃戦姫もウンコは臭いんだな」
「い、言うな！　見るなあ！　好きでウンコしてるわけじゃない！　うぅ……恥ずかし過ぎる……」
「ウンチなんて見ないでください！　いやぁ……こんなところで大便お漏らしなんて……！」

一度目とは違い、ザーメンに混じって茶褐色の汚物が床に転がる。
固形便をまじまじと観察され、黒髪戦姫とお嬢さま戦姫はゆでダコのごとく真っ赤になった。
「ま、さっきよりはマシになったかねぇ。それじゃあ結果発表といこうか」
「……うぅ、頼む……」
「神様、お願いですわ……」
サクラヒメとコーデリアは固唾を飲んで妖月の言葉を待つ。
そして、ザーメン的入れの結果が告げられた。
「より多くのザーメンを入れることができたのは……コーデリア！　このゲームコーデリアの勝利さ」
「そ……そんな」
「はぁぁ……よかったですわ」
「サクラヒメ、あんたのザーメンは勢いが良すぎてバケツを飛び越しちまってたよ。ケツ圧が強いってのも考え物だねぇ」
「くっ、くううぅ……」
敗北の現実にギュッとまぶたを閉じる装刃戦姫サクラヒメ。これまでの記憶が足を震わ

せる。
「あんたの受ける罰ゲームは『掻痒地獄』。その包茎チンポを狂わせてあげるよ」
「掻痒地獄……だと？」
「実際に味わってみればよくわかるさ。お前たちやりな」
「ぐ、んううぅぅう……!?」
サクラヒメは目隠しを外されると、手を後ろで押さえられ小鬼たちに起立させられる。
勃起したフタナリペニスとアナルには薄緑色に濡れた筆が近づけられ、ペチョペチョと粘液が塗りたくられた。
「うぐ、んううぅぅ……な、何をしている……！」
「すぐにわかるようになるさ。ふふ、すぐにねぇ」
「それは一体どういう意味……ヒグッ!?　ジ、ハグウウウウゥウウウウ!?」
清廉な黒髪乙女は瞳を見開き驚愕の声を上げる。
原因はただ一つ。勃起肉竿と菊門に強烈な痒みが訪れたのだ。
「あが、がっ！　アア……がアァアアアアアアアッ！　こ、これはアァアアアアアアアア!?」
「今塗ったのはウルシの何百倍も痒くなるあたしの調教薬さ。気が狂っちまいそうだろ

う？」

「そんなものをわたしに!?　ごが、ぎ、ぎイィィイイィイイイイ！」

この世の物とは思えない痒みに発狂する変身ヒロイン。意識が点滅し口からは獣のような声が吐き出される。

小鬼に支えられていなければ立っていることもできないだろう。

「かゆい！　かゆい！　かゆいかゆいかゆいイイイイィ！　こんなのおかしくなる！　おがじぐなるウウウウウウウゥ！」

「あーあ、可哀想にねぇ。まぁ、これも自業自得だと思ってあきらめな」

「チンポもアナルもかゆ過ぎて狂ってしまう！　も、んオオオォオオ〜〜ッ！　かゆいいぃいいいいいい！」

すぐそばにいる妖月の声すらも遠くに聞こえる。濁流のごとく押し寄せてくる痒みに汗が噴き出す。

「んー、壊れちまっても困るし、掻くことくらいは許可してやろうかねぇ。拘束を解いてやりな」

「や、やった……あぐ、がぎイイィィ……ジぎイイイィイイイイイ〜〜ッ！」

手が自由になると目に見えないほどの速さで恥部が擦られた。

赤く腫れた肉幹を掴むとゴシュゴシュと乱暴に扱き、菊門に指を三本も突っ込んでグチュグチュと直腸を掻く。

ガニ股で掻き毟る姿は下品なオヤジのようだが、今の彼女にそのことを気にしている余裕はない。

「かゆいの無理無理無理いいいいいい！　えぐ♥　へげ♥　へエエェエエエェエエエエエエエ♥」

「そのうち治まるからシコシコしてな。滅多に使わないから何時間後かまではわからないけどねぇ」

「おぉ♥　チンポかゆい♥　ケツ穴かゆい♥　掻かないと狂ってしまう♥　へエ……へげえぇえええええええええええ♥」

性器を擦る快感で声に甘いものが混じっていく。恥も外聞もなく黒髪戦姫は手を動かし続ける。

「さ、サクラヒメ!?　どうなってますの!?」

「そうだ、勝者にはプレゼントをあげないとねぇ。忘れるところだったよ」

「ん……妖月……」

目隠しを外されコーデリアは目を細める。

ぼやけた視界は少しずつ晴れていき、少女の眼前に『プレゼント』が現れた。
「こ、これは……？」
「あんたの大好きな浣腸器さ。ただちょっとサイズは大きいけどね」
まるでガスボンベのように巨大な二本の浣腸器、その一本がコーデリアの鼻先、もう一本がお尻に近づけられる。
中に詰まっているのは当然ザーメン。濃厚な精臭で少女の頭はクラクラしてしまう。
「ま、まさか……！」
「理解できたようだね。このゲームであんたたちが噴き出した精液、そのすべてがプレゼントさ。わざわざこぼれた精液を集めるなんてエコロジーだろう？」
「そんなのエコじゃありませんわ！　気持ちの悪いものを近づけないで！」
「勝ったからって調子に乗るんじゃないよ。コイツはあたしが直々にブチ込んでやろうかねぇ」
「や、イヤアアアアアアアアアア!?」
お嬢さまの絶叫などまったく気に留めず、妖月の尻尾が浣腸器を掴むと、クチバシを口腔（こうこう）とアナルに挿入した。
すぐにピストンが押し込まれる。

ブチュ♥　ブチュチュ♥　ブチュウウウウ～ッ♥

「ごぶっ!?　おご……おゴおおぉおおぉおおおおおおおおおっ!?」

「一滴でもこぼしたら追加の浣腸をするからね。残さず飲みな」

「ンブ……ぶぐ、ブううぅううううう！　あげ、おへエエェエエエエエエエ！」

対魔の名門エイミス家のとは思えない音色を奏でる薔薇の戦姫。

雄の匂いと白濁のトロみで嗅覚と味覚、いや身体のすべてを蹂躙される。

「うぷ……ううぅ……んぷううぅう……！」

「へえ、全部入るもんだねぇ。感心感心」

「ぶぅ……うぶ、あえ……ううううぅ……！」

口とお尻を抑えて決壊だけは回避することができた。

だが、一秒一秒と吐き気が押し寄せ、とても長くは持ちそうにない。

「く、くるひぃ……うぶ、うぶぶぶ……んんんんん～～っ！」

「せっかくあたしがプレゼントしてやったのに感謝の言葉もなしかい。それとも、変態マゾのあんたにはこういうご褒美の方が好みかねぇ？」

「ひゃううぅう!?　やっ、ダメ……ダメですわ！　ああ、ンアアアアアァアアアッ！」

妖月の手が股下に伸びると、発情したフタナリ勃起を擦り出した。

鋭敏になった肉体がさらに追い込まれていく。
「ごぶ、い、今そんなことされたら……ひ、あひいいぃ……！」
「大好きなチンポオナニーをしてやってるんだ、少しは喜んでみせな。お客さまの前だってことを忘れるんじゃないよ」
「え、笑顔ぉ……♥　あひ、んいいいいいぃ……♥」
「そう、笑顔は大切だからねぇ。ニッコリ笑いな」
「えへ♥　えへへ♥　えへひイイイィイイイイ～ン♥　お、おチンポくるうぅ……♥」
ぎこちない笑みをつくり、観客に媚びを売る。
お腹の圧迫感とフタナリ陰茎の快楽で、泣き笑いながら悶絶するお嬢様ヒロイン。
極限の淫悦をその身に刻まれ、声がクリームのように甘く蕩けていく。
「んん、ふうううっ、くうううぅうぅう♥　ザーメン……も、漏れてしまいそうですのぉ♥」
「それは口かい？　それともお尻かい？　まさかあんたのチンポって言うんじゃないだろうねぇ？」
「全部♥　全部ですわ♥　身体のすべてがザーメンタンクになったみたいでヘンになっち

ゃいますのぉおおおお♥　ほぉ♥　んオオオオォーッ♥」

風船のように膨らんだお腹を揺らし、絶頂の予感に恐怖する。

この状態で射精すれば、確実に浣腸されたザーメンを吐き出してしまうだろう。

「うぅ♥　らえぇえ……♥　妖月さま、一度トイレに……トイレに行かせてくださいませ♥　うっぷ♥　うううぅ……♥」

「却下。演目の最中で逃げ出す役者がいるものかい」

「お願いですから……本当にもう出てしまいそうですのぉ……♥　えぉ♥　おおおぉ……♥」

鈴口から透明な液体を垂れ流し、土下座しそうな勢いで頭を下げる。

肉体も精神も白濁に支配され、アクメの瞬間が近づいてくる。

「も、もう許してくれぇ♥　かゆ過ぎてチンポもアナルも真っ赤になってしまう♥　おご、おおぉお♥　わたし壊れるううぅうう♥」

「あんたもそろそろ限界みたいだねぇ。もうイキそうなのかい？」

「イキたい♥　イキたい♥　イキたいいいぃいいい♥　雑魚ザーメンがチンポの先っぽまで昇ってるんだ♥　痒み勃起ゴシゴシしながらイキたくてたまらん♥」

「ううぅ……わたくしも限界ですわ♥　チンポ汁注がれ過ぎて血液まで真っ白になってし

まいそうですの♥　これ以上はもう……おご、アヒイイイイィ〜〜ッ♥」

フタナリ肉竿を掻きながら、フタナリ肉竿を扱かれながら、装刃戦姫は絶叫する。

苦痛と淫悦の波紋が混ざり合い、射精衝動が暴走する。

（みっともなくて情けないのに感じてしまう♥　女としてやってはいけないことばかりしているのに♥　エロオヤジポーズでチンポ昂るうぅ〜〜っ♥）

（妊婦みたいなお腹でアクメしてしまいそうですの♥　身体がザーメン専用ミルクタンクになったみたいで、無様過ぎるのにイキたいいぃ……♥）

恥ずかしい姿を晒すたびに、自分が別の人間に変わっていく。

恐ろしいはずなのに玉袋はパンパンに張り詰め、津波のように快美の波動が押し寄せてくる。

「チンポアクメしろ変態戦姫！」

「人前でザーメンお漏らしを見られたいんだろ。この雌豚が」

「よくあんなことができるわね。女のプライドはないのかしら」

「うっ、んうううぅう……♥　やめろぉ……」

「ハァハァ……言わないでくださいませ……」

好き勝手に飛ばされる野次が乙女の心を切り刻む。

大勢の前で人間失格の行為をしているという事実。惨めさ情けなさで胸が詰まる。

「イ……イク♥　チンポビクビクってくる♥　くるううううぅううう♥」

「っぷ♥　うぶ♥　ンぐううぅううう♥　タマタマが精液大量生産してますのぉおおお♥こ、擦るのいけませんわぁああ♥」

「イキな装刃戦姫サマ。たぁっぷりと恥を晒しながらねぇ」

「イク♥　イクイク♥　ザーメン滾る♥　かいかいチンポイク♥　おへ、エエ、えええぇえええええ♥」

「んぶ……も、もらふ♥　もらふ♥　漏れちゃいますわあぁあああ♥　わたくしのおチンポ汁がどっぴゅんしちゃいますのオオオオォ♥」

サクラヒメは肉竿に爪を立て、ブチュブチュと耳障りな音を鳴らしながらアナルを掻く。

コーデリアは喉元と直腸に迫るザーメンに理性を狂わされ、淫辱からの解放を待ち望む。

すべてが臨界点に達しダブル戦姫の総身がガクガクと震え、次の瞬間、恥辱の汚汁が噴き出した。

ブビュ♥　ビュググ♥　ビュリュリュリュウウウウウウゥ♥　ゴプ、プ♥　ドボボボオオオオォオオ～♥

「ひ、ひ、ひぎイイイイイィイ♥　腫れチンポイク♥　腫れアナルイク♥　かゆ過ぎマゾ

性器がイッてしまううぅううう♥　あぁ……かゆいのにガニ股で恥ずかしいポーズしてるのに感じてしまう♥　チンポの先からキモチイイお汁が止まらない♥　おほ♥　ほぉ♥　ザーメン残さず吐き出すぅ♥　かゆい♥　かゆい♥　かゆいのにイイィイイィイイイイ♥」

「おろ♥　おろろ♥　オエエェエエエエ♥　えほ♥　げほ♥　ざ……ザー汁♥　ザー汁♥　ザー汁ぶちまけちゃってますのおぉおおおおお♥　口からザーゲロ、ケツ穴からザーウンコ漏らして、お股のおチンポまでイッちゃいますわ♥　全身金玉になったみたいにスケベオスチンポ汁まき散らしますの♥　えぉ♥　えぉお♥　げえぇえぇえぇえええええ～～～ん♥」

劇場中に広がるほどの精液を噴き出し、無様にイキ果てる正義のヒロイン。

フタナリ肉竿の奴隷となって痴態を見せつける。

「ふふふ、なかなかいい見世物だったよ。これならお客さまも満足してくれるだろうさ」

「かゆい♥　かゆいかゆい♥　チンポかゆいの止まらないいいいいいいいい♥」

「えぉ♥　ゲロ……げろろろ♥　ぼへエエェエエエエエエエエエエエエ♥」

「っと、聞こえちゃいないか。ま、気持ちよさそうでなによりさ」

白目を剥いて絶頂を続ける装刃ヒロインを他所に、妖月は閉幕のあいさつをする。

終わることのない快楽はまるで煉獄のようであった。

◆◆◆◆

「一体どういうことだこれは！」

「こんなの聞いてませんわよ！」

地下劇場淫獄三日目、サクラヒメとコーデリアは鬼蛙に食ってかかった。

はみ出したGカップ巨乳とEカップ美乳、フタナリ肉竿と玉袋が装刃戦姫の衣装を淫らに彩る。

「やれやれ、キミたちの顔見知りをさらったくらいで大袈裟だなあ」

「無関係な人間に手を出すな！　今すぐ解放しろ！」

「こんなこと絶対に許しませんわよ！」

舞台の上には様々な衣装を着た女子生徒の姿があった。

人数は三十人ほどだろうか。皆が皆不安げな表情を浮かべている。

「すごい数の人……昨日聞かされたことって本当なの？」

「あちらにもこちらにも化け物がウヨウヨいるね。これが夢ならいいんだけど」

「もうやだぁ……帰りたいよぉ……」

今にも泣き出しそうな声が聞こえてくる。

化け物に生殺与奪の権を握られる恐怖は、想像を絶するものだろう。
「彼女たちは小道具さ。今回の演目は『オマンコ当て、童貞卒業ゲーム』だからね」
「なんだその卑猥なゲームは!?」
声を張り上げるサクラヒメと言葉を失うコーデリアを他所に鬼蛙は説明をする。
「昨晩使ったオナホールは持っているよね？」
「持ってますけど、これが何だっていうんですの」
「そのオナホールの原型、オリジナルとして膣をコピーした生徒が今ここにいる。オリジナルのオマンコを挿入して見つけるのがゲームの趣旨ってわけさ」
「……貴様の悪趣味にはもう言葉もない」
「キミたちの使ったオナホールはそれぞれ別のものだけど、どちらか一人でも当てられたら今日は終わりにしてあげるよ。媚薬で破瓜の痛みは和らげてあるから、思う存分ハメまくろうね」
「貴様の命令には従うが限度がある。わたしたちが一般生徒を犯すとでも思っているのか？」
「嫌なら演目を乱交パーティーに変更してもいいけど、どうする？　普通の人間がオニグミのチンポに耐えられるか試してみようか」

「ぐっ……わかった！　わたしがやる」
「フン、乗ってあげますわ」
苦渋の決断をするダブル戦姫。オニグミによる調教の激しさは十二分に承知している。
罪のない学友を犯すのは心苦しいが、彼女たちを廃人にするわけにはいかない。
「じゃあゲームを始めようか。だれを犯すかはキミたちが決めていいよ。一番手はどっちかな？」
「わたしがいく。約束を破るなよ」
緊張の面持ちでサクラヒメが進み出る。
新たな悦楽の兆候を感じ取り、フタナリ肉竿がピクリと反応した。
（挿入ってセックスのことだよな……わたしがセックスするのか……）
初めての性交渉に胸が高鳴りを見せる。
いけないとわかっていても、黒い期待感が湧き上がってきてしまう。
（ずっとオナニーやオナホールばかりで実際に挿入したことはなかったからな。男どもはそんなことばかり考えているらしいがわたしは……い、いや余計なことは考えるな！　当てることだけに集中するんだ！）
揺れる心を懸命に制御しようとする黒髪乙女。これまでとは違う肉の衝動が深淵から顔

を覗かせる。
「お客さまも待っているし早く決めてくれないかな？」
「こんなことすぐに決められるか！　えっと……ええと、か、彼女だ！」
サクラヒメが選んだのは褐色肌の少女だ。
ウェーブロングの金髪を腰まで伸ばし、迫力のある乳房を強調するように胸元を開き、瞳にはアイラインが引かれている。
一言で言えば黒ギャルといった感じだ。
「あ、あたし!?　なんで!?」
「第六感だ。すまないが付き合ってくれ」
「ふざけんなよテメー！　だれがテメェなんかと……ひっ!?　か、身体が勝手に!?」
黒ギャル少女の身体は本人の意思に逆らって動き、四つん這いのポーズを取った。
まるで挿入を待ち望んでいるかのように。
「キミたちの身体はボクの操り人形なんだよ。抵抗は無意味だからあきらめてね」
「ち、チクショウ……！」
「これもお前たちを助けるためなんだ。耐えてくれ」
「や、やめろバカ！　ぶっ殺すぞ！」

ただの少女の強がりなど装刃戦姫には無意味。

サクラヒメはヒョウ柄の下着をズラすと、ギンギンに勃起した男根を密着させる。

「いくぞ」

「クソッ離せ！　離せよ！」

常にワガママを通してきた日常が反転する。雄の衝動が滾り、愛撫もなしに淫肉がかき分けられた。

ズチュ♥　ズググ♥　ズチュググウウウウゥ～ッ♥

「や、あ、あっぐううぅうううううっ！」

「ん……ううう……♥」

「ぐ、ううぅうううう～っ！　抜けよバカあぁぁっ！」

「言い忘れていたけど最低でも三分間はピストンを続けてもらうよ。でないとセックスにならないからね。正解することができなかったり、途中で射精してしまった場合も乱交パーティー決定だから、彼女たちを守りたいなら気合いを入れた方がいいよ」

「な、何言ってんだよこの変態！　やっ……う、動くな！　動くなあぁぁあああああああっ！」

腰を振るスピードが上がり、パチュンパチュンと淫らな抽送音が打ち鳴らされる。

太腿を伝う鮮血が痛々しい。
（これが本物のオマンコの感触♥　オナホールより狭くて熱くて絡みついてくる♥　すごい♥　すごいぃ♥）
初めて体験する本物の女体の衝撃。
これまでとはまったく違う快楽に、サクラヒメの思考は蕩かされる。
「ふぅ、んうううぅう♥　三分間♥　三分間はがんばらないといけないからな♥　し、仕方ないな♥」
「だから痛いって言ってんだろ！　ぐぅぅ……ら、乱暴にすんな！　だれだか知らないけど童貞かよテメェ！」
「だってオマンコが気持ちよくてやめられないんだ♥　遊んでいるように見えて中は真面目なんだな♥　おっ♥　うお♥　も、もう少しだけ我慢してくれ♥」
「う、うるさいバカ！　アグ、ングウウウゥウウウ！」
相手のためだと口にしながらも、瞳は蕩け、言葉にはハチミツのように甘いものが混じる。
フタナリ陰茎は激しく血管を脈打たせ、金玉がオタマジャクシを大量生産する。
「んンっ♥　あぐんっ♥　チンポにくるぅ♥」

「ぐうウウウゥウッ！　ホントマジでふざけんな……やぁ♥　あんうううぅううう♥」
極太の肉圧力を前に黒ギャル少女の蜜壺は濡れ、甘酸っぱい喘ぎが漏れ出していく。
（装刃戦姫に転身しておいてよかった♥　建宮流華のままじゃこんなことできないからな♥　万が一バレたら人生終了だが……き、きっと大丈夫だろう♥）
自分の正体がわからないことを利用し、思う存分淫悦に耽（ふけ）る生徒会長。
学園での清廉な立ち振る舞いをかなぐり捨て、肉勃起に身体をゆだねる。
「ふん♥　ふん♥　ふううぅぅ～ん♥　チンポくるぅ♥　ぁ、おほおおおぉおお♥」
「気持ちよさそうにしているところ悪いんだけど、そろそろ答えを聞かせてくれないかな？」
「では回答するが答えは×だ。わたしが使ったオナホールは彼女ではない」
「本当にそれでいいの？」
「気持ちよかったが感触が全然違う♥　ン……んんぅ♥　どうなんだ合っているのか!?」
「へぇ、なるほどね」
鬼蛙はもったいぶった様子で答えを焦らす。どうやら今すぐに答え合わせをする気はないようだ。
「正誤の判定は○だと言った時にするよ。ゲーム続行の判断はキミたちに任せた方が面白

いでしょ？」
「ふん、そうやってニヤニヤ笑っていろ。最後にはわたしたちが勝ってみせる！　♥　ん、ンウウウウゥ……♥」
「終わったなら早く抜けよ！　いつまでやって……ああ、あぐうううううう♥」
「そ、そうだな！　すまない」
我に返った淫乱戦姫はにょぷんっ、と勃起ペニスを引き抜いた。雌蜜が糸を引き、亀頭がテカテカと光る。
「お次はだれにする？」
「……彼女だ」
「わ、わたしですか!?」
サクラヒメが次に選んだのは風紀委員長だった。
セミロングの黒髪で前髪をセンターで分け、胸は薄く眼鏡をかけている。
非常に真面目な女子生徒で学園では規則について口論になったこともあった。
「ち、近寄らないで！　あなたたちのやっていることは犯罪よ！」
「すまない。今度こそ当てるからぁ……♥　あ♥　んウウウゥ～～ッ♥」
「いや……嫌アァアアアア！　わたし初めてなのに……ぅ、アグウウウウウウウゥ～

ッ！」

少女の言葉をまったく無視してフタナリ肉竿がバックから挿入される。

痛みこそ軽減されているが、異物感のおぞましさに耳をつんざくような声が上がる。

「やだ……やだぁ！　ぎ、ぎひイイイィイイイイッ！」

「んっ♥　ンンっ♥　フウウウウゥ～～ッ♥　さっきよりもキツいぃぃ……♥　吸盤みたいにチンポに吸い付いてくる♥　あう♥　ううううぅぅ～～♥」

「わざわざ口に出さないでよ……あ、あぐうう……！」

「くぅう……腰フリたまらん♥　はぁ、ハァハァ……♥　犬みたいにヘコヘコしてしまううぅう♥」

乱暴に股間を前後させ男の悦びに耽溺する装刃ヒロイン。ペニスにピッタリとフィットする感触が心地よい。

「アッ、アアアッ……♥　お前がこんなにキツマンだなんて知らなかったぞ♥　規則にうるさいくせにオマンコが風紀を乱しまくりじゃないか」

「気持ちの悪いことを言わないでください！　そもそもなぜわたしのことを……ウッ♥　そ、そこ敏感だから……うぅ、んうううぅうううう♥」

「なんだそこが弱いのか？　ならもっと責めてやる♥　フン♥　フンフン♥　フウウウウ

ウ〜〜ン♥」

「やめ……あ、アグッウウウウウウウウウッ♥」

偶然探り当てたGスポット目がけて、サクラヒメはピストンを強める。

雌を支配する快感に雄の本能が覚醒していく。

そして、再び三分が経過した。

「素晴らしいオマンコだったがこれでもないな♥　答えは×だ♥」

「最低……あなたは最低よ！」

サクラヒメが回答しゲームは続いていく。次はコーデリアが相手を選ぶ番だ。

「さあ、キミはだれにする？」

「あの人にしますわ。使った感触だとスポーツをしている方の気がしますの」

「いいよ、わたしは。他の子が犯されるよりはマシだしね」

選ばれたのは水泳部でエースを務める女子生徒だった。

服装はスクール水着でブラウンのショートヘアーが活発な印象を与え、太腿についた筋肉がエロチシズムを煽る。

容貌は中性的で岩戸学園では女子生徒たちの王子様だ。

「あなたは覚悟していますのね」

「身体の強さには自信があるからね。君が正解することを祈っているよ」
この状況であっても優しさを失わない対応にコーデリアの心がときめく。
だが、それは少女の言葉に感銘を受けたからではなく――
（本人がいいなら思いっきりパコハメして構いませんわよね♥　流華さんのセックスを見てわたくしもう限界ですの♥　あぁ……ついに脱童貞……♥）
浅ましい欲望を渦巻かせるブロンド縦ロールお嬢さま。
フタナリ陰茎はムケ亀頭を露出させ、睾丸ではドロドロに煮詰まった精子がつくられる。
「い、いきますわね♥」
スクール水着の股布をズラすと雄の太幹があてがわれ、一息に朱い肉裂を貫いた。
ミチミチと女陰が開き、快美器官が結合する。
ズグ♥　グググ♥　ズチュググウウウウゥ～～ッ♥
「っ……んん……ンううぅ……！」
「おっ♥　おおっ♥　おっほおおオオォ～ッ♥　生ハメ♥　生ハメ♥　初めてのオマンコ挿入すごいですの♥　おチンポキモチイイ～～ッ♥」
生物としての本能、交尾する悦びが頭の中を埋め尽くす。丸々と太った陰嚢が歓喜に弾む。

「おセックスがこんなに素敵だなんて知りませんでしたわ♥　オマンコの締まりもとっても良くてパコパコ止まりませんのおぉおおおお♥　んぉ♥　おおおぉ♥」

「ッ……ぐ、ああ……！　も、もう少しゆっくり動いてもらえるとありがたいんだけどね……」

「失礼しましたわ♥　そうですわよね、ピストンするだけでいいのですからもっとスローペースで♥　でぇ……♥」

「んく、あ、ウゥ……わかってくれたかな？」

「やっぱり無理ですわ！♥　おチンポ入ってますのに我慢なんてできませんのォ♥　へぅ♥　ふうぅ♥　んぐフウウウウゥ～～♥」

ボリュームのある金髪を振り乱し、コーデリアは快楽の波に飲まれていく。

相手のことを考える理性などまったくない。

「ぐ、苦しい……あ、アアアアアアアアッ！」

「ごめんなさい♥　ごめんなさいぃ……♥　ほぅ♥　んんぅ♥　へほうぅぅう～～っ♥」

「いやだ……ああ、うぐうううううううぅう！」

「オマンコ狭くてヒダのザラザラがスケベ過ぎますわ♥　ずっぷずっぷって快感が昇って

きますの♥　はあぁ♥」

全方位から肉竿を愛撫する感触に、痴女としか思えない嬌声が吐き出される。

厳しい練習で練り上げられた肉体は、性技においても一着だ。

「三分経過。答えはどっちかな？」

「ば、×ですわ！　わたくしの使ったオナホールはこの方じゃありませんのぉ……♥」

「ハァハァ……ひどい人だね……」

わずかに残った理性で肉竿を引き抜く薔薇の戦姫。

声をかけられるタイミングがもう少し遅ければ、快楽に負けて射精してしまっていただろう。

「次はあの子にしますわ♥」

「ひ、ヒナのこと!?」

ヒナと名乗る少女は怯え、身体をすくませる。

ピンク色の髪をツインテールにした、幼児体型の女子生徒だ。

「む、ムリムリ！　そんなの入らないよぉ！」

「大丈夫、すぐに終わりますから♥」

「いや……いやだぁ！　やあああぁあああああっ！」

ピッタリと閉じた縦スジを我慢汁でヌルついた肉棒がこじ開けた。
まだ陰毛も生えそろっていない鼠蹊部を、獣欲のままに占領する。
「あが、グ、ぐひイイイイイイイィ〜〜ン！」
「んんっ……かなりキツいですわね♥　初めは痛いかもしれませんけど、すぐに良くなりますわよ♥」
「やだやだやだやだ抜いてよぉ！　こんなのヒナ壊れちゃう……あ、アアアアアアッ！」
「ヌぅ♥　ウウウウウウウゥ……♥　床のシミでも数えてなさい♥　ハァ……あはぁあああああ〜〜っ♥」
まるでオニグミのようなセリフを吐き、ロリィな肢体を弄ぶ正義のヒロイン。
奥行きの浅い膣孔を穿（うが）たれる苦痛は、媚薬でも完全には消せない。
「あぁ……♥　へあぁああ♥　マンコキいいですわ♥　手でする時の何倍もエレクトしてしまいますの♥」
「パパ、ママぁ……だれか助けてよぉ……ん、ジジ……！　ぎぅ、ウウウウウウウゥ〜〜ッ！」
「おチンポに従うのいい♥　パコハメすごぃ♥　キツキツマンコしゅごいいいいいいいいいい♥　あへぇえ……♥」

サファイアブルーの瞳を淫悦に蕩かせ、コーデリアは性交に溺れていく。
「本当は正解がわかっているのに、ワザと外しているんじゃないよね!?　ヒナたちのこと助けてくれるんだよね!?」
「と、当然ですわ！　どんなに気持ちよくても嘘なんて吐きません！　あぅ……♥　あふうううぅ……♥」
少女の言葉で一瞬理性が戻る。
装刃戦姫としての使命がギリギリのところで、守る意思を繋ぎ止める。
そして、女子生徒にとって地獄のような三分間が終了し、ようやく回答が告げられた。
「こ、答えは×ですわ！　彼女も違います……♥」
「うぅ……ひどい……ひどいよぉ……」
フタナリペニスが膣孔から抜かれ、女子生徒は泣きじゃくりながら解放された。
「まだまだお友達はいるからね。キミたちの勘の良さに期待してるよ」
「くっ……仕方ないな♥」
「やるしかありませんものね♥」
サクラヒメとコーデリアは当たりを探し、女子生徒たちを犯していく。
それが自分たちの正義だと信じて。

◆◆◆◆

「はぁ……はぁ……こんなことがあるのか」

「まさか嘘でしょう……」

装刃ヒロインは残りの人数が二人になっても、まだ正解を見つけることができなかった。

互いに相手を交換して犯しあい、度重なる挿入で肉竿の忍耐力ももはや限界だ。

（本当にオリジナルなんていうのか？　わたしたちは騙されているんじゃないのか？　もしくは……）

（これってそういうことですわよね。くっ、相変わらずやり口が汚いですわ）

不信感を抱きつつも、サクラヒメとコーデリアは目配せをする。胸中には確信に似た思いがあった。

女子生徒たちは無作為に集められたわけではなく、二人に近しい人間が混ざっていたのだ。

（できることなら友人は犯したくない。その心理に付け込んできたのか）

（わたくしと一緒に転入したメイドを狙うなんて……本当に最低ですわ）

親しい人間を利用され、ダブル戦姫は唇を噛む。

（オニグミに輪姦などさせてたまるものか！　そんなことをさせるくらいなら、いっそわ

たしが……♥）

（たとえ怨まれることになっても全員守ってみせますわ。わたくしなら化け物のチンポに奪われる前に気持ちよくできるはず……♥）

角砂糖のように崩れ行く理性を繋ぎ留め、再びゲームに挑む対魔ヒロイン。

濁った劣情に支配されながらも、今度は二人同時に指名する。

「わたしは彼女にする」

「は、はい！」

サクラヒメが選んだのは剣道部の後輩だ。

黒髪をポニーテールで纏め、剣道着は慎ましく膨らんでいる。

くりくりとした瞳が子リスのような印象を与える可愛らしい少女だ。

「わたくしはその子にしますわ」

「承知いたしました」

コーデリアが選んだのはエイミス家のメイドだ。

ストレートロングの金髪を腰の辺りまで伸ばし、たわわな果実がメイド服を押し上げている。

オニグミに拉致された時点で覚悟を決めたのか、無表情を貫いている。

「ゲームもクライマックス、キミたちの答えを見せてもらうよ」
「ああ、いくぞ！」
「絶対にこれで終わりにしてみせますから！」
バックからお尻を掴み下着をズラすと、二本のペニスが淫裂に接触する。
フタナリ肉幹は真っ赤に充血し、一秒でも早く射精したいとミミズ腫れのような血管を脈打たせていた。
限界ギリギリまで追い詰められたそれは、本日何十度目かの挿入を体験する。
ズグ、グググ♥　チュグウウウウウウゥ～～ッ♥
「ヒッ、あ、ああ、アアアアアァアアアアアアッ！」
「ッぐ……んんん……！」
対照的な悲鳴が上がり、剣道少女とメイド少女の柔肉が穿たれる。
雄の欲望を込めた一刺しに脊髄の神経が震える。
だが、黒髪乙女とブロンドお嬢さまの驚きはそれ以上だった。
今までとは比較にならない快美がフタナリチンポを直撃したのである。
「おお♥　ほおおぉ♥　おっほオオオォオオオ♥　ち、チンポチンポチンポチンポにくるうぅ♥　これしゅごい♥　一番しゅごいいいいいいいいい♥」

「へお♥　ごおお♥　おチンポきてますのおオオオォオ♥　キュウキュウ締め付けオマンコが疲れマラに響いてきますのおぉおおおお♥」

戦いに相性があるようにセックスにも相性のいい相手がいる。

サクラヒメとコーデリアが選んだ女子生徒は、射精衝動を昂らせるという点において最高だった。

「あ、ふああ、アへあああぁ〜〜♥　ハメるのいい♥　良すぎる♥　チンポにマゾザーメンがどんどん昇ってくるうぅうう♥」

「やっ、乱暴にしないで……ジジ、ンンン〜〜ッ！」

「止められない♥　止められない♥　腰フリ止まらないイイイイィイ♥　ああ……チンポが気持ちよ過ぎる♥」

股座の猛りに突き動かされ、猿のように腰を振り続ける装刃戦姫サクラヒメ。

抽送音に合わせてGカップメロンが大きく弾む。

「マンコキ♥　マンコキ♥　オマンコでコキまくる♥　包茎マラのチンカスまで擦り付けてしまうううぅ♥」

「汚いこと言わないで……！　この変態！」

「口の悪い子にはお仕置きだな♥　もっと奥までほじってやる♥　フン♥　むぐん♥　ヌ

ぐうううぅうう♥」

「っ……ぐ、ア、アアァアアアアアアアーッ！」

後輩ということも忘れてピンクの媚肉をかき回す。精管がザーメンを送り、いけないとわかっていても射精を渇望せずにはいられない。

「おん♥　おん♥　うおおオオォ～～ン♥　あなたのオマンコがこんなにスペシャルだなんて知りませんでしたの♥　一突きするだけでおチンポが溶けてしまいそうですわ♥　アフウウゥゥ～～ッ♥」

「ッ……うう、はぁぁ……！」

「こんなことならもっと早くエッチしておくべきでしたわね♥　カウパーがはしたないくらい湧き出てきて、種付けしたくなっちゃいますわ♥　あヒ♥　ヒヒ～～ン♥」

「お嬢さまそれはいけません……くぅ、ぐうううぅう！」

子供の頃から一緒に遊んだメイドを相手に、汚れた欲望を発散する。

惨め過ぎる交尾をしているのに、背筋を流れる快美電流が止まらない。

「金玉も密着させてぇ……♥　もっと、もっと奥までブチ込みますのおぉおお♥　ッン、くううぅ～～♥」

「いけません目的を見失っては……はぁ、あああぁっ！　生徒の方々を助けるのでしょ

う!?」

「そんなのわかっていますわ♥　でもセックスが最高過ぎますの♥　ハメちゃダメなのにおチンポ虜になるぅ♥」

「あが、あぐうぅぅ……ううぅうううっ！」

今のコーデリアにとっては苦しむメイドの声すらもピストンを煽るスパイスにしかならない。

犬のごとくハッハッと舌を出し、我を忘れて交尾する。

「三分が経過したわけだけど、答えを言ってもらえない？　それとも童貞卒業の方が大事なのかな？」

「こ、答えはぁ……♥」

「い、今言いますわ……♥」

サクラヒメとコーデリアは気づいている。

自分たちが挿入している相手がオナホールのオリジナルではないことを。

しかし、それがわかっていても抽送を止めることはできない。

（どうしてこの子もオリジナルじゃないんだ!?　わたしは間違っていたのか……っ、ンンンン♥　ダメだ頭が働かないぃいい……♥）

（なにかおかしいのにチンポきてしまいますの！　ざ、ザーメン出したいぃ♥　これ以上焦らされたらわたくしおかしくなってしまいます！）

もう他に選択肢はないはずなのに答えが見つからない。無意味に女子生徒を犯したのではないかという疑心、不安、後悔が心を苛む。

（も、もう無理だ♥　これ以上耐えられない♥）

（射精したい♥　射精したい♥　射精したいぃぃ♥）

今の彼女たちを動かしているのは頭ではなく、フタナリ肉竿に他ならない。

瞳の向こうでは快美の火花がパチパチと瞬き、黒と黄金の戦姫は屈服の言葉を吐いてしまう。

「答えなんてどうでもいい！　種付けする♥　ザーメン注ぐことの方が大切に決まっているだろう♥　おお♥　んおおおぉおおお♥」

「答えなんてクソどうでもいいですわ♥　パコハメより大切なことなんてありませんのおおおおおおお♥」

「う、ウソ!?　何言ってるの!?」

「お嬢さま快楽に負けてはなりません！　正気を取り戻してください！」

剣道少女とメイド少女が必死に呼びかけるが、肉悦に堕ちた装刃戦姫には届かない。

腰を打ち付けるスピードがさらに速さを増し、亀頭が子宮口をノックする。
「オマンコ突く♥　突く♥　突く♥　突きまくるうぅうううう♥　チンポ竹刀で一本取りゅのお♥　うぅ、ザーメンくる♥　ポコチン汁昇ってくるうぅうううう♥」
「こんな時建宮先輩がいてくれたら……ア、ああ！　やぁあああああ！」
「温かくてキツキツでヌルヌルでパーフェクトなオマンコですわ♥　エイミス家の子女として誇りに思います♥　んぅ、ううぅ……おチンポに響きますのおぉ♥」
「どうか自分を見失わないでください……あく、んんく、う、ンウうぅぅううううう！」
本能のままに射精衝動を昂らせ、童貞肉幹は大人になろうと猛り狂う。
鈴口がブルブルと震え、マグマのような精熱が股座に充填（じゅうてん）される。
何度も何度ものお預けを喰わされていたフタナリ勃起は、熱く重い白濁ゼリーを吐き出した。
ビュグ♥　ドビュググ♥　ドッビュグウウウウゥウウウ♥　ドプ♥　ブッブ、ブビュルルルウウウウウウゥ〜〜ッ♥
「おほ♥　おぉおほ♥　ふほおぉおおおお♥　イッた♥　イッた♥　チンポイッたあぁああああ♥　童貞チンポが初めてイッたあぁあ♥　ほぉ♥　おぉおぉ♥　くっさいザーメンドバドバ中出しする♥　後輩のマンコに中出しアクメ決める♥　敗北負け犬ゴミ精液一滴

残らず吐き出すのおぉ♥　ぎ、ぎもぢぃぃ～～～～っ♥」

「うひ♥　ひひひ♥　イッひひひ～～ん♥　童貞おチンポ初射精♥　女の子のオマンコで初イキしますのおぉおおお～～っ♥　カクカク腰フリダンスでザー射♥　パンパン玉袋打ち付けてザー射♥　おチンポで子宮ノックしながら惨めに情けなくザー射しますのぉおおおおお♥　マゾ発情臭まき散らしながらメイドオマンコでイグ♥　イグ♥　イッグううううぅ～～っ♥」

プライドなど一欠片もないアヘ顔でイキ狂う敗北ヒロイン。

淫裂から溢れるほどにザーメンを注ぎ、腰を振り続ける。

「残念だけど今回もボクの勝ちみたいだね。クフフ、ご愁傷様」

「くぅ、ううぅ……♥　どういうことだ鬼蛙……」

「ぁ……ああ♥　わたくしたちを騙していましたの!?」

「童貞卒業おめでとう。じゃあ、答え合わせをしようか。結論から言うとオナホールのオリジナルはキミたちのオマンコさ。サクラヒメはコーデリアの雌穴を、コーデリアはサクラヒメの雌穴を探してたってわけ」

「そ、そんなぁ……卑怯だぞ……！」

「そんなのわかるわけありませんわ……！」

「『オリジナルとして膣をコピーした生徒が今ここにいる』って言ったでしょ？　人の話はよく聞かないとね」
「じゃあ、わたしたちのやってきたことは一体……」
「あ、あああ……」
自分たちが無意味な陵辱を行ったという事実。
言葉を失う装刃戦姫の前で、今まさに乱交パーティーが開催されようとしていた。
「ヒヒ、美味そうなガキどもだなぁ」
「おい、暴れるんじゃねえよ。ここからはオレたちが気持ちよくしてやるからなあ」
「やめろ！　離せテメェ……ング！　んうううううう！」
「汚いものを近づけないで……ア、あくうぅうう！」
「この変態……ああ、アアアアァアアア！」
「うぅ、臭いぃ……ヒナ死んじゃうううう……！」
「嫌ですあなたたちとなんて！　ッ、ううううぅ！」
「あ、くあああああぁ！　わたしに触れるな！」
黒ギャル、風紀委員長、水泳部員、ロリぃ、剣道部の後輩、メイド、他の女子生徒たちもオニグミの毒牙にかかる。

悲鳴と嬌声は劇場中に響き渡り、魔の饗宴（きょうえん）は終わることなく続いていく。

◆◆◆◆

地下劇場淫獄四日目。

本日も屈辱的な調教が戦姫たちを待ち受ける。

「毎度毎度よく思いつくものだ……下衆どもめ」

「ここには変態しかいないようですわね」

サクラヒメとコーデリアは赤ちゃんの衣装で舞台に上げられていた。

頭にはフリルの付いたフード、胸元には可愛らしいよだれ掛け、手にはフワフワしたミトンの手袋、お尻には大人用の布オムツを穿かされている。絵柄はすべてピンクの苺模様だ。

それ以外の着衣は認められておらず、絹のような素肌が晒され、Gカップ巨乳とEカップ美乳がよだれ掛けの下からはみ出していた。

「それにアソコがムズムズして……」

「うぅ……気持ち悪いですわね」

フタナリペニスにはローターが括り付けられ、肛門にはアナルバイブが突き刺さっている。またスイッチ一つで射精させられるのかと思うと気が重い。

（こんな格好を見て何が面白いんだ。良平がこの場にいなくて助かった。もし見られたら……か、考えたくもない！）

（このわたくしが赤ちゃんのコスプレなんて！　どいつもこいつもクズ野郎ばかりですわ。良平くんに知られたら人生お終いですわね。二度と顔を合わせられませんわ……）

引き締まった肉体に赤ちゃんコスチュームはかなり不釣り合いで、二人は拳を震わせて歯噛みするばかりだ。

堕ちたと思わせるために反抗的な態度は取れない。作り笑いを浮かべながら、下卑た視線の的になるしかないのだ。

「いい格好じゃないか。よく似合っているよ」

本日の司会は妖月。これから始める調教を想像し、早くも舌なめずりしていた。

ルージュの塗られた唇が半月状に歪み、お尻から生えた白い四尾をくねらせる。

「お前たちお客さまに自己紹介だよ。しっかりとアピールしな」

「わ……わかりまちた♥　赤ちゃん戦姫サクラヒメでちゅ♥　長所は無駄に大きなオッパイ♥　短所は腋が臭いことでちゅ♥　好きなことはセンズリでちゅう♥　ばぶばぶう～♥　ぶぶう～♥」

「赤ちゃん戦姫コーデリアでちゅわっ♥　長所は場所ばかり取るデカ尻♥　短所はマンコ

が臭いことでちゅわ♥　好きなことは露出オナニーでちゅ♥　ぶぶ～う♥　ばぶう～♥」

赤ちゃん口調で恥ずかし過ぎるセリフを言わされる装刃ヒロイン。

死にたくなるくらい惨めだが、今はまだ演技を続ける時だ。

オムツでゴワゴワしたお尻を突き出し、ミトンで包まれたお手々を振りながらアピールする。

「ふふ、よくできたねぇ。それじゃ、あんたたちにはハイハイ競走をしてもらおうか。お前たち準備をしな」

（ハイハイ競走……？）

（一体どんな競走ですの？）

頭に疑問符が浮かぶ。聞くだけではほんわかした印象を受けるが油断はできない。

命令を与えられた小鬼たちは手際よくコースをつくっていく。

舞台には十数本の金属ポールが並べられ、障害物競走に使うハードルを思わせた。

ポールは床から少し浮いているだけで、四つん這いでも簡単に乗り越えることができそうだ。

「今から勃起を維持したハイハイの姿勢で舞台の端から端、スタート地点からゴール地点まで競走してもらうよ。ただし並べられたポールにペニスが触れたらスタートからやり直

し。負けた方には罰ゲームがあるから精々頑張りな」
（勃起状態で競走……悪趣味だができなくはないか）
（女狐の考えそうなことですわね）
眉間をひそめながらも、思いのほか単純な内容に安堵する。
だが、そのように甘い話があるわけなく、身の毛がよだつような仕掛けが告げられた。
「ああ、そうだ。ポールには電気が流れているから注意して進みな。チンポを感電させたくはないだろう？」
「で、電気だと……!?」
「正気ですの!?」
「赤ん坊らしくない口のきき方だねぇ。大体オニグミに忠誠を誓ったんじゃないのかい？」
「ぐ……う、嬉しいでちゅ♥　サクラヒメはハイハイ競走しましゅ♥　ぶぶぅ～♥」
「わ……わたくしもコーデリアもおチンチン丸出しでハイハイしまちゅっ♥　させてくだちゃい妖月ちゃま♥　ばぶぶ～♥」
必死で取り繕い赤ちゃん言葉で媚びを売る。
よく見るとオムツの真ん中には切れ込みがあり、そこからフタナリ陰茎を露出することができた。

妖月はローターが括り付けられたイチモツを晒しながら進めと言っているのだ。
（やるしかないか。オニグミを倒すためならこんな屈辱なんて……！）
（精々調子に乗ってなさい。神器結晶を取り戻したら万倍にして返してあげますから）
スタート地点に移動し、横並びで電流ポールに臨むサクラヒメとコーデリア。
小鬼がホイッスルを鳴らし、ハイハイ競走がスタートした。
（さっさと終わらせてやる。こんなもの修行に比べればなんということはない！）
（くだらないお遊戯ですわね。速攻でクリアして差し上げますわ！）
序盤から飛ばし、二人はかなりの速さで舞台を進んでいく。装刃戦姫として鍛えられた筋力はまだまだ健在だ。
電流ポールも腰を浮かして難なくかわしていく。
「ほお、やるじゃないか」
「チッ、つまらねえ。早く感電しやがれ」
「そーだ。俺たちは情けなく射精するところを観にきたんだよ！」
オニグミや観客の期待を裏切って、順調に競走は進む。
しかし、全体の三分の一まで進行したところで状況が変わった。
「二人もよく頑張るねぇ。じゃあ、ここらで一発いっておこうか。スイッチオン」

妖月が手元のリモコンでローターの電源を入れたのだ。
たちまちに振動が襲い掛かり、肉茎と亀頭がブルブルと可愛がられてしまう。
ヴヴ……ヴヴヴヴヴヴヴッ！　ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ!!
「あっぐううううう!?　妖月貴様……んぐくううううううぅぅ～～っ♥」
「ひぅっ、んひくううぅうぅぅう♥　お、おチンポが……あひイイイィイィイイン♥」
被虐に慣らされた肉体は呆れるほど刺激に弱く、フタナリペニスがさらにビン立ちさせられる。
調教の影響で二人の感度は常人の何倍も鋭くなっていた。
「うっ、うぎぃぃいいいいいぃ♥　チンポ振動ダメえええええええええ♥　ほ……包茎チンポがおっきくなっちゃいまちゅうぅ♥　ばぶッ♥　ぶぶう～～ッ♥　ぶううぅ～♥」
「ひぐうぅうううううぅ♥　ひぎゅ♥　うぐぅッ♥　わたくしのおチンポも怒張してしまいまちゅのぉ♥　ドマゾ勃起マラが暴れちゃいまちゅわ♥　んッ♥　あぶぶ～ッ♥　ばぶう～♥」
肉竿に血液が送られムクムクと膨らんでいく。ミミズのような血管が浮き上がり、乙女の極太フタナリチンポが立派に反り返った。
ローター振動のせいで腰を突き出す格好になってしまい、真っ直ぐ歩くことさえ困難だ。

「チンポ♥　チンポ感じまちゅ♥　んぶっ♥　ふぐうぅうううう♥」
「こ、こんなのズルいでちゅわ♥　ばぶ♥　ばぶばぶ♥　んぐうぅうううう♥」
鈴口をじわりと湿らせながら本物の赤ちゃんのようにハイハイさせられてしまう。
柔らかな双乳がよだれ掛けを押し上げて官能的に弾んだ。
「いいぞ！　もっとチンポをブラブラさせろ！」
「まるで玩具の子犬みたい。惨めねぇ」
「んぐ、ふぐむうぅうう♥　妖月め卑劣な……ああ、あううぅうううん♥」
「こ、腰が抜けてしまいまちゅわ♥　ほぉ♥　もぉ♥　へほぉおおおおおぉお～っ♥」
振動で手足がふらつき、ポールを避けることもままならない。
亀のようにノロノロした動作でなんとかゴールを目指す。
「ぐひいぃ……う、うぐぅ♥　んッ♥　おおうッ♥　おチンポヤバイでちゅう♥　おチンポが当たってしまいまちゅ♥　敏感なところに電気がきちゃいまちゅ♥　ぶぶ～♥　あううぅッ♥」
「ひぅッ♥　で……電気なんて絶対に嫌でちゅわ♥　ビリビリ大嫌いでちゅのおぉおおおお♥　わたくしのおチンポちゃんと動いてぇ♥　おぶ～♥　ひううぅうぅうぅ♥」
「はうっ……♥　ぐううぅッ♥　腰が抜けてしまいまちゅ♥　進めないでちゅうぅうぅ

うううぅッ♥　妖月さまぁスイッチを切ってぇ♥」

「わたくしからもお願いちまちゅわ♥　妖月しゃま♥　おチンポ振動つらいですのぉおおおおお♥　ハイハイできなくなっちゃいまちゅうぅうう♥　んんッ♥　むきゅぅッ♥」

快美振動に身体を弄ばれる。ポールを跨ぐたびに、冷汗が流れる。

姿勢は風に舞う枯れ葉のように安定しない。感電なんて絶対にごめんなのに。

「ダメに決まっているだろう。立場をわきまえない雌奴隷にはお仕置きだねぇ。はい、スイッチ強っと」

「おぐぅうううぅううう♥　おッ♥　おうッ♥　パワー上げないでえぇえぇえぇえぇえ♥　ごめんなさい妖月ちゃまあぁあぁあああぁ♥　おぶッ♥　むぐうぅうぅう♥」

「ンあぁあぁぁあぁぁあああッ♥　あっ♥　ああんっ♥　わたくしも謝りまちゅからぁ♥　だからおチンポぶるぶるさせるのやめてえぇえぇえぇえぇ♥　進めなくなっちゃいまちゅうぅうううう♥　へぉ♥　あひイィイイイイン♥」

カクカクと腰を動かしながらサクラヒメとコーデリアはハイハイ歩きをする。

歯を食いしばり快楽に耐えていても、射精衝動はどんどん昂ってくる。

可能なら今すぐにでも肉竿をシゴきたく、フタナリにされたことをこんなに怨めしく思ったことはない。

「チンポ狂う♥　狂ってちまううぅうう♥　んぐあぁあああ～っ♥」
「あぁ……腰フリしたいぃ♥　ザーメン昇ってきちゃいまちゅ♥　ばぶ♥　ぶうぅ～♥」
赤ちゃんの格好が余計に恥辱を煽り、頬が熟れたリンゴのごとく赤くなる。
床に恥ずかしい我慢汁を飛ばしながらゴールを目指す淫猥乙女。ゴールまでの距離はスピードタイプのコーデリアが少し近いだろうか。
「おい、さっさと進めよ！」
「ペニスをぶんぶん振って情けないですわねえ」
「い、急がないといけないのに……ぐぅっ♥　ハグウウウウウゥゥ～～ッ♥」
「おチンポくるしぃ♥　ハイハイがキツいでちゅのぉおおお♥　ぶぶ♥　んぶくううぅ～っ♥」
最高に無様でみっともないショーに観客は大喜びだ。口々に勝手なことをのたまい、さらに装刃戦姫の心を踏みにじる。
「も、もうダメでちゅわ♥　わたくし力が入りませんの……あ、あああ、アアァアアアアッ！」
ゴールまであと数メートルというところで、ついにコーデリアの肉竿がポールに触れてしまった。

電流がブロンド戦姫の身体を駆け巡る。
ビリ、ビリビリイイィィイッ！　ビリビリビリイイイイイイイイイッ！
「あびッ♥　あぎぃぃぃぃぃぃぃッ♥　おチンポに電気流れちゃってまちゅう♥　うぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ♥」
勃起ペニスを感電させ獣のような悲鳴を上げるコーデリア。
流れる電流は決して強くはないが、神経の集中している箇所を責められ悶絶する。
海綿体が膨れ上がり睾丸が震え、肉茎の先端がヒクヒクと蠢き、フタナリペニスが痛みに反応する。
「い、イク……イク……イキまちゅうぅうぅぅぅぅ♥　マゾ射精しちゃいまちゅうぅううう♥」
限界を迎えた肉竿から白濁液が迸った。
ブビュ♥　ビュビュク……ブビュルルルウウウウウゥゥウ♥　ドクッ、ドピュルルルン♥
「ん、ンほおおおぉおおおぉおお♥　イグッ♥　イグッ♥　イッきゅうぅぅぅぅぅ♥
電気ビリビリでおチンポがイっちゃいまちゅう♥　ばぶっ♥　ばぶっ♥　ぶぶうううううぅぅぅうッ♥　赤ちゃんザーメンでちゃいまちゅのおぉおおおぉ♥」

みっともなく白濁液を吐き出しながら、大声で絶頂する赤ちゃんコーデリア。
ペニスを這いずりまわる電気刺激に狂わされる。苦痛が嬉しくてたまらない様子で、赤ちゃん衣装をアピールしながら観客にアヘ顔を晒す。
「はぇ……アへぇ……♥　バブううぅ～ん♥」
これで始めからやり直しである。小鬼に引きずられスタート地点に戻される。
（感電したらあんなことになってしまうのか……わ、わたしは電気アクメなんて絶対にしない！　しないからなっ！）
悲惨過ぎるコーデリアの惨状を見て、サクラヒメは青ざめる。とても人間がする絶頂とは思えない。慎重にポールをかわして、ゴールまで進んでいく。距離はあと三メートルもない。
「よし、あと少しだ」
「ああ、そういえばコイツのことを忘れていたよ。せっかく準備したんだから使わないとねぇ」
「何……ん、ンンンッ!?　ングむうううぅううう～～っ!?」
妖月はもう一つのスイッチを入れる。お尻に刺さっているアナルバイブのスイッチを。
機械音と共に直腸壁が擦り上げられ、快美の閃光が下半身から上半身へと駆け上る！

ブヴヴヴヴヴッ！　ブヴヴヴヴヴッ！　ビヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ！

「くひぃッ♥　お……お尻♥　お尻いぃいぃいぃいぃ♥　おッぐ♥　こ、肛門が変になるううぅうぅッ♥　アナルイク♥　アナルイグ♥　アナルバイブでバランス取れなくなっちゃいまちゅうぅうぅぅぅう♥」

「ほらほら頑張りな♥　おチンチンが痺れちゃうよぉ」

「うぎゅうううう♥　ハグッ♥　お……おぐうぅうううぅうう♥　チンポいじめ嫌なのぉ♥　許ちて許ちてえぇぇぇぇぇぇ♥　ばぶっ♥　ばぶっ♥　ぶぶぅ～♥」

突然の肛門攻撃にフラフラと身体を揺らすアナルマゾの変態乙女。前立腺を刺激され、強制的にマゾ勃起させられる。

「ま、まてっ！　本当にダメだから……あ、あひゃあぁあああああああっ♥　ケツ穴感じてしまう♥　ウンコ穴でイキたくなるぅうううう♥」

快楽と恐怖がない交ぜになり、耳をつんざくような悲鳴が上がる。肉幹の血管が脈動し、射精衝動が押し寄せてくる。

「で、でる♥　ザーメン漏れまちゅ♥　今ダメなのにぃいいいいい♥　バイブすごぃいい……♥　くるっ！　くるくるくるくるぅウウウウゥゥッ♥」

身体のすぐ下にポールがあるのに、絶頂を制御できない。瞬く間に意識が飛翔し、あっ

けなく雄汁が噴き出した。

ビュク♥　ブビュルルウウウゥ～ッ♥

「イク♥　イクううううぅ～っ♥　ケツ穴ほじりでザーメンぶちまけりゅうぅううう♥　ケツマゾアクメするうぅううう♥」

粘ついた雫がパチパチと火花を散らす。水の中にいるように身体がフワフワして心許ない。

「力が入らない……だ、ダメだ！　いや……あぁぁあああっ！　アアァアアアアアアアッ！」

バランスを崩した勢いで、肉竿がポールに接触する。青白い電流が逆りイッたばかりのフタナリチンポを痛烈に刺激した。

ビリビリイイイイッ！　ビリビリイイイイイイッ！　ビリビリビリイイイイイイイイッ！

「おッぎいぃいいいぃいいぃいぃ♥　ま、ま、マゾマラが感電してりゅうぅううぅうッ♥　ん……ぎ……うひっ♥　ほごおぉおおおぉ♥　変態イキマラがビリビリ痺れるううぅううぅうぅぅう♥」

ローターの刺激と電気刺激が合わさり、圧倒的な快悦が生まれる。躾けられた肢体は電

流の痛みさえも心地よいと錯覚し、淫悦に痙攣した。
思考が点滅し被虐エクスタシーを覚えながら、肉竿がせわしなくザーメンを吐き出す。
ビビビリュウウウウゥゥ♥　ピュピュピュ……ドピュピュピュウウウウゥゥ～～ッ♥
「い……イグッ♥　イグイグ♥　イグッ♥　イッグウゥウウゥウウゥウ♥　おひいいいいい♥　マライグ♥　マライグ♥　わたしのド淫乱マラがまたイグウゥゥウゥウゥウゥ♥　ばぶっ♥　ばぶっ♥　ばぶうぅうううぅうううぅう♥」
涙どころか鼻水まで噴き出しながら感電絶頂する装刃戦姫サクラヒメ。
これで彼女もスタートからやり直しだ。
「くぅ……ハァハァ……や、やりましたわ。わたくしの勝ちですわね！」
その間にコーデリアが進み、ゴールテープを切る。ハイハイ競走の勝者は決定した。
「ぐぅ……わたしの負け……罰ゲームか」
「じゃあ、お色直しといこうかサクラヒメ。最高に恥ずかしい思いをさせてあげるよ」
サクラヒメは一度舞台袖に引っ込む。そして頬を上気させながら再び舞台に現れた。
オムツに新たな切れ目を入れられ、薄ピンク色の菊門を露出させられている。
「うぅ……この変態ども……」
悔し涙が溢れる。黒髪乙女は舞台の中央、観客からよく見える位置に立つと上半身を折

り曲げた。

屈伸するような体勢で股の間から顔を出し、肛門をヒクつかせながら変態セリフを口にする。

「装刃戦姫サクラヒメは……ば、罰ゲーム『お人形遊び』をしまちゅ♥　会場の皆さま♥わたしの最低お遊戯をいっぱい見てくだちゃい♥」

言うと同時に菊門がいやらしく隆起する。まるで、噴火前の火口のようだ。

「おいおい、勘弁してくれ」

「品がないわねぇ」

観客たちはここで脱糞でもするのかと顔をしかめる。

「も、もう少し……で、でる！　でてくるぅうううう♥　あ、あああっ！」

「ふふ、よくできました」

だが、予想に反して皺の伸びきったアナルから出てきたのは、ゴムでできた犬の玩具であった。

サクラヒメは尻穴から乳児用の玩具をひり出すと、括約筋で玩具の下半身をガッチリと固定し、指人形のように支える。

（こ……こんなの正気じゃない。完全に頭がおかしい変態女だ。ひど過ぎる……惨めで恥

ずかし過ぎる……！　ううぅ……）

装刃戦姫の矜持を切り刻む屈辱罰ゲームに、心が乱れる。

黒髪ヒロインはぎこちない笑顔をつくり、恥辱のごっこ遊びを強いられる。

「ぼっ、ぼくの名前はポチだワン♥　お家は変態ドマゾのウンコ穴だワンッ♥　ワンッ♥　ワンッ♥」

裏声を使ってアテレコまでさせられる。妖月と会話をするように。

「へぇ、ウンコ穴に住んでいるのかい。ポチはそんなくっさいお家で嫌じゃないのかい？」

「い……嫌だけど仕方ないワンッ♥」

「どうしてだい？　あたしだったら引っ越したいけどねぇ」

「サクラヒメがおバカの雌奴隷だからだワンッ♥　オツムが弱いからぼくがいないとダメなんだワンッ♥　ワウ～ン♥」

「ふぅん、装刃戦姫サマは頭が悪いのかい？」

「そうだワンッ♥　いつもフタナリチンポで射精しちゃう性欲バカ女だワンッ♥　正義のヒロイン気取っているくせにチンポには勝てない淫乱雌犬だワンッ♥　ワンッ♥　ワンッ♥　クゥーンッ♥」

正気とは思えない恥辱に頭の中が真っ白になる。これが現実だと信じたくない。

「――ひどいなこれは」
「……はは、ハハハ！」
「あはははは！　頭がおかしいんじゃないのか！」
「下品ねえ。人間のすることとは思えないわ」
あまりの醜態に観客たちは一瞬静まり返り、それから嵐のような爆笑が巻き起こった。
皆が皆装刃戦姫の醜態を嘲笑い、容赦なく野次が飛ぶ。
（くっ、転身さえできれば貴様たちなんて……良平のことがなければ今すぐこの場で全員斬り殺してやりたい）
サクラヒメは茹蛸めいて赤くなりながら、必死に耐えることしかできない。
アナルで人形を支えたまま。
「まだ終わりじゃないよ。お前たちアレを持ってきな」
妖月はその様子を愉しみながら、新たな淫辱を宣言する。
命令を受けて小鬼が淫具をサクラヒメの前に置く。それは哺乳瓶の飲み口にオナホールを取り付けたような外見をしていた。
「お次はそこのベイビーオナホでオナニーをしてもらうよ。お客さまにセンズリこいてるところを見せつけな」

「わ……わかりまちた♥」

媚びた笑顔をつくりながらサクラヒメはベイビーオナホを手に取る。

内部は人肌に温められローションでヌメヌメと光っていた。フタナリ肉竿を入り口に近づけ、一気に挿入する。

（くうぅうう！　んぅ……温かくて絡みついてくる……も、もう果ててしまいそうだ……）

肉ヒダには特製の媚薬が塗りこまれペニスの感度を上昇させる。実際の膣孔を上回る快楽を提供する鬼の淫具だ。

黒髪戦姫はミトンの手袋でオナホールを掴むと、みっともなくオナニーを始めた。

ヌチュッ♥　ヌチュッ♥　ヌチュッ♥　グチュチュッ♥　ヌチュッ♥

「みなちゃま見てくだちゃい♥　ばぶっ♥　ぶうっ♥　スケベ赤ちゃんのオナホコキッ♥　んんっ♥　んふ～ッ♥」

「もっと腰を突き出しなよ」

「はいぃ♥　ばぶぅっ♥　はぁうんっ♥　んんっ♥　ボッキおチンチン見て見てぇ♥　し～こしこ♥　し～こしこ♥」

「そうだよ。お客さまによぉく見せつけるのさ」

「これしゅごいッ♥　射精したばかりのなのにチンポがビンビンになりまちゅッ♥　ひぅ

ッ♥　あッ♥　て……手が止められないいいいいいい♥　あふううううぅ～～ん♥」

理性を滅却する肉筒。意識が天に向かって上昇を始め、手淫を圧倒的に上回る快美が心を削る。

「あはぁぁあぁぁあぁ～～ん♥　ヤバイでちゅ♥　おチンポ遊びがやめりゃれないのおおぉおお♥　おッ♥　んあああああぁぁあぁ♥」

「とんだ淫乱赤ちゃんもいたもんだよ。そんなにオナニーが好きなのかい？」

「好きっ♥　好きっ♥　好きでちゅうぅうぅうぅぅ♥　マラをシコるのが大好きなんでちゅう♥　オムツから包茎マラだしてゴシゴシするの好き好きいぃいいいぃいいいいッ♥」

「ふふ、あの坊やに見せてやりたい光景だよ」

「言うなぁ……！　お、おほおぉおおおおおぉおおお♥　おチンポ刺激がたまらない♥　哺乳瓶オナホがサイコーすぎまちゅうううぅぅう♥　おふッ……ひうぅうッ♥　んッ♥　吸い付いてくるぅうううううう♥」

特製オナホールに涙を流して感動するフタナリ乙女。乳児のごとく一生懸命肉茎を擦り、射精衝動を増幅させていく。

「ばぶっ♥　ばぶっ♥　わたしは変態赤ちゃんでちゅッ♥　チンポをシコシコするだけの

ドスケベ赤ちゃんになりまちゅう♥　ぶぶ～♥　ばぶばぶ♥　ばぶうぅ～ん♥」
「ギャハハ！　堕ちるところまで堕ちたな！」
「品性の欠片もないわねぇ。情けないわ」
「ばぶっ♥　ばぶっ♥　ぶぶばぶ～♥　んぅっ、くふうぅうううう♥」
口の端からは唾液が溢れ、よだれ掛けはもうビショビショだ。
鮮烈な快感に呂律がまわらなくなり、本物の赤ちゃんになってしまいそう。
「赤ちゃん最高でちゅ♥　これからはオムツの中にオシッコしまちゅッ♥　おしゃぶり咥えてパパに遊んでもらうのぉッ♥　ぶー♥　ぶー♥」
「もっと手を速く動かしな。しっかりミルクを搾り出すんだよ」
「ばぶっ♥　ばぶぶっ♥　おッぼぉお♥　チンポ♥　チンポ♥　おチンポお遊戯がんばりまちゅッ♥　あうううぅう～ん♥」
乳児の格好を指さされながら破滅へ向かう黒髪乙女。
よだれ掛け、ミトンの手袋、オムツがすでに精液でドロドロになっていることも気にしない。
もはやオナニー以外のことは考えられず、白肌に玉のような汗が浮かび淫臭が噴き出す。
（母さまのオッパイを吸っていた頃に戻ったようだ……意識が浮つく……んうぅう！

ぜ、絶頂が止められない……！）

肉竿を擦る手の動きが速くなり、エクスタシーが股座から脳天へと昇っていく。

「あっ、くる♥　きちゃいまちゅ♥　もう出ちゃうぅうぅぅぅ♥　んぐうぅぅぅっ♥」

身体の芯が熱した鉄棒のごとく熱くなる。倒錯的なシチュエーションに溺れながら、サクラヒメは精を吐き出した。

ベイビーオナホの中身を真っ白に染めようと、退行絶頂を迎える。

ドビュ♥　ドビュビュ♥　ドボ……ブバババァァァァァァ♥　ゴバ♥　ドババ♥　ブビュククウウウゥゥ〜〜〜ッ♥

「おッ♥　おおッ♥　おあああぁあああ♥　赤ちゃんイク♥　赤ちゃんイグう♥　ばぶッ♥　ばぶうぅぅぅぅぅ♥　ベイビーオナホにザーメンどっぴゅんしまちゅう♥　ばぶっ♥　ばぶっ♥　いつもセーラー服着てるのにオムツ穿いてミルクオシッコ漏らしちゃいまちゅうぅぅぅぅ♥　白いオシッコぶちまけまちゅうぅぅう〜〜っ♥　わたち赤ちゃんなのぉ♥」

哺乳瓶の中をザーメンミルクで満たしていく赤ちゃん乙女。

入りきらなかった精子がフードやよだれ掛けにかかり、白く浸食していった。

オムツの中も愛液でビショビショで、クレヴァスが淫靡な花を咲かせている。雌の甘酸っぱい匂いが肉竿との隙間から漏れ出していた。

「ふぁ♥　ああ……くううぅうぅう……♥」

「そんな……サクラヒメ……」

「ふふ、よくできました。次はごはんにしようか」

「ふぇ……ご、ごはん……？」

「ま、まさか……！」

妖月の瞳に嗜虐の光が宿る。

「ミルクは新鮮な方がおいしいだろう？　サクラヒメはお疲れだし、お飲みよコーデリア」

「……わ、わかりまちたわ」

お嬢さま戦姫はさっきまで陰茎が入っていた哺乳瓶に口をつける。

むせかえるような精臭が鼻腔を刺激する。

（うぅ……流華さんには悪いですけど、ひどい匂いですわ。あぁ……）

「さっさと飲みな」

「は、はいでちゅ……」

意を決してザーメンミルクを口の中に入れる。

「んぶっ……ぐぅ、ぶぐうううぅ～っ！　あぶ、うえぇ……」
生臭い香りが口いっぱいに広がり、意識が朦朧としてくる。強烈な臭気で呼吸をするのも苦しい。
「あぶ、ぐぶ……うぐうううぅ……」
「吐き出したらもう一瓶飲ませるからね。しっかりと味わいな」
「ひゃい……んくっ♥　ふぐむうぅぅう♥　ごく、ごく、ゴクンッ♥」
白濁液が喉を通過するたびに胃の中の物がせり上がってきそうになる。
卵の白身のような感触がいつまでも舌に残って不快だ。
「んぅっ、ゴクン♥　ごぶ、おぶ……ンッ♥　ぐむうううぅ～ん♥」
目をつぶって汚濁を嚥下する。ベイビーオナホが空になるまでスペルマをゴクゴクと飲む薔薇の装刃ヒロイン。
「完飲した感想はどうだい？　正直に言うんだよ」
「それは……あの……く、臭いでちゅわ♥　鼻が曲がるほど臭くて最低でちたの♥　よくこんな激臭ザーメンを金玉に溜め込んでいるものかと感心してしまいまちゅわ♥」
引きつった笑顔でザーメンのレポートをする。口の端からは溢れた精液が糸を引いていた。

「鼻が曲がるほど臭いんだとよ！　よかったなサクラヒメ！」
「包茎チンポだと中身まで臭くなるのね。勉強になったわ」
「ひどい……わたしは臭くなんて……うぅ……」
「サクラヒメ……」
万雷の嘲笑を浴びながら、その場でへたり込む黒髪乙女。
戦友を貶めてしまい、コーデリアもかける言葉がない。
ダブル戦姫はオムツを白濁に汚し、四日目の演目が終了した。

第八回　背徳絶頂　恋人に注がれる白濁

地下劇場淫獄、最終日。

二人の装刃戦姫は制服を着せられて、舞台に上がっていた。

セーラー服とブレザー制服の胸元は解放され、たわわなGカップ巨乳とEカップ美乳がはみ出ている。

スカートも膝上四十センチで切り揃えられ、もはや衣服としての役割を果たしていない。下着の着用は許されず、心許ない布きれの間から、フタナリペニスが顔を覗かせていた。

（チッ……下衆どもの性癖には毎度辟易させられる。まあいい、それもあと少しの我慢だ。今日の調教が終わればすぐに儀式を開始するはず。良平とクリスのためにも、必ず自由を手にしてみせる！）

（ついに最終日ですわね。流華さんと良平くんのために、わたくしのすべてを出し尽くしますわ！）

何度目かもわからない淫獄に臨む装刃戦姫。フタナリ快楽に慣らされた身体は、すでに限界に達していたが、愛する人を守るために気力を振り絞る。

「今日も楽しませてもらうよ、サクラヒメ」
「元気にしていたかい、お嬢さま」
悪鬼が壇上に姿を見せる。
鬼蛙は丸々と太った身体をタキシードで包み、妖月は着物姿で微笑を浮かべた。
二体は禍々しい瘴気を放つ呪符を握り、これまでにない鬼気を漲らせている。
（演技は常に続けている。奴らはわたしたちが完全に堕ちたと思い込んでいるはずだ）
（見ていなさい。吠え面かかせてやりますわ！）
あれだけ痴態を晒してまだ戦う意志が残っているとは思わないはず。
ダブル戦姫は勝利を確信し、双眸を煌めかせる。
「長かった淫獄ショーも本日で閉幕。その代わり、最後に相応しいとびっきりの恥辱を用意しています。皆さま、心ゆくまで楽しんでいってください。それでは、今回の演目、巨チンザーメン噴水を始めます！」
鬼蛙は割れるような拍手を浴びながらショーの開幕を宣言する。
「キミたちには極上の射精を体験してもらうよ。まずはこの呪符をチンポに貼ってもらおうかな」
「承知した。鬼蛙さま」

「はい、ですわ」
媚びた表情で呪符を受け取ると、ペタリと肉茎に貼りつける。
瞬間、固めたばかりの決意は、角砂糖のように崩れ出した。
「ひぐっ!?　な、何だこれは……!?」
「おチンポが熱くて……んっ、あああぁああ！」
呪符から黒い渦が発生したかと思うと、男根を包み込み形を変える。禍々しい感触に全身の毛が逆立つ。
渦が晴れたあとに現れたのは、進化を遂げた新たなフタナリペニスだ。
「こ、こんなバカなことが……」
「ちょっと、じょ、冗談ですわよね!?」
ペニスの長さは五十センチにまで伸張し、金玉もソフトボールサイズに膨張する。
巨大化に合わせて射精衝動も増幅し、火で炙られているように身体の芯が熱く、今すぐにでもシゴかなければ暴発してしまいそうだ。
これまでの倍以上はあるイチモツに、フタナリ乙女は悶え狂う。
「あぐうううぅううう！　お、おチンポが大きく……んんっ！　んくぅ……♥」
「これすごいですわ！　おチンポがビクビク脈打ってぇ♥　射精したくてたまりません♥

コキたい♥　おチンポシコシコしたいですの♥」

「鬼蛙、シゴかせてくれ！　すぐにセンズリしないとどうにかなってしまいそうなんだ！」

「わたくしもですわ！　コーデリアの激臭ザーメンを吐き出させてくださいませ！」

開始早々に理性を蒸発させ、宿敵に懇願してしまう。膨れ上がった雄幹から、凄まじい性衝動が立ち昇ってくる。

「いいよ。好きなだけオナニーしてごらん。ただし、観客席からよく見えるようにね」

「まったく、どうしようない雌奴隷だねぇ。みっともないったらありゃしない」

「か、感謝するぞ鬼蛙！　ん、あぁぁ……♥」

「妖月さま、ありがとうございます！　う、ふううぅぅ……♥」

お許しを得た黒髪、ブロンド戦姫は両手で大きな肉幹を掴むと、左右からゴシゴシと擦り上げた。片手では大き過ぎてカバーできないのだ。

ゴシュッ♥　ズチュ♥　ゴシュゴシュゴシュ♥

「お……おほおおおおぉおおぉお♥　すごい♥　すごい♥　しゅごいいいいいいいい♥　デカチンポしゅごい♥　ギュンギュン子種汁が溜まっていく♥　ザーメンパワー充填しまくるぅ♥」

「ほぎゅうううぅうううう♥　い、いいですわコレぇ♥　キンタマ♥　キンタマ♥　ビッ

グサイズ金玉が最高ですのおおおぉぉお♥　睾丸でわたくしの変態雄精子がドンドン生産されていきますの♥　おほ♥　おお♥　ふひぃいいいいい♥」

ヘコヘコと腰を動かし、怒張器官をそそり立たせながら快楽を貪る。

一擦りごとに今までの比ではない快美の波が訪れ、理性や矜持を飲み込んでいく。

観客に笑われるのも気にならないほどに、巨根センズリに没頭してしまう。

「チンポ♥　チンポ♥　チンポおおおおおお♥　デカチンポをゴシゴシするの気持ちよくてたまらん♥　オッ♥　ウング♥　巨チンセンズリ最高すぎるうぅうううう♥」

「ポコチン♥　ポコチン♥　オヒイィイイイイイン♥　おっきくなった変態ドスケベ男根が喜んでますのおおおぉぉお♥　お手々でおチンポ、シ〜コシコ♥　シ〜コシコ♥」

節操なく手を腰を動かす巨根美少女。

包茎のサクラヒメは包皮と亀頭が擦れるたびに卑猥な水音を鳴らし、ペニスで淫猥なコンサートを開催してしまう。

コーデリアはデカ金玉を太腿に打ち付け、タプンタプンと柔らかな感触を楽しんでいた。

グロテスクな陰嚢が前後するたびに、濃厚な雄汁が生産され勃起力が高まる。

鬼蛙がこの日のためだけに創り出した呪符は、相手が装刃戦姫でなければ、廃人と化してしまう最後の切り札。その効力も絶大だ。

「も……もうダメだ♥　チンポつらい♥　キツいぃ♥　あ……アッ♥　でる♥　でる♥　でてしまうぅうう♥　早漏デカマラで射精するうぅうぅうう♥　おッ♥　ひうあああああああああ♥」

「おほ♥　ひぅぅッ♥　わたくしもイキますわ♥　キンタマぐにぐにしながら公開オナニー最高ですの♥　キンタマ♥　キンタマ♥　タヌキみたいな巨大キンタマでイキましゅのおおぉおおおお♥」

ケダモノめいて喘ぎながら、男性器をバキバキに滾らせる。舌を突き出しよだれを垂らすその姿に、装刃戦姫の凛々しさは欠片もない。

これほどの快悦にこらえ性のない早漏肉竿が耐えられるはずもなく、あっという間に特濃雄精子が噴き出した。

ビュルルル♥　ビュルルル♥　ブビュルルルウウウゥウウウウウ♥　ビュリュリュウウウウ♥

「おふ♥　おっうぅうぅうぅう♥　で、でてりゅ♥　わたしの変態巨大マラがイッてるうぅうぅうぅうぅうう♥　洪水みたいにザーメン出してりゅ♥　おッ♥　おッ、ほおおぉおおおおぉお♥」

「わ、わたくしもイギますのおおおぉおおお♥　パンパン金玉からスペルマシャワー出して

しまいますの♥　キンタマ揉みながら雌ブタイキしますのおぉおおおおおぉお♥　ぶひっ♥　ふごぉ♥」

みっともなく嬌声を響かせながら、精子を吐き出すデカチン戦姫。

両手をザーメンでドロドロに汚し、荒い息を吐きながら射精の余韻を味わう。

（これが極上の射精……すごいぃ♥）

（意識がブッ飛んでしまいますわぁ……♥）

今までの射精を上書きする肉快楽に、トロンと瞳を蕩かせ酔いしれる。

だが、膨れ上がった射精衝動は一発だけでは満足しない。巨大睾丸が子種汁を大量に生み出し、ドクンドクンと陰茎へポンプする。

「あんっ♥　ん、く♥　だ、出したい♥　また出したくてたまらない♥　おチンチンがパンパンに膨らんで……センズリしたいいいい♥」

「んむっ♥　わたくしのチンポもギンギンですわ♥　さっき出したばかりなのにオナニーしたくてたまりません♥　マゾチンポがフル勃起してしまいますのぉオオオオォ……♥」

「鬼蛙もう一度ヌかせてくれ！　シコシコしたい……ザーメン出したくてたまらないんだ！」

「射精させてください妖月さま！　キンタマがブリュブリュ精液つくってますのぉ！　チンポ！　チンポ触らせてぇえええ！」

肉竿にヘビのような血管がいくつも浮かび上がり、海綿体がはち切れんばかりに膨張する。

皮の剥けたカリキノコがヌラヌラと光り、鈴口が切なげにヒクつく。

「そこまで射精したいなら許可しようかな。ただし、次はサクラヒメはボクと、コーデリアは妖月と一緒に絶頂してもらうよ。八大鬼の実力、思い出させてあげる」

「ようやくあたしの出番かい。来なよ装刃戦姫サマ」

「ああ、よろしく頼む♥」

「わかりましたわ、妖月さま♥」

躊躇なく悪鬼の命令に従う汚臭ザーメン乙女。

あまりの陰茎の昂りに、もう演技しているのかどうかもわからない。

「クフフ、立派なチンポになってくれて、ボクも嬉しいよ」

鬼蛙はサクラヒメの正面に立つと、自らの陰茎を露出した。長さは巨大化チンポと同程度だが、幹の太さがまったく違う。

凶器とも思える肉勃起は、年月を重ねた大木のような威圧感で天を仰ぎそびえ立ってい

た。

（ゴクンッ。すごい、なんて逞しいんだ。以前見た時とまったく違う。これが鬼蛙のペニスなのか……っ……だ、ダメだダメだ！　何を見惚れている！　良平を助けるんだぞ！）

男性の象徴を目の当たりにして思わず喉を鳴らしてしまう。

火照った身体をどうにか抑える黒髪ヒロイン。

「皆さまの前で存分に狂っちまいな」

妖月もコーデリアの前に立つと、四本の尻尾を展開した。

自由自在にくねる尻尾に呪力を漲らせると、一本に束ね巨大な手の平に変化させる。

これならどんな巨肉竿でも掴んでシゴくことができるだろう。

（ふあぁ……妖月の尻尾がこんなにカッコ良く見えるなんてぇ♥　あれでおチンポをシコってもらえたらどれだけ気持ちいいのかしら♥　……って、いけませんわ！　女狐に感動してどうしますの！　良平くんを助けるのに誑かされてはいけませんわ！）

始めに妖月が動く。コーデリアを背後から抱きしめ耳元に唇を近づけると、

「じっとしていな。あたしが気持ちよくしてやるからさ」

「は……はい♥」

大きな手の平で巨根ペニスを掴み、両手でも覆いきれない肉幹に指をまわして、根元か

ら擦り上げた。

「あっ、んうううううぅ……♥」

射精欲求がさらに高まり、精神力を総動員して耐えなければ、すぐに絶頂してしまいそうなほどの快楽が押し寄せてくる。

「ひうううぅッ♥　んんッ♥　チンポすごい♥　すごい♥　すごいですのおぉおおおおお♥」

「ふふ、身体中が蕩けそうだろう？　盛大にイカせてあげるよ」

「ひゃいッ♥　イキたい♥　ザーメンだしたいですわ♥　ヒグ♥　ンアあぁあああああああ♥」

「本当にこらえ性のない雌ブタだねぇ。イキたいなら、皆さまの顔を見ながらおねだりしな」

「わかりましたわ♥　変態デカチンポのコーデリアはぁ……濃縮特濃ザーメンビュービュー射精したいですのおぉおおおおッ♥　先っぽからくっさいミルクを出させてぇ♥　ジおオオォ～ン♥」

観客席からは早く射精しろとコールが飛び交う。ブロンド戦姫が惨めな醜態を晒すところを、見物したくてたまらない様子だ。

巨大陰茎は妖月の巧みな愛撫に何度も鈴口を開閉させ、マグマのような欲望を滾らせた。
「早くも限界みたいだねぇ。まったくマンコの臭いマゾのうえに早漏だなんて恥ずかしくないのかい？」
「恥ずかしいですわ♥　ムレムレ腋でクサマンのうえに超デカチンなんて♥　死ぬほど恥ずかしいですわぁ♥　ひぅ、あうううぅう……♥」
「でも、恥ずかしいのが好きなんだよねぇ？」
「はいいぃ♥　恥ずかしいのがイイですのぉ♥　恥ずかしくて、みっともなくて、惨めなのが最高にコーフンしますのぉおおぉおおおぉお♥　ああ、もうおチンポがパンパンですわ♥　出させて♥　早くザーメン出させてぇ♥」
「イク時は乳首でオナニーしながらイクんだよ。オッパイも淫乱な雌奴隷だって教えてやりな」
コーデリアはEカップ美乳の先端をつまむと、クリクリとオナニーを開始した。
フタナリ射精だけでも最低なのに、公開乳首自慰まで強制させられてしまう。
「んっ♥　ふあぁ♥　乳首オナニーも気持ちいいですの♥　はぅ、んうううぅ～っ♥」
乳首を引っ張り爪で弾いて、激しく快悦を求める。巨大手の平コキの気持ちよさと合わさって天にも昇る心地だ。

「い……イク♥　イクッ♥　イグッ♥　イグうううぅううううぅううう♥　乳首とデカチンポ手コキでアクメしちゃいますのおぉおおお♥　ぢおおぉ♥」

妖月の愛撫に耐えきれず肉竿が暴発する。

炎のような射精の脈動に抗う術などあるはずもなく、一度目以上の勢いで精液が迸った。

ビ、ビュクウウウゥ♥　ドププウウウゥ♥　ドビュルウウウウゥ♥　ドブブブブブゥ♥

「ほおおおうぅうううう〜ッ♥　おチンコ汁ドバドバでてますのぉ♥　巨大手コキが気持ちよくてたまりません♥　おッグ、ンッ♥　皆さまぁ、巨根マゾ雌の淫乱大量ザーメン見てぇ♥　い〜っぱい蔑んでえぇえええええぇえええ♥」

ドビュドビュと、観客にかかりそうなほど大量射精する薔薇の戦姫。

想像すらしなかった法悦に金玉を震わせ、その場にへたり込んでしまう。

「あ、アハハ……しゅごいですわぁ♥」

（なんて気持ちよさそうにアクメするんだ……わたしも、あれくらい射精してみたい……）

サクラヒメは淫悦への期待に肉幹を震わせた。

戦友が絶頂するまで待たされた巨肉竿は、大蛇のごとく張り詰め、パンパンに反り返っている。

「そんなに物欲しそうな顔をしなくても、彼女と同じ、いやそれ以上の快楽を与えてあげる。未来の旦那様を信じてよね」

「ああ、信じているぞ」

（だれが旦那だ、この変態蛙め！）

鬼蛙は一直線になるように、自らの亀頭とサクラヒメの亀頭をくっつけた。巨肉竿同士が触れ合い、乙女の思考がジーンと痺れる。

「今から兜合わせ、ペニスとペニスを擦り合わせるよ。ボクがリードするから任せておいて」

「初めてするプレイだな……わたしにできるだろうか？」

「心配ないよ。キミはじっとしているだけでいいからさ。ただ、笑顔だけは忘れずにね」

「承知した。鬼蛙さま♥」

快感と屈辱がない交ぜになった表情でサクラヒメは微笑む。

そして、密着した部分がゆっくりと擦り合わされていく。

（熱い……それにドクドクしてる……んっ♥）

血管の脈打つ感触が直（じか）に伝わってくる。

高温で熱せられた鉄棒のように互いの体温が感じられ、心臓が鼓動を速める。

「あうっ♥　ひうぅ♥　チンポすごい♥　スリスリすごい♥　ぐうくうううぅぅう～っ♥」

「ね？　言ったでしょ？」

「ああっ♥　き、貴様の言う通りだ♥　チンポとチンポをこすると頭がパーになってしまう♥　感じまくるぅ♥　ほおぉおおぉおおおお♥」

「ボクの動きに合わせてね。そうすれば天国に連れていってあげるよ」

「ひゃい♥　はぁ、あふうぅうううぅ♥」

嬌声を上げ兜合わせに興じる黒髪乙女。

フタナリデカ陰茎が触れ合うたびに、背筋がビクンビクンッとのけ反った。

雄の象徴に身も心も預けてしまいたくなる。

「チンポとチンポでくっつくのイイ♥　亀頭発情する♥　ハウ……ひう、ひゃあああぁ～～ん♥　も……もうでてしまいそうだ♥」

「まだダメだよ。それにほら、こうしたらもっと気持ちいいでしょ？」

「ひぅううう⁉　う、はううぅううぅう♥　こするスピードが上がってぇえええええ⁉♥」

亀頭と亀頭が粘着音を鳴らし、鈴口と鈴口がぶつかり合って糸を引く。我慢汁にまみれ

た男根から淫猥なハーモニーが奏でられた。
トクンッと子宮まで疼いてしまう肉快美だ。
「アウ、う、ンクウウウウゥウウウ♥　チンポいい♥　熱くて切なくてどうにかなってしまいそうだ♥　鬼蛙……わ、わたしはもう……♥」
「もう出したいの？　クフフ、キミは本当にスケベだね」
「さ、さっきからチンポが疼いてもう我慢できないんだ♥　早くザーメン出したいいいいいい♥」
「いいよ。でも、その代わりボクのことを好きだって言って欲しいな。それができるなら射精させてあげるよ」
「っ……わかった！　言うだけでいいんだな！」
サクラヒメの巨肉竿がさらに膨れ上がり、射精の態勢に入った。
擦り合わされる肉棒の動きが一層激しくなり、睾丸がアメリカンクラッカーのように跳ねる。
（これは演技、そう演技だ。だから決して良平を裏切っているわけじゃない。チンポ欲求に負けたわけじゃない……♥）
恋人に対する想いも快楽の波に飲まれていく。

「くる♥　チンポアクメくるうううぅ〜〜♥」

亀頭が激しく蠢動し肉竿が離れた瞬間、強烈な勢いでザーメンが迸った。

ピピ♥　トププ♥　ブ、ブビュルビュルウウウウウウウウウウ♥　ドビュルウウウウウ♥

「好き♥　好き♥　好き好き♥　しゅきぃいいいいぃ♥　鬼蛙、貴様のことが大好きなんだあああぁ♥　大好き♥　い、イクッ♥　イグッ♥　マゾ巨大チンポがイッてしまう♥　チンポとチンポでキスしながらラブラブちゅっちゅっアクメしゅりゅうううぅううううう♥」

恍惚の表情でエクスタシーを迎える黒髪乙女。意識が真っ白に飛翔し、必要以上に恋人めいたセリフを言ってしまう。

舌を出しながら虚空を見つめる彼女を眺め、鬼蛙は口角を吊り上げた。

今は心地良いだろうが、肉竿はすぐにまた射精を求めるだろう。

二度の射精で刻み込まれた快楽は、逃れられない楔となっているはず。

終劇の準備は整った。

「キミらしい豪快な射精だったよ。ボクに任せて良かっただろう？」

「は……ひゃいぃ♥」

「あんたもそうだよねぇ、コーデリア？」
「ええ、最高の絶頂を感謝しますわ♥」
「とびきりのアクメ顔を晒してくれたことだし、ご褒美をあげようかな。頑張ったキミたちのためにスペシャルゲストを用意しているんだ。さあ、入ってきて」
「え。な、に……？」
「はい……？」
呆けた表情で鬼蛙が指さす方向を見るダブル戦姫。その顔はすぐに驚愕へと変わった。
舞台の上にかけがえのない恋人、三城良平が現れたのである。
「……」
「良平っ!?　どうしてここに!?」
「こ、こんなところに来てはいけませんわ！」
丸眼鏡の少年は服を身に着けていなかった。男性にしては少し線が細い裸体を晒している。
だが、今の二人にとって格好などどうでもいい。
地下劇場での痴態をすべて、彼に見られていたかもしれないのだから。
美貌を蒼白にし、必死に弁明する。

「ち、ちがッ……違うんだ良平！　これは無理やりやらされているだけだ！　鬼蛙なんか好きじゃないっ！」

「そうですわ！　わたくしだっておチンポの生えた淫乱マゾじゃありませんっ！　あ、あなたに軽蔑されたら、もう生きていけませんわ！」

「あれ？　キミたちはオニグミに忠誠を誓ったんだよね？　まだ良平くんが大事なのかな？」

「坊やに言い訳するなんておかしいねぇ。チンポを生やされて感謝しているんだろ？」

「そ、それは……」

「うぅ……」

追及されても口ごもることしかできない。

最悪の事態に困惑するばかりで、どんな顔で良平を見ればいいのかわからない。

「……」

「げ、幻滅されても仕方がないのはわかっている。良平……頼むから何か言ってくれ……」

「……？　なにか様子がおかしいですわよ。一体どうしましたの？」

不思議なことにこの陰惨な状況でも、少年は一言もしゃべらなかった。

決して呆然として言葉を忘れているわけではない。まるで発声すること自体を忘れてし

まったようだ。
「ああ、坊やの声はあたしが奪っておいたよ。ここで騒がれちゃ困るからねぇ。次のショーが終われば元に戻してやるさ」
「ショーだと!?」
「まだ何かさせるつもりですの!?」
続くセリフを鬼蛙が引き継ぐ。装刃戦姫を完全に、絶望の暗闇に突き落とすために。
「キミたちには良平くんのお口と尻の穴にペニスをぶち込んでもらうよ。オニグミに忠誠を誓っているならできるよね？」
「こ……このクズッ！　そんなことできるかっ！　良平はわたしの恋人なんだぞ！」
「そうですわっ！　わたくしのお友達にひどいことなんてできません！」
「拒否するのは勝手だけど、その場合一ヶ月は巨チン状態のまま射精を我慢してもらうよ？　キミたちは知らないだろうけど、羅轟丸さまの復活に必要な装刃戦姫はすでに調達済みなのさ。今やっているのはただのお遊び。まあ、好きなだけ苦しんでればいいんじゃないかな」
「貴様ァッ！　必ず殺す！　二度と再生できないように討滅してやる！」
「この外道！　エイミス家の名に懸けて、絶対に許しませんわよ！」

演技することも忘れ、怒りをあらわにする装刃戦姫。
もちろん、鬼蛙の言葉は偽りだ。
サクラヒメやコーデリアクラスの装刃戦姫は簡単に用意できるものではない。
儀式を成功させるために、彼女たちが一番大切にしている支えを破壊することが目的である。
そして、強気な言葉とは裏腹に、二人はフタナリ肉竿の誘惑に取り憑かれていた。
（い、一ヶ月だと!?　できるわけがない……今だってまた……すぐにでも射精したいのに！　はぁ、あぁぁあ♥）
（そんなに待たされたら気が狂ってしまいますわ！　でも……良平くんの身体で射精なんて……♥）
再び射精欲求が膨れ上がり、巨肉棒が開放を求めて鈴口をヒクつかせる。抗えない雄の快楽欲求に苦悶することしかできない。
「ああそうだ、良平くんの肉体は呪力でオナホールみたいにしてあるから。巨大ペニスで貫いても苦しむことはないよ。ボクだって同級生に死んで欲しくはないからね」
「あんたたちは坊やのために、ここまでずっと耐えてきたんだよねぇ？　だったら、少しくらい助けてもらっていいんじゃないかい？　それくらい当然の権利だと思うけどねぇ」

「い、痛くないからといって、そんなこと……」
「良平くんのために戦ってきたのは事実ですけど……」
鬼の囁きが弱った心に染み込んでいく。
事実、股間のフタナリペニスも一度目、二度目の射精以上の怒張を見せつけていた。
なにより自分たちが抵抗したところで、儀式は実行されると断言されたのだ。
不安と渇望が心を支配していく。
「キミたちは彼とセックスしたわけじゃないんだろう？　想像してごらん。本当にその小さなペニスで満足できるのかな？　あれだけの変態調教を受けた身体が普通のセックスで快楽を得られるとは思えないけどね」
「そ、それは……いや、でも……！」
「おチンチンの大きさなんて、わたくしは……き、気にしませんわ！」
否定するそぶりを見せながらも、つい下半身に目がいってしまう。
勃起していないとはいえ、少年の陰茎はかなり小ぶりで、大きさも自分たちの親指くらいしかない。
どう考えても、今味わったような絶頂感を得られるとは思えなかった。
（あんなものなのか……良平のおチンポは。確かにこれなら鬼蛙の方が……）

（普通の女性ならあれでいいのかもしれませんが……わたくしには……）

望んだ快楽を得られない。その現実が少女たちの心と身体を惑わせる。

フタナリ衝動は天井知らずに上昇を続け、迷った末に二人が出した結論は、

「すまない良平……どうしても我慢できないんだ。お前の尻穴にチンポをハメさせてくれ♥」

「苦しくないならＯＫですわよね……わたくしにお口を使わせてください♥」

妖絶な笑みを浮かべて完全に屈服する正義のヒロイン。肉勃起の快楽が理性を塗りつぶす。

「……ッ！　～～～ッ!?」

良平の瞳が恐怖で見開かれたが、どうすることもできない。

二人は命令されるまでもなく、全裸の少年を四つん這いの姿勢にさせる。

「すぐに終わらせるからな♥　我慢してくれ♥」

「ちょっとパコパコするだけですから♥」

巨大肉勃起が口と尻穴にあてがわれると、前戯もなく一息に貫いた。

ズチュ♥　ズググ♥　ズググウウウゥゥ～～ッ♥

「――――ッ!!　ンゥゥ……！」

「おっほ♥　入った♥　ケツ穴に入ったぁ♥　ふおおおおおぉぉ～～っ♥」
「良平くんのお口に生挿入♥　と、蕩けてしまいそうですわ♥　ンひひひぃ～～っ♥」
呪力で軟体化させられた肉体は、五十センチの肉棒を易々と受け入れる。
唾液や腸液がローション代わりになり、女性の膣孔よりもスムーズに挿入できてしまうほどだ。
「おほおぉおぉおおおぉ♥　ケツマンコ♥　ケツマンコ♥　お尻マンコおおおおぉおおお♥　良平のケツマンコすごいぃ♥　オナホールより吸い付いてくる♥　おほおぉおおおおお♥」
「あっ、アン♥　はあ～ん♥　お口マンコもたまりません♥　舌のザラザラした感触が極上ですの♥　喉のクニクニした感触がたまりませんの♥　わたくしの亀頭♥　おチンポキャンディーいっぱい味わってくださいな♥」
声の出せない少年に手加減なしで腰を振る。粘膜が擦れるたびに、グチュチュッと耳障りな音が鳴り響く。
「おふッ♥　おふぅッ♥　彼氏の尻穴で最低センズリ♥　センズリ気持ちイイ♥　おぐうぅぅ♥」
「ひゃああ～～ん♥　お口の中がオナホみたいに絡みついてきますわぁ♥　おチンポが唾

液でドロドロになってしまいます♥」

「〜〜〜ンンッ！」

雄の暴力的な本能が刺激され、肉竿の硬さは増すばかり。

獣のごとく腰を振る姿に観客は笑い声を上げ、鬼蛙は確信の笑みを浮かべた。

「気持ちよさそうで羨ましいよ。もちろん、このまま出したいよね？」

「そうだ！　の、昇ってくる♥　ザーメンが溢れそうなんだ！　うぅぅ♥　はうぅぅ♥　だ、出させてくれぇ……♥」

「あれ？　でもそれって良平くんをオナホールだと思っているわけだよね？　恋人がただのハメ穴っておかしくないかな？」

「仕方ないだろう！　だっておチンポシゴきが気持ちよ過ぎるからぁ……♥　ああぁ……♥」

「だったらフってあげようよ。別れて本物のオナホール扱いにしてあげないと、彼に失礼なんじゃないかな？　安心して、ボクがその代わりに彼氏になってあげるから」

悪鬼が嗤う。

破綻した論理に疑問を持つだけの余裕はない。何度も見たニキビ面も、今のサクラヒメには魅力的に映った。

（別れると言わなければ、もっと焦らすに決まっている。これまでと同じく演技をすればいいだけだ。そう、いつもみたいに……♥）

桃色の霧が黒髪乙女の思考を包む。

心が都合の良い言い訳を求め、驚くほど簡単に答えは決まった。

「わ、わ、わたしは……その……」

「もっと大きな声で言ってよ」

「――――ッ！♥　わ、別れる♥　別れる♥　良平と別れる♥　こんな奴ただのオナニーグッズだ♥　変態性欲を満たすためだけの肉穴だ♥　んんッ♥　くうん♥　わたしは彼氏よりフタナリチンポ優先の淫乱女なんだぁぁあああああ♥」

一番大切なモノが、ガラガラと音を立てて崩れ去っていく。

卑猥な水音を立て肉竿を抜き差しする姿に、かつての凛とした風格は微塵も感じられない。

「それだけじゃ信じられないな。他には？」

「わたしは学園で変態オナニーしたり♥　おチンポ同士でキスするのが大好きな淫乱生徒会長だ♥　巨大チンポで射精できればケツの穴も舐める汚辱マゾなんだぁ♥　だから射精のためなら別れたって構わない♥　ざ、ザーメンくるうぅううう♥」

「じゃあ、認めてよ。キミはチンポ快楽のために浮気していた雌奴隷だって」
「もちろん認める♥　認めるぞ♥　わたしはチンポ快楽に負けて浮気していた最低の変態売女だ♥　貴様専用のフタナリ雌奴隷だッ♥　一日中ザーメンのことしか考えていない人間便器なんだぁあああ♥　ホオオォオォオ～～ッ♥」
自分と恋人を貶めながら、フタナリ変態だと宣言する装刃戦姫サクラヒメ。
ピストンの動きに合わせて尻穴が火口のようにめくれ上がり、間抜けな音が漏れ出る。
良平に屈辱を与えるその行為がさらに嗜虐心を増幅させ、倒錯的なシチュエーションに溺れていった。
（別れるって言うのがこんなに気持ちいいなんて♥　良平ごめん……♥）
「……！　ゾうぅ～～ッ！」
罪悪感と快楽で黒髪乙女の思考が千々に乱れる。少年の泣き出しそうな呻き声に胸が痛む。
だが、マゾに躾けられた身体は正直で、フタナリペニスは今日一番の勃起をみせ、もう射精したいと言わんばかりにヒクついていた。
続いて妖月も唇を開く。
「そういえばあんたも坊やが好きだったんだよねぇ？　コソコソ隠れてさ」

「ハウぅ♥　ンウウウぅ♥　それが何ですの……？」
「愛しい男がフリーになったじゃないか。今がチャンスだと思うけどねぇ」
「――ッ!!　で、でも……そんなこと！」
「友達のお古は嫌かい？　構わないさ、もらっちまいなよ」
その言葉で急速に欲情が湧き上がってくる。サクラヒメが演技をしていると気づいていても、自分の気持ちが抑えられない。
（悔しいけど妖月の言う通りですわ。わたくしだって良平くんが好きなんですもの♥　大好きなんですもの♥　流華さんがいらないなら、構いませんわよね♥）
秘密にしていたはずの気持ちは、もう止められない。愛情と欲情が入り混じり、お嬢さま戦姫は堕ちていく。
「もらいますわ♥　中古だって平気ですの♥　だって、わたくしは良平くんのこと好きなんです♥　初めて会った時からずっとずっと好きなんですから♥」
「ふふ、いい返事だよ。で、今はその坊やでイラマチオの真っ最中だけど、後悔はないのかい？」
「まったくありませんわ♥　初めてできた彼氏でオナニーするの最高ですの♥　ほぉ♥　もぉおぉ♥　カワイイうえにおチンポまでシコシコできるなんて、わたくしにピッタリ

ですわ♥」

「――――ッ!?　ムぅぅ～っ！」

歪んだ恋心をフタナリ快楽で上書きする。サクラヒメの存在も、良平の意思すらもはや関係ない。

少年の喉から困惑と絶望の音色が奏でられた。

「良平、これからはオナホとして鍛えてやるからな♥　ドマゾ生徒会長として厳しく指導してやる♥」

「エイミス家の男に恥じない肉便器にして差し上げますわ♥　お口マンコでしっかり味わいなさい♥」

「んぐッ!?　――――ッ!!」

堕ちた戦姫は嗜虐に口角を吊り上げる。

さらに快悦を貪ろうと、二人揃って抽送のスピードを上げ、言葉責めまで開始する始末だ。

「良平、申し訳ない♥　無理やりケツマンコ犯して申し訳ない♥　でもお前も悪いんだぞ♥　そんな短小チンポじゃチンポキスできないからな♥　わたしはもう鬼蛙のデカチンポじゃないと満足できないんだ♥　オ、ほぉおおぉおおおお♥」

「あら、あらあら♥　よく見たら良平くんも勃起してますわ♥　女の子に犯されて感じるなんて、あなたも変態ですのね♥　おまけに勃起しても剥けない真性包茎なんて最悪ですわ♥　指サイズのチンポ彼氏はオナホールになっていればいいですの♥　はひいぃいいいいぃ〜〜ん♥」

「ケツ穴犯されて勃起する変態め♥　元彼女のわたしよりチンポが小さくて情けないと思わないのか♥　この場でデカチンポの快感を教えてやる♥　フン♥　フンフン♥　フンうううぅう〜〜っ♥」

「ほら、もっとお口マンコを動かしなさい♥　歯を立てるんじゃありませんわよ♥　あなたはわたくしのモノなんですから♥　フラれたばかりの中古アナルマゾ彼氏なんですから♥　オオオォォ〜ン♥」

聞くに堪えない言葉を吐きながら、巨根快美に溺れていく。

大勢の観客の前だということも、自分が何を言っているのかもわからない。

「短小チンポのM男め♥　フル勃起してもわたしの通常サイズより小さいじゃないか♥　短小♥　短小♥　短小短小短小短小♥　フタナリ女子に犯されてマゾ勃起する短小チンポを躾けてやる♥」

「ひうううぅんッ♥　ねぇどんな気持ちですの？♥　女の子にチンポの大きさで負けち

ゃう粗チンくん♥　巨根チンポにイラマチオされて勃起しちゃう負けチンポの変態さん♥小っちゃいおチンポかわいいでちゅね～♥」

愛する人を蔑みながら貪欲に快美を求めていくチンポ優先のケダモノ乙女。

ペニスの衝動だけが暴走する。

「そろそろイクぞ♥　お前のみっともないお尻マンコに注ぎ込んでやる♥　竹刀みたいな特大チンポでアナルマゾにしてやるからな♥　ほ、おぉ♥　へほおぉおおおおおおん♥」

「わたくしの男として、しっかりドMアクメなさい♥　一生匂いが取れないくらいザーメンこびりつかせてあげますわ♥　ふんっ♥　ふううぅん♥」

限界まで快楽を得ようと乱暴に腰を動かし、狂った肉悦に酔いしれる。

自らの存在を最底辺にまで貶めながら、装刃戦姫は大量のスペルマを解き放った。

ブ……ビチュル♥　ドブ♥　ドッビュルウウウゥウウウウウウウ♥　ブビュクウウウウウウウゥ♥

「んほおおぉおおお♥　イグイグイグイグッ♥　巨大チンポいぐう♥　ケツマンコで射精しまくる♥　元彼の尻穴パンパン犯してぇ♥　変態雌マラアクメ極めるううぅうう♥　おッほおおぉおおぉおおぉおおお♥♥」

ゴビュ♥　ブブビュク♥　ドプドプドプウウウゥゥ～～♥　ゴボ♥　ドボボボォオオオオ♥

「んッ……ンひいいイイイィィイィイ～～ッ♥　たまりませんわぁ♥　良平くんのお口に万年発情雌汁ビュービュー発射しますの♥　飲んで♥　飲んで♥　直飲みザーメンヨーグルトをプレゼントしちゃいますわ♥　わたくしの変態性欲を受け止めてくださいな♥　でます♥　またでますのッ♥　デカキンタマ直送チンポ汁でますのおぉオオオオオオォ♥♥」

アヘ顔で逆レイプ絶頂する正義のヒロイン。魂まで抜け落ちるような極大アクメに溺れていく。

下品にみっともなく喘ぐその様は、オニグミさえも顔をしかめるほどだ。

「～～～ッ！　ふぐ、うぅ……！」

「ん、ふうぅ……♥　なんだお前もイッてしまったのか♥」

「まったく、だらしないですわね♥　んッ♥　ンううぅう……♥」

口腔をザーメンで満たされ、肛門から前立腺を責められ、良平も精を吐き出した。

短小ペニスからピュルピュルと唾のような精液が垂れ落ち、舞台にシミをつくる。

「その程度の射精しかできないのか。鬼蛙さまの足元にも及ばないな♥」

「もらったのはいいですけど、ちょっとガッカリですわね♥」
ペニスを引き抜くと小柄な少年は床に崩れ落ちた。
レイプされたうえに射精まで嘲笑され、気を失ってしまう。
やがて快楽の波が引くと、加虐心で暴走した戦姫たちの思考は元に戻っていった。
「ん、ま、まってくれ。わたしは何を……？」
「――わたくし、今なんて言ってましたの？」
急速に頭が冷えていく。サクラヒメとコーデリアは呆けた瞳で辺りを見回した。あれほど騒いでいた観客も淫ら過ぎる光景を目の当たりにして、水を打ったように静まり返っている。
ようやく、自分たちが取り返しのつかないことをしたことに気づいた。
「わ、わたしはなんてことを……良平……あ、ああ……」
「良平くん……良平くん……!?」
呆然と倒れた少年を眺める。自分たちを支えてきたものが、雲散霧消する。
「おやおや、せっかく彼女になったのに残念だねぇ。口とケツからザーメン垂れ流して、ボロボロじゃないか」
「それは……や、あ」

「ま、オナホール扱いしてりゃ当然かねぇ。これでまだあんたのことが好きだったら奇跡だよ」

「言わないで……わ、わたくしは……」

コーデリアの身体から力が抜けていく。隠していた恋心をさらけ出し、手に入れた少年は、白濁にまみれ横たわっていた。

「ち、違いますわ……！　わたくしはそんなつもりじゃ……い、イヤアアアアアアァアアアアアアッ!!」

「安心しな。坊やが嫌ったって、あたしはあんたを見捨てない。でないと尻尾の怨みを晴らせないしねぇ。そうだろう装刃戦姫サマ？」

「妖月……まだわたくしを装刃戦姫だと言ってくれますの？」

「もちろんさ。最高にみっともないフタナリマゾ装刃戦姫として一生飼ってあげるよ。人間の男なんかじゃ到底及ばない快楽を与えてやるさ」

「う、嬉しいですわ♥　わたくしのすべてを調教して、管理してくださいませ♥」

コーデリアは涙と精液にまみれた笑顔で、服従を誓う。

名家の装刃戦姫として悪魔と戦ってきた誇りなどもうどこにもない。

そして、サクラヒメもまた、底知れぬ絶望に打ちひしがれていた。

「これで良平くんとは完全に破局だね。まぁ、キミの方から別れたんだし問題ないか」
「鬼蛙……」
「大丈夫だよ。ボクならフタナリマゾのキミでも見捨てない。ずっとずっと永遠に一緒にいてあげるからね」
憎しみしか感じなかった両親の仇。いつか討ち果たすことだけを願った根暗顔が、今はとても魅力的に見えた。
（良平を犯してしまい、仇を討つことすらできない……儀式を利用するために耐えてきたこともすべて無駄だった……装刃戦姫失格、いや人間としてもう終わりだな……あはは……）
サクラヒメの心を絶望が覆い尽くす。プライドも、愛する人への想いも、恥辱に抗うすべての意味が失われていく。
（もうどうなってもいい。こんなわたしを好きだと言ってくれるのは鬼蛙だけなんだから♥）
流麗な双眸が黒く濁る。今まで歩んできたすべてを捨て去り、黒髪乙女は言葉を紡ぐ。
「鬼蛙、貴様のことが好きだ♥　わたしを雌奴隷に、貴様のお嫁さんにしてくれ♥」
星一つない夜のような眼差しで、最愛の人を見つめる。

堕ちた悦びにフタナリ肉竿を震わせながら。

最終回　闇に沈む装刃戦姫　堕淫と恍惚の未来

装刃戦姫は快楽に堕ち、残すは神鬼、羅轟丸を復活させる儀式のみ。
大勢のオニグミが見守る中、最後のフタナリ調教が始まろうとしていた。
「それにしても、あの坊やを生かしておく意味はあるのかい？　用は済んだんだから喰っちまえばいいのにさ」
「手に入れたコレクションも見せびらかす相手がいないとつまらないですから。彼には最後まで見届けてもらいますよ」
「まったく、いい趣味してるよ」
良平を元の身体に戻すための術を施した妖月は、やれやれといった様子で肩をすくめた。
「さてと、陣も完成したようだし、さっそく始めようか」
舞台には歪んだ五芒星を囲むように円を描いた、『降魔の陣』があった。
陣の中で装刃戦姫が精液と共に吐き出した霊力を使い、羅轟丸を復活させる仕組みである。
「あんたたち準備はいいかい？」

「ああ、もちろんだ♥」
「なんなりと命令してくださいませ♥」
ダブル戦姫は悪鬼に恭順し、蕩けた笑みを浮かべる。
股間の肉茎は巨大化したままで、まだまだ尽きることなく射精できそうである。
「わたくしからいきますわね♥　神器……転身♥」
陣の中心に進み出るコーデリア。
返還された神器結晶を舌で舐めると、改めて転身する。言霊に応え、濁ったサファイアブルーの光が放たれた。
淫欲を体現するように、これまでとは違うコスチュームがブロンド戦姫の肢体を包む。
「人に仇なす悪魔（デモン）の皆さん♥　いっぱいいっぱいご奉仕しますわね♥　お口マンコでおチンポ舐めてぇ♥　淫乱チンポでマゾ射精♥　雌ブタ戦姫コーデリア、ここに見参ですわ♥」
サキュバスのように微笑み、下品で淫雑なセリフを決めるコーデリア。
頭の兜はそのままに、V字のスリングショット水着が魅惑のボディラインを彩る。
収まりきらないEカップ美乳と巨玉フタナリチンポがいやらしく弾んだ。
「一生ペットとして生きていく覚悟はいいかい？　これからはあたしの命令に絶対服従だよ」

「妖月さまのためならなんでもしますわ♥　戦闘でも実験台でも夜のお伴でも好きに使ってくださいませ♥　淫乱マゾペットとして躾けてくださいな♥」
「なら手始めに椅子になってもらおうか。そこにしゃがんでごらんよ」
「椅子……ですの？　一体どうやって……んっ！　むううぅううう♥」
困惑しつつもしゃがむコーデリアの顔面に妖月の股間が覆いかぶさった。
着物をたくし上げ、紫のショーツをピッタリと唇に密着させる。
麝香に似た香りが鼻腔をくすぐった。
「ひうっ♥　アアンッ♥　椅子になるってこういうことですのね♥　ふぁ……あぁぁあ♥」
「うっとりしてるんじゃないよ。しっかり支えな」
「妖月さまの下着を直接嗅げるなんて光栄過ぎますわ♥　香りだけでもおチンポがビンビンになってしまいます♥　はぁぁ……ふぁぁあ♥」
犬のように肉竿を振り、鈴口を濡らす。
屈辱的な仕打ちをされているのに、興奮が収まらない。
「ザーメンを出す前に謝罪の意味も込めてクンニでもしてもらおうか。しっかり奉仕しな」
「はい♥　オマンコ舐めさせてもらいますわ♥　ん……んぅ♥　ちゅう……んううぅ……

♥」

クロッチを横にズラすとベロを挿し込み、丹念に膣孔を舐めまわす。

甘ったるい水音が欲情を煽る。

「ちゅく、ちゅううぶ♥　あぶ♥　オマンコおいしくてたまりませんわ♥　はあはぁあああああ♥」

「なかなか上手いじゃないか。毎日使うことも検討しておこうかねぇ」

「お褒めに与り光栄ですわ♥　オナニーくらいしか取柄のないマゾ戦姫ですが、誠心誠意オマンコペロペロさせていただきますの♥　ちゅ♥　はむちゅうううぅん♥　くんくんくんくんくん♥」

「おやおや、尻の匂いまで嗅いでいるのかい。ま、好きにするといいさ」

「ふおおおおぉ♥　アナルに鼻を埋めてクンクン、クンクンクン♥　かぐわしくてやめられません♥　香りが素敵すぎますのおぉおおおお♥　フゴ♥　フゴおおぉおおおお〜〜っ♥」

豚のように鼻を鳴らし肉感たっぷりのお尻に魅惑される。

奉仕する悦びに乳首もビン勃ちだ。

「まだまだこんなものじゃ済まさないよ。次はオマンコにコイツをぶち込みな」

四本の尻尾が一塊になると極太の肉バイブへと変化した。

充血した亀頭やカウパーの先走りなど、本物よりも雄々しい雄凶器がコーデリアの鼻先に近づけられる。

「あたしのペットに処女はいらないんだよ。ついでに捨てちまいな」

「は、はい♥　妖月さまの尻尾勃起でハメハメします！　させていただきますわ♥」

抵抗する気力などあるはずもない。

被虐快感への期待を胸にコーデリアは肉バイブへ手を伸ばす。

（ついにバージンを卒業しますのね。初めては好きな殿方に捧げたかったのですけど……いえ、それよりもおチンポですわ♥　生ハメしながら射精なんてどれほど気持ちいいのでしょう♥）

宿敵相手に純潔を散らすことよりも、フタナリ快美への期待が思考を支配する。

射精絶頂のためならどれほど惨めな思いをしようと構わない。

「いきますわね。ん……あっ、ああ、ン、ンぐうううぅうううぅ～～～～ッ!!」

亀頭を膣孔にあてがうと力を込め一息に挿入する。熱い男根がピンク色の柔肉をかき分けていく。

「あっ、あぁぁあああ！　どんどん入っていきますわ♥　もう少しで奥までぇ……♥」

恐れを振り払い薔薇の秘奥を穿つお嬢さま戦姫。薄い膜に亀頭が触れ、激しい衝撃と共

に処女膜が引き裂かれた。

プチ、ズチチ、ズチチチイイイィ〜〜ッ！

「ア、あひぐウウウウウゥッ♥　きてます♥　雌穴にすごいのがきてますの♥　痛いのにぎもぢイイ〜〜っ♥」

「あは、アハハハハ！　よかったねぇ処女卒業できて。相手は男どころか人間ですらないけど！」

「おぅ♥　んぅううぅう♥　そんなのどうでもいいですわ♥　マンコキできるなら本物のおチンポでなくてもオッケーですの♥　ふぅ♥　アフウウゥゥ〜〜ッ♥」

鮮血で太腿を染めながら嬌声を上げる。

破瓜の喪失感よりも腹の底から湧き上がってくる悦楽が思考を塗りつぶしていく。

「マンズリ♥　マンズリ♥　マンズリ最高ですわ♥　へぉ♥　おお♥　ふほおおぉおおぉおお♥　すごいのがどんどん昇ってきますのおぉおおお♥」

「初体験とは思えない乱れっぷりだねぇ。おまけにチンポまでフル勃起じゃないか」

「マゾ快感が伝播してますの♥　お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵過ぎますわ♥　つらくてみっともなくて、変態勃起がいつもより喜んでしまいますのぉ♥　あへ♥　へエエエェエエエエ♥」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおっ勃て快美に酔いしれる。
バイブに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。
「股の下で大きな声を出しちゃってまあ。女としての慎みってものはないのかい？」
「そんなものあるわけありませんわ♥　バイブピストンがあれば他に何もいりませんの♥　ほぉ♥　もぉ♥　ほぉおおぉおおおお♥」
「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねぇ。っと、クンニも忘れるんじゃないよ」
「ひぃいいいぃ♥　オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥　じゅぶ♥　ちゅうぶ♥　んぷっ、ちゅじゅりゅりゅうううう♥」
上の口と下の口から卑猥なメロディを奏でる正義のヒロイン。
フタナリペニスからは透明な液体が漏れ始め、射精の瞬間が迫ってくる。
「も、もう出てしまいそうですわ♥　身体のすべてが敏感で、すぐにでも果ててしまいそうですの♥　ちゅう、んちゅうううう♥　お願いですから射精させてくださいませ♥」
「どうしようかねぇ。うっすいザーメンじゃ困るし、もっと溜めてからにしようかねぇ」
「んぶ♥　ちゅうううぅう♥　はむ、ちゅくふうううううぅ～ん♥　絶対に失望はさせませんから♥　わたくしの金玉力を総動員して、妖月さまが満足する最高のマゾザーメンを吐

き出してみせますわ♥　だ、だからお慈悲をくださいませ♥」

地面に頭を擦り付けるような勢いで射精の許可を求め、蜜壺でくねらせる舌の動きを速めていく。

我慢汁を飛び散らせて媚びる姿に、高貴なプライドなど欠片も見当たらない。

「ふんっ♥　ふんうううぅ～っ♥　ザーメンがもうすぐそこまで来ていますの♥　焦らさないでぇ……ふぐ、んぐアアァアアアアア♥」

「そこまで言うなら仕方ないねぇ。全力でイクんだよ」

「ありがとうございますわ♥　ほっ♥　おおっ♥　ザーメンくるううぅ……♥」

「おや、舐められて冷えたのかねぇ。催してきちまったよ」

「……え？」

何気ない一言にコーデリアの思考が真っ白になる。催すとはどういう意味の言葉だっただろうか。

「厠に行くのも面倒だしここでしようか。ちょうどいいところに受け口もあることだしさ」

「ちゅぶ……あむ、んんぶ！　ま、待ってください！　わたしくまだ下にいて……あうっ♥　あ、あんうぅうううう♥」

「ん？　あんたはマンズリの最中なんだろう？　気にせず気持ちよくなりなよ」

「あきゅうぅうぅう♥　あひ……バイブ動かさないでえ！　大事な部分に当たってますのお！　おご♥　もごおぉおおおおお♥」

肉バイブが蠢き膣奥をゴリゴリと掘削する。強烈な悦楽に雌声を上げ、フル勃起ペニスまで前後させる薔薇の戦姫。

汚辱の恐怖と期待に肢体を戦慄かせる。

「妖月さまそれだけは許してください！　観客の方々にも見られてますから！　うぐ、んぐうぅウウウウウウ!?」

さらに体重がかけられ口を封じられる。妖月の尿道口がヒクヒクと蠢き、尿意が膨れ上がっていく。

そして、黄金色の液体がコーデリアの口に向かって流し込まれた。

ジョロ♥　ジョロロロロ♥　ジョババ～～ッ♥

「ンンぐ……むっぐうぅうぅうぅう！　オシッコが入ってきて……うぶ、ほごおおおぉおおお！」

「おっとこれじゃ椅子じゃなくて便器かねぇ。どっちでもいいけどさ」

「ぶぶ！　ごぶぶ！　臭いしょっぱいい……はぶ、ブウゥウウゥウウウウウウウッ！」

「一滴残さず飲み干すんだよ。こぼしたらまた罰を与えるからね」

「ふぐ……ごく、ゴクン♥　ゴクッゴクン♥」

喉を鳴らし生暖かい液体を胃に流していく。

常人なら発狂してしまいそうなシチュエーションも、マゾヒロインには極上の快楽だ。

倒錯的な幸福感がフタナリ肉竿に血液をポンプし、鈴口にカウパーの泡が浮かぶ。

「ひいいぃいいい～♥　便器♥　便器扱い最高ですの♥　オシッコまみれなのにおチンポが興奮してたまりません♥　うぶ、ゴブ♥　もおおぉおおおおおおおお♥」

「精液を捧げなコーデリア。羅轟丸さまのためにね」

「ひゃいい妖月しゃまあ♥　もゴッ♥　ぶほおッ♥　ザーメンくる♥　ザーメンきますわ♥　射精管どんどん昇ってきてますのぉお♥　へお♥　おへおおぉおおおお～っ♥」

バイブの抽送速度が上がり、はしたない水音がさらに大きくなる。

フタナリ肉竿に血管が浮かび上がり、背筋がビクンッと跳ねる。

鈴口がパクパクと口を開き、怒涛の勢いで雄の白濁が迸った。

ブビュ♥　ビュリュリュリュ♥　ドバ♥　ドブババ♥　ドビュバババアアァァ～ッ♥

「くふ、おおっ！　ンほおおおぉおお～っ♥　イグ♥　イグ♥　オマンコイキながらおチンポイグう♥　濃ゆいマゾザーメンがどぴゅどぴゅでてますのおおぉおおおお♥　オシッコ飲みながら便器になりながら最低の無様イキチンポ♥　ミルクサーバーみたいにザ

ーメンお漏らし止まりません♥　ぎ、またイグ♥　イグぅ♥　射精終わりませんわ♥
あへ、アへぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～ん♥」
雌奴隷として儀式に貢献し、美貌を蕩かせる装刃戦姫コーデリア。
完全にペットとして躾けられ、その瞳にかつての煌めきはない。
降魔の陣が淡く発光し、ザーメンを吸収した。
「おチンポしゅごい♥　しょごすぎますのぉ♥　げふ♥　ケプ♥　ゲェ～プ♥」
白目を剥きオシッコ臭いゲップをする。
薔薇のお嬢さま戦姫はどこまでも続く快美の深淵に堕ちていった。
「いい見世物だったよ。次はボクたちの番だね」
「ああ、楽しみだな♥」
入れ替わるようにサクラヒメと鬼蛙が降魔の陣へ進み出た。
「神器転身♥」
胸元から神器結晶を取り出し言霊を込める。直後、紅黒い閃光が四方八方に放たれた。
セーラー服を分解して出現したのは、淫らな改造を施されたウエディングドレスだ。
流れるような黒髪には純白のブーケ、丸出しのGカップ巨乳はビスチェで強調され、シルクのガーターベルトとストッキングが下半身を彩る。

羞恥花嫁衣装を纏った黒髪乙女は、声高らかに名乗りを上げた。
「人に仇なす悪鬼羅刹よ思う存分笑うがいい♥　痴態を晒すは神器の刃♥　変態チンポ勃起させて淫乱マンコでラブラブセックス♥　お嫁さん戦姫サクラヒメここに見ざ～ん♥」
自らを最低の存在に貶め、それまで良平に向けていた視線とまったく同じものを鬼蛙へ向ける。
両親の仇討ちや装刃戦姫としての使命など、もはやどうでもいいといった様子だ。
「鬼蛙、わたしはどんなプレイでも構わないぞ♥　めちゃくちゃに犯してくれ♥」
「クフフ、キンタマが空っぽになるまで射精させてあげるからね」
「望むところだ♥　装刃戦姫の矜持に懸けてチンポにご奉仕してやる♥」
鬼蛙はニキビ面を喜悦に歪めると、サクラヒメをぐっと抱き寄せた。
愛する人にするように。
「鬼……蛙？」
「この時をずっと待っていたよ」
「あ……♥　ん、んむ♥　んんん……♥」
腫れぼったい唇と薄ピンク色の唇が重なり、ねっとりとしたキスが交わされる。
初めは戸惑っていたサクラヒメも、次第に積極的に舌を絡めていく。

相手がヒキガエルのような醜男（ぶおとこ）ということも気にしていない。彼女の中では世界一の美男子と愛を確かめ合っているつもりなのだ。

「んっ、ちゅっ♥　あむ、くちゅ、んちゅっ♥　はむんっ、うう……♥」

「ンプッ……ン……上手になったね」

「貴様に色々教えてもらったからな♥　ちゅっ♥　ちゅく♥　んんむっ♥　んむ～～♥」

「ジ……」

「ちゅっ♥　んちゅっ♥　ちゅぱ……はむっ♥　んくっ……あああん♥　鬼蛙、エッチの前に言いたいことがあるんだがいいか？」

「いいよ。何？」

「雌奴隷にしてくれてありがとう♥　わたしのようなチンポオナニーしか取柄のないシコ猿を好きだと言ってくれるのは貴様だけだ♥」

唾液を混ぜ合わせながらうっとりと微笑む。狂った快楽が心を満たしていく。

「おまけに彼氏をオナホール扱いするようなド変態だしね。本当に感謝してもらいたいよ」

「んちゅ、ちゅはぁ♥　良平のことはもういいだろ♥　今は貴様だけのものなんだから♥　んん……ちゅ、ちゅうぅ……♥」

「少し意地悪だったかな。じゃあ、しようか」

「ああっ♥　たくさん愛してくれ♥　んちゅっ♥　はぁむんっ……♥　ちゅっ♥　れろん♥」

唾液の糸を引きながら唇を離し、股間を硬くするフタナリ乙女。

発情した肉竿ははち切れんばかりに怒張し、皮の間からはピンク亀頭が顔を覗かせる。

鬼蛙は指に唾をまぶし、たわわな双乳やキュッと引き締まったお腹、ピーチヒップを媚薬愛撫していった。

「ひうッ♥　ひゃうううん♥　やんッ♥　背筋がゾクゾクする♥」

「動かないでね。すぐに効いてくるから」

「んっ、はううう♥　くすぐったい♥　あ……あくううぅう！　媚薬で身体がポカポカしてきた♥　あうっ……オッパイが熱いぃ♥」

「もう乳首が勃ったね。ボク好みに育ってくれて嬉しいよ」

「ひゃうううう♥　乳首つまむなぁ♥　牛乳が敏感に反応してしまう♥　引っ張られてロケットみたいになってしまう♥　まったく貴様はスケベだな♥　あう♥　んんう♥」

桜色の乳頭をコリコリと扱かれ、子猫のように甘えた声を出す。

快感が伝わるたびに、ふっくらとした乳房が弾んだ。

「ああっ♥　ふあぁぁあああああ♥　胸だけでイッてしまいそうだ♥　あくううぅ……

♥」

「あれ、早くも限界かな？　オマンコに挿入して欲しいならしてあげるけど」

「ま……まだいい♥　もっと焦らしてくれ♥　もっともっとわたしをイジメてくれ♥　ううぅ♥」

言葉に応えるように黒髪乙女の腋窩に長く伸びた舌を這わされた。

ナメクジが這ったような跡を残し、粘着質な淫音が鳴り響いていく。

「やぁん♥　バンザイポーズで腋舐められてる♥　いっぱい汗かいたから蒸れてるのに♥　ずず♥　むずううぅうぅ♥」

「まるでチンポを擦られたような反応だね。全身性感帯みたいだ」

「くうぅうぅぅ～ん♥　性感帯とか言うなぁ♥　わたしだって恥ずかしいんだぞ♥　それに匂いだってキツいし♥　ウエディングドレスを腋臭で汚してしまう♥」

淫臭を舞台に振りまきながら喘ぐ装刃戦姫。コンプレックスを自ら抉り、被虐肉体を発情させてしまう。

「その調子だよ。破裂しそうなほど勃起しようね」

「ペロペロされるのいい♥　腋マンコが発情しておかしくなる♥　チンポも昂ってくるぅうぅう♥　あく♥　ンぐうううぅうう♥」

腰が抜けそうなほどの快美に立っていられないのか、鬼蛙にもたれかかり首に腕をまわす。

お腹に密着するほどの屹立イチモツは、濃密なフェロモン臭を発散していた。

「ふう♥　ふううう♥　んひううぅううう♥　身体中が熱くて燃え上がる♥　あお♥　オオォ〜ン♥」

「こっちの具合はどうかな？」

「ひぅうう⁉　そ、そこはあ……♥」

鬼蛙は乙女の秘奥に指を入れると、優しくかき回した。

女の敏感な部分を触られサクラヒメの声が跳ね上がる。

「んあああああああ♥　ま……マンコに入ってくるぅ♥　恥ずかしい音立てられてる♥　ひあ、ん……くぅ……ヒゥン♥」

「もう洪水状態だね。ボクが触る必要なかったかな？」

「おおっ♥　指の腹で撫でられてる♥　爪の先で引っかかれてる♥　気持ちいいのどんどん昇ってくるうぅうう♥　んうううぅ〜〜っ♥」

湧き出る淫蜜をローション代わりに愛撫は続く。

パックリと開いた肉花弁は雄の象徴を心待ちにしている。

「も、もう我慢できない♥　欲しくてたまらない♥　チンポ♥　貴様のチンポが欲しいんだ！」

「どうぞ。ボクはいつでもいいよ」

鬼蛙は胡坐をかくと誘うように手招きする。股間には腕のように太い肉凶器が屹立していた。

（いよいよあの極太チンポがわたしの中に入るんだな。ゴクッ……初めての生エッチ♥）

目を奪う怒張器官に思わず生唾を飲み込む。子宮が高鳴り雌の悦びに指先が震える。

（初めてを鬼蛙に捧げるなんて以前のわたしなら想像もしなかっただろうな。でも今は嬉しい気持ちしかない。エッチしたい♥　オマンコがしたい♥）

嫌悪感しか覚えなかった肉棒がとても愛おしく思える。

あの夜フェラチオした相手に処女を捧げられることがたまらなく嬉しい。

「不束者だがよろしく頼む♥　いっぱい愛してくれ♥」

頬に軽くキスをするとサクラヒメは腰を落とし、怒張したイチモツを招き入れた。肉棒が灼熱の滾りを見せ処女膜を貫通する。

ブチ♥　ブチブチ♥　ズチュチュ♥　ググ、ズブ、ズブブブウウウゥゥ～～～ッ♥

「あ、アアアアアアアッ！　あぐ、んあぁぁあああああああああああッ!!」

破瓜の痛みで耳をつんざくような声が上がる。鮮血が肉棒を伝い陣に流れ落ちる。

「あぐ、ぐうぅうぅうぅうっ！　ふぐ、おごアアアアアアアアッ！」

「ちょっと本気を出しすぎたかな。大丈夫？　動ける？」

「し、心配は無用だ！　装刃戦姫サクラヒメを侮ってもらっては困る♥　んぐ、むぅウウゥ♥」

喉を貫通しそうな巨根相手に腰を動かし、必死でなじませる。

媚薬で昂った淫裂はとめどなく愛液を生み出し、内臓を潰すような痛みすらも受け入れていく。

「ひッ……ひあうぅぅうぅぅう！　は……入ってる♥　入っているう♥　貴様のチンポがしっかり奥まで挿入されているぞ♥　あああ～～ッ♥」

「処女喪失おめでとう。気分はどう？」

「そんなの幸せに決まっているだろう♥　チンポの熱い高鳴りが伝わってきてぇ♥　マンコが火傷（やけど）してしまいそうだ♥　ハゥン♥　ンン♥　ああ……痛いけど気持ちいい！　気持ちいいっ♥」

「喜んでもらえてよかったよ。人間のセックスじゃこうはいかないでしょ？」

「ああッ♥　オニグミとセックスできてよかった♥　それもこんなにデカチンのイケメン

なんてぇ♥　わたしは果報者だ♥」

恍惚の表情で夫をたたえる美少女ヒロイン。温かな淫溝を蠢かせ蛙ペニスを称賛する。

少し身じろぎするだけで痺れるような快美が背骨を走っていく。

「動くよ。肩の力を抜いてボクに体重を預けてね」

「ああ、わかった……っ、ングアアあぁあああ!?　は、激し……ひぐっ！　ハウウウウ〜ン♥」

鬼蛙はスタートから激しいピストンを膣肉に打ち込む。

テンポの速いストロークで一瞬にしてサクラヒメの思考は白熱した。

「アンッ♥　は、ヒャあああぁああ〜〜ン♥　響く♥　響いてくる♥　ゴンゴン雌穴に響いてくるのおおぉおお♥　お、オオォォオオォ〜ッ♥」

「ッ……すごいオマンコだね。キツくてチンポ絡みついてくる。ボクも色んな女を犯したけど、ここまでの名器はキミが初めてだよ」

「く、ぅっ……そう言ってくれるのは嬉しいが、このままだとすぐにイッてしまいそうだ♥　生セックスがこんなに感じるなんて♥　あああっ♥」

自らも腰を動かし膝の上で喘ぐスケベ乙女。

粘膜の狭間をカリ首で擦られるたびに、抜かないでくれと肉ヒダが蠢く。

「奥の奥まで届いて壊れてしまいそうだ♥　あぉ♥　ふおお♥　子宮が疼くぅ♥」
「可愛いよサクラヒメ。ボクの予想通り身体の相性は最高みたいだね」
「そんなの当たり前だ♥　どれだけ貴様のことを考えてきたと思っている♥　んう、はぁ……はぁぁ♥　アひゃぁあああああぁあ♥」
何度も刃を交えた経験か二人のリズムはピッタリとシンクロしていた。
時にキツく時に優しく肉竿へ吸い付く花孔は、悪鬼のマラに丹念に奉仕する。
「すまないもうダメだ♥　挿れてもらったばかりなのにチンポが限界なんだ♥　出る♥　出る出る♥　射精してしまううぅう♥」
「相変わらず早漏な包茎チンポだね。もうお漏らししそうなんだ」
「ひうぅぅうううぅ〜〜っ♥　ンンンッ♥　早漏で申し訳ない♥　貴様の逞しいチンポと違ってこらえ性のない負け犬チンポで申し訳ない♥　へぅ、うぅうううぅう♥」
魂まで蕩けるような快楽の暴力に、サクラヒメの陰茎が悲鳴を上げる。
射精衝動が急速に高まり、巨大化したペニスが脈動する。
白雪のような素肌がブルリと震え、腰の動きに合わせGカップ巨乳が激しく上下する。
「おっぐうぅうううぅうぅ〜〜ッ♥　変態マラがビクビクしてるう♥　んきゅ♥　はうぅ♥　射精したくてたまらない♥　ザーメン♥　ザーメン♥　ザーメン出したい♥

わたしの子種汁出したいいいいいいい♥」
「もう完全に限界みたいだね。でも、その前に」
「こ、これって……♥」
巨大化したフタナリペニスにピッタリサイズを合わせた指輪が嵌められる。
黄金のリングの頂点には大きなダイヤモンドが光り輝いていた。
「結婚指輪がまだだったよね。気に入ってくれるといいんだけど」
「こんなの嬉しいに決まっているだろ♥　ああ……なんて綺麗なんだ♥」
うっとりした表情で飾られた肉竿を見つめるお嫁さん戦姫。
頭のおかしい変態行為をしているのに、感動の涙まで浮かべてしまう。
「指輪が擦れてますます感じてしまう♥　チンポが悦んで抑えられない♥　うっ、んううううぅ♥」
「精液は十分に溜まったみたいだね。いいよ、好きなだけ射精して」
「あうぅ……きゃうう♥　本当にもう限界だ♥　先にイッてしまう♥　はうッ……亀さんがパクパクいってぇ♥　出てしまう♥　包茎スケベマラがもう無理っていってるう♥　あぐぐウウウウウウウゥ♥」
サクラヒメの様子を見て鬼蛙は剛棒のスピードを速めた。

互いにタイミングを合わせ快美の階段を上っていく。
背筋に電流が走り何もかもが臨界点に達した瞬間――
二人の精が放たれた。
ドボ、ドビュグ♥　ブ♥　ドッビュルルウウウウウ♥　ビュグ♥　ビュグググゥ～～♥
「ジ……うう……」
「んッ、んほおおおぉお♥　チンポイク♥　マンコイク♥　チンポイク♥　マンコイク♥　どっちもイッてるうううぅ～～ッ♥　チンポと子宮がキスしてる♥　キス♥　キス♥　愛のキッス♥」
濁流のような蛙精子を膣奥で感じながら、サクラヒメはザーメンを噴き上げる。
狂ったように吐き出される言葉は、これまでの人生を捨て去った証明。
「はぅ♥　おおう♥　ザーメンで愛されてる♥　好き♥　好き好き♥　大好きだぞ鬼蛙♥　たくさんたくさん赤ちゃんを産むからな♥　わたしを貴様専用の孕み袋にしてくれ♥　キンタマが空っぽになるまで射精する精処理用マゾ奥さんにしてくれ♥　あッ♥　アグウウゥ♥　またイクッ♥　またアクメくる♥　ラブラブ妊娠確定アクメする♥　あん♥　あはあぁぁあああああ～～ん♥♥」

獣のようなヨガり声を上げ幸福絶頂する装刃戦姫サクラヒメ。
淀んだ霊力が瞳にハートマークを描き、身も心も雌奴隷に堕ちる。
恍惚の面持ちで降魔の陣にザーメンを注ぎ、復活の儀式はここに完成した。
「もう二度と離さないよサクラヒメ」
「はい♥　鬼蛙……あなたぁ♥」
恋人も両親も守るべき人類すらも裏切って、底のない快楽の沼に沈んでいく。
ウエディングドレスを白濁で汚し悪鬼に抱かれる黒髪乙女は、もう二度と人の道に戻ることはない。

◆◆◆◆

一年後。
降り止まない雨をＢＧＭに、三城良平は自室でオニグミについて調べていた。
「はぁ……」
ついため息がこぼれてしまう。
全校生徒の大半が体調を崩し、岩戸学園は今日も休校だ。
大気に充満する呪力が体力のない者から順番に身体を蝕んでいくのである。
あの日から世界は闇に覆われていた。

『神鬼、羅轟丸』その正体は呪力でできた大気そのものであった。
実態のない身体にはどのような攻撃も効果がなく、その規模は世界中に広がり各国を脅かしている。
他のオニグミたちも力を増幅し、対魔協会と残存する装刃戦姫が必死の抵抗を続けているが、戦況は芳しくない。
「流華……クリスさん……」
頭を巡るのは二人を助けられなかった後悔ばかりだ。
超がつくほどお人よしの少年は、あの時の彼女たちに失望してはいなかった。
どれだけの陵辱が行われていたとしても、受け入れる覚悟があったのだ。
たとえ自分自身が犯されたとしても。
「二人とも待っていて。今度は僕が助ける番だから」
決意をはっきりと口にする。自分の非力を知ってなお、少年はオニグミと戦う道を選ぶ。
ピンポーン。ピンポーン。
「？　だれだろう？」
インターホンが来客を告げ良平は玄関へ急いだ。今のひっ迫した状況で外を出歩く人間は珍しい。

疑問に思いながらドアを開けると、そこに人影はなく、一枚のＤＶＤが置いてあった。
「なんだこれ……」
嫌な予感がする。
ただの悪戯だとは思えず、良平は急いで自室に戻り、ＤＶＤをプレイヤーに差し込んだ。
すぐに映像が再生される。

『んっ♥　ああ、ハァあああああぁ♥　マンコ気持ちいい……♥』
『あんっ♥　あああんっ♥　またイッてしまいそうですわ♥　あくふうぅ……♥』
薄暗い古城のような場所にサクラヒメとコーデリアはいた。
触手で編み上げられた肘掛椅子に座り、恥部を弄られているのか艶っぽい声を漏らす。
良平の瞳が驚愕に見開かれ、全身から冷汗が噴き出す。
画面に映し出される光景はあまりにも非現実的だった。
『ああ……また動いてる♥　かわいい奴め♥』
『んうううぅ♥　早く顔が見たいですわね♥』
目を釘付けにするのははだけた装刃戦姫の装束や当然のように晒される素肌ではなく、
大きく膨らんだお腹だ。

ハート型の淫紋でデコレーションされたそれはドクンドクンッと脈打ち、二人が妊娠していることを明確に表していた。

『いい顔だね二人とも。妖月にも見せてあげたいくらいだよ』

二人のそばで鬼蛙が喜悦に口角を歪める。

室内に蔓延る触手は金や宝石類で飾られ、警護を務めるのは小鬼のような下級のオニグミではなく屈強な牛頭馬頭。

羅轟丸復活の功績で鬼蛙と妖月は八大鬼やその他すべてのオニグミを統括する立場になっていた。

妖月も各国の対魔協会を壊滅させるべく、飛び回っている。

『はぅ♥　ンあぁぁあ♥　ふふ、もうこんなに大きくなりましたのね♥　生命の神秘ですわ♥』

『妖月の実験に付き合うなんてある意味尊敬するよ。複数の呪力を持つ新種のオニグミを妊娠しているって聞いたけど』

『そうですわ♥　鬼か天狗か河童か大百足（おおむかで）かどんな赤ちゃんが生まれてくるか楽しみでなりませんの♥　さっそく使ってもらえるなんてとても光栄ですわ♥　ん……んふうぅ……♥』

実験動物として扱われる快楽に舌を出して悦ぶお嬢さま戦姫。
内臓を圧迫されることすら気持ちいいのか、巨大フタナリ肉竿もフル勃起状態だ。
『うん……あうふううぅ～♥　わたしだって強い子を産むからな♥　ゆくゆくは八大鬼になってもらうんだ♥』
『そうだねサクラヒメ。楽しみにしているよ』
『あなたとわたしの子供だから絶対に可愛くてかっこいい子供になるぞ♥　んあぁぁ……男の子と女の子どっちの名前も考えておかないと♥』
鬼蛙の子種を宿し、愛おしそうにお腹をさする黒髪乙女。
一回り大きくなった乳輪は母乳の影響で、じんわりと湿っていた。
フタナリペニスもさらに肥大化し、自力で歩くことも難しそうだが、本人は幸せのようだ。
それが歪んだ愛の産物であったとしても。
『あく、はぁあああ♥　またチンポがビクビクいってる♥　ザーメン昇ってくる♥　あなた……ううん、月彦（つきひこ）さまチンポを入れてくれ♥　もっと感じたいんだ♥』
『わたくしにもお願いしますわ♥　生ハメのことしか考えられない雌穴♥　ザーメン用マゾホールをほじって欲しいですの♥　んっ♥　んんぅ……♥』

立場が変わったことで、鬼蛙にも名前が授けられた。
「月彦」と命名したのはサクラヒメである。
『それじゃ、ボクも楽しませてもらおうかな』
『おご♥　おごおおぉおおお♥　チンポ♥　チンポきたぁ♥　月彦さまの極太マラが入ってくるうぅうううう♥　ゾおぉぉ～ん♥』
『さっそく子宮口に当たってますの♥　オマンコがパンパンに満たされちゃってますの♥　ぅぅ♥　ふぐうぅぅうううう♥』
触手椅子の座面が盛り上がり鬼蛙のイチモツが出現すると、乙女の花弁をかき分けていく。
己の肉竿を増やす新たな能力だ。
『すごく大きくて最高ですわ♥　マン汁とまりません♥　ゔッ♥　もおおおおおぉ♥』
『サクラヒメはどう？』
『もちろん最高に決まっている♥　ふあぁ……チンポ素敵過ぎるぅ……♥』
軽く絶頂しかけながらアヘ顔で喘ぐボテ腹戦姫。雄の力強さに思考が蕩けていく。
『あぐ♥　あぁぁああ♥　わたくしもうイキそうですわ♥　胸もおチンポもパンパンで恥ずかしいお汁がすぐそこまで来てますの♥　んぉ♥　あはおおぉおおおおぉ♥』

『わたしもマゾアクメしたい♥　母乳とくっさいザーメンまき散らしたい♥　ぅふうぅ……♥　ジヘエエエエェエエ♥』

『イク前に良平くんにメッセージを頼むよ。二人とも撮影中だってことを忘れないでね』

『そういえばそうでしたわね♥　おチンポが最高過ぎて忘れていましたわ♥』

『良平……？　ああ、そんな奴もいたな♥　他の男に興味はないが月彦さまの命令なら仕方ない♥』

カメラに視線を合わせ乳房と肉棒を扱くダブル戦姫。

乳頭と亀頭に透明な液体が滲み、より大きな快楽を貪ろうと手がスピードを上げる。

『良平くん、わたくしのことは心配しなくていいですわよ♥　鬼蛙さまと妖月さまにいっぱい可愛がってもらっていますから♥　ぃぅ♥　ぅひゃぁぁあああ～ん♥　もう人間のおチンポなんかじゃ気持ちよくなれませんし♥』

『月彦さまのチンポはすごいんだぞ♥　太くてカリ首もキノコみたいに大きいんだ♥　あんなもので犯されたら虜になるに決まっている♥　ん……ふあぁぁ、あぐあああああぁああ♥　良平の粗チンとは大違いだな♥』

淫肉から雌の体液を溢れさせ、かつて愛した少年に別れを告げる。

猛茎に突き上げられるたびに、ビクンビクンッと柔肌が震えた。

『んぐっ♥　んぐぅっ♥　ピストン上手過ぎますわ♥　ちゃんと感じるところに当たって擦ってくれますの♥　うふふ、これが女の悦ばせ方ですわよ♥　童貞クンにはわからないと思いますけど♥』

『巨チンセックスじゃないとフタナリチンポも気持ちよくなれないしな♥　ふふ、良平のチンポじゃ入ったかどうかもわからないだろ♥　あう♥　ムグうぅうぅうぅう♥』

『二人とも楽しそうでしょ？　クフフ……直接見せられないのが残念だよ』

『あうっ♥　胸に指が食い込んできますの♥　はぁ……♥　あぁぁ……♥　もっと揉んでくださいまし♥』

『ふんうぅうぅう♥　わたしのオッパイもモミモミされてる♥　そんなにされたら母乳が漏れてしまうぞ♥　あんうぅぅ……♥』

鬼蛙は触手椅子の間に立ち見せびらかすように肉メロンを揉みしだく。

自分たちの主人がだれか教えるように。

『あぐ♥　あぐぐうぅぅ♥　オマンコハメでおチンポまで元気になってしまいますわ♥生臭いカウパーが溢れてしまいます♥』

『包茎デカチンポがギンギンになるうぅうぅう♥　くっさいマゾの匂いをプンプンさせて発情してしまう♥　アヒイイイイィ～ン♥』

『アヘるのもいいけど笑顔を忘れちゃダメだよ。キミたちの可愛いところをアピールしないと』

『ひゃ、ひゃい♥　にっこりスマイルしますわ♥　笑顔で勃起おチンポ見せつけますの♥　はぁ……はぁああ♥　イキたい♥　も、もうダメですわ♥』

『ピース♥　ピース♥　シコりピース♥　チンポオナニーしながらエロピース♥　ひぃ、いいいい～～ん♥　くる♥　ザーメン来てる♥』

男を欲情させるためだけの淫らな笑顔を浮かべる。フタナリマゾの悦びが陰嚢を焚き付ける。

下半身の力が抜けペニスの根元に灼熱の快美が収束する。

鬼蛙の男根も熱く滾り射精のタイミングをうかがう。

『今日一回目の射精、いくよ』

『イク♥　イキますわ♥　おチンポきてますの♥　ペット妊婦コーデリアのアクメ姿をよくご覧なさい♥　んぉ、オッパイ張ってくるぅ♥　もおおぉ♥　のほおぉおおおおぉ～～っ♥』

『良平、とびっきり惨めに射精するから今夜のオカズに使うといい♥　童貞チンポをシコシコしながらよく見るんだぞ♥　ゔッ♥　ゾ、んオオォオオオ～～♥」

膣奥に雄汁が注がれるのと同時に、Gカップ巨乳とEカップ美乳、フタナリ肉竿が蠢き、白濁液が天高く打ち上げられた。

恥ずかしい嬌声とスペルマサウンドをカメラが余さず記録する。

ビュク♥　ブビュク♥　ビュリュリュリュウウウウゥゥ♥　ボビュ♥　ドバババァ～ッ♥

『はうううううん♥　い……イク♥　イッてしまいます♥　中出しされてオッパイとおチンポでピュッピュッしてしまいますの♥　良平くん、わたくしのアヘ顔目に焼き付けなさい♥　おチンポのことしか考えていないマゾペットの顔を♥　この世で一番みっともないド下品顔を♥　んっ♥　んんん♥　んほおおおぉおおおおおおぉおおお♥♥』

『出る出る出るザーメンでるぅ♥　赤ちゃん用ミルクもポコチンミルクも全部出てるううううう♥　ぅッ♥　ああん♥　月彦さま好き♥　だいしゅき♥　生ハメセックスだいしゅき♥　世界で一番愛してる♥　ずっとずっと雌奴隷としてそばにいさせてくれ♥　アヘ♥　アヘ♥　アへぇえぇえぇえぇえぇ～～～ん♥　フタナリチンポ最高♥　射精しゅきしゅきいぃいいいいい♥　もお♥　おっほおおおぉおおおおおお♥♥』

白目を剥き人間では考えられない量のザーメンを吐き出す敗北戦姫。

レンズ越しにでも栗の花の香りが漂ってきそうだ。

「そんな……嘘だ……」

血の気を失う少年を他所に白濁の嬌態は続いていく。

魔悦に身を堕とし二人の戦姫は終わることのない絶頂を繰り返す。

快楽で反り返ったフタナリペニスは精液に濡れ、まるで一振りの刀のように煌めいていた。

あとがき

どうも、フタナリ愛好家の有機企画です。

『装刃戦姫サクラヒメ　フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女』にお目通し頂きありがとうございます。

今作は私が初めて執筆したフタナリ変身ヒロイン陵辱小説です。

右も左もわからないまま書いたノクターンノベルズ版を改良し、読みやすく、さらに過激な調教シーンを加えてみました。

サクラヒメとコーデリアは私の性癖を詰め込めるだけ詰め込んだキャラクターなので、容赦のない淫語、絶頂描写をお楽しみください。

最後に、可愛いヒロインと極太なフタナリイラストを描いてくださった緑木邑先生、新たなインスピレーションを頂いている作者の皆様、いつも応援してくださる読者の方々、二次元ドリームマガジンで一年以上も連載を続けさせてくださったＫＴＣ編集様に、心から感謝申し上げます。

これからも応援していただけたら幸いです。

二次元ドリームノベルズ414

装刃戦姫サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
【電子書籍版】

著　者
有機企画

装　丁
マイクロハウス

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル１Ｆ
●編集部TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Yuukikikaku 2018
当ファイルは、二次元ドリームノベルズ『装刃戦姫サクラヒメ　フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女』
（2018年7月13日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！　読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **http://ktcom.jp/goiken/**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション　二次元ドリームノベルズ感想係

S T O R Y

装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華は闇に紛れて人に仇なす妖魔――オニグミと激しい戦いを繰り広げていた。だがオニグミ幹部である鬼蛙の下劣な罠にかかり、卑猥な肉竿を生やされ、悪夢のようなフタナリ調教ゲームを強いられてしまう。男子トイレでの男根オナニーや勃起筆による変態書道など、徐々に苛烈さを増していく恥辱遊戯。やがてオニグミの魔手は彼女の親友である装刃戦姫コーデリアにまで襲い掛かり……。肉勃起のもたらす極上の快楽が美しき戦姫たちの気高い心を蝕んでゆく!

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索